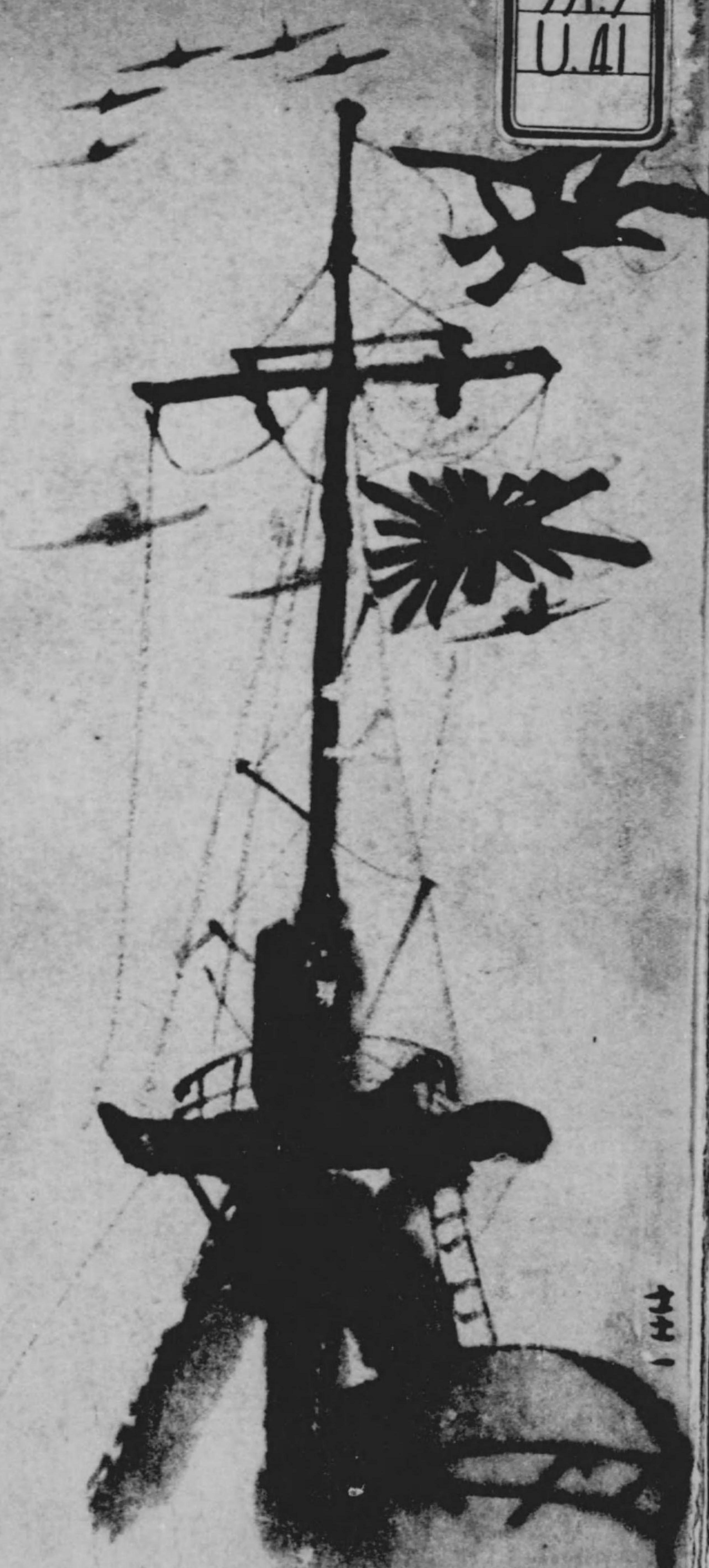


日本海軍航空隊

植松尊慶著



397.5
U.41

1



0057849-000

397.5-U41ウ

日本海軍航空隊

植松尊慶・著

アルス

昭和19

AJG

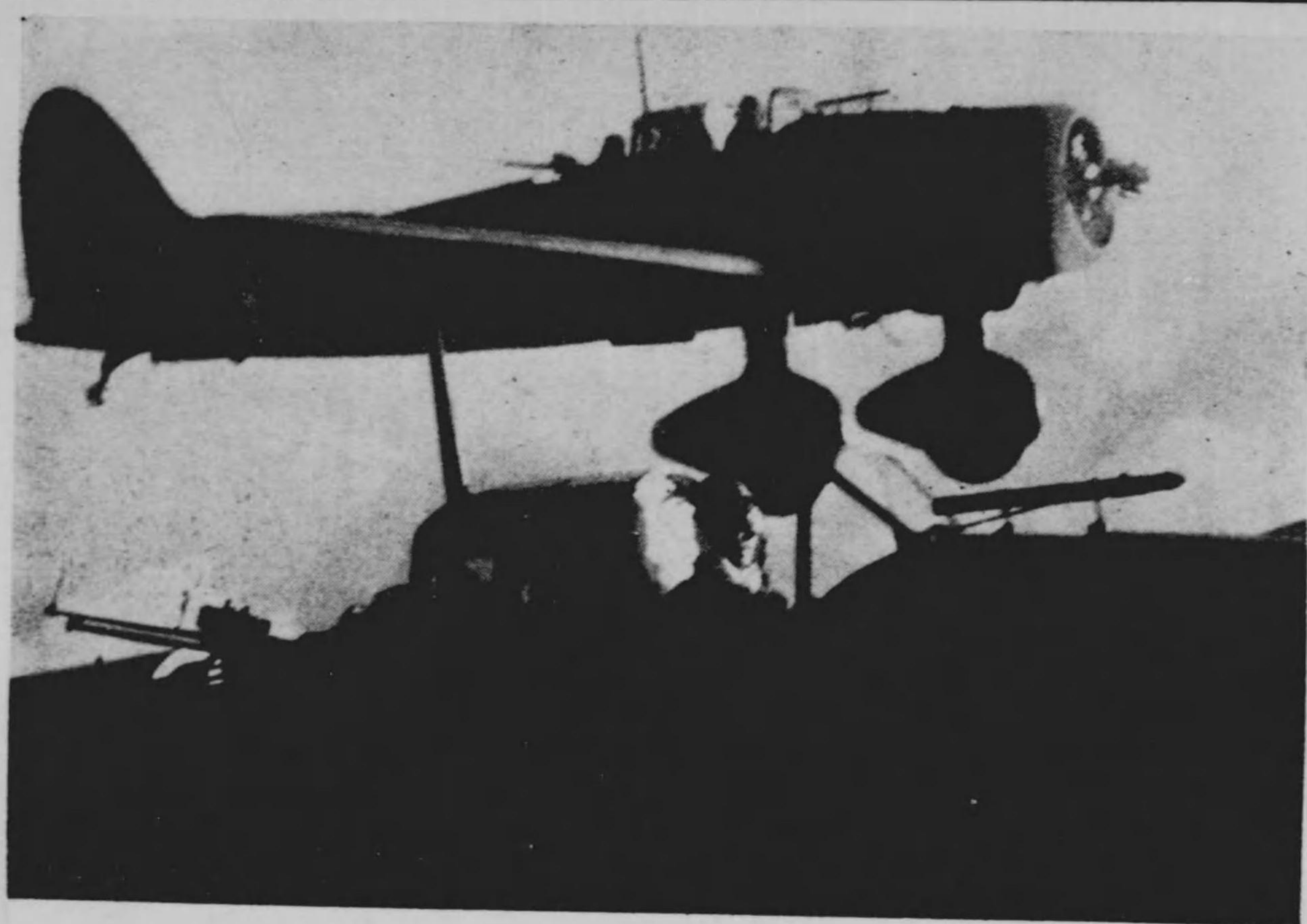
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

156^v

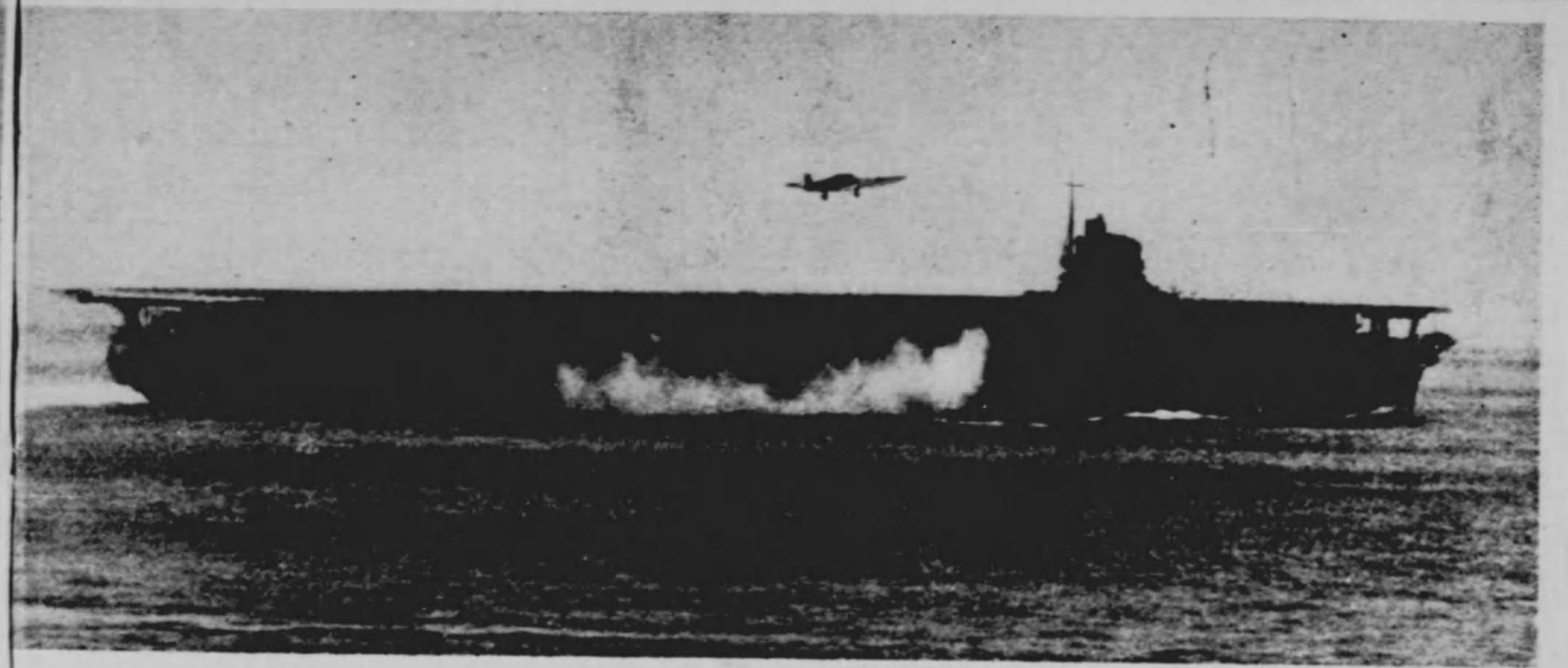


私も征く，大空の決戦場へ！
(海軍飛行豫科練習生)

装 幀 ・ 高 澤 圭 一
海軍關係寫眞ノ複製ハ海軍省許可済八〇二號



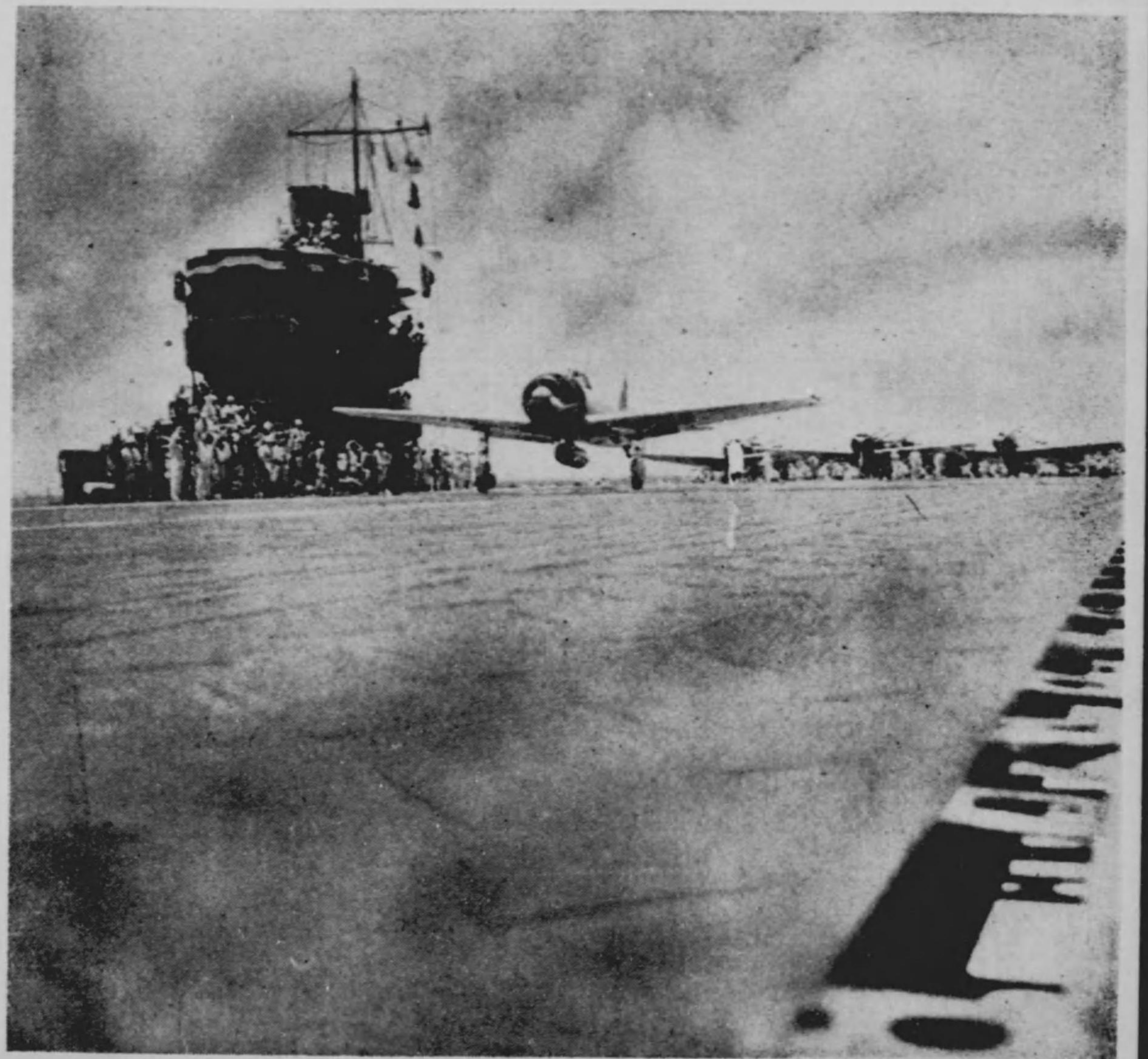
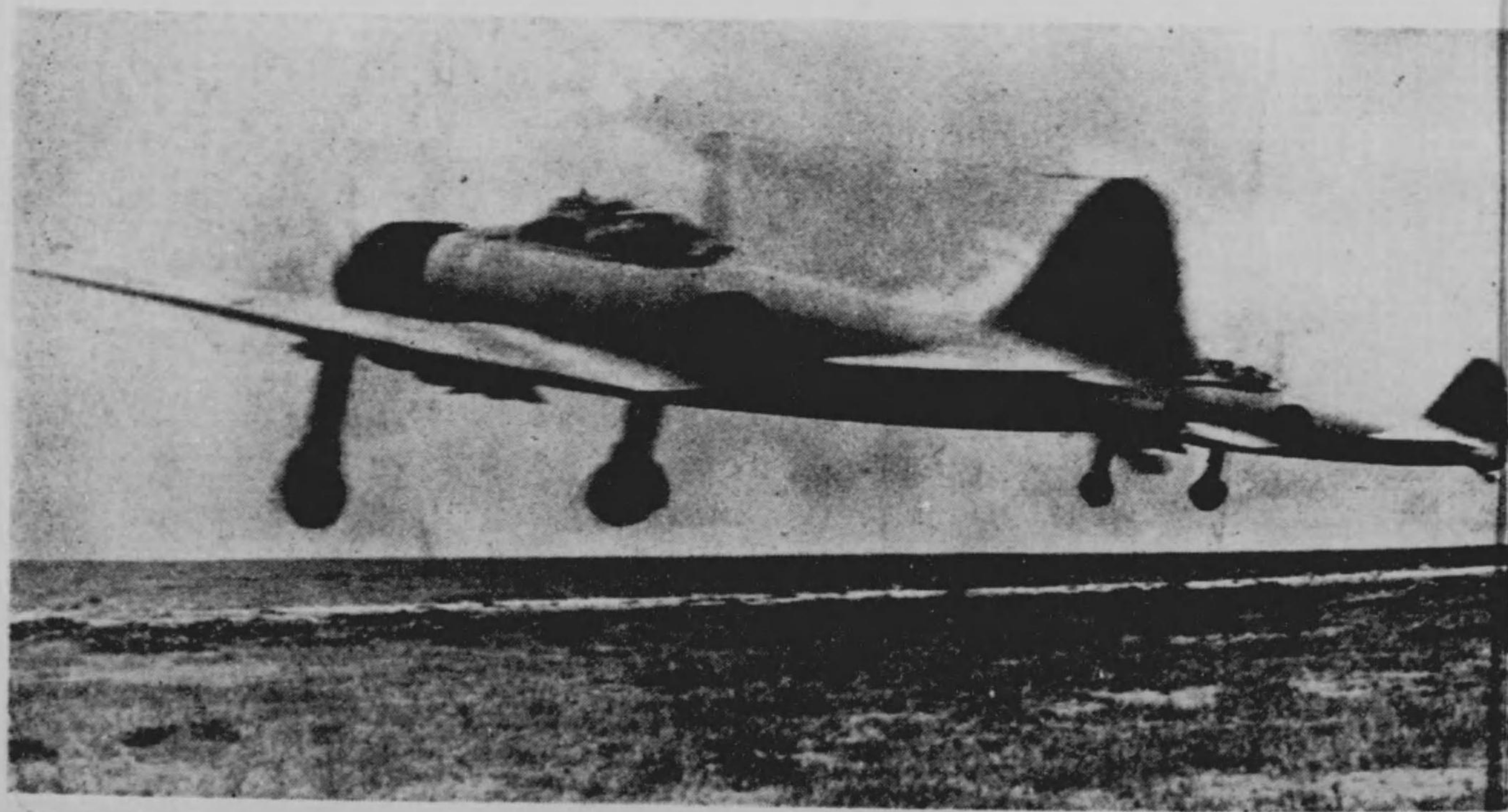
歸還する艦上爆撃機

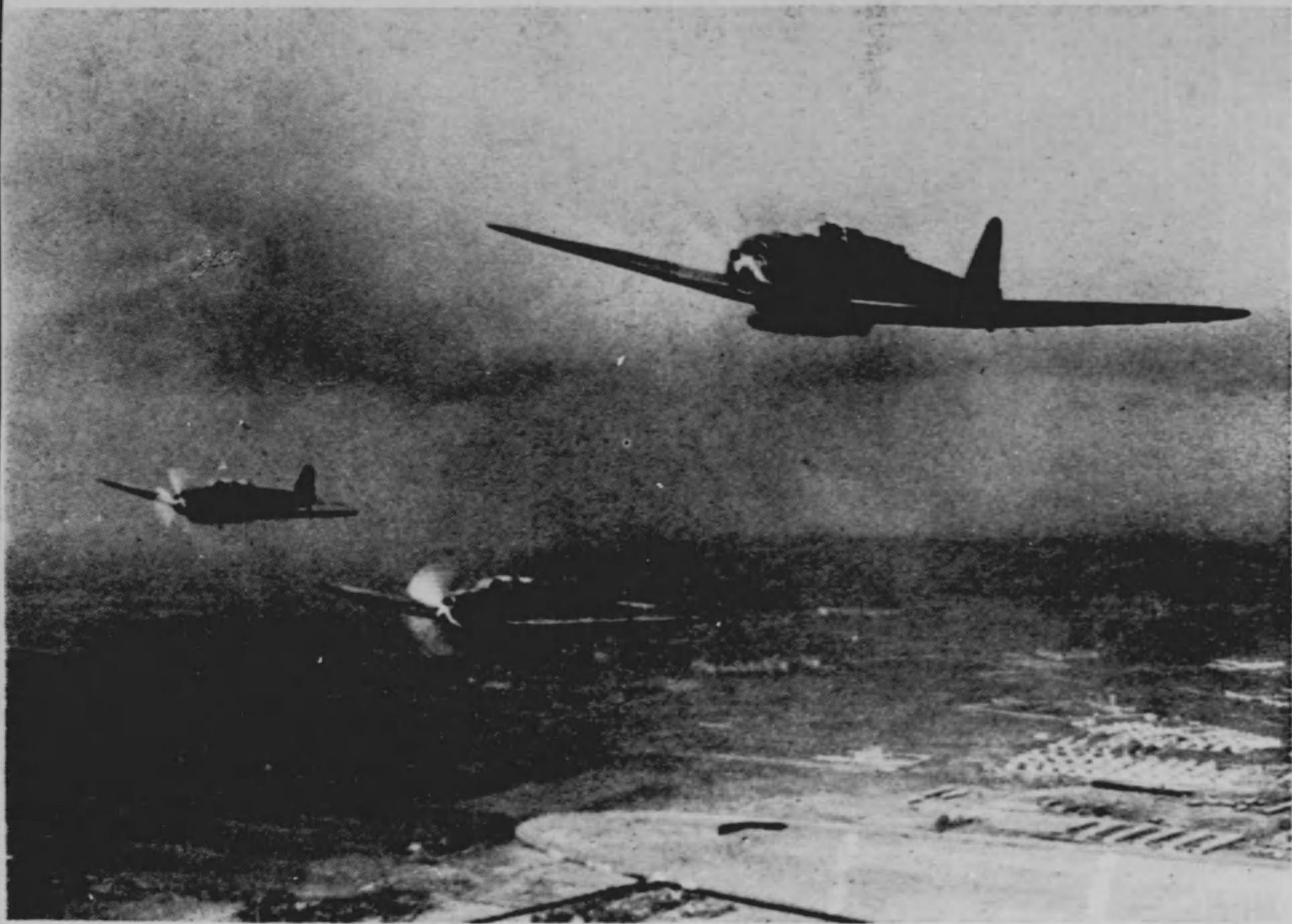


我が航空母艦とその艦上機

母艦から進發する戦闘機

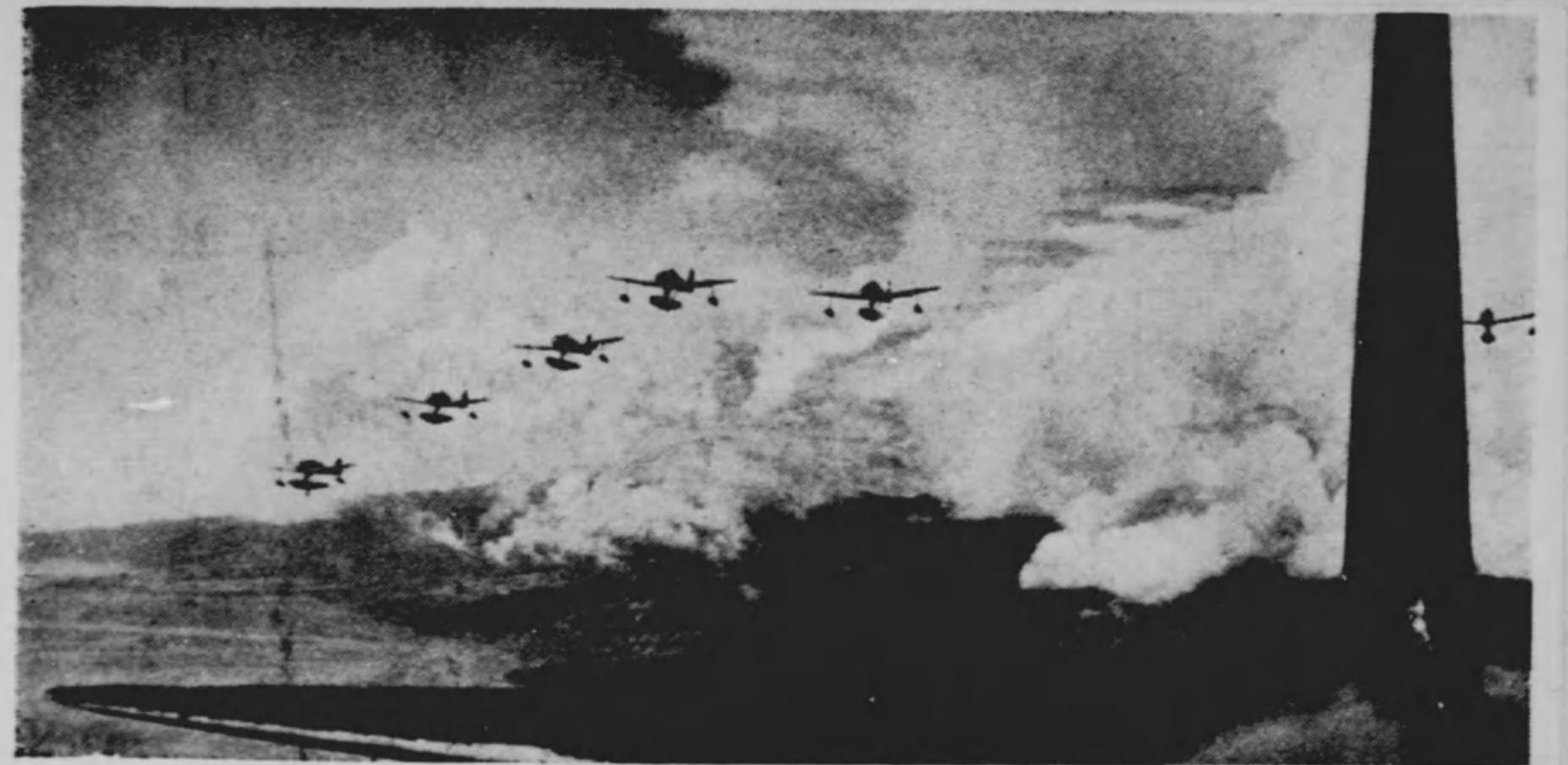
陸上基地から出動する戦闘機



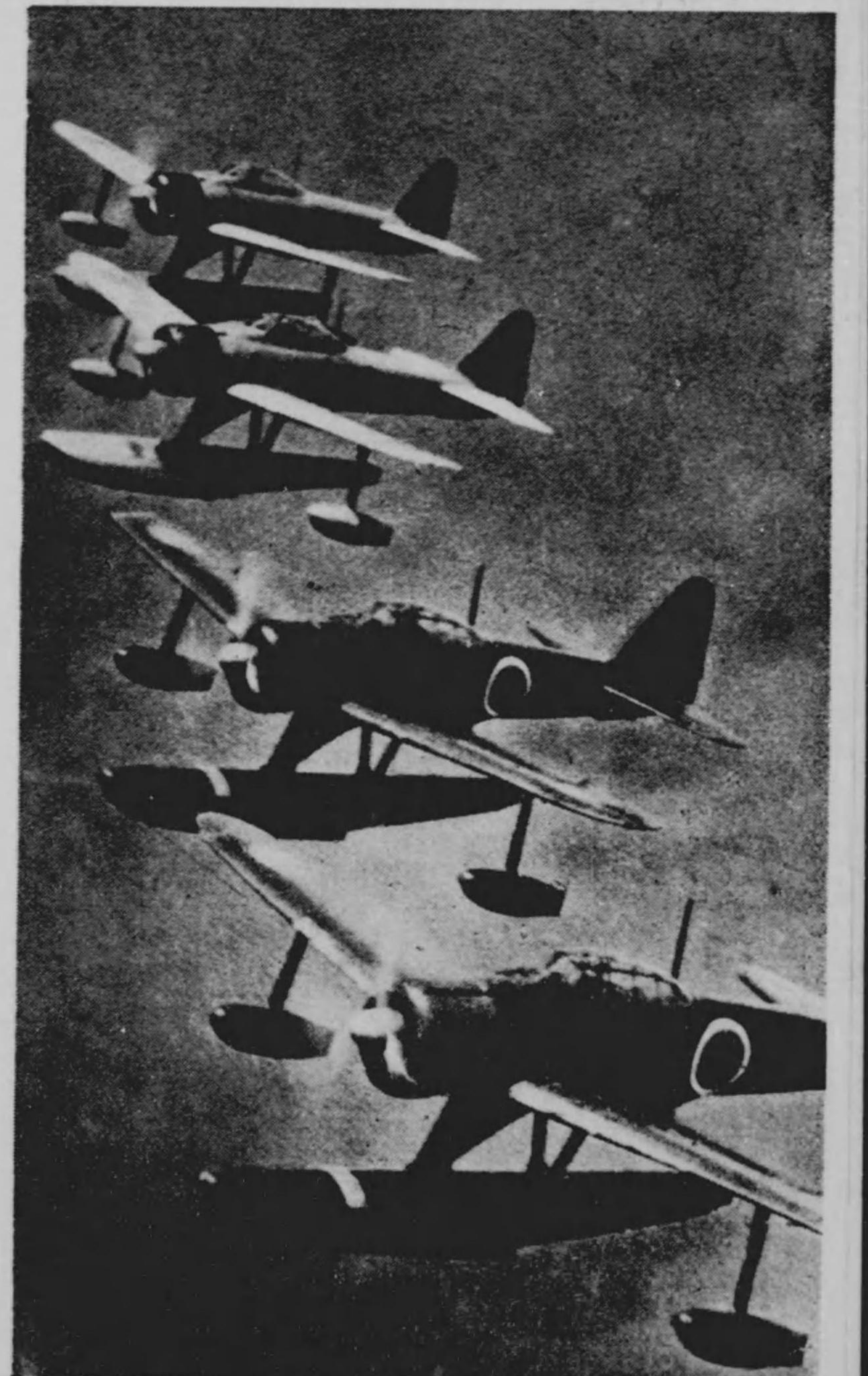


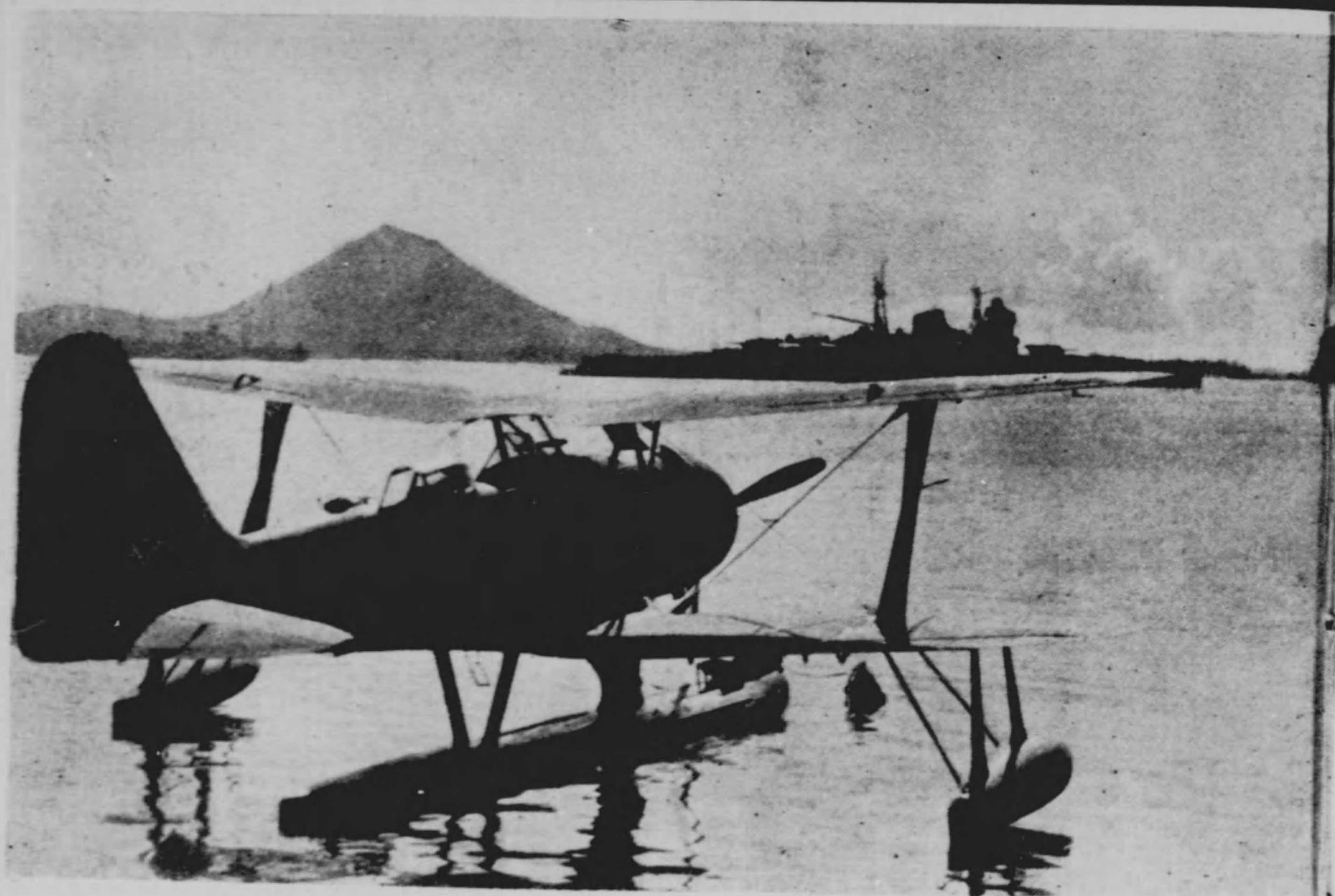
爆撃に向かふ攻撃機

雷撃に向かふ攻撃機

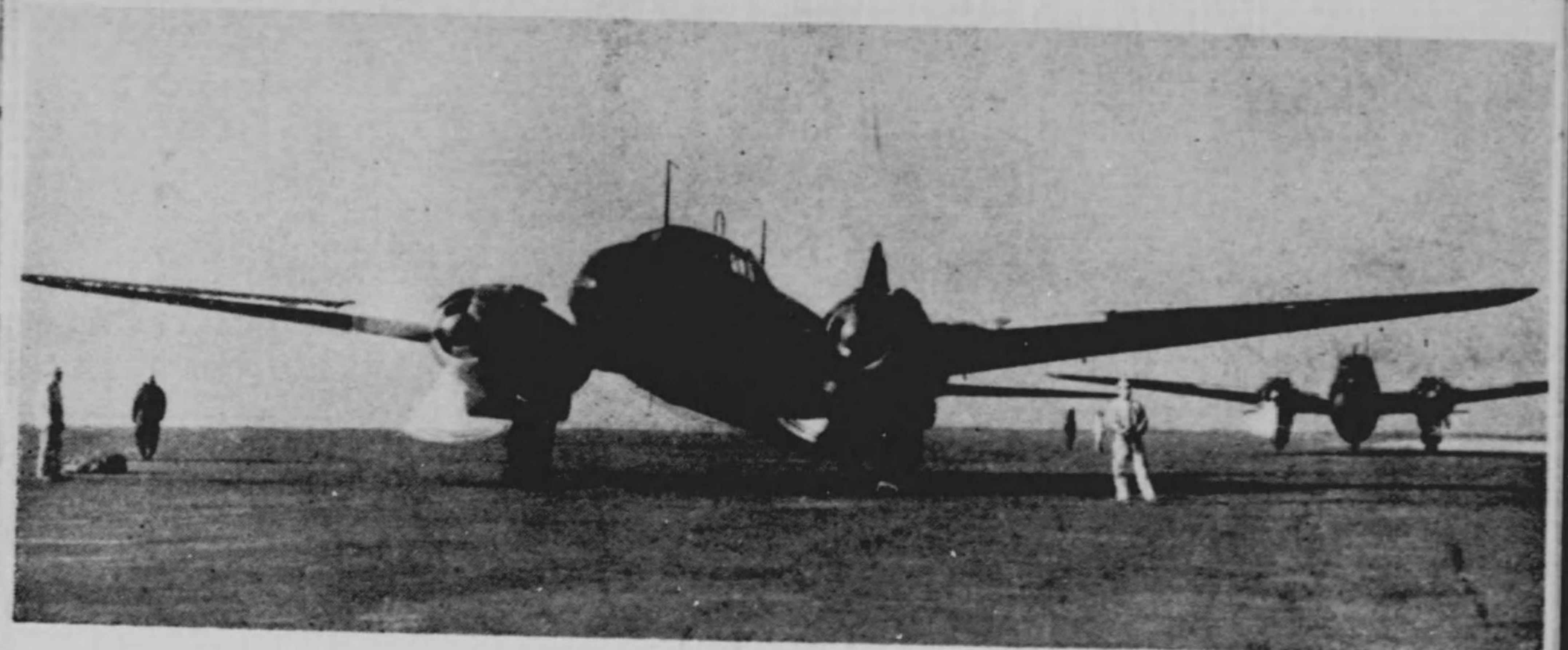


編隊で出撃する水上戦闘機(上・下)



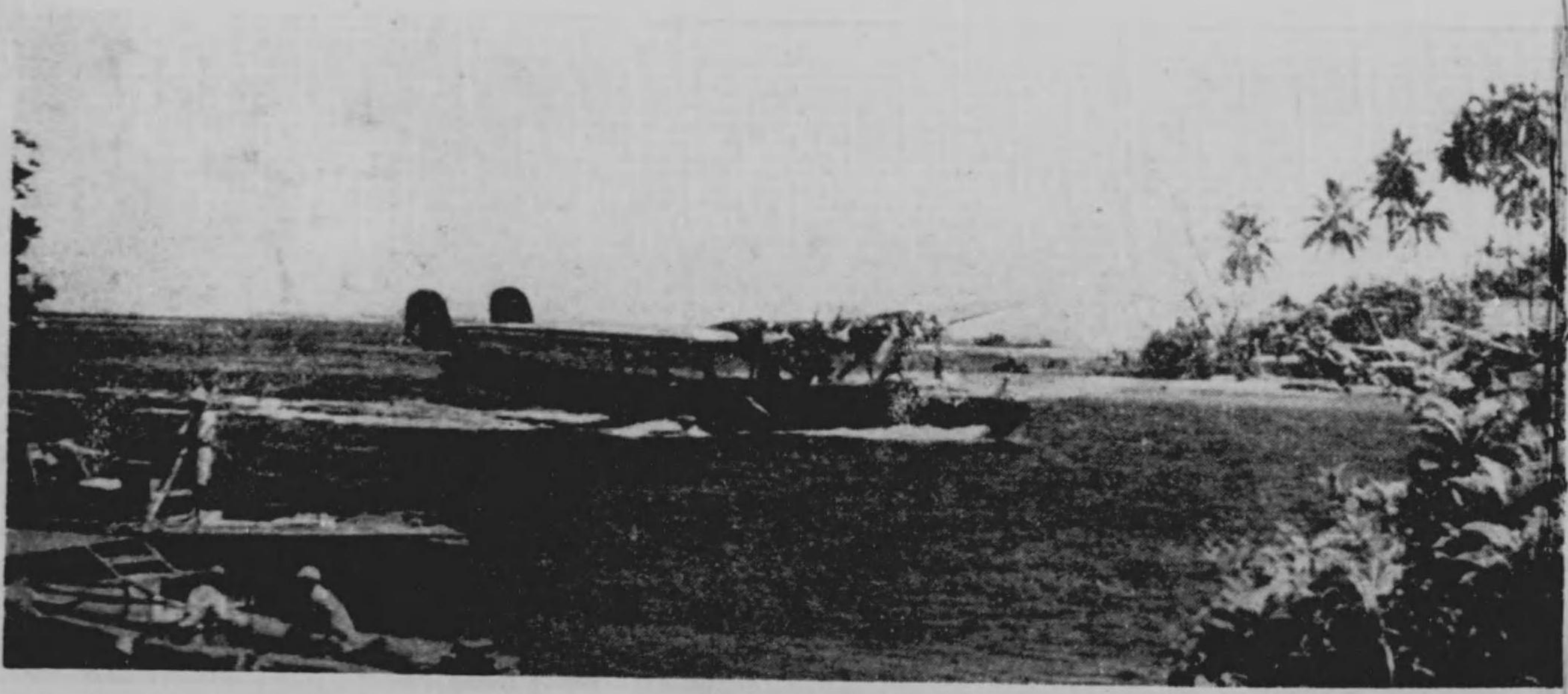


艦隊基地の水上観測機



出動準備成つた新鋭陸上攻撃機

基地に滑走する大型飛行艇



新鋭陸上攻撃機の頭部銃座



1003
2

序

海上艦艇の勢力で海洋を制することを、制海権をにぎるといふ。飛行機の勢力で空中を制することを、制空権をにぎるといふ。

昔、日本のやうな海國は、りつばな艦艇をたくさん持つて、この制海権をにぎれば、國の運命は安全であつた。論より證據、帝國海軍が、いつもその制海権をにぎつてゐたために、日清、日露の兩役をはじめ、いくたびもの事變や戦争に勝ちぬいて、我が國を、今日のやうなりつばな日本に、發展させることができたのである。

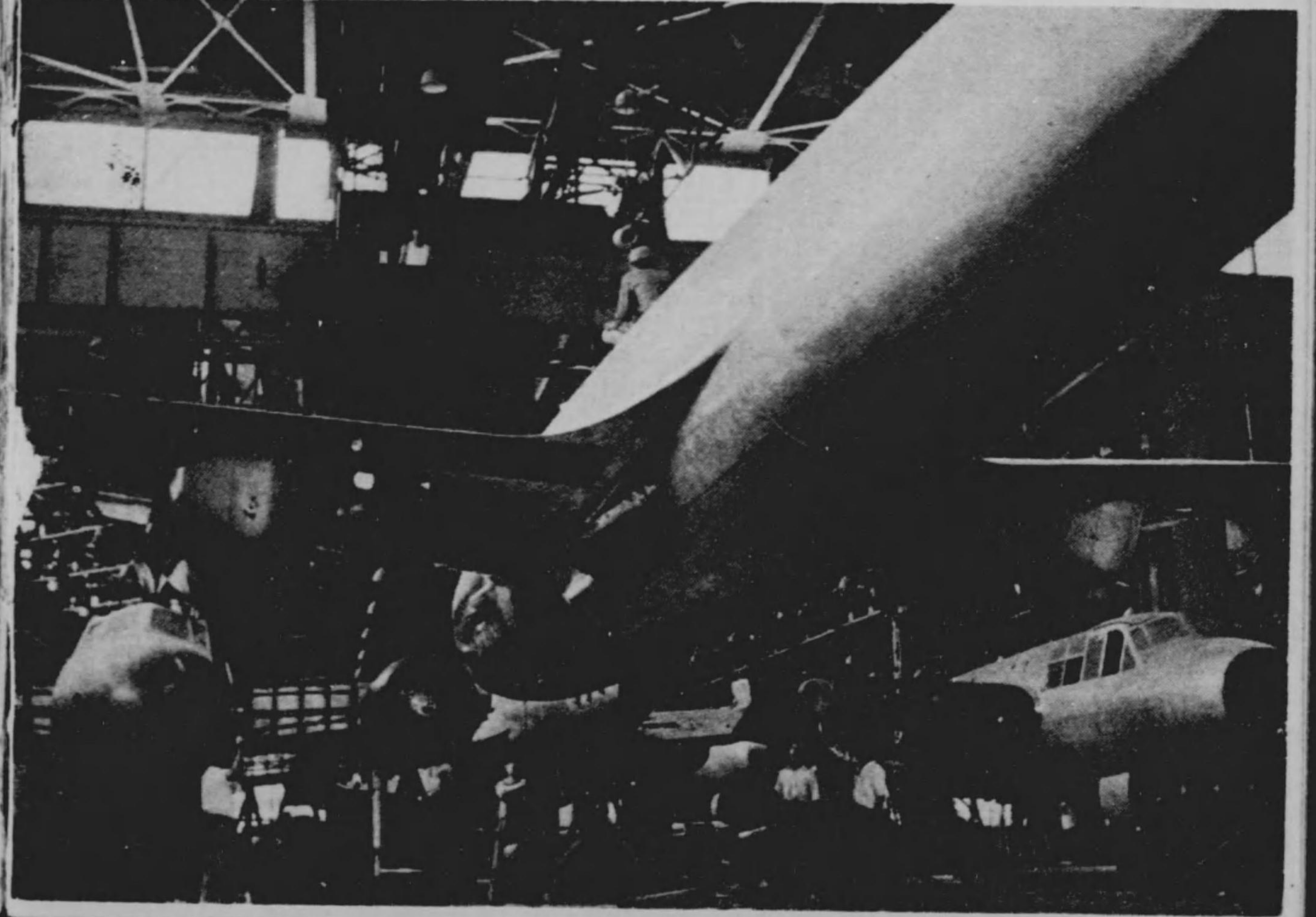
しかし、飛行機の進歩は、制海権をにぎる方法に、大きな變化をもたらした。何故なら、はじめに飛行機で、海洋上空を制しておかなければ、どんなりつばな艦艇も、自分の思ふやうに行動することが、できにくくなつたからである。つまり、完全な制海権をにぎるためには、まづもつて、制空権を完全ににぎらなければならなくなつたのである。

今、大東亞戦争の戦局は、何故非常に重大だといはれるのか。それは、日本海軍の航空兵力が十分でなく、第一線の制空権が、大體において敵の手中にあるからである。いく箇所もの占領地域か



戦艦隊と協力する陸上攻撃機

一機でも多く前線へ!



ら、轉進せざるを得なかつたのも、いく度か尊い玉碎部隊を生じたのも、山本司令長官が戦死されたのも、つきつめて見れば、みな我が航空兵力の不足が、その主な原因となつてゐるといへる。

勿論、日本海軍航空隊は、鬼神のやうにさまざまの戦をつづけてはゐる。そのためにこそ、今日かうして我我も、安全に生活してゐられるのである。しかし、そのたたかひは、いかにも悪戦苦闘である。いくら大きな戦果をあげても、人と機との補充力の大きい敵は、又たちまちもりかへしてくる。つまり、敵の息の根をとめることが、なかなか容易でないのである。

しかし、帝國海軍の飛行機は、敵のものにくらべて、少しも劣らぬりつばなものである。それに乗込む將兵の精神や腕前のりつばさに至つては、今更いふまでもない。従つて、もし我が海軍が、敵と同じだけの航空兵力を持つことができたなら、敵の反撃は一撃にたたきつぶされ、押しかへしてくれば、又たちまちたたきつぶされ、ついに敵は、ぐうの音も出せなくなるであらう。今や正に、大東亞戦争の勝敗の方向をきめるのは、敵味方のいづれが、より大きな航空兵力をもつか、さうしてその結果、いづれがより完全な制空権をにぎるか、といふことになつたのである。

前線にあつて、日夜の別なく、はげしいたたかひをくりかへしてゐる將兵は、慰問文もいらない、慰問品もいらない、欲しいのはただ飛行機とその搭乗員だと叫んでゐる。何といふ悲痛な叫びであらう。この叫びに應じて起ち、一日も早く、作戦に必要なだけの航空兵力をととのへるのは、銃後

國民全部の責任である。さうして、その責任をはたす國民の中心となるべきものこそ、日本青少年たる諸君であらねばならぬ。

本書はかういふ見地から、青少年諸君に對して、海軍航空の本質を、あらゆる角度から解説し、諸君の正しい理解と奮起とをうながしてゐるものである。大東亞戦争に入つてから、海軍航空に關する青少年向の著書は、少からず世に出た。しかし、本書のやうに、帝國海軍とその航空隊の使命を、大所高所から正確にとらへ、その細目にわたつて明快に説きつくしてゐるものは、他に決して多くはないと信ずる。諸君の熟讀を望んでやまない所以である。

昭和十九年三月

大本營海軍報道部

海軍中佐 高瀬 五郎

讀者へ

この本は、皆さんに、我が海軍航空隊に關することを、一通りわかつていただくために書きました。

しかし、さうはいひましても、ただ、飛行機の寸法とか、速力とか、馬力とかいふ種類の知識だけをつかむことよりも、海國日本の生命をまもり、海國日本の國力を伸ばすために、我が海軍航空隊は、どのやうに大切な役割を持つものであるか、又その役割を完全にはたすためには、どのやうな準備と活動をつづけなければならぬか、といふやうなことをわかつていただく方に、一層大きな努力をはらつてあります。

大東亞戦争で、日本が今、海軍航空兵力の不十分なために、どのやうに苦戦をつづけ、その結果どのやうに尊い犠牲を捧げてゐるかといふことは、皆さんもすでによく御存知のことと思ひます。

このことをすでに知り、更に今いつたことがわかつたとしたら、皆さんは、一體どのやうに決心しなければならぬのでせうか。その心を決めることに、この本が少しでも役立てば、ほんたうに

うれしいことでもあります。

大本營海軍報道部の高瀬中佐は、この本のために、御懇切な序文を寄せて下さいました。そのことを特に記して、感謝のしるしといたします。

昭和十九年三月

著者

【御注意】本文中に「本年」とあるのは、昭和十八年のことです。

日本海軍航空隊 目次

第一章 海洋航空決戦時代	三
一 航空兵力と陸戦	三
二 航空兵力と海戦	七
三 大東亞戦争と海軍航空	一〇
四 飛行機か軍艦か	三
五 アメリカの對日航空作戦	六
六 航空決戦時代至る	二二
第二章 今日の軍用機の性能	二四
一 高性能を第一とする軍用機	二四
二 速度	二五
三 航続距離	二六

四	高	度	二七
五	大	さ	二六
六	武	装	二五
七	つくり方、その他	二四
八	性能と戦闘實力	二三

第三章 我が海軍航空隊の發達

一	前世界大戰まで	二二
二	上海事變まで	二一
三	大東亞戰爭まで	二〇

第四章 海軍機の種類とその役目

一	種類のある理由	一九
二	偵察機	一八
三	戦闘機	一七
四	爆撃機	一六

五	攻撃機	一五
六	陸上攻撃機	一四
七	飛行艇	一三

第五章 航空母艦

一	航空母艦の役目	一三
二	その構造	一二
三	飛行機の發着法	一一
四	困難で危険な操作	一〇
五	その性能	九

第六章 水上機母艦

.....	一七
-------	-------	-------	-------	----

第七章 基地航空隊と艦隊航空隊

一	基地航空隊と艦隊航空隊	二三
二	艦隊航空隊の長所と短所	二二

三	基地航空隊の長所と短所	二五
四	兩兵力を充實することが大切	二六

第八章 海軍航空隊の特殊性

一	海國の敵を討道	三〇
二	海洋航空の困難と危険	三一
三	母艦發著の困難と危険	三三
四	敵艦攻撃の困難と危険	三五
五	要求される高性能	三七
六	特殊訓練の必要	三八

第九章 戦ふ海軍航空隊

一	ハワイ海戦	四一
二	マレー沖海戦	四四
三	フィリピン方面	四六
四	印度洋方面	四七

第一〇章 航空兵力を育てるもの

一〇	航空戦の出現	六一
一一	敵の戦意と航空決戦	六八
一二	その他の主な海戦	六九
一三	南太平洋海戦	七〇
一四	珊瑚海海戦	七二
一五	ミッドウエー強襲	七三
一六	ソロモン海戦	七五
一七	その他の主な海戦	七六
一八	航空戦の出現	七八
一九	敵の戦意と航空決戦	八〇
二〇	その他の主な海戦	八一
二一	南太平洋海戦	八二
二二	珊瑚海海戦	八四
二三	ミッドウエー強襲	八五
二四	ソロモン海戦	八七
二五	その他の主な海戦	八八
二六	航空戦の出現	九〇
二七	敵の戦意と航空決戦	九二
二八	その他の主な海戦	九三
二九	南太平洋海戦	九四
三〇	珊瑚海海戦	九六
三一	ミッドウエー強襲	九七
三二	ソロモン海戦	九九
三三	その他の主な海戦	一〇〇
三四	航空戦の出現	一〇二
三五	敵の戦意と航空決戦	一〇四
三六	その他の主な海戦	一〇五
三七	南太平洋海戦	一〇六
三八	珊瑚海海戦	一〇八
三九	ミッドウエー強襲	一〇九
四〇	ソロモン海戦	一一一
四一	その他の主な海戦	一一二
四二	航空戦の出現	一一四
四三	敵の戦意と航空決戦	一一六
四四	その他の主な海戦	一一七
四五	南太平洋海戦	一一八
四六	珊瑚海海戦	一二〇
四七	ミッドウエー強襲	一二一
四八	ソロモン海戦	一二三
四九	その他の主な海戦	一二四
五〇	航空戦の出現	一二六
五一	敵の戦意と航空決戦	一二八
五二	その他の主な海戦	一二九
五三	南太平洋海戦	一三〇
五四	珊瑚海海戦	一三二
五五	ミッドウエー強襲	一三三
五六	ソロモン海戦	一三五
五七	その他の主な海戦	一三六
五八	航空戦の出現	一三八
五九	敵の戦意と航空決戦	一四〇
六〇	その他の主な海戦	一四一
六一	南太平洋海戦	一四二
六二	珊瑚海海戦	一四四
六三	ミッドウエー強襲	一四五
六四	ソロモン海戦	一四七
六五	その他の主な海戦	一四八
六六	航空戦の出現	一五〇
六七	敵の戦意と航空決戦	一五二
六八	その他の主な海戦	一五三
六九	南太平洋海戦	一五四
七〇	珊瑚海海戦	一五六
七一	ミッドウエー強襲	一五七
七二	ソロモン海戦	一五九
七三	その他の主な海戦	一六〇
七四	航空戦の出現	一六二
七五	敵の戦意と航空決戦	一六四
七六	その他の主な海戦	一六五
七七	南太平洋海戦	一六六
七八	珊瑚海海戦	一六八
七九	ミッドウエー強襲	一六九
八〇	ソロモン海戦	一七一
八一	その他の主な海戦	一七二
八二	航空戦の出現	一七四
八三	敵の戦意と航空決戦	一七六
八四	その他の主な海戦	一七七
八五	南太平洋海戦	一七八
八六	珊瑚海海戦	一八〇
八七	ミッドウエー強襲	一八一
八八	ソロモン海戦	一八三
八九	その他の主な海戦	一八四
九〇	航空戦の出現	一八六
九一	敵の戦意と航空決戦	一八八
九二	その他の主な海戦	一八九
九三	南太平洋海戦	一九〇
九四	珊瑚海海戦	一九二
九五	ミッドウエー強襲	一九三
九六	ソロモン海戦	一九五
九七	その他の主な海戦	一九六
九八	航空戦の出現	一九八
九九	敵の戦意と航空決戦	二〇〇
一〇〇	その他の主な海戦	二〇一
一〇一	南太平洋海戦	二〇二
一〇二	珊瑚海海戦	二〇四
一〇三	ミッドウエー強襲	二〇五
一〇四	ソロモン海戦	二〇七
一〇五	その他の主な海戦	二〇八
一〇六	航空戦の出現	二一〇
一〇七	敵の戦意と航空決戦	二一二
一〇八	その他の主な海戦	二一三
一〇九	南太平洋海戦	二一四
一一〇	珊瑚海海戦	二一六
一一一	ミッドウエー強襲	二一七
一一二	ソロモン海戦	二一九
一一三	その他の主な海戦	二二〇
一一四	航空戦の出現	二二二
一一五	敵の戦意と航空決戦	二二四
一一六	その他の主な海戦	二二五
一一七	南太平洋海戦	二二六
一一八	珊瑚海海戦	二二八
一一九	ミッドウエー強襲	二二九
一二〇	ソロモン海戦	二三一
一二一	その他の主な海戦	二三二
一二二	航空戦の出現	二三四
一二三	敵の戦意と航空決戦	二三六
一二四	その他の主な海戦	二三七
一二五	南太平洋海戦	二三八
一二六	珊瑚海海戦	二四〇
一二七	ミッドウエー強襲	二四一
一二八	ソロモン海戦	二四三
一二九	その他の主な海戦	二四四
一三〇	航空戦の出現	二四六
一三一	敵の戦意と航空決戦	二四八
一三二	その他の主な海戦	二四九
一三三	南太平洋海戦	二五〇
一三四	珊瑚海海戦	二五二
一三五	ミッドウエー強襲	二五三
一三六	ソロモン海戦	二五五
一三七	その他の主な海戦	二五六
一三八	航空戦の出現	二五八
一三九	敵の戦意と航空決戦	二六〇
一四〇	その他の主な海戦	二六一
一四一	南太平洋海戦	二六二
一四二	珊瑚海海戦	二六四
一四三	ミッドウエー強襲	二六五
一四四	ソロモン海戦	二六七
一四五	その他の主な海戦	二六八
一四六	航空戦の出現	二七〇
一四七	敵の戦意と航空決戦	二七二
一四八	その他の主な海戦	二七三
一四九	南太平洋海戦	二七四
一五〇	珊瑚海海戦	二七六
一五一	ミッドウエー強襲	二七七
一五二	ソロモン海戦	二七九
一五三	その他の主な海戦	二八〇
一五四	航空戦の出現	二八二
一五五	敵の戦意と航空決戦	二八四
一五六	その他の主な海戦	二八五
一五七	南太平洋海戦	二八六
一五八	珊瑚海海戦	二八八
一五九	ミッドウエー強襲	二八九
一六〇	ソロモン海戦	二九一
一六一	その他の主な海戦	二九二
一六二	航空戦の出現	二九四
一六三	敵の戦意と航空決戦	二九六
一六四	その他の主な海戦	二九七
一六五	南太平洋海戦	二九八
一六六	珊瑚海海戦	三〇〇
一六七	ミッドウエー強襲	三〇一
一六八	ソロモン海戦	三〇三
一六九	その他の主な海戦	三〇四
一七〇	航空戦の出現	三〇六
一七一	敵の戦意と航空決戦	三〇八
一七二	その他の主な海戦	三〇九
一七三	南太平洋海戦	三一〇
一七四	珊瑚海海戦	三一二
一七五	ミッドウエー強襲	三一三
一七六	ソロモン海戦	三一五
一七七	その他の主な海戦	三一六
一七八	航空戦の出現	三一八
一七九	敵の戦意と航空決戦	三二〇
一八〇	その他の主な海戦	三二一
一八一	南太平洋海戦	三二二
一八二	珊瑚海海戦	三二四
一八三	ミッドウエー強襲	三二五
一八四	ソロモン海戦	三二七
一八五	その他の主な海戦	三二八
一八六	航空戦の出現	三三〇
一八七	敵の戦意と航空決戦	三三二
一八八	その他の主な海戦	三三三
一八九	南太平洋海戦	三三四
一九〇	珊瑚海海戦	三三六
一九一	ミッドウエー強襲	三三七
一九二	ソロモン海戦	三三九
一九三	その他の主な海戦	三四〇
一九四	航空戦の出現	三四二
一九五	敵の戦意と航空決戦	三四四
一九六	その他の主な海戦	三四五
一九七	南太平洋海戦	三四六
一九八	珊瑚海海戦	三四八
一九九	ミッドウエー強襲	三四九
二〇〇	ソロモン海戦	三五一
二〇一	その他の主な海戦	三五二
二〇二	航空戦の出現	三五四
二〇三	敵の戦意と航空決戦	三五六
二〇四	その他の主な海戦	三五七
二〇五	南太平洋海戦	三五八
二〇六	珊瑚海海戦	三六〇
二〇七	ミッドウエー強襲	三六一
二〇八	ソロモン海戦	三六三
二〇九	その他の主な海戦	三六四
二一〇	航空戦の出現	三六六
二一一	敵の戦意と航空決戦	三六八
二一二	その他の主な海戦	三六九
二一三	南太平洋海戦	三七〇
二一四	珊瑚海海戦	三七二
二一五	ミッドウエー強襲	三七三
二一六	ソロモン海戦	三七五
二一七	その他の主な海戦	三七六
二一八	航空戦の出現	三七八
二一九	敵の戦意と航空決戦	三八〇
二二〇	その他の主な海戦	三八一
二二一	南太平洋海戦	三八二
二二二	珊瑚海海戦	三八四
二二三	ミッドウエー強襲	三八五
二二四	ソロモン海戦	三八七
二二五	その他の主な海戦	三八八
二二六	航空戦の出現	三九〇
二二七	敵の戦意と航空決戦	三九二
二二八	その他の主な海戦	三九三
二二九	南太平洋海戦	三九四
二三〇	珊瑚海海戦	三九六
二三一	ミッドウエー強襲	三九七
二三二	ソロモン海戦	三九九
二三三	その他の主な海戦	四〇〇
二三四	航空戦の出現	四〇二
二三五	敵の戦意と航空決戦	四〇四
二三六	その他の主な海戦	四〇五
二三七	南太平洋海戦	四〇六
二三八	珊瑚海海戦	四〇八
二三九	ミッドウエー強襲	四〇九
二四〇	ソロモン海戦	四一一
二四一	その他の主な海戦	四一二
二四二	航空戦の出現	四一四
二四三	敵の戦意と航空決戦	四一六
二四四	その他の主な海戦	四一七
二四五	南太平洋海戦	四一八
二四六	珊瑚海海戦	四二〇
二四七	ミッドウエー強襲	四二一
二四八	ソロモン海戦	四二三
二四九	その他の主な海戦	四二四
二五〇	航空戦の出現	四二六
二五一	敵の戦意と航空決戦	四二八
二五二	その他の主な海戦	四二九
二五三	南太平洋海戦	四三〇
二五四	珊瑚海海戦	四三二
二五五	ミッドウエー強襲	四三三
二五六	ソロモン海戦	四三五
二五七	その他の主な海戦	四三六
二五八	航空戦の出現	四三八
二五九	敵の戦意と航空決戦	四四〇
二六〇	その他の主な海戦	四四一
二六一	南太平洋海戦	四四二
二六二	珊瑚海海戦	四四四
二六三	ミッドウエー強襲	四四五
二六四	ソロモン海戦	四四七
二六五	その他の主な海戦	四四八
二六六	航空戦の出現	四五〇
二六七	敵の戦意と航空決戦	四五二
二六八	その他の主な海戦	四五三
二六九	南太平洋海戦	四五四
二七〇	珊瑚海海戦	四五六
二七一	ミッドウエー強襲	四五七
二七二	ソロモン海戦	四五九
二七三	その他の主な海戦	四六〇
二七四	航空戦の出現	四六二
二七五	敵の戦意と航空決戦	四六四
二七六	その他の主な海戦	四六五
二七七	南太平洋海戦	四六六
二七八	珊瑚海海戦	四六八
二七九	ミッドウエー強襲	四六九
二八〇	ソロモン海戦	四七一
二八一	その他の主な海戦	四七二
二八二	航空戦の出現	四七四
二八三	敵の戦意と航空決戦	四七六
二八四	その他の主な海戦	四七七
二八五	南太平洋海戦	四七八
二八六	珊瑚海海戦	四八〇
二八七	ミッドウエー強襲	四八一
二八八	ソロモン海戦	四八三
二八九	その他の主な海戦	四八四
二九〇	航空戦の出現	四八六
二九一	敵の戦意と航空決戦	四八八
二九二	その他の主な海戦	四八九
二九三	南太平洋海戦	四九〇
二九四	珊瑚海海戦	四九二
二九五	ミッドウエー強襲	四九三
二九六	ソロモン海戦	四九五
二九七	その他の主な海戦	四九六
二九八	航空戦の出現	四九八
二九九	敵の戦意と航空決戦	五〇〇
三〇〇	その他の主な海戦	五〇一

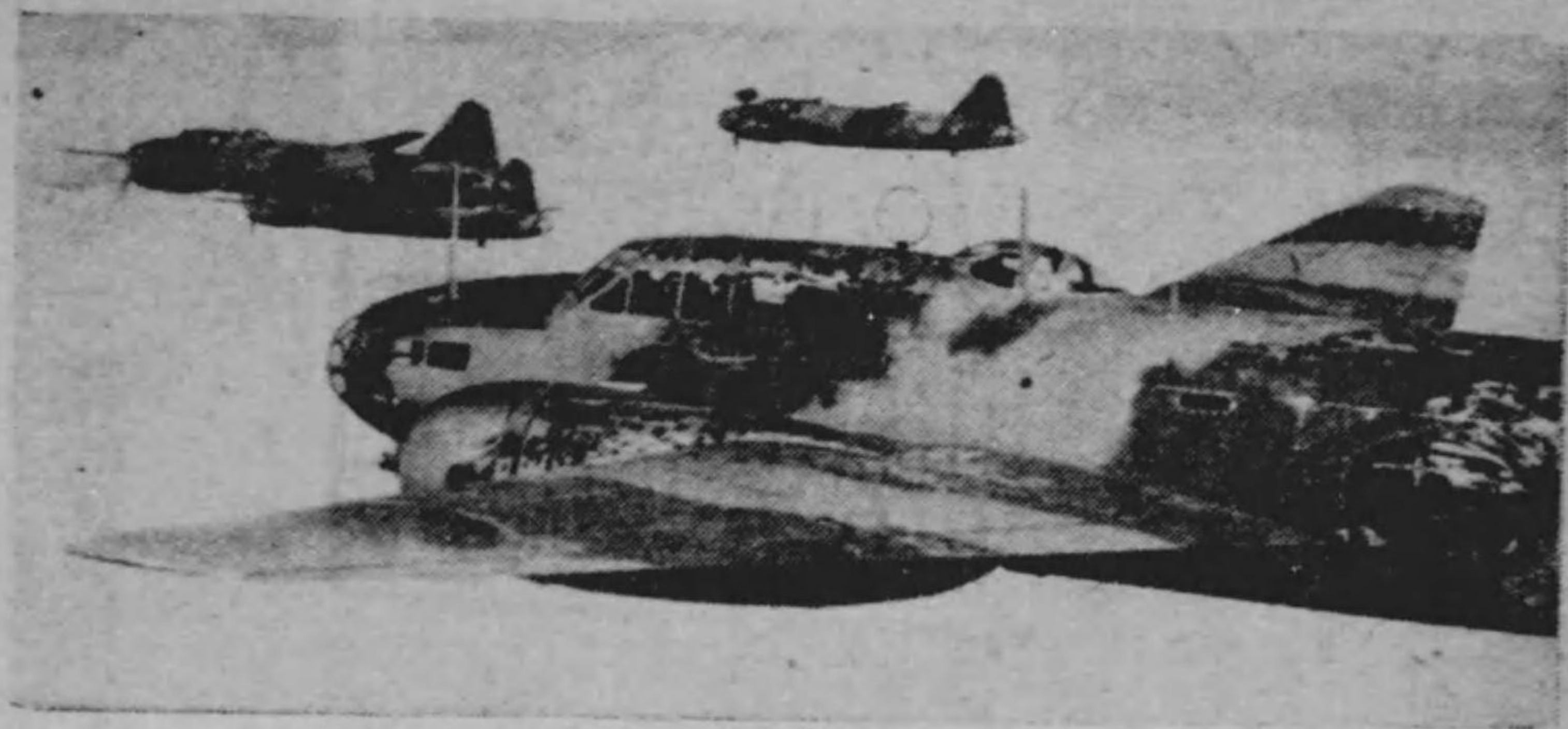
日本海軍航空隊

第一章 海洋航空決戦時代

一、航空兵力と陸戦

この前の世界大戦は、大正三年にはじまりました。それは、アメリカのライト兄弟が、今から二十九年前の明治三十六年に、はじめて飛行機で飛行するのに成功してから、わづかに十一年目のことでしたが、その飛行機は、新しい兵器として、さつそく戦場にかり出されることになったのです。もちろん、その當座の飛行機は、後で記しますやうに、非常に幼稚なものでした。しかし、戦時での兵器の一年分の進歩は、平時の十年分にも二十年分にも相當するといはれます。この第一次大戦は、大正七年に終わりましたが、その五年間の實戦の要求と經驗の結果、この飛行機も驚くほどの進歩をとげることになったのです。

しかしこの大戦では、戦争にとって飛行機は、非常に大切なものであるといふことはわかりましたが、戦争の勝敗を決するほどの値打があるものとはみとめられませんでした。偵察にも役立つ、連絡にも役立つ、砲彈のとどかない後方の爆撃にも役立つ。しかし、そのいづれもが、勝敗をさめ



敵爆撃に向ふ新鋭陸上攻撃機隊。

るほどの効果をあらはすまでには行かなかつたのです。

しかも、これはもつばら陸戦でのことで、海戦と飛行機に至つては、ほとんど全く無関係のまままで終りました。イギリス海軍は、何とかして飛行機を利用しようと、いろいろ工夫をこらし、航空母艦をつくることなども研究してみましたが、つひに實戦に役立てるまでには至らなかつたのです。

飛行機が、つまり航空兵力が、陸戦の勝敗を決するのに、いかに大きな力を持つものであるかといふことが、實際に證據立てられるやうになつたのは、昭和六年の満洲事變以後のことであつて、それが昭和十二年以來の支那事變でいよいよあきらかとなり、更に昭和十四年の第二次ヨーロッパ大戦——それが引續いて今日の世界大戦になつてゐます——に至つて、眞に決定的なものとなつてきたのでした。

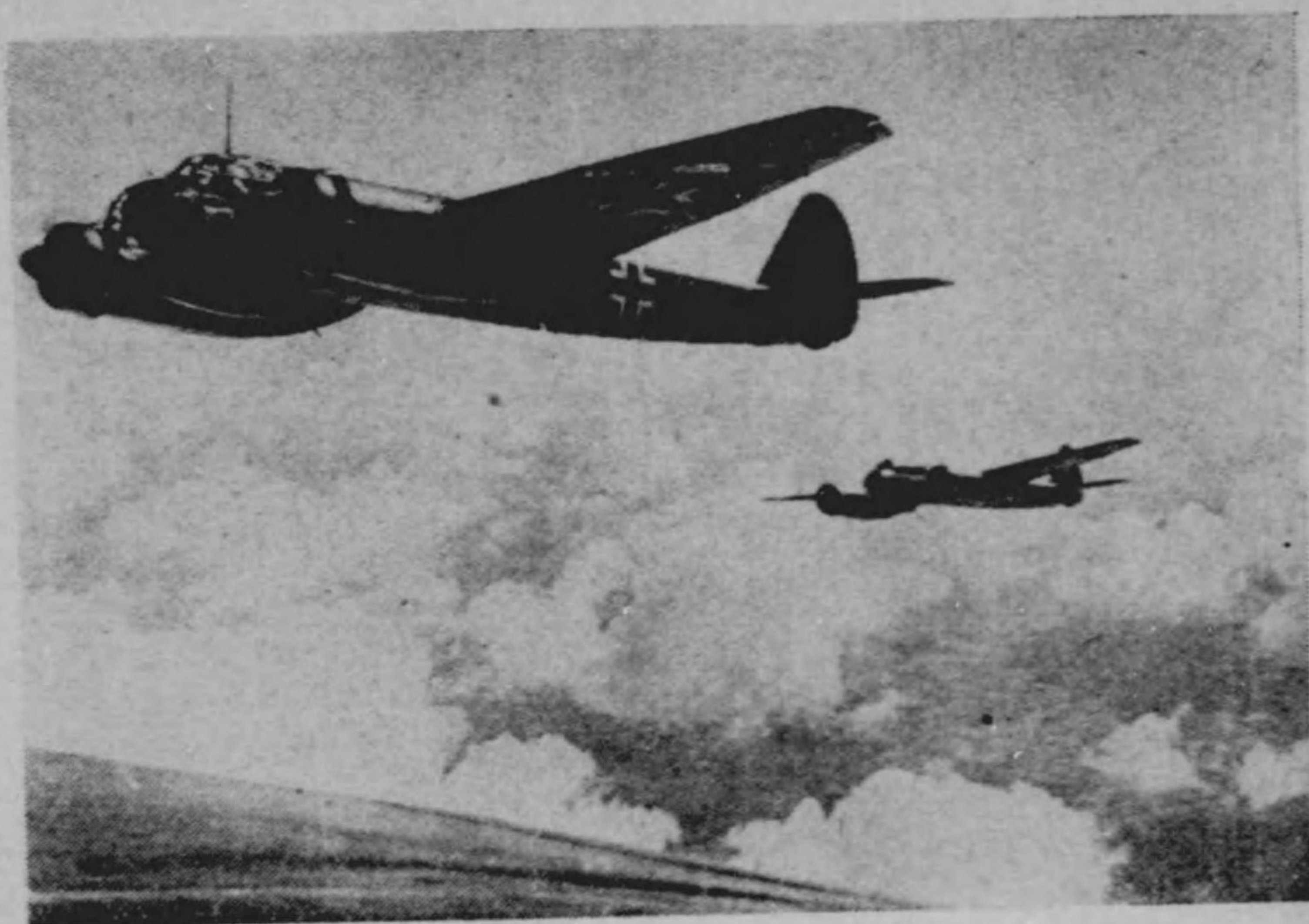
この前の大戦に敗れた後、一切の軍備を禁じられてゐたドイツは、ヨーロッパ新秩序建設のためには、ふたたび武力を用ひ

て立上る必要のあることを覺悟し、巧妙な方法で、ひそかに兵力をたくはへてゐましたが、それがある程度まで達した時を見計らひ、昭和十年、軍備を再建することを宣言しました。ヒットラー總統が、ドイツの政權を握つたあくる年のことです。

それからドイツは、公然と軍備を充實しはじめましたが、それには、航空兵力と潜水艦兵力に主力をそそぎました。これは、ドイツの陸上作戦と海上作戦の方向を示すもので、陸戦にはもつばら飛行機を、海戦にはもつばら潜水艦を主役として活躍させる計畫なのでした。

そのうちさつきいつたやうに、第二次ヨーロッパ大戦が昭和十四年にはじまりました。その九月一日、まづポーランドと國交を絶つや否や、ドイツ空軍は、空をおほふばかりの大編隊をもつて進撃し、全國の飛行基地をたたきつぶして、まづ敵空軍の反撃を封ずると共に、あらゆる軍事據點に猛爆をくりかへしました。さうして、その爆煙も収まり切らぬうちに、戦車を主力とする地上部隊が殺到して行つたのです。かくして、同月の二十七日には、首都ワルソーが陥落し、政府は國外にうつりましたが、ポーランド國は事實上全く滅亡しました。

その後ドイツは、昭和十五年四月にはノルウェー、五月にはオランダ、ルクサンブル、ベルギーに進撃しましたが、いづれの場合も、對ポーランド戦と同様に、その空軍を先驅させて敵の腰をくだき、その後は地上部隊と協力して、眞に疾風枯葉をまく勢をもつて敵を壓倒しました。



ユンカース88A爆撃機(ドイツ)幅18.375米、長さ14.376米、高さ4.70米、發動機2基計2400馬力、4座、機銃6、爆弾1800疋、最大496軒時、航続距離2500軒。

次に、やはり同様の戦法によつて、同十五年六月にはフランスを降伏させ、翌十六年四月にはギリシャ、ユーゴスラビアを平定し、六月には、對ソ聯戦に突入しました。

ソ聯は、ドイツに次いで空軍を充實させてゐた國ですが、質的に見てドイツの敵ではなく、それに従つて陸上の戦線も後退を重ね、その後大分もりかへしましたが、それでもなほ、その防禦線を國內數百軒のところにおいて今日に至つてゐます。

ドイツが、次々に、このやうにめざましい戦果を収めることが出来たこの原因には、作戦のうまさもあり、兵士の精神力の強さもあり、機械化された軍の優秀さもありませんが、何といつても、空軍力の壓倒的

な優勢が、第一にものをいつたものであることは、世界中の軍事通のみとめるところです。

ここに至つて、陸戦に對する飛行機の價値は、確固不動のものとなつてきました。

支那事變でも、皆さんの御承知の通り、我が陸海軍の航空兵力は、完全に敵のそれを壓倒し、全支の制空權は確實に我が方に握られてゐました。(大東亞戦争に入つてからも同様であります。)しかもなほ、ポーランドやオランダのやうに、又はフランスのやうに、蔣介石政権が降伏しないのは、支那の國土の特殊性——その無邊際(むへんがい)の廣さと、その國家(と、かりにいっておきます)の組織の特殊性——戦争をつづけるのは、蔣がその政權を維持するための手段であるといふやうな事情によるもので、一つの戦局を單位にしていへば、やはり我が方の航空兵力が第一に、少くとも眞先にものをいつてゐるのです。

二、航空兵力と海戦

陸戦での飛行機の偉力は、この通りはつきりしてゐますが、海戦の方ではどうでせうか。

この前の大戦中の海戦で、飛行機はほとんど功績らしい功績をあらはさなかつたことは、さつきさひました。

昭和七年、滿洲事變の翌年に起つた上海事變でも、昭和十二年からの支那事變ではもちろんのこ

と、我が海軍航空隊は、眞に縦横無盡の活躍を演じました。

しかし、何分にも當の蔣軍が、艦艇らしいものをほとんどもつてゐないため、敵の艦隊對我が航空隊のたたかひもなく、彼我の艦隊戦に我が海軍航空隊が協力するといふやうなこともありませんでした。わづかに、敵の小艦艇を爆撃で沈めたやうなことがあつただけで、本格的な海戦で、飛行機の價値が十分に發揮されるといふやうな場合はなかつたのです。

それでは、昭和十四年からの、第二次ヨーロッパ大戦ではどうかといふと、さすがにこの方では、いくらか實現されてゐますが、しかし、それもあまりばつとしたものではありません。

そのうちで、いちばん華々しいのは、昭和十六年五月末、北大西洋で行はれたドイツ戦艦ビスマルクの追撃戦でした。すなはち、五月二十四日、イギリスの巡洋戦艦フッド(四二一〇〇噸)を、一撃の下に倒して歸航中だつたドイツの新鋭戦艦ビスマルク(三五〇〇〇噸と公稱す)は、同日の夜中から、イギリス航空母艦の搭載機の攻撃を受け、翌日は舵機その他を破壊されて航行の自由を失ひ、また速力も一二節におちたところを、計一六隻のイギリス軍艦に包圍され、二十七日の午前、巡洋艦の雷撃によつて、つひにとどめをさされてしまつたのです。

この時は、結局の功績は巡洋艦にあるわけですが、事態をここに至らしめたのは、たしかに飛行機の功績でありました。

この他に、地中海方面で、イギリス海軍と、樞軸國空軍が、たがひに相手國艦隊を攻撃したことが數回ありますが、そのしとめたものは、みな巡洋艦以下の艦艇でした。

このやうに、陸戦では、前にいつたやうな偉力を示したドイツ空軍も、海戦ではほとんど見るべき戦果をあげてをりません。その理由としては、ドイツがはじめからその空軍を、海洋作戦に使うつもりでゐなかつたことや、イギリス海軍が、たとへばドイツ軍のノルウェー進駐の時のやうに、ドイツ空軍をおそれて、その行動圏内に近づかなかつたことなどが數へられます。従つて、ドイツ空軍の海上での活躍は、主として哨戒や、敵商船の攻撃に向けられてゐるやうです。

イギリス空軍の方では、ドイツ艦隊の勢力が、イギリスのそれよりも段ちがひに劣り、はじめから海戦らしい海戦の行はれる機會が少かつたため、かりにその實力があつたにしても、それをふるふ機會にもまた、めぐまれなかつたものでせう。

いづれにせよ、こんなわけで、ヨーロッパ大戦に入つてからでも、海戦での飛行機の力量や價値が、一體どれくらゐまで發揮されるものであるかは、よくわかりませんでした。

しかし、少くとも次の一つのことだけは、たしかなものとしてされてゐました。それは、どつちみち飛行機で戦艦を沈めることは不可能だといふことです。開戦早々、ドイツの飛行機は、北海でイギリスの一戦艦を攻撃したが沈まなかつた。地中海では、イタリアの空軍が、イギリス戦艦のマレー



我が戦艦の威容。

ヤを猛攻したが沈まなかつた。前記したビスマルクの追撃戦で、イギリス海空軍は、ビスマルクに對して、計八本の魚雷を命中させたが、それだけではやはり沈まなかつた。(ビスマルクは、その他に三十本の艦艇魚雷を受けてゐる。) けつきよく、飛行機は戦艦をしづめることは出来ない。戦艦をやつつけられない以上、海戦での飛行機の力は、決して決定的なものではない……。

世界各国は、このやうに信じてゐました。少くとも我が海軍以外はさうして、大東亞戦争のはじまるまでは……。

三、大東亞戦争と海軍航空

さて、その大東亞戦争ではどうでせうか。大東亞戦争で我が海軍航空隊の發揮した偉力については、後で詳しく記しますが、とりあへず、大東亞戦争がはじまつてから、滿二箇年の間に行はれた海戦の、主なものを列記してみると、左のやうになります。



出動を前にして基地で訓練を受ける我が水上戦闘機隊員。

- ハワイ海戦(昭和十六年十二月八日)
- マレー沖海戦(同 十二月十日)
- ジャワ沖海戦(昭和十七年二月四日)
- バリ島沖海戦(同 二月二十日)
- スラバヤ、バタビヤ沖海戦(同 二月二十七日—三月一日)
- 印度洋作戦(同 四月五日—四月九日)
- 珊瑚海海戦(同 五月七日—五月八日)
- 東太平洋作戦(同 六月四日—六月五日)
- 第一次ソロモン海戦(同 八月七日—八月九日)
- 第二次ソロモン海戦(同 八月二十四日)
- 南太平洋海戦(同 十月二十六日)
- 第三次ソロモン海戦(同 十一月十二日—十一月十四日)

ルンガ沖海戦（昭和十七年十一月三十日）　　レン、ネル島沖海戦（昭和十八年一月二十九日）
イサベル島沖海戦（同二月一日―七日）　　フロリダ島沖海戦（同四月七日）
ルンガ沖航空戦（同六月十六日）　　ブーゲンビル島沖海戦（同十月三十一日―十一月二日）
ブーゲンビル島沖航空戦第一次―第六次（同十一月五日―十二月三日）
ギルバート諸島沖航空戦第一次―第四次（同十一月二十二日―二十九日）
マーシャル諸島沖航空戦（同十二月五日）

このうち、第一番目のハワイ海戦の大戦果も、主として航空部隊のあげたものであり、マレー沖海戦でも、敵発見、接敵の功績は潜水艦にゆづるとしても、直接撃沈したのは航空部隊です。特にこの海戦は、イギリスが、對空防禦に精魂をかたむけつくし、自ら不沈戦艦と誇つてゐた、プリンス・オヴ・ウェールズが沈められてゐる點で注目されるものですが、ここにかかげた海戦で、飛行機が直接参加してゐないものといへば、バリ島沖、スラバヤ・バタビヤ沖、ルンガ沖の諸海戦ぐらゐのものでせう。しかし、これ等の海戦でも、その前後には、必ず飛行機による偵察とか連絡とかがあつたにちがひありません。又「何々海戦」或は「何々航空戦」と固有の名稱はあたへられなう、長期、かつ廣範圍にわたる南北の戦線、特にソロモン群島及びニューギニア島方面では、上陸部隊の陸戦を別とすれば、ほとんど空中よりする彼我の強襲戦の連続であります。

すなはち、我が海軍航空隊は、どんな艦種であらうと、たたかへば必ずこれをうちとつてしまふ實力を、まさまじと世界中に示しました。これは同時に、海戦における飛行機の價値といふものを、確固不動のものとしたことなのであります。ここにおいて、制海権を獲得し、かつ、維持するには、絶対に航空兵力を缺くことの出来ないことが、はじめてあきらかにされました。すなはち、制海権を獲得するには、まづ制空権の確立が先立たねばならないのであり、その制空権を確立するには、まづ強力な航空兵力を整備充實させなければならぬ、といふことになつたのであります。

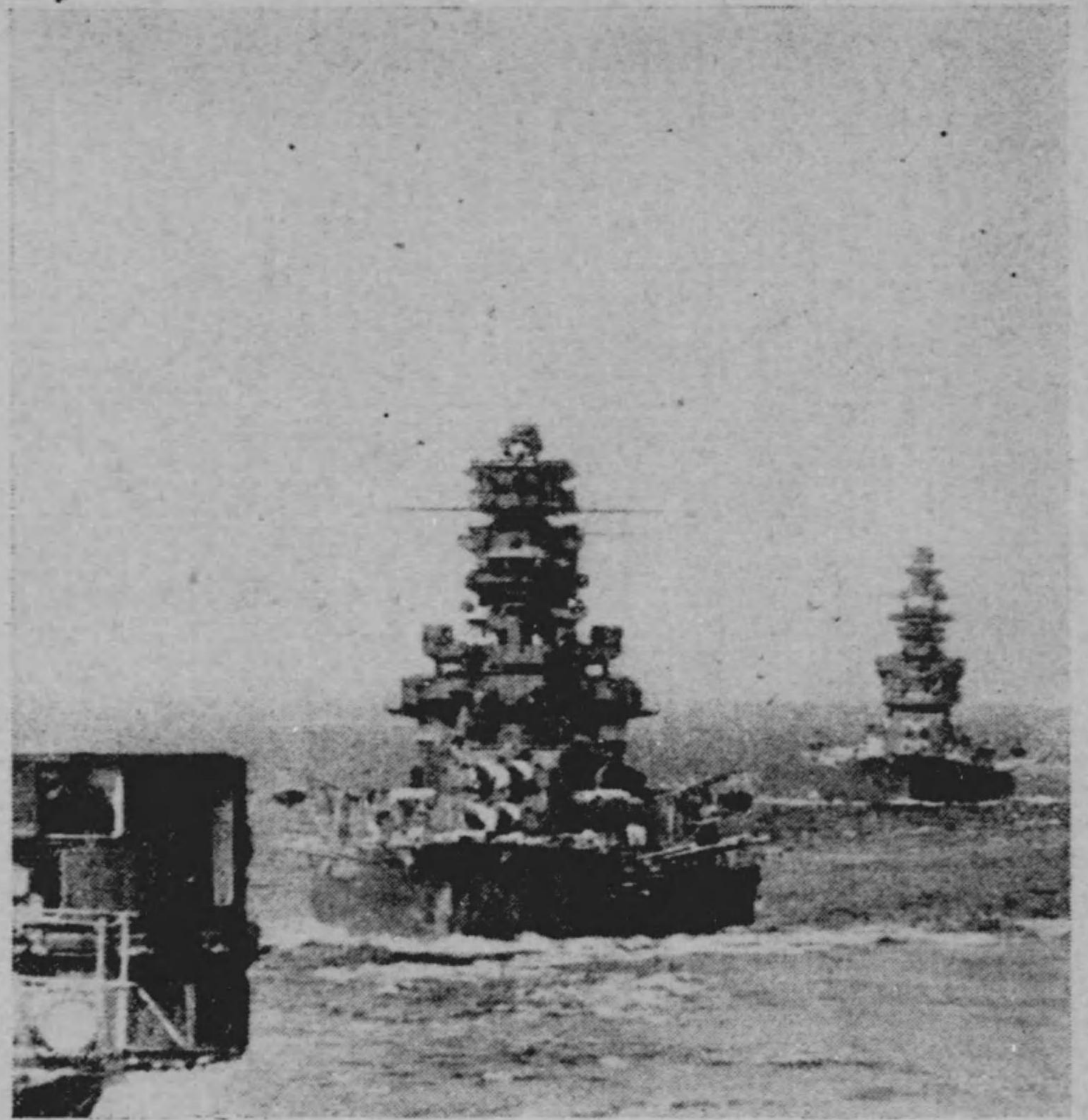
四、飛行機か軍艦か

ここで注意しなければならないのは、飛行機の威力がはかりしめてくるにつれて、軍艦、特に戦艦の値打を軽く見る様子の見えて來たことあります。

大東亞戦争での實例によつて、戦艦が、「我こそは海上の王者である」といつて、今までのやうに威張つてゐられなくなつたのはたしかです。

しかし、私たちはその一方で、海上のたたかひは、必ず飛行機を活躍させられる場所ではかり行はれるとは限らない、といふことを考へて見なければなりません。

又、海上のたたかひは、どんな場合でも、必ず飛行機を活躍させられる天候の時ばかり、行は



堂々たる我が戦艦隊の出動。

れるものとも限らない、といふことも忘れてはなりません。

次には又、今日の飛行機は、大都市の爆撃などを別とすれば、夜間での活動能力が、ひどく低下するといふことも、見逃してはならないことです。

すなはち、始めの飛行機の活動する「所」の条件、

次は「自然」の条件、次は「時」の条件の問題です。

今日の飛行機の航続力が海上の大艦と同じぐらゐに

ならない限り、その航続能力の及ばない海上で、同時に、航空母艦を伴はないで、彼我の艦隊がぶつかることもあり得るわけですから、さういふ場合は、戦艦のやうな「強い軍艦」を「多く」持つ方が勝つことになります。

次の天候については、海上の大艦の方が、飛行機よりもはるかに強い自主性を持つ、つまり天候の悪いことで、行動の自由をうばはれる割合が、飛行機よりもはるかに少いことはいふまでもありません。極端な例をつくれれば、飛行機はとて飛べないやうな悪い天気の時でも、軍艦の方は敵の飛行場の沖合に迫つて、砲撃を加へるといふやうなことも出来るわけです。

夜間の活動に至つては、海上艦艇の方が、飛行機よりも問題なく自由であり、又効果的であつて、例へば、船團の夜間の護衛などは、艦艇でなければとても出来ません。夜の暗さは、敵味方双方の飛行機に、同様に作用するのですから、この場合の護衛は、敵の潜水艦や、他の艦艇の攻撃に對してなされるわけですが、これには、何といつても海上艦艇の方が適するのです。

つまり、今日の飛行機が、海上の大艦のやうな航続力を持ち、風雨に對して強くなり、夜の暗闇にも困らないやうな性能をもてるまでは、海上の軍艦の力といふものを軽く見ることは、大きなまぢがひなのです。

ソロモン、ニューギニア方面や、アッツ島などへ敵が兵力を揚げる時は、ものすごく多数の飛行

機を出動させます。それがいかに優勢なものであるかは、我が軍の當局者も「遺憾ながら、第一線の制空権は、今のところ敵の手中にある」といつてゐるのでも想像されます。

それほど優勢な航空兵力を持ちながら、敵がその軍隊を輸送したり、上陸させたりする時は、常に多数の軍艦を、しかも、出来るかぎり戦艦をも出動させてゐるのです。これは、行動する舞臺が海上である限り、どんな作戦にも、必ず強力な艦艇の協力を必要とするといふ事實を、敵側の方から證明してゐるものであります。

かういふことを、深く心にとどめながら、航空兵力の重要性を考へて行きたいと思ひます。

五、アメリカの對日航空作戦

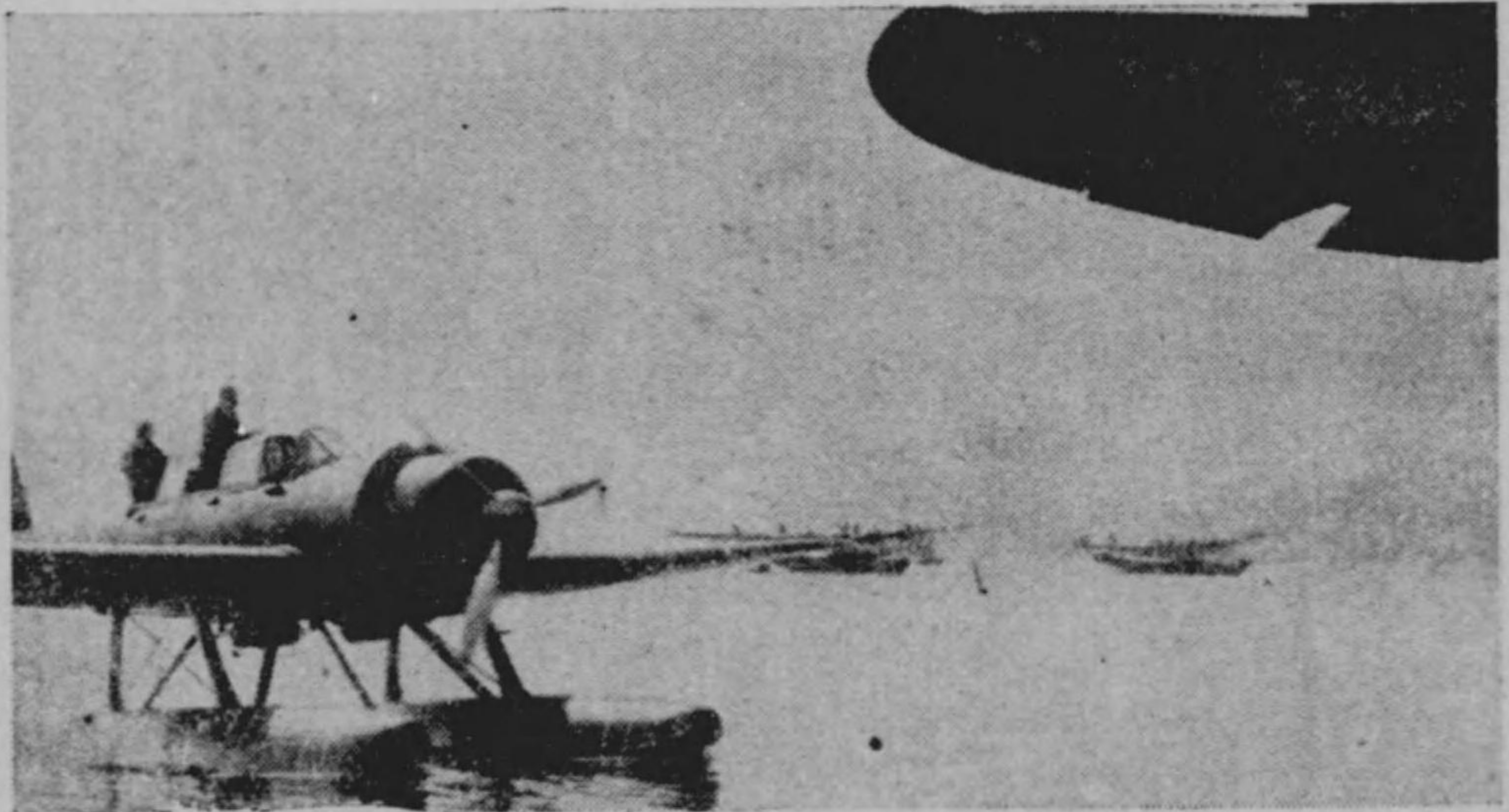
さて、開戦以來、我が海軍航空隊にさんざんたたかされた敵——ここでは、主としてアメリカのことですが——は、今日、どういふ作戦に出てゐるでせうか。

ここで、参考のために、開戦以來昭和十八年十二月七日まで、帝國海軍の滿二箇年間にあげた綜合戦果と、我が方の損害を一覽表にして見ると、次頁のやうになります。

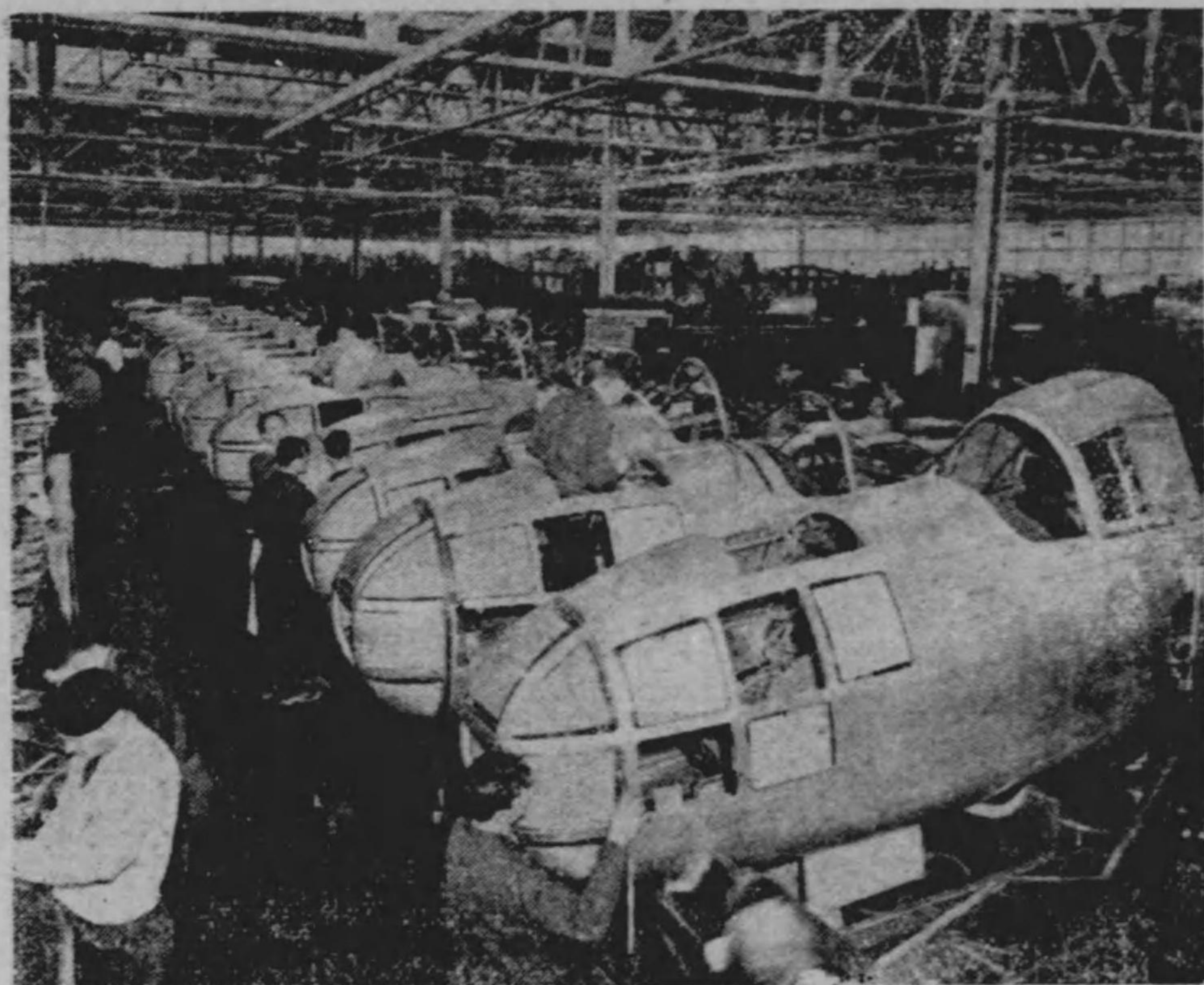
皆さんもすでに、御承知の通り、大艦の建造には、いづれも數箇年の年月を要しますから、一年や二年のうちに、かうまとめてやられては、とても補充が間にあひません。たとひ、間にあつたに

開戦以來の帝國海軍綜合戦果 (昭和十八年十二月七日まで)

艦種	撃沈			撃破			拿捕			我損害		
	米	英	蘭	米	英	蘭	米	英	蘭	沈没	大破	中破
戦艦	一〇	二	六	二	三	一	一	一	一	一	一	一
航空母艦	三	一	三	三	一	三	三	一	三	三	二	一
甲巡洋艦	三	六	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
乙巡洋艦	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
甲驅逐艦	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
乙驅逐艦	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
特務艦	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
潜水艦	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
砲艦	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
艇掃海	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
魚雷艇	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
小艦艇	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
特設艦船	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
艦型未詳	三	三	三	三	三	一	三	一	三	三	五	一
合計	四七	六	三	二	二	一	二	三	六	一	一	一
飛行機	五、二五	一、七六	六、八四	一、二五	一、二五	一、二五	一、二五	一、二五	一、二五	一、二五	一、二五	一、二五



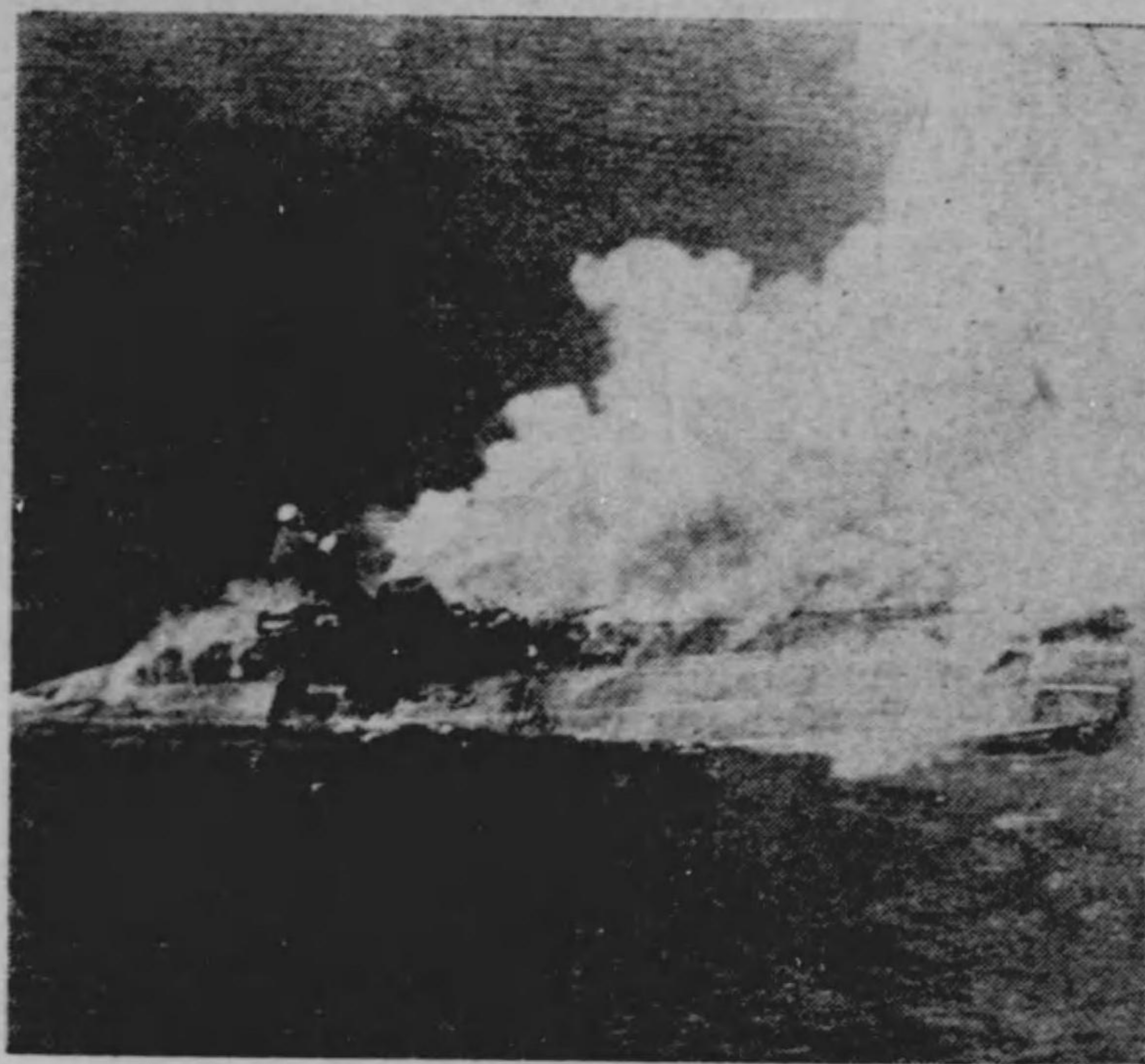
海軍航空部隊の水上基地



▼ーチン飛行機工場的大量生産。

それにつれて、乗員も出来なければ何にもなりません。それには、正規の兵隊だけではとても足りませんから、各種の學校に働きかけ、在校中から基礎訓練をほどこし、卒業後短期間の實習で、一人前の乗員に仕立てるといふ方針をとつてゐます。

もつともこれは、今急にはじまつたわけではなく、今まで第一線で働いてゐたアメリカ空軍將校もその八割までは、學生出身者であるといはれます。今後は、全體としての乗員を、大量に補充しなければならぬ關係上、この學生からの徵用も、思ひ切つて多くしようといふわけなのですが、とにかくいろいろな手段によつて、十八年中には二〇萬以上の乗員を養成する計畫を立



我が海軍に討取られたイギリス航空母艦ハーミス。

しても、また片ばしから、我が海軍航空部隊の好餌にされてしまふでせう。

そこでアメリカとしては、何はともあれ日本の海軍航空隊をやつつけ、各戦線の制空權を確保することが先決問題だ。それも、一機一機の戦闘性能や、乗員の術力や戦闘精神ではとてもかなはないから、しやにむに數で押して行かう。つまり日本が、つぶしてもつぶしても、つぶされないほどの航空兵力をさし向ける。それにつれて、日本の航空兵力も次第に傷つく。そこをどこまでも押して行けば、もともと資材と工業力のとぼしい日本は、しまひには必ずまゐる

にちがひなす……。

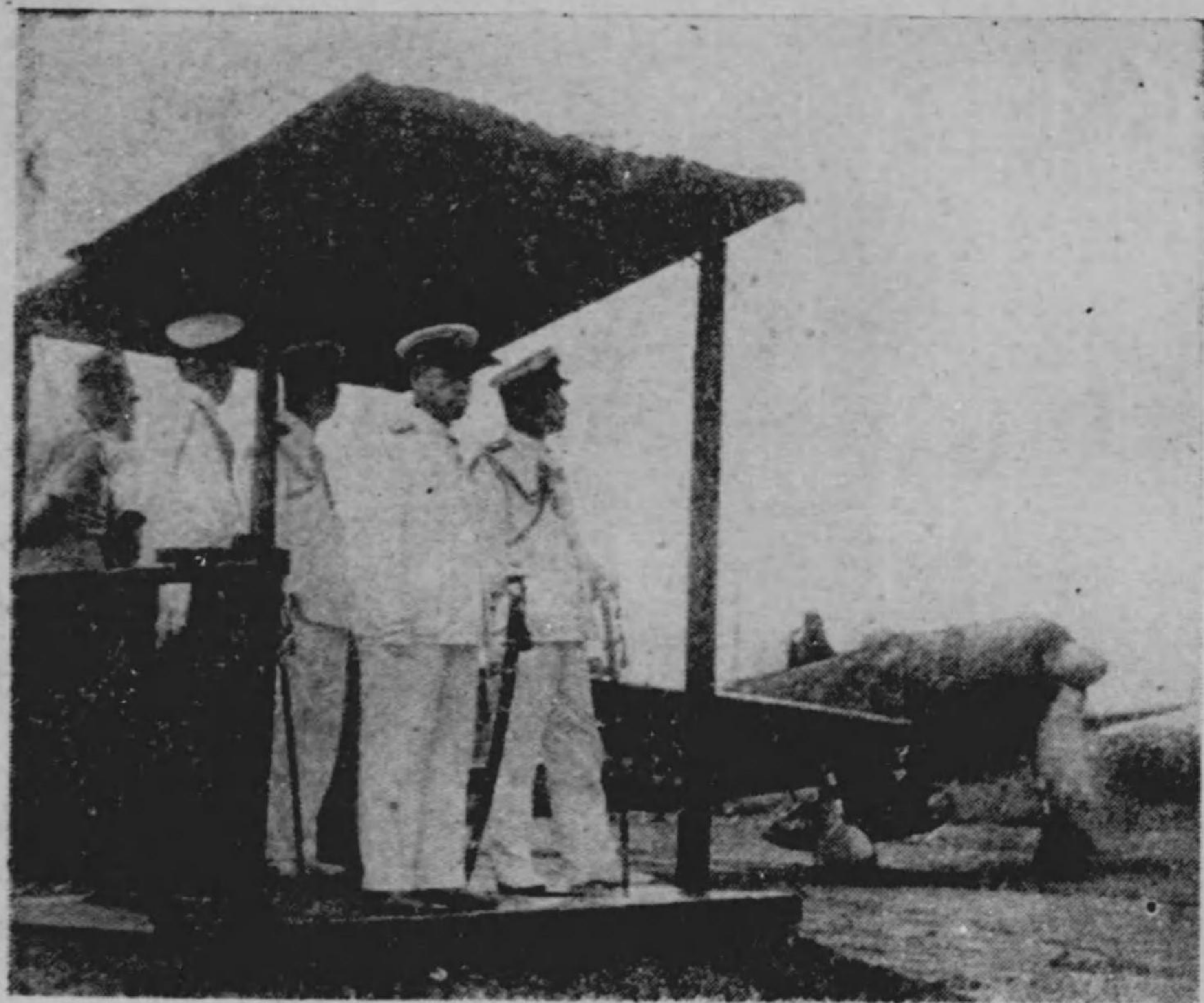
アメリカは、かう腹を据ゑました。そこで、開戦直後から、對日戦備の重點を航空兵力におき、十八年中には、月一萬機以上の製造能力を出せるやうにすると言明しました。

ててゐます。

かういふアメリカの作戦は、一應圖にあたりました。何しろ彼は、資源と工業力においては、世界一といはれてゐる國ですから、その航空兵力はめきめきと増強されて來たのです。その一方で、我が國は開戦以來追ひうちのかげ通して、戦線は伸びられるだけ伸びてゐた有様でした。そこへアメリカは、その空軍の全力をあげて押しかへして來たのです。

これに對して我が海軍航空部隊は、海上部隊と力を合せて、鬼神も及ばぬほどの應戦をつづけましたが、何といつてもかなはないのは、敵の機數の壓倒的な優勢さでありました。その結果我が方は、諸君も御承知の通り、ソロモン群島中のガタルカナルをはじめ、數箇の基地から轉進せざるを得なくなりました。アツツ部隊の玉砕も、その原因は主として我が航空兵力の劣勢にあり、又、山本聯合艦隊司令長官の戦死も、その原因は同じであるといへるのであります。

しかし、我が方はこの間にあつて、ただ爲すこともなくたたかれてゐたわけではありません。齒には齒をもつて、目には目をもつて報いるべく、こちらでも鋭意航空兵力の増強に努めてゐたのです。ところが、敵もまたこの間にあつて大馬力で整備してゐたものがありました。それは航空母艦です。さうして大膽にもその母艦の航空兵力を總動員して、更に我が要線へ肉薄して來るに至りました。前後六次に及んだブーゲンビル島沖、四次に及んだギルバート諸島沖、マーシャル諸島沖の



南方の飛行基地で作戦指導中の山本元帥、向ふに見えるのは戦闘機。

諸航空戦は、かくして起つたものであり、そのたびごとに、我が海軍航空部隊によつて擧げられた

大戦果は、我が航空兵力の充實を證據立ててゐるものと見て差支へありません。

開戦後半年でその航空母陣を全滅させられた敵は、基地航空兵力で我が方を押へつけながら航空母陣を再建し、大舉反攻して來たが、それがまたもや手荒くたたかれてゐる——これが、大東亞戦争滿二年來の現状であります。

六、航空決戦時代來る

このやうにして、今は正に「航空決戦時代」となりました。何はともあれ、まづ空で勝たなければ、空で勝ちつづけなければ、どんな作戦も出來ない時代となりました。



戦闘演習中のアメリカ海軍（飛行機はグラマン F2F-1 型水陸兩用機、軍艦は重巡洋艦）。

日の空中戦では、我が方の大勝利と決しても、次の日の敵は、前日以上の勢力で、ふたたびおしかへしてくるといふやうな、海上決戦では想像されないやうな状態が、平氣でくりかへされるやうなことになりました。

海上の戦闘は、その主體であるところの艦艇の建造に、多くの時間と、多くの資材とを必要とする關係上、その補充が容易でなく、従つて、その敗戦から生ずる劣勢は、ある年月の間とりかへすことができません。つまり、海上の決戦は、文字通り勝敗を決する動機となります。

しかし、航空戦の場合は、さう簡單には行きません。これは、飛行機とその乗員の補充が、艦艇の場合よりは、ずっとたやすいからです。つまり、多量生産がさくからです。

それで、數年前にあつた、ノモンハンの空中戦のやうに、大東亞戦争での制空戦のやうに、ある

かうなると、今日の制空戦は、空中決戦の間斷のない連続であると同時に、その航空兵力の補充戦となり、生産戦となつてくるわけでありす。さうして、そのやうにして、航空戦で勝つて、勝つて、勝ちぬき、それに應じて敵の海上兵力を、たたいて、たたいて、たたきぬいた時、はじめてほんたうの制空権が我が方の戦に握られ、同時に制海権も確保されることになるのであります。

敵アメリカは、今も申した通り、世界一の工業國であり、資源國です。そのアメリカが、今總力をあげて、航空兵力の擴充に熱中してゐます。

これは、まことに容易ならぬことであります。そこで私はこれから、海軍航空に關する一通りのことをお話し、我が海軍航空隊は何故強いのか、又、何故強くなければならぬのか、さうして、それをどこまでも強くするには、我々として、どういふふうな心掛け、どういふふうな努力すべきであるかといふやうなことに ついて、皆さんといつしよに考へて行きたいと思ひます。

第二章 今日の軍用機の性能

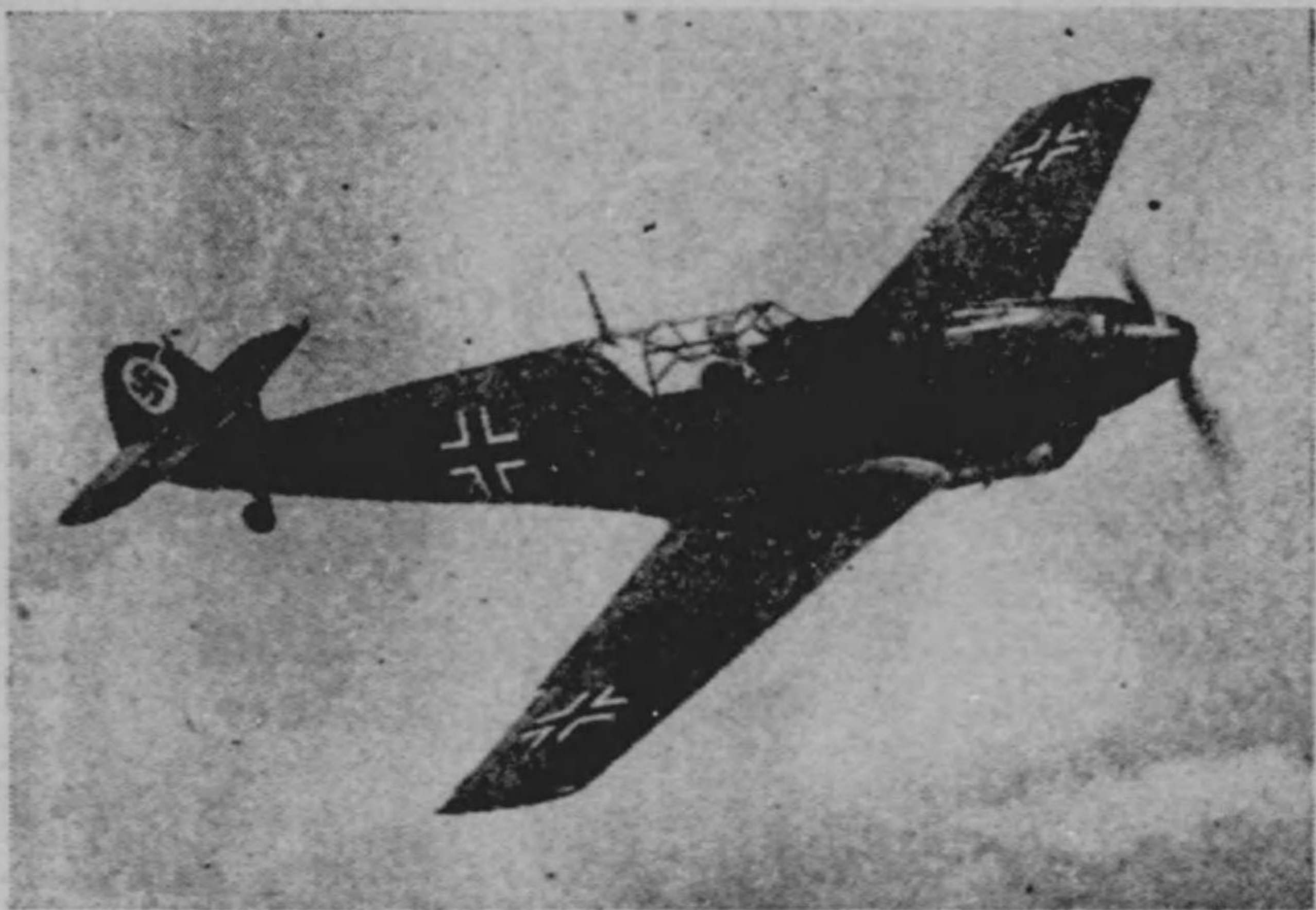
一、高性能を第一とする軍用機

その前に、今日の軍用機がどんな段階をたどり、現在はどのような性能を出せるやうになつてゐるかを調べて見ませう。それを一通り頭に入れておけば、今日の航空戦の性格や、制空權と制海權の關係などが、いつそうよくわかるからです。

現在飛行機には、軍用と民間用とがありますが、軍用機にしても、民間機にしても、飛行機の理窟そのものには、何のちがひもありません。

しかし民間機の方は、つくり方にしても、とばし方にしても、安全で經濟的であることを第一としなければならぬのに對し、軍用機の方は、そんなことよりも、性能のよいことを第一としなければならぬといふ點では、全くちがつてゐます。

それはその筈で、民間機は平和な産業や商業に使ふものであり、軍用機は、國家が生きるか死ぬかといふ大事をさめる戦争で、出来るだけ強くなければならぬ關係上、自然にかういふ結果とな



メッサーシュミット109型單座戰闘機（ドイツ）。

るのです。それで、今日の飛行機の性能の記録も、たいいてい軍用機がもつてゐます。これから、それについて簡單にのべて見ませう。

一、速度

アメリカのライトが、明治三十六年に、二六〇米を五秒間でとんでから三年後の、明治三十九年に、フランス人のサント・デモンは、五〇馬力の複葉機で、一時間に四一軒の割合でとんでゐます。前大戦のはじまる前の年の大正二年には、同じくフランス人のヴェドリースが、デベルデユッサン單葉機で、一七四軒時（軒時は軒で示す一時間の速さ）の記録をつくつて、世間を驚かしました。大戦の終つた翌々年の大正九年には、同じくフランス人のサディ・ルコアントが、ニューポール複葉機で、一気に一〇〇軒時も記録を引上げ、二七五軒時の速さを出しました。

ところが今日では、その三倍近くも速くなり、七五五籽時が速度の世界記録となつてゐますが、これを出したのは、ドイツのメッサーシュミット一〇九型單座戰鬥機です。これは、東京—大阪間を、三五分ほどでとべる速さにあたります。

三、航 續 距 離

フランスのブレリオが、八〇籽のドーヴァー海峡を横斷して、世界中をあつといはせたのが、ライトの最初の飛行成功から六年後の明治四十二年。それから十六年後の大正十四年には、フランスのアラシヤール他一名が、ブレゲーの一枚半翼（複葉のうちの一翼の大きさが、他の半分ぐらゐしかないもの）で三一六六籽をとんで世界記録をつくりました。

更にその十三年後の昭和十三年には、イギリスのブルネット他二名が、ヴィッカーズ・ウェルズリー爆撃機で、エジプトのイスマリアから、オーストラリアのダーウィン——大東亞戦争で、我が海軍機からさかんに爆撃されてゐるあのポート・ダーウィンまで、一一五二〇籽をとんでゐます。

これが現在の航續距離の世界記録ですが、これを京から東の方へのばして見ると、太平洋を横斷してアメリカにたどりつき、更にそのアメリカを横斷してから、大西洋に出るだけの距離にあたります。

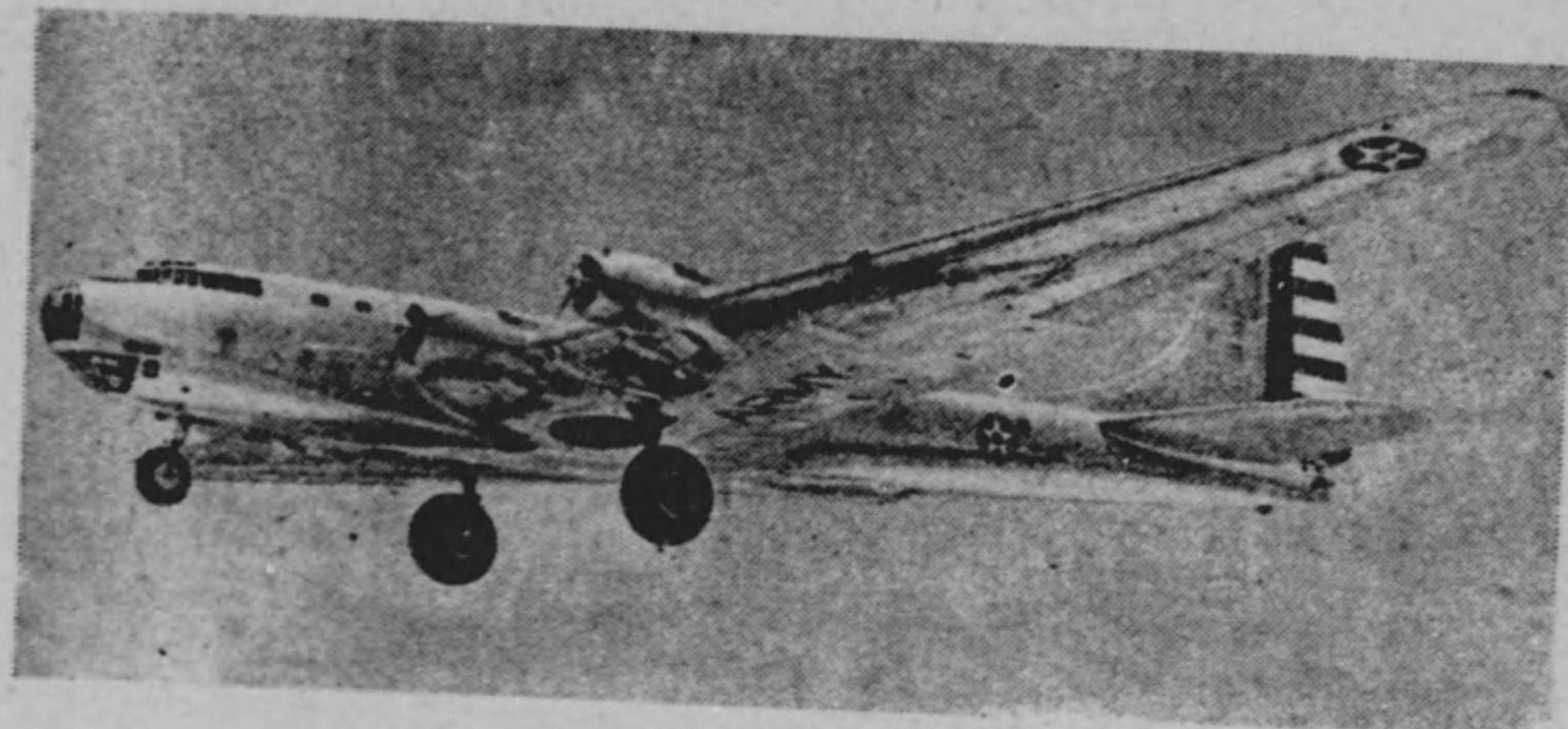
これは、ある地點から他のある地點へ、まつすぐとんだ距離の記録ですが、一定の地點を、ぐるぐるまはつた合計の距離としては、昭和十四年に、イタリアのサヴォイア・マルケッティ爆撃機の一二九三五籽といふのが、世界記録となつてゐます。これを、前大戦のおこる前年、大正二年の記録の、フランス人スガンが、アンリ・ファルマン複葉機でつくつた一〇二一籽にくらべると、一二倍にもなつてゐます。

四、高 度

ブレリオがドーヴァー海峡横斷に成功したのと同じ年の明治四十二年には、フランス人のラタムが、アントアネット單葉機で、一五五米までとんだのがその年の高度記録でしたが、その十四年後の大正十二年には、前に速度の記録をつくつたフランス人のサディ・ルコアントが、一〇七四一米までのぼることに成功しました。しかし、現在の世界記録は、イタリア人ベッチが、昭和十三年にカプロニ式複葉機にのつて、一七〇八三米までのぼつたものです。

この高さは、我が富士山の四倍以上、世界第一の高山エベレストの約二倍にあたります。

しかし、以上にあげた記録は、みな記録をとるために、それを第一の目的として準備してとんだ時にあらはれた性能で、どんな場合でも、この通りといふわけには行きません。實際の戦争の時



ダグラスB19型超重爆撃機（アメリカ）。

爆弾や機関銃などをつまなければなりませんから、重くなつて速度がおちたり、ガソリンを少くするので、航続距離がへつたりするやうになります。いづれにしても今日の飛行機は、出さうと思へばこれだけの性能が出せる、といふことには變りがありません。

五、大 き さ

飛行機は、必ずしも大きいものだとは限りません。戦闘機などは小さい方が、かへつて便利な場合もあります。それにしても、どれだけ大きなものをつくれるかといふことは、それだけ技術が進歩したことを示すわけです。

今日の飛行機で、いちばん大きいのは、アメリカのダグラス・B一九型です。これは、アメリカが長距離爆撃用として設計したもので、幅約六四米、長さが約三四米、機體の重さが三八〇〇〇斤、搭載量（つめるものの重さ）が二五〇〇〇斤、両方合はせれば、

ば、實に六三〇〇〇斤の重さとなります。しかも、一二〇〇〇斤の航続力をもつてゐるさうです。

乗組員は一〇人といふことになつてゐますが、一人の重さを六〇斤としても、一〇人で六〇〇斤しかありません。それで、差引二四〇〇〇斤以上の重さだけ、爆弾や、機関銃や、機関砲や、その弾や、燃料などをつめることになるわけです。この搭載量は、ふつうの重爆撃機の搭載量の一〇倍ぐらゐにあたります。

しかし、實際のところ、この途方もなく大きい爆撃機は、試験飛行では成功しましたが、ほんものの戦争に出かけて、はたしてどれだけ役に立つかはあやしいものだともいはれてゐます。

六、武 装

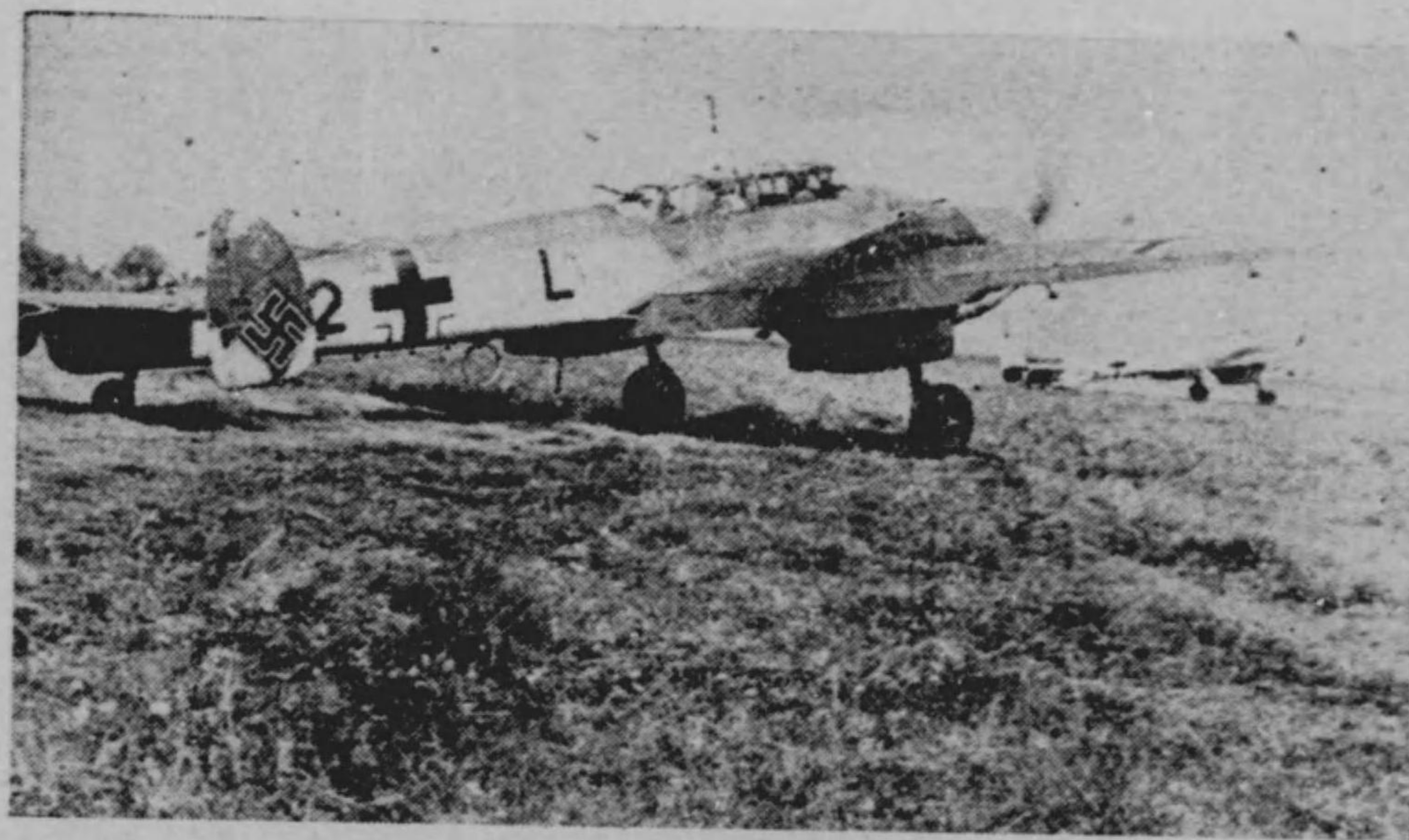
この前の大戦で、はじめて飛行機が戦場にあらはれた時分は、ふつうの小銃を射つたものです。（フランスの飛行機は、嘘かほんたうか知りませんが、はじめのうちは、れんぐわのかけらをぶつつけたりしたこともあつたさうです。）

それが、大戦の終るころには、前方に向けて、プロペラの回轉をぬつて弾を射つ固定機関銃を二挺もつけた他、後方には、同乗者用の旋回機関銃を一挺つけたものがあらはれてゐました。

しかし、今日の軍用機の武装は、そんな貧弱なものではありません。大東亞戦争で、さかんに射



スーパーマリン・スピットファイア単座戦闘機（イギリス）。



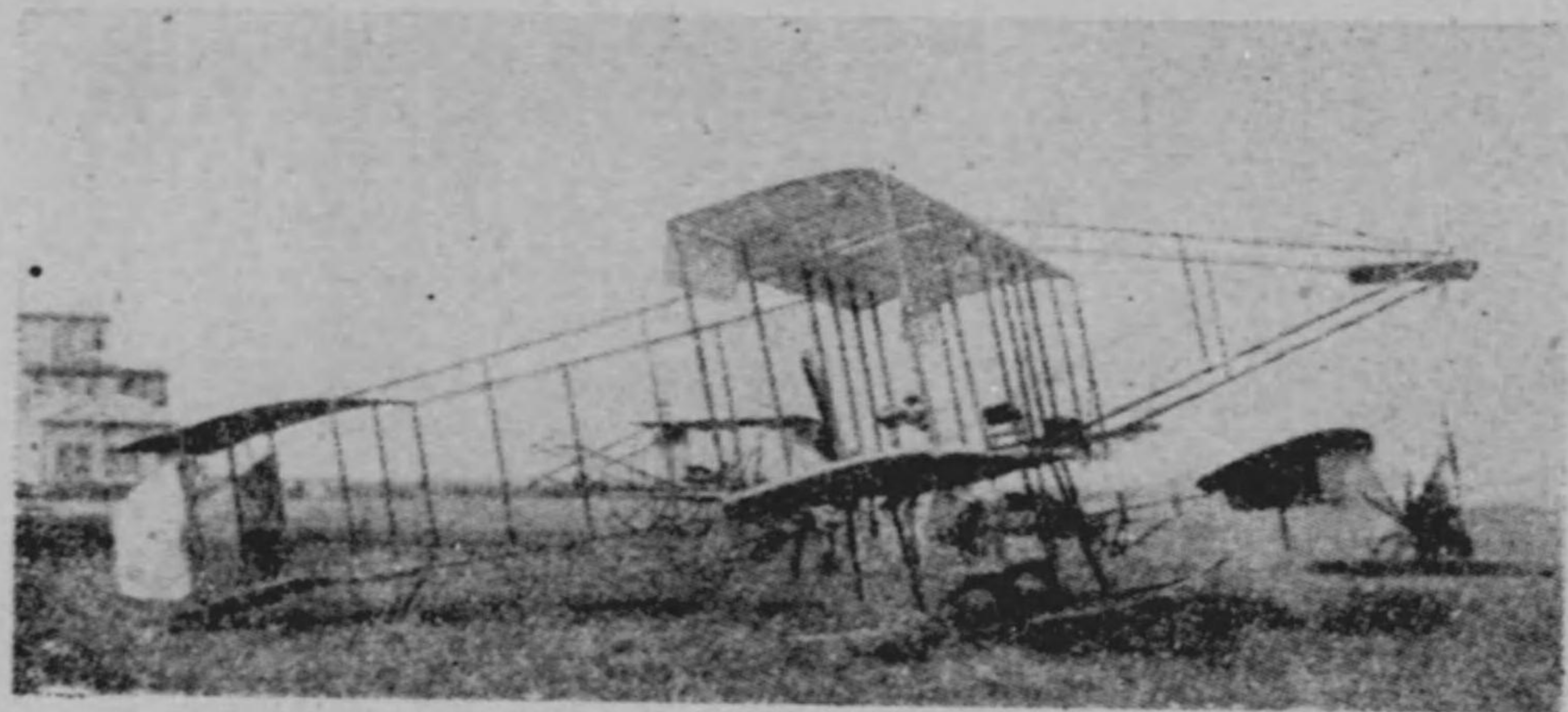
メッサーシュミット110型雙發戦闘機（ドイツ）。

ちおとされた、イギリスのスーパーマリン・スピットファイア単座戦闘機は、八挺から一〇挺の機
關銃を、ドイツのハインケル一二型單座戦闘機は、機關砲と機關銃を、それぞれ二挺づつつけた
他、いくつかの小型爆弾をもつことができます。同じくドイツのメッサーシュミット一一〇型複
座戦闘機（雙發）は、機關砲二挺と六挺の機關銃をつんでゐます。

使はれはじめたばかりの頃は、サイダー瓶ぐらゐだつた爆弾も、今日では五〇〇疋も、一〇〇〇
疋もの大きさも普通となりました。ものをうちこはす力も、ものすごいものになつてゐます。かう
いふ爆弾を、今日の爆撃機の大きいものは、二〇〇〇疋分も、三〇〇〇疋分もつみこんで、何千疋
といふ遠方まで攻撃にをかけて行くのです。

七、つくり方、その他

昔の飛行機は、木材の骨組ほごみに布を貼はつてつくりました。翼もそのやうにしてつくつた、ごく薄い
ものでしたから、そのままでは、飛行機をとばせるだけの風壓ふうあつ（風の壓す力）にたへられません。
それで、大部分の飛行機は、上下に二枚の翼を並べた複葉式とし、その間に柱を立て、更に何十本
もの針金を張つて、ぐらつかないやうにしました。まれには一枚翼の單葉式もありましたが、この
時は上の方に柱を立て、下の方は脚あしなどを利用して、やはりたくさん針金を張つて、翼がぐらつ



昔の飛行機の一例、モーリス・ファルマン式（フランス）。

かないやうにしたものです。

かういふ柱や針金の多いことは、空気の抵抗を増し、速力をおとす原因の一つとなりましたが、そのうち翼型の研究がすすみ、翼を厚くしてもさしつかへない、否、かへつてきさめのよい型が出来ることがわかると、だんだん翼を厚くして一枚だけにし、柱や針金を使はないやうにしました。

それと共に、軽くて丈夫な金属をつくる研究がすすみ、金属の骨組の上に、ジュラルミンといふやうな薄い金属板をはつて、翼ばかりでなく、胴體も尾部も、全部金属でつくるやうになりました。いはゆる全金属製です。

かうなると、いよいよじやまな出づばりをなくし、丈夫さもうんと増したものがつくられるやうになりましたが、一方では、空気の抵抗をできるだけ少くする型態——流線型の研究がすすんできましたので、飛行機はいよいよ速く、又うまくとべるやうになったのです。

ライト兄弟がはじめてとんだ時の飛行機の發動機は、わづか一二馬力でした。それが、前大戦中には二〇〇乃至三〇〇馬力のものが使はれるやうになり、更に今日では、一臺で二〇〇馬力以上もあるものがつくられてゐます。重爆撃機などは、かういふ大馬力の發動機を、二臺から四臺ぐらゐまでつんでゐるのである。

飛行機をつくり方や發動機が、このやうに進歩した結果、前にお話したやうな、いろいろのすばらしい記録もつくられるやうになつたのです。

八、性能と戦闘實力

ここで一つ注意しなければならないのは、性能の記録と、實際の戦闘力との関係です。

軍用機にとつて、性能のよいことが必要なのは、改めていふまでもありません。しかし、性能さへよければ、必ず實際の戦争に強いかといふと、必ずしもさうではありません。

たとへば、速力はかりすぐれてゐても、操縦性が劣つてゐたり、搭載量は大きくても、航続力が小さかつたりといふやうな工合に、どこか一點だけずばぬけてゐたのでは、結局上手な戦争はできないといふことになります。

かういふ部分部分のことでは、たとへば機關銃砲の數とか、装甲の厚さとか、速度とかいふ點で

は、我が軍用機にまさる敵機が、ずるぶんあることと思ひます。しかし、實際にたたかつて見ると、彼等は決して我が方にかなひません。

そのわけは、第一に我が軍用機が、戦闘第一を旨とし、その機種に應じて、その機種の必要とする各性能を、まんべんなく高めてゐるからです。

次に、搭乗員の技術がすぐれ、同時に見敵必殺の一念に燃えあがつてゐるからです。かりに、我が軍用機に敵の人間をのせて見ても、決して我が方と同等の強さは發揮し得ないでせう。

こんなわけですから、性能記録の数字だけで、その飛行機の戦闘實力をさめるのは、かなりそつかしいことなのです。それに、性能記録といふのは、さつきもちよつといつたやうに、その記録をとるための最上の條件で、たとへばお天氣のよい時とか、機關も乗員もいちばん調子のよい時とかをえらんでつくるのですから、そんなことにはおかまひなしにとばなければならぬ戦時とは、いつそう話がちがつてくるわけです。

何事にも、大きな数字ばかり並べたがるアメリカの飛行機の性能表などを見て、いきなり恐れ入つてしまはないやうに、皆さんもよく注意して下さい。

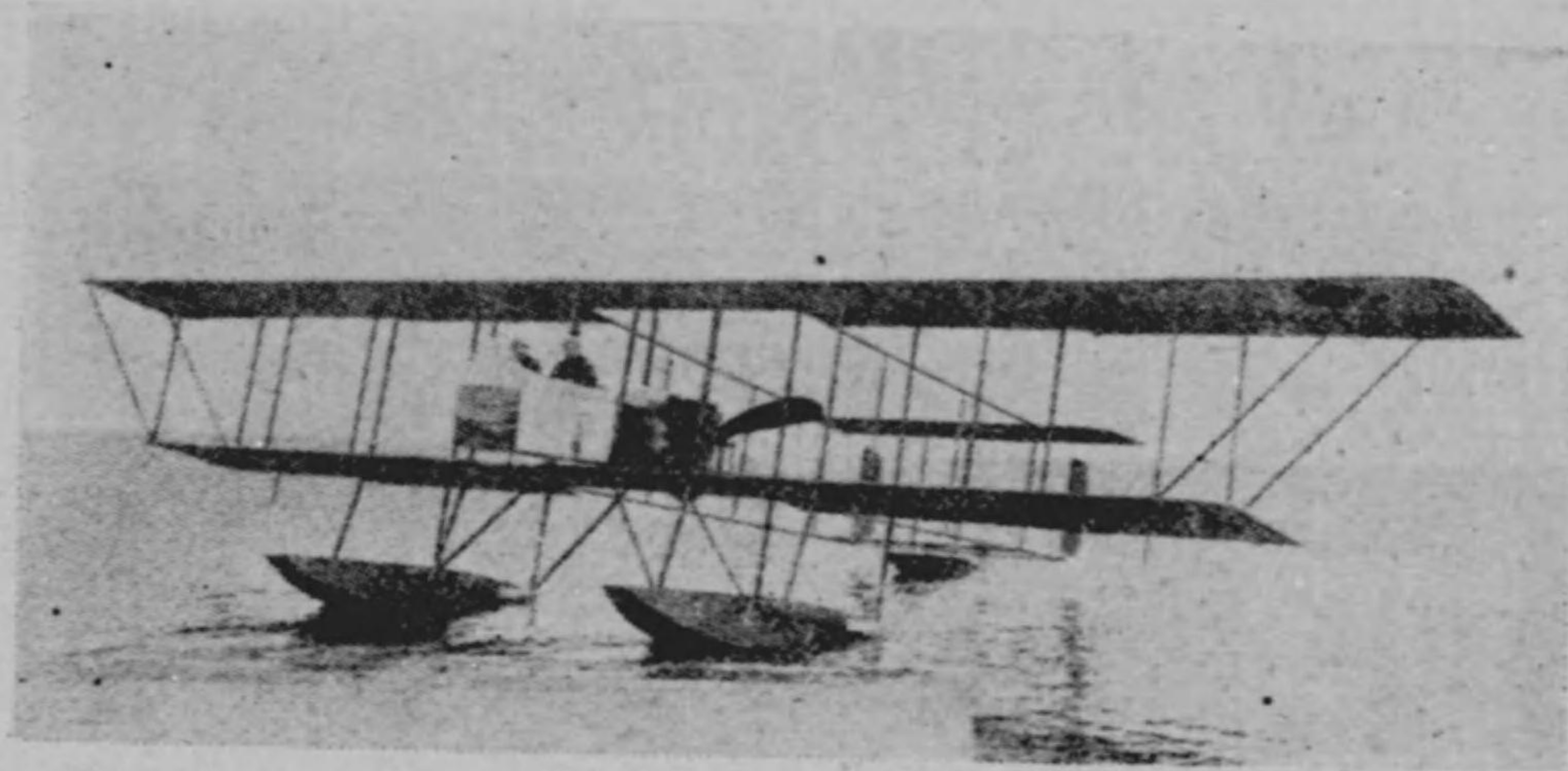
第三章 我が海軍航空の發達

一、前世界大戦まで

飛行機そのものは、前章にのべたやうな工合に發達してきましたが、それでは、我が海軍航空隊はどんな道をたどつて、今日の精強な状態に達したものでせうか。

我が國で、はじめて飛行機に關する、組織的な研究が行はれるやうになつたのは、明治四十二年のこと、臨時軍用氣球研究會がそれに當りました。これは、陸海軍の専門士官と、民間の學者たちがあつまり、航空機一般について、共同の研究を行ふものでしたが、このままでは、種々の不便があるので、我が海軍は、明治四十五年、航空委員會を横須賀に設け、海軍独自の立場から研究をすすめることになつたのです。

それと同時に、フランスには梅北、小濱兩大尉、アメリカには河野、山口、中島（中島飛行機株式會社の創設者）の三大尉が、飛行術研究に派遣され、そのフランスにはファルマン式、アメリカにはカーチス式の水上機が註文されましたが、これ等の飛行機は、同年の秋に到着しましたので、



モーリス・ファルマン式水上機。

前記の河野大尉は、カーチス式を操縦して飛行しました。それは、明治四十五年十一月二日のことで、これが海軍機の最初の飛行です。さうして、その十日後の十二日の観艦式には、初の天覧飛行を行ひ、翌大正二年秋の海軍大演習では、早くも偵察任務に服してゐます。

なほこの年には、横須賀工廠でカーチス式の試作に成功してゐます。

翌大正三年には、第一次世界大戦が起りました。當時我が國は、イギリスと同盟をむすんでゐましたので、ドイツを敵として起ち、その東洋における根據地の青島を攻略することになりました。さうして、同年十一月には、早くもそれに成功してゐますが、この攻略戦には、水上機母艦若宮が、ファルマン式水上機四臺を積んで出動し、偵察や爆撃に活躍させました。これは、我が海軍機の参加した最初の實戦であります。

この世界大戦は、新兵器であるところの飛行機を、急激に進

歩發達させました。それと共に、飛行機の軍事的價值が次第には、きりしてききましたので、我が海軍では、多くの將校を海外に派遣して研究させ、一方では、すでに委員會で取扱ふべきものではなくつたことを認め、それを解散して航空隊を組織することになり、その最初のものとして、横須賀海軍航空隊が新設されました。大正五年四月一日のことです。

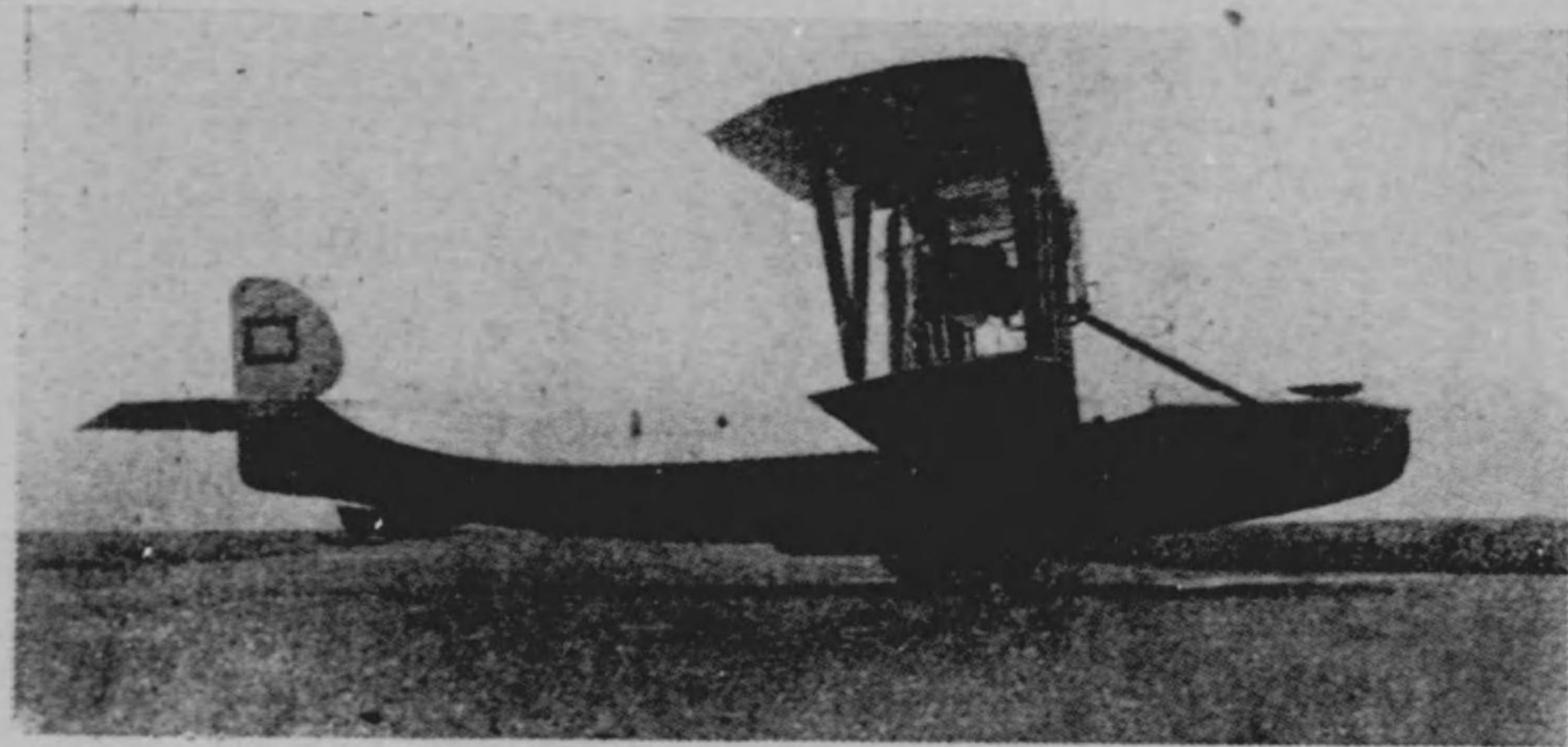
翌六年には、今までのやうに、操縦者を將校中からばかりでなく、廣く下士官中からも採用して、人員の擴充をはかることにしました。又この頃は、すでに國産の發動機や機體の製作にも成功してゐたのです。

大戦は、その翌年の大正七年に終つてゐますが、この年には、飛行機の他に、氣球や飛行船も採用され、横須賀に氣球隊が新設されました。

二、上海事變まで

このやうに、第一次大戦中、我が海軍航空隊は、いちじるしく發達しましたが、たがひに國土を接近しあひ、空中での爭覇戦をはげしくくりかへした、ヨーロッパ諸強國の飛行機の方は、更に數段もの進歩をとげたのです。

我が海軍は、率直にこのことを認め、大正八年には、フランスの空軍將校五十七名を、同十年に



我が國最初の飛行艇テリエ式。

はイギリスの空軍將校三十名を招いて、實戰の經驗にもとづいた教育を授けてもらふことにしました。これは、我が海軍航空隊の操縦術、航空戰術を發達させるのに、非常に役立つものであります。

なほ、この中間の大正八年には、飛行艇がはじめてフランスから輸入され、翌九年には、桑原大尉が、水上機母艦の艦首に設けた飛行甲板からの出發に成功してゐます。又、十年には、優秀な國産艦上戦闘機・艦上雷撃機等が、どしどしとくり出されてゐます。

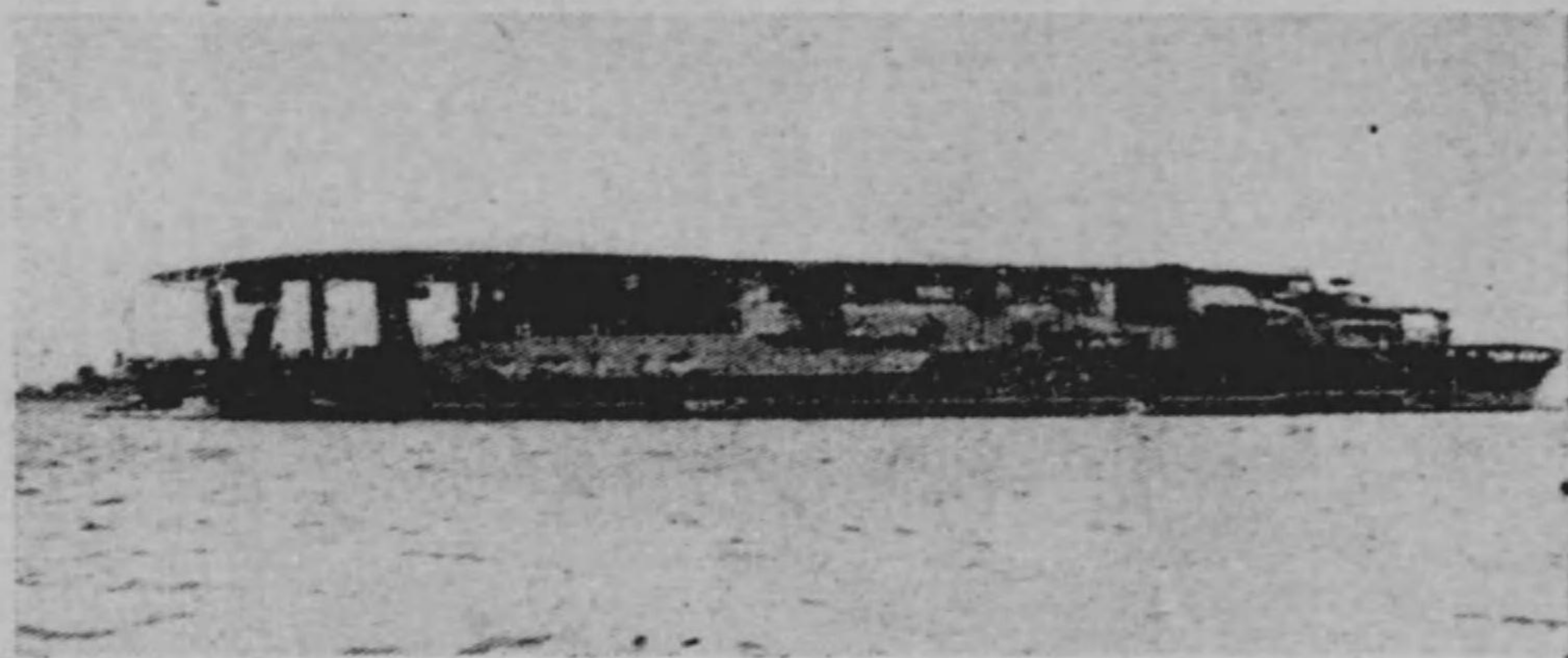
翌十一年には、横須賀航空隊に航空船隊がおかれた他、霞ヶ浦、大村各航空隊が新設され、又、我が海軍最初の航空母艦鳳翔が出來上る等、我が海軍航空隊にとつて、まことに意義深い年ですが、一方ではワシントン軍縮會議が、主力艦と航空母艦の保有量を、アメリカとイギリスの五に對し、日本に三をおしつけた、たいへん呪はしい年でもあります。

そこで我が海軍は、制限外におかれた巡洋艦以下の、いはゆる補助艦艇の増強につとめると共に、同じく制限外におかれた航空兵力の充實に全力をつくすことになりました。

ワシントン會議は、航空母艦の保有量は制限しましたが、飛行機そのものには觸れませんでした。アメリカやイギリスは、遠洋への機動性を有する母艦さへ制限すれば、それで安心と思つたのでせうが、どつこいさうはまゐらず、大東亞戰爭開始以來、皆さんも御覽の通り、主として我が海軍航空隊によつて、その艦艇も航空兵力も、めちやめちやにたたかかれてゐるのは、何とも小氣味のよい話であります。

さて、このやうにして、形體が整備充實されて來ますと、我が海軍航空隊は、長距離飛行訓練をさかんに實施しました。即ち、十四年の五月には横須賀—北京間、十五年の五月には佐世保—上海間（飛行艇）、同七月には、横須賀—元山間（同上）、昭和二年四月には、水上偵察機による千島飛行、六月には佐世保—臺灣間、七月には横須賀—小笠原間、昭和四年には横須賀—サイパン間（飛行艇）等の長距離海洋飛行を實施し、いづれも見事に成功してゐます。

これより前、昭和二年には、二六九〇〇噸の航空母艦赤城、翌三年には同じく二六九〇〇噸の母艦加賀が竣工し、我が海軍航空隊はいよいよ充實してきました。兩艦とも、はじめ巡洋戰艦として計畫されたのですが、ワシントン會議の結果、航空母艦に変更建造されたのです。



航空母艦赤城

又、昭和三年には、呉式射出機が完成し、これを練習艦朝日に据ゑつけ、射出機からの飛行にも成功を収めました。

昭和五年は、いはゆる少年飛行兵の第一期生が公募された、記念すべき年です。この制度は、世界にも前例のない企畫で、その成果は、昭和十二年の支那事變であざやかに發揮され、大東亞戦争に至つて、いよいよその眞價がみとめられてゐるものであります。

この昭和五年には、館山航空隊が、翌三年には呉航空隊が開設されてゐます。又、この時分は、機體、發動機等、すべて純國産のものをもつて占められ、人員の大量養成と相俟つて、我が海軍航空隊の實力は、正に確固不動のものとなりました。

昭和六年九月に勃發した滿洲事變は、翌七年一月末、飛火して上海事變となりました。

この事變には、水上機母艦能登呂、航空母艦鳳翔、加賀等が出動し、我が海軍航空部隊が、はじめて近代的な航空作戰に活動することとなりました。

すなはち、一月二十一日、第一回目の偵察飛行を行つた後、連日敵砲臺や陣地に對する爆撃をくりかへしました。二月二十二日には、小谷大尉が、アメリカ人ショットの操縦する戦闘機と交戦、これを撃墜しましたが、自らも敵弾に倒れました。これは、我が海軍航空部隊としての最初の敵機撃墜であります。

上海事變は、三月三日停戦となりましたが、それまで、我が海軍航空部隊は、連日のやうに偵察や爆撃をくりかへして地上部隊に協力し、航空母艦及び航空兵力の價値を、十分に發揮したのです。

三、大東亞戦争まで

上海事變は、このやうにして、海軍航空兵力の價値を示すと共に、その實戰の經驗はまた、我が海軍航空を進歩發達させるのにあづかつて、大いに力あるものでした。

一方では、昭和五年のロンドン會議で、巡洋艦以下の補助艦艇の保有量にも差等をつけ、我が海軍には、アメリカ、イギリスの七割弱をおしつけました。ここにおいて、その比率の劣勢を補ひ、海防の完全を期するため、我が海軍は、いよいよその航空兵力の増強につとめ、又、航空戰術の研究、航空戰團の訓練に突込んで行つたのであります。

かくして、昭和八年二月には水上機母艦神威が、五月には航空母艦龍驤が完成、又十一月には大湊に、昭和九年の二月には佐伯に、十年の十月には舞鶴に、十一年の四月には木更津と鹿谷に、十月には横濱と鎮海に、それぞれ航空隊が開設されました。さうして、その翌十二年には、支那事變の勃發となつたのです。

支那事變は、滿洲事變、上海事變と同様に、日本排斥——いはゆる排日行動が發火點となつて起つたものであり、その排日行動はまた、東亞の地域に、日本の勢力の伸びるのを望まないイギリスやアメリカや、その他の國々が、滿洲の張政權や、支那の蔣政權をかけからあやつり、そのおかしやらせたものであります。

この事變に對して、我が方は、はじめ不擴大方針をとつておりました。つまり、本國から大きな兵力を送らず、なるべく現地部隊の交渉だけで、穩便に解決をつけようとしたのです。

それをいいことにして、蔣介石軍は、我が權益や國民の最も集中してゐる上海の日本租界を、十重二十重にとりかこみ、無防備の我が居留地帯に連日空襲を加へました。

その結果、租界の周圍ではものすごい市街戦となりましたが、我が海軍の特別陸戰隊員は、數十倍の敵軍に猛反撃をくりかへすこと約十日間、つひに居留地の安全を守り通し、後着の陸軍部隊の協力を得ることが出來たのでした。

ところが、航空兵力の方は、敵がアメリカやイギリスの新鋭機を數百機も用意してゐたのに對し、我が方は、支那方面艦隊の艦載水上機數臺を持つに過ぎません。しかし、それでもなほ勇敢に敵を迎へうち、敵戦闘機三機と、浮舟のつたいはゆる下駄ばき機單機でわたりあつて、敵の一機を撃墜し、他の一機を浮舟でたたき落とすといふやうな、空中戦をも演じてゐます。

しかし、いづれにしても、かういふ調子では、勝戦をつづけることはおぼつかない。どうしても敵の空軍を、思ひきりたたきつけなければならぬ。そこで、八月十五日、折から颶風の荒れ狂つてゐた支那海を突破し、敵の空軍根據地や、當時の首都の南京などに、我が海軍航空部隊が大空襲を加へたのが、いはゆる渡洋爆撃として知られてゐるものであります。

このやうな長距離爆撃は、當時としては世界戦史上空前のことで、全世界を驚倒させました。ここにおいて、我が海軍航空隊が、前に記したやうに、かねてから海洋上の長距離行動の訓練につとめてゐた効果の一部も、はじめて世にあらはれるに至つたのですが、そのほんたうの價値は、大東亞戦争に入つてから、全面的に發揮されることになつたのです。

それはさうとして、支那事變における海軍航空隊の活躍は、眞にめざましいものがあり、全支那の空は、完全にその手によつて制壓され、常に陸戦を有利にみちびいたばかりでなく、我々内地のものも、敵の空襲に對しては、少しの不安もない生活をつづけることができました。



波 洋 爆 撃

この前後五年にわたつた支那事變は、多くの尊い犠牲を生じさせましたが、その一方では、あらゆる部面にわたつて参考事項を供し、我が海軍航空隊の實力を、いよいよ向上させることになりました。さうして、次第に險惡を加へてくる國際情勢に對應して、數の上でも増強をつづけてゐるうちに、大東亞戦争となつたのであります。

我が海軍航空隊の奮闘ぶりについては、後の方で記しますが、要するに、海戦といふ海戦には、ほとんどすべて航空部隊が協力し、又は主力となつて活躍して敵艦艇の大半を撃滅し、敵機約五〇〇

〇を撃墜破してゐるのです。さうして、その威力は、今までの海戦のやり方を根本から變更させ、又艦艇そのものの建造法にも、革命をもたらすやうになるだらうと見られてゐる有様です。

第四章 海軍機の種類とその役目

一、種類のある理由

さて、今までのべて来たやうな戦闘をやつてのけ、戦果をあげるには、ただ一種の飛行機ではだめであることはいふまでもありません。

一口に軍艦といつても、その中には、戦艦・巡洋艦・航空母艦・潜水母艦・水上機母艦・海防艦・砲艦・潜水艦・驅逐艦・敷設艦・特務艦、その他で二十種以上もの別があります。これは、一つの軍艦で、何から何までやりまるといふわけには行かないので、それぞれ得意な戦法をもつたいく種類もの軍艦をつくり、分業的に活動して、全體としての海戦を有利に戦はうといふのです。

飛行機の方も同様で、一機種で何でもできる萬能機といふやうなものは、なかなかつくれない。無理につくれば、その仕事のうちのどれか一つを専門にする機には、きつとかなはないといふことになるので、やはり、いくつかの種類をつくり、それがたがひに連絡しあひ、補ひあつて、綜合戦力を大きくするやうになつてゐるのです。

我が海軍の飛行機は、今のところ、偵察機・戦闘機・爆撃機・攻撃機・飛行艇等に大別されます。これから、その一つ一つについて解説して行きます。

一、偵察機

昭和十七年五月七日、八日の二日間にわたり、わが海軍航空隊は、オーストラリア東方の珊瑚海で、アメリカとイギリスの聯合艦隊に猛攻を加へ、戦艦一隻、航空母艦二隻、重巡洋艦一隻撃沈、戦艦二隻、重巡洋艦一隻撃破、敵機八十九撃墜といふ輝かしい大戦果をあげました。いはゆる珊瑚海海戦であります。

これより前、敵の大艦隊が移動中との情報がありましたので、我が偵察機隊のある一機は、〇時間ものあひだ、海上をさがし廻つたあげく、つひに前記の大部隊を発見、その旨を無電で基地に知らせた。同機は、燃料のゆるすかぎりがんばつて、やうやく敵を見つけたのであつて、その時は、基地までかへるのに、一ばい一ばいの燃料しか残つてゐませんでした。

ところが、同機は、そのかへり道で、さつき自分の打電した報告によつて出動して来た、味方の攻撃部隊に出あつたのです。すると、同機は、くるりと向きをかへ、攻撃部隊の先頭に立つて案内役になりました。

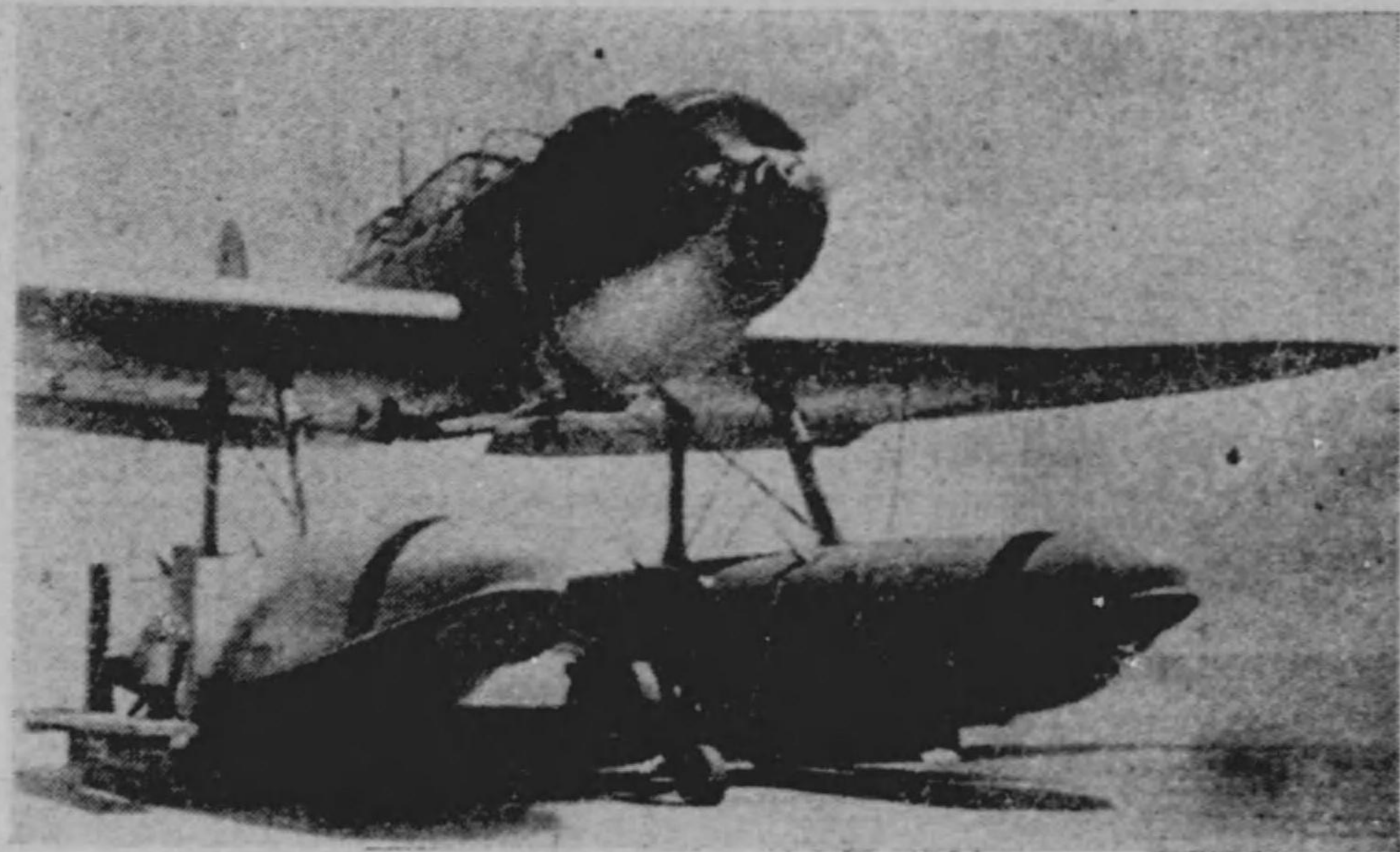
敵を發見し、その勢力や、現在位置や、進行の方向や、速度等を打電したことで、同機の任務はすでに立派にはたされたのです。しかし、その乗組員は考へました——萬一、味方があの敵艦隊を發見されなかつたらどうなるだらう。今までの自分の努力が無駄になるのはまだよいとして、みすみすあの敵の大部隊をとり逃すことになる。それは全海軍、いや、帝國にとつて由々しき大事件だ。よし、俺が案内に立つ……。

おかげで、我が攻撃部隊は、首尾よく敵艦隊の上空に達し、勇躍して攻撃態勢に入りました。その時、先導に立つた偵察機は、翼をふつて味方に別れを告げると同時に、敵艦目がけて一直線に突込んで行つたのです。これは、引返す時からの、覺悟の自爆であつたことはいふまでもありません。

偵察機は、その名の通り、敵狀を偵察し、それを報告するのを、主な任務とする飛行機です。そのためには、まづ航續力の大きいこと、つまり、長い間飛びつづけられることが必要です。この條件は、特に海軍機の場合に、いつそう強く要求されるものです。

陸上のたたかひでは、敵の行動する地點なり、道順なりは、地圖をしらべれば、大體の見當がつかれます。それは、山とか、谷とか、川とかいふやうな地勢上の條件によつて、その行動がひとりで制限されるからです。それで、陸戦にはたらく偵察機は、出發前に、自分の行動すべき方向や時間等を豫定することができます。

水上偵察機



もちろん、海軍偵察機でも、最初からあるきまつた地點、たとへばシンガポールのセレーター軍港とか、マニラ港とかいふやうなところを偵察する場合は、前もつて行動時間の豫定も立てられます。

しかし、海上の敵機動部隊を探し出し、その様子を偵察する場合は、さうかんたんには行きません。海洋は、その上を行動するものに對して、何の制限も加へないからです。それで、豫想海面に行つたからとて、必ず敵がそこにあるとはかぎらない。いつ、どつちへ行つてしまふかも知れないからです。それを、どこまでも探し求めなければならぬといふ事情から、海軍の偵察機の航續力は、特に大きくなければならないのです。

ついでに記しますが、偵察機にかぎらず、この航續力の大きいといふことは、海軍機全體に必要なことで

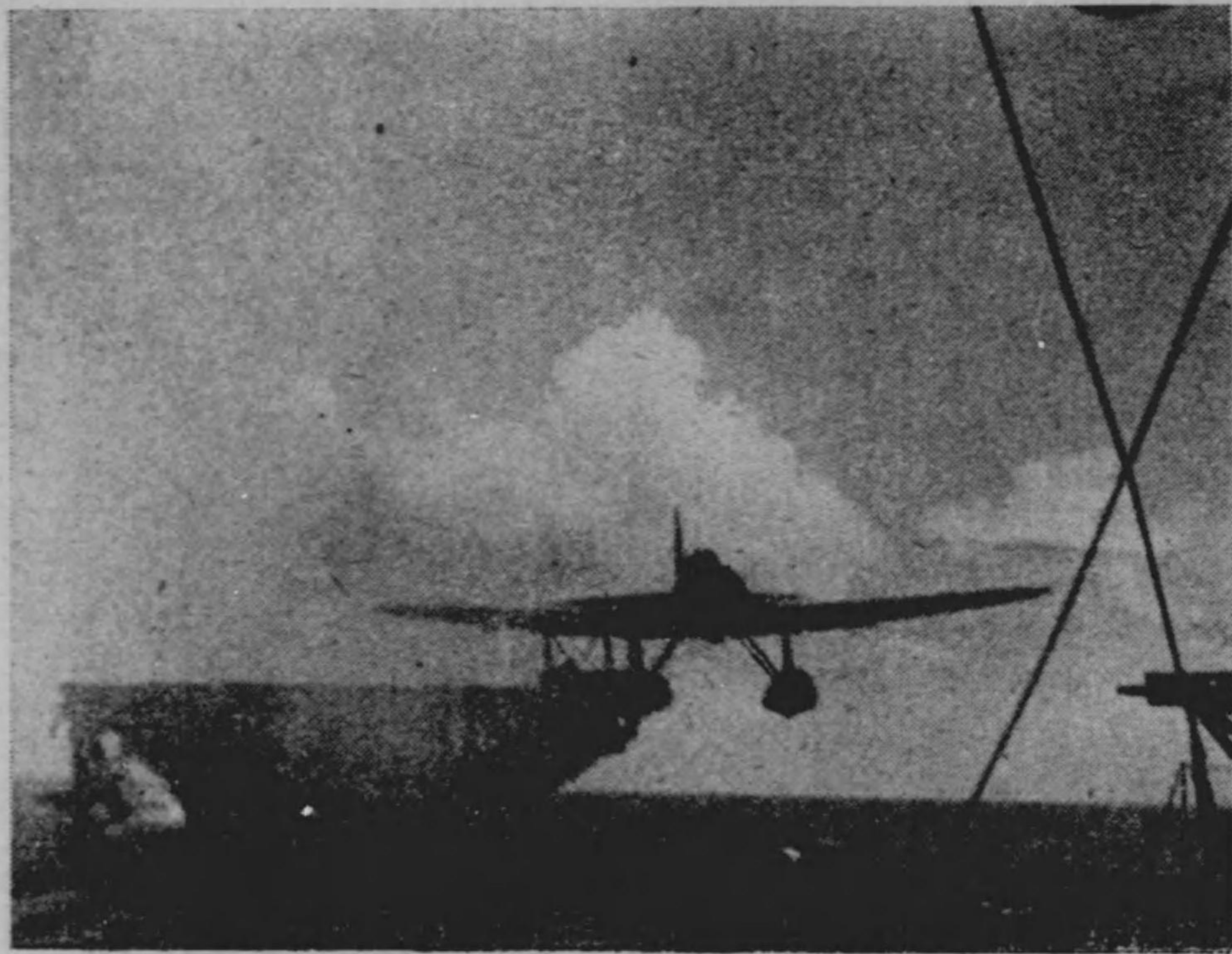
す。もつとも、爆撃機や攻撃機が、爆弾や魚雷をだいて、あてもなくとび廻るといふことはなく、あらかじめ敵の所在位置をたしかめてから出動するので、その行動時間も豫測することができますが、それにしてもその時間は、陸戦の場合よりも、ずっと長いことが要求されるのです。何故でせう。

海が広いからです。おまけにその上には、何の障物もないので、敵はいつ、どこからでも、自由に攻撃を加へてくる。それを、できるだけ遠方の海洋上でつかまへて、たたかばなければならぬからです。

さて、偵察機は、敵を発見したら、前にいつたやうに、その様子を本隊へ知らせなければなりません。そのために偵察機は、特に性能のよい無電機をつんでゐます。又、要塞や軍港や、海戦の様子などを写真にとることも必要な時がありますから、航空写真機をそなへたものもあります。

かういふ、いろいろな仕事をする關係上、偵察機の搭乗員は、二人、あるひは三人ぐらゐなければなりません。おまけに、さつきお話ししたやうに、燃料をたくさんつんで、航続力を大きくしなければなりませんから、その機體は、どうしても戦闘機などよりは大きくなり、行動もあまりすばしくありません。

我が海軍の偵察機は、たいてい浮舟をつけた水上機です。いはゆる水上偵察機です。この水上偵



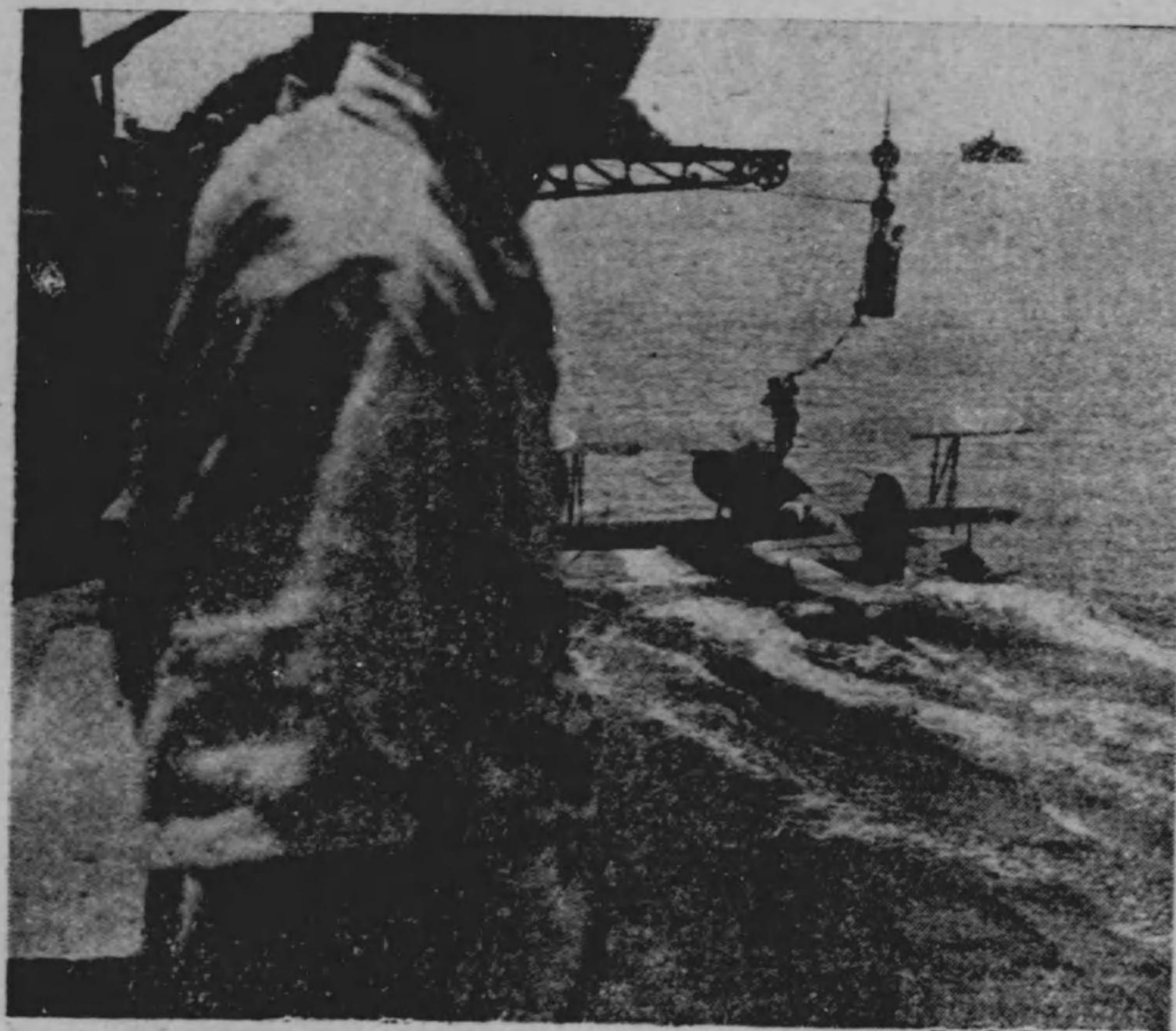
射出機から發射された瞬間の水上偵察機。

察機は、根據地の海面に發着して活動し、また、戦艦や巡洋艦などに搭載されて活動します。あとの場合は、特に艦載水上機といひます。

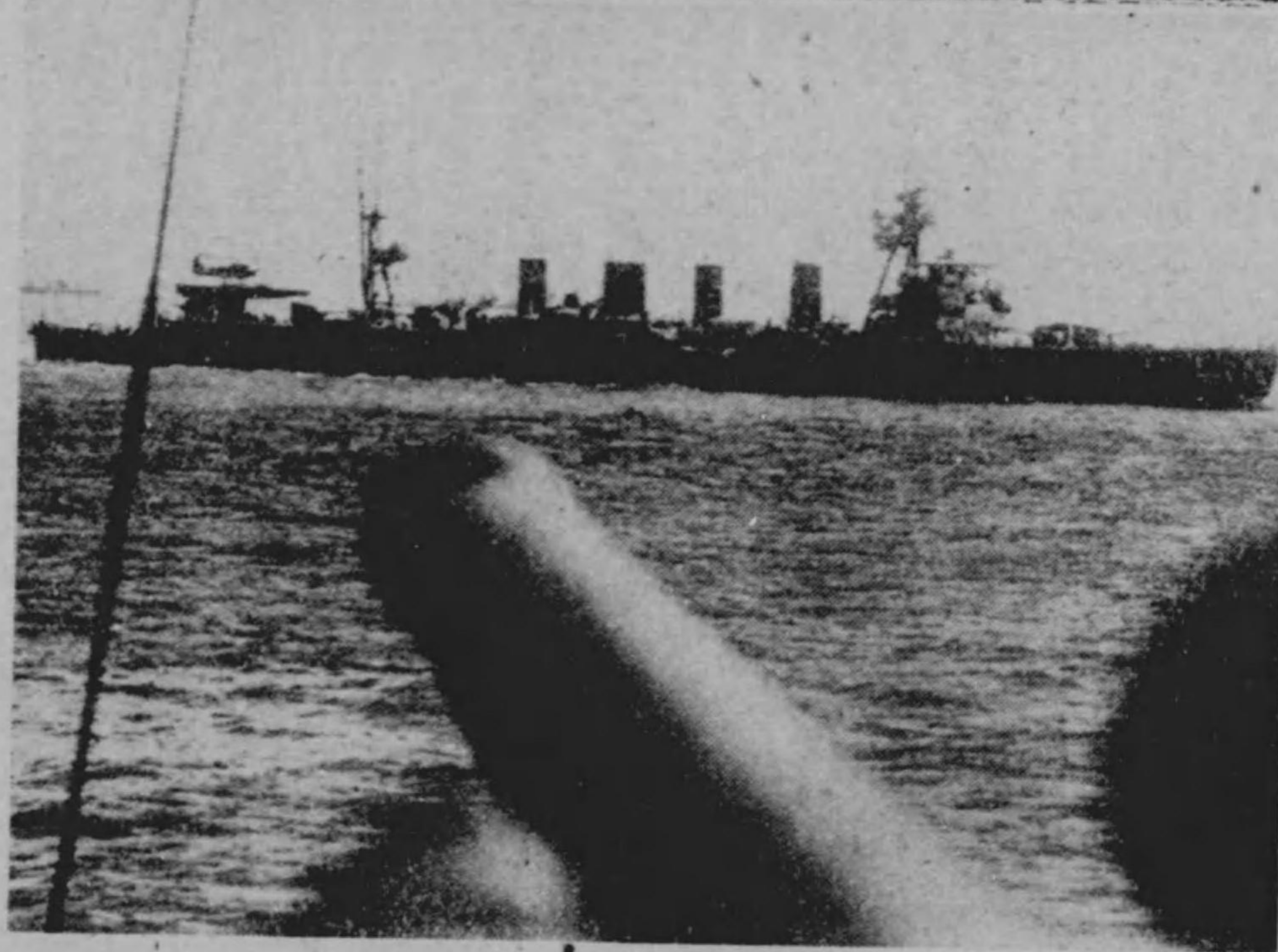
艦載（水上）機が出發する時は、艦上の射出機（カタパルト）から發射されますが、かへる時は、又もとの射出機の上へひらりと降りるわけには行きませんから、一たん近くの海上へ著水し、滑走して艦側へ來ます。艦は進行を止めて、それを起重機でつり上げて收容するのです。

しかし、この收容はふだんの訓練の時、又は戦場から遠くはなれた海面でなければなりません。艦から出發した後で戦闘がはじまれば、艦の進行をとめて、起重機を出してつり

艦上に收容される艦載水上機。



輕巡洋艦の射出機に載せられた艦載水上機。



上げるなどといふのんきなことは、してゐられないからです。さういふ場合の艦載機は、どつか遠くの方に僚艦を見つけて、收容してもらふより外はありません。しかし、それは必ず期待できることではありませんから、戦闘直前の艦載機は、最初から自爆を覺悟して飛び出し、しかも自分にあへられた使命だけは、できるだけ忠實にはたすのです。戦闘機や爆撃機のやうに、はなやかな戦果をあげるものではないだけに、かういふ偵察機の使命は、全く悲壯なものであります。

海軍には、陸上を基地とする航空隊もあります。航空母艦もあります。それでもなほ、戦艦や巡洋艦が、めいめい數臺の偵察機をつんでゐるのは、基地航空隊の飛行機の行動される範圍外の海上で、さうして、航空母艦をつれてゐない時でも、海戦を有利にするためです。

かういふ場合、艦上から出發した偵察機は、いち早く敵艦隊の様子をさぐり、それを無電で味方の艦隊に知らせます。あの日本海海戦のはじまる約十時間前、すなはち、明治三十八年五月二十七日午前四時五十分、哨艦信濃丸がまづバルチック艦隊を發見し、「敵艦見ユ」といふ無電を發しました。次いで、巡洋艦の和泉が敵艦隊にとりこき、その隊列の順序や、隻數や、速力や、進航の方向や、その他一切のことを知らせました。

それで東郷司令長官は、實際に海戦のはじまる何時間も前から、敵の状態を手にとるやうに知り、めんみゝな作戦をねつて戦闘にのぞみ、あの大勝利をつかみました。

これと反對に、敵艦隊の方は、日本艦隊の情勢は全くわからず、ただ、文字通りめくらめつぽふにとびこんで来て、徹底的にたたきつぶされてしまったのです。

今日の艦載機の仕事の第一は、この信濃丸と和泉のやつたことを、いつしよにしたものと思へばよいのですが、その一方では、昔の海戦では、想像もされなかつたやうな仕事をやります。彈著の觀測や、煙幕の展張などがそれです。

艦砲（軍艦の大砲）の彈丸のとどく距離は、時代と共にのびる一方で、たとへば、日露戰爭頃の戦艦の主砲のそれは約八〇〇〇米、この前の世界大戰當時のそれは一五〇〇〇米、さうして現在では、三〇〇〇〇米以上となつてゐます。

大砲の彈が遠くまでとんで行くことは、それだけ早く敵をやつつけられることになつて、たいへんけつこうなのですが、その一方では、せつかく射つた彈が、うまく命中したかどうか、よくわからないといふ不便をとまふことにもなりました。三〇〇〇〇米以上もはなれると、相手の艦體は、地球のまるみのため、水平線の下へかくれてしまふからです。

かういふ時、艦載機の活動がはじまるわけで、上空から見下しながら、自艦の彈のあたり工合を調べ、それを一々無電で報告します。艦の方では、それによつて狙ひを正し、命中彈を集中するやうにするのです。

又、たとひ、艦體がよく見える程度の距離での砲戦にしても、この艦載機が（他の艦艇でも出来ませんが）煙幕を張つて味方の艦隊をかくしてしまひ、自分はその煙幕の上から敵艦隊を見張つて、味方の砲撃を指導すれば、敵はただ射たれる一方といふ、みじめな立場におちいつてしまふわけです。しかし、これは敵が我が偵察機に向つて、まるで反撃しなかつたとしての話で、實際は、先方もこれと同じやり方に出てくるにちがひありません。そこで、おたがひにそれをやらせまいとして、ここに偵察機同志の戦鬪がはじまることになり、それに勝つた方が、今までのべてきたやうな有利なたたかひをやるやうになるわけです。これも、制空権のあり方によつて、海戦の勝敗がさまることを物語る一例であります。

我が海軍の艦艇部隊と航空部隊は、昨年八月七、八、九日の三日間にわたつた第一次ソロモン海戦で、撃沈だけでも敵巡洋艦一三隻、驅逐艦九隻、潜水艦三隻、輸送船一〇隻といふ驚くべき大戦果をあげてゐますが、そのうちの八日の夜戦は、艦艇部隊だけで行はれたものです。

その夜、我が艦隊が、敵艦隊の集合海面より、まだすゝと手前を進んでゐる時、まつくらやみの空へ飛上つて行つたのは、旗艦の艦載機でした。それから幾時間かたち、我が艦隊は、その大砲や魚雷をつかへるところまで、敵の集合海面に近づきました。

その時、敵の上空を旋回しながら、味方艦隊の近づくの待つてゐた艦載機から、ぱつと照明彈

が投下されました。何十隻かの敵艦船は、その光の下にくつきりとうかび上りました。その瞬間に、我が艦隊の一せいの攻撃がはじまりました。かの艦載機は、敵艦隊の所在地點を、味方にたしかめさせる役目をつとめたのです。

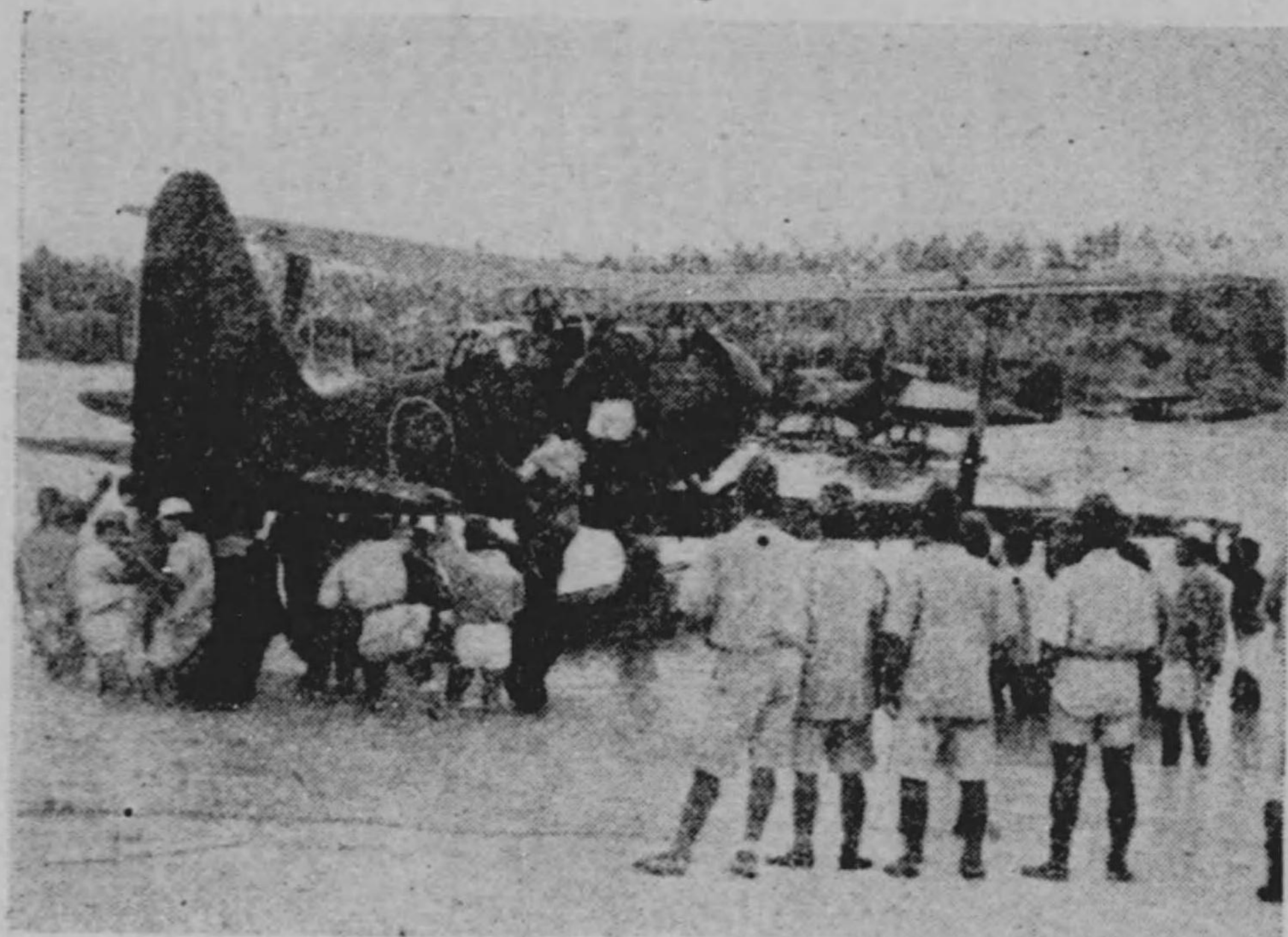
海軍の偵察機は、だいたい、以上のやうなはたらきをやります。しかし、前にいつたやうに、空中戦をやらねばならぬこともありますから、何挺かの機銃を用意してゐます。又、哨戒といつて、廣い海面をぐるぐるとび廻り、敵の來襲を見張る役目にもつきます。さういふ場合に、敵の潜水艦などを発見しても、攻撃を加へられるやうに、小型の爆弾をつんで出かけることもあります。

偵察機の仕事は、以上で想像されるやうに、たいへん地味なものであります。特に哨戒飛行などは、昨日も今日も、晝も夜も、たえまもなく空と海をにらんで、とびつづけるのですから、一通りや二通りの辛抱強さでは、とてもつとまりません。しかも、ただとんでさへあればよいのではなく、その際限もない空と海の間から、ごまつぶよりも小さく見える敵機や、鉛筆の先のやうな敵潜水艦の潜望鏡などを発見しようと、血眼になつてゐなければならぬのです。ほんたうに、「縁の下の力持ち」といふのは、偵察機の搭乗員のためにできてゐるやうな言葉です。

しかし、我が海軍の偵察機の搭乗員は、自分たちの仕事がりつばになしとけられてゐてこそ、はじめて他の部隊の勝利も導き出されるのだといふ尊い自覺の下に、大東亞の空のすみすみまで、間斷



水上偵察機に小型爆弾をとりつけるところ。



基地で整備中の水上観測機。

なしに活動をつづけてゐるのです。

私たちは、海戦に、航空戦に、はなばなしの戦果をさくごとに、そのかけには、偵察機隊の骨身をけづるやうな辛苦が、必ずひそんでゐることを、思ひ合はせなければなりません。さうして、この項の最初にのべた、珊瑚海海戦に自爆した偵察機の勇士の精神を、他のすべての搭乗員も、かたかくたく抱いてゐることを知っておきませう。

なほ、我が海軍では、特に彈著観測に従事するものを、水上観測機といつてゐます。

終りに、水上偵察機の一例として、イタリヤのカプロニ三一二型をあげて見ますと、翼幅一六二〇米、全長一三・四〇米、全高四・四〇米、發動機七〇〇馬力二基、乗員三名、最大速

度四〇〇杼時、航續距離一五〇〇杼となつてゐます。

三、戦闘機

偵察機の項でお話したやうに、もし、敵の偵察機が、我が艦隊の様子をさぐりに來たら、さうしてその時、味方に航空母艦があつたら、どういふことになるでせうか。

もちろん、その甲板から、矢のやうに戦闘機がとび出して行つて、敵の偵察機をたたきおとしてしまふでせう。いや、それより前に、何臺もの戦闘機を、代る代る味方艦隊の上空へくり出して、絶え間なく警戒をつづけ、てんから敵機をよせつけないやうにするのがふつうです。

戦闘機は、空中戦を主任務とする飛行機です。空中戦の勝利者となるためには、行動が敏捷で、攻撃力の大きいことが、まづ第一に必要です。それで、どこの國の戦闘機も、飛行機のうちでいちばん運動がすばしく、いちばん多くの機關銃（砲）をつんでゐます。つまり、戦闘機の戦闘力の中心となるものは、發動機と機關銃砲だといふことになりました。

たとへば、諸君もすでにおなじみの、イギリスのホーカー・ハリケーン二型戦闘機は、單座（一人乗）で一〇三〇馬力、最大速度五四〇杼時、機銃八、同じくスーパーマリン・スピットファイア三型は、一一四五馬力で最大速度六四五杼時、機銃八一〇をそなへてゐます。



ホーカー・ハリケーン2型単座戦闘機 (イギリス).

戦闘機の主任務が、空中でのなぐりあひにあるとすれば、當然その行動は敏捷第一でなければなりません。ところが、この敏捷な行動をとるためには、まづ、強馬力の發動機をつけて、高速力を

これに對して、やはりイギリスの爆撃機のプリストル・ポーフォート型は、四座で一〇六五馬力
二基、最大速度五〇〇杼時、機銃二、同じくヴィッカーズ・ウェリントン型は、五座で一〇〇〇馬

力二基、最大速度四〇〇杼時、機銃四となつてゐます。

爆撃機は、發動機の總馬力こそは戦闘機より大きいですが、その代り人間も、四倍にも五倍にもなつてゐます。全く戦闘機は、發動機が機銃を背負つてとび廻るやうなものです。

人間同志のなぐりあひでも、のろまなものがのろろしてゐるうちに、すばしい方は、ぼかぼかつとやつつけてしまひます。

戦闘機の主任務が、空中でのなぐりあひにある

とすれば、當然その行動は敏捷第一でなければな

りません。ところが、この敏捷な行動をとるため

には、まづ、強馬力の發動機をつけて、高速力を



〔上〕 陸上基地の戦闘機。
〔下〕 編隊飛行中の戦闘機。



ロッキードP38単座戦闘機(アメリカ) 幅15.85米、長さ11.53米、
高さ3米、發動機2基計2180馬力、機銃4、最大650軒時。

出せることが大切です。さうでない、敵機を追いつめるのも、有利な位置へ退避するものも、思ふやうに行かなくなるからです。

次には、操縦性のよいことが大切です。つまり、上下左右自由自在に、體を動かせることが大切です。これは高速力であることとは別の問題で、高速力であることが、必ずしも身動きが軽快だといふことにはならず、かへつて、高速であるほど身動きが不自由になるものです。それは、たとへば自動車などが、高速度で走つてゐる時は、急回轉がやりにくいと同じ理窟です。

それで、一直線にとぶ時は、できるだけ高速力を出せて、その必要のある時には、できるだけ身輕に立ち廻れることが大切なのです。

又、上昇力にすぐれてゐることも、缺くことのできない条件です。來襲の敵機を迎へうつにも、空中戦で、有利な上空に位置を占めるにも必要なのは、上昇力にすぐれてゐることです。

この操縦性や上昇力にすぐれることは、發動機の馬力だけを大

きくしてもだめで、その發動機のはたらき工合や、プロペラのつくり方、機體の設計等、あらゆる部分にわたつて實に微妙な工夫研究を必要とするのです。

いづれにしても、戦闘機の行動は、このやうに敏捷なものです。従つて、この敏捷な戦闘機同志がたたかふ場合、その火器を發射するのにちやうどよい機會は、なかなかつかまへられません。たとひつかまへても、その時間は、あつといふ間に過ぎてしまひます。そこで戦闘機が、この短い時間内に、攻撃のさきめをあらはすには、どうしても數多くの機銃砲をそなへ、一ぺんにできるだけ多くの彈丸をたたきつける必要が生じてくるのです。これが、體のわりあひに、途方もなく多くの火器を備へてゐる理由の一つです。

又、敵の爆撃機を攻撃する場合を考へて見ると、その圖體が大きいので、同時に今日の爆撃機は、昔とちがつて非常に高速となり、堅牢につくられてゐるので、容易にへたばりません。それで、これを打ちとめる役目につく戦闘機の方は、どうしてもその火器を増して、攻撃力を大きくする必要にせまられてきたのです。敵戦闘機を防ぎさへすればよい爆撃機の方は、大きな圖體に、より少ない機銃をもち、機銃砲をそなへてゐるのはごく稀であるのに、それを射ち止めようとする戦闘機が、より多くの機銃をもち、機銃砲をそなへてゐるのが多いのも、以上のやうな理由にもとづいてゐるのです。



ドイツのハインケル 111K 型爆撃機に撃墜されるイギリスのスピットファイア戦闘機。

小さな體をもつて、このやうなばたらきをやれるやうにつくられてゐる戦闘機は、その代りに、どこかで何かの犠牲を拂はなければなりません。その第一のものは航続力の小さいことです。

小さい體に大きな發動機をつけ、たくさん火器をそなへ、その弾丸をつみ、その上更に多くの燃料をつんで航続力を大きくすることは、全く無理な話です。

この戦闘機であつて、たいてい二時間前後といふのがふつうになつてゐます。戦闘機の任務には、敵機を迎へうつことの他に、味方の爆撃機隊を護衛するといふ、大切なこと

それで、軍用機のうちで、いちばん航続力の少いのは、どこの國でも

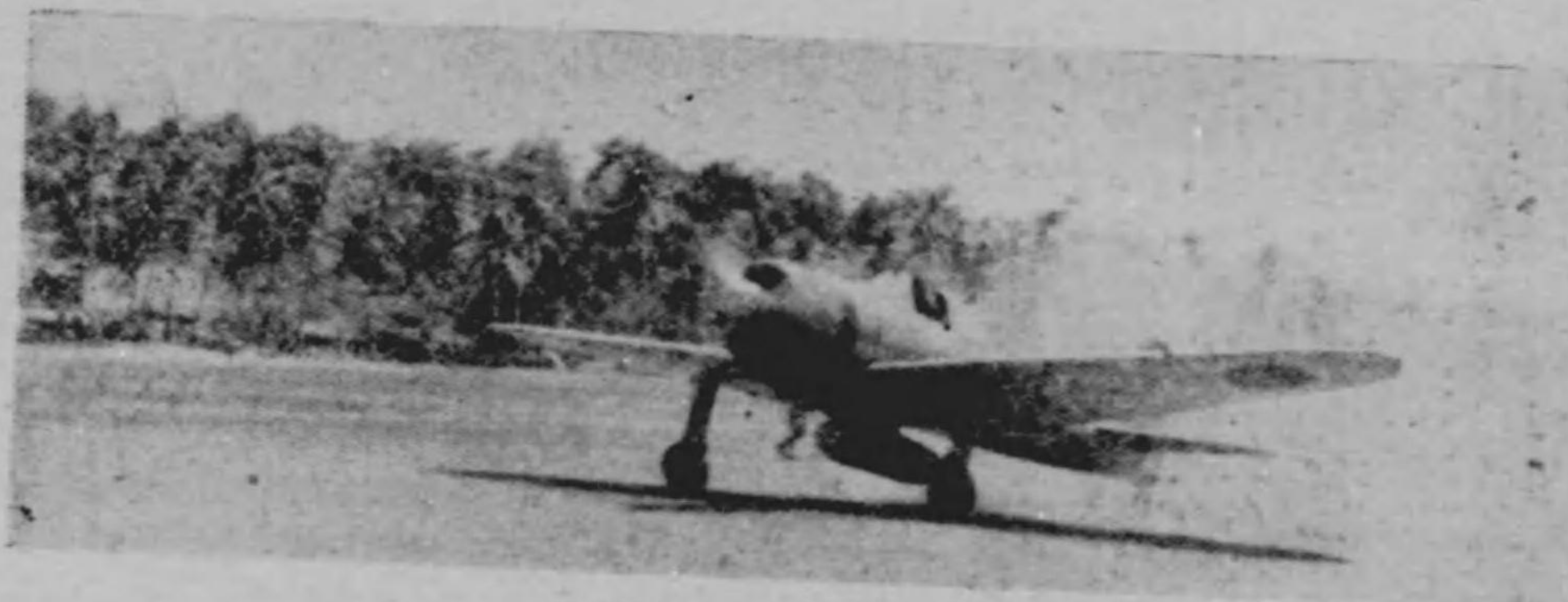
もあります。

爆撃機のことですから、當然遠方まで行動します。それで、結局は爆撃機だけで、敵上空に突込むやうになりますが、出来ることなら戦闘機をつれて行って、おそひかかってくる敵戦闘機を追ひ拂つてもらひ、自分の被害を少くし、爆撃もおちついてやりたいものです。

そこで、戦闘機としての性能をおとさずに、航続力を大きくする工夫がこらされるやうになりました。ドイツのメッサーシュミット 110 型などは、その代表的なもので、二八二浬の巡航速度（發動機の全馬力を出さず、燃料を加減して飛ぶ速さ）にすると、實に一〇時間も飛びつづけられるさうです。

ただし、この 110 型は二人乗で、發動機も二基つんでゐます。武装も、機關砲二、機關銃四といふ相當なものです。かういふのは、重戦闘機とか、長距離戦闘機とかいはれます。

我が海軍の戦闘機の航続力の優秀なことは、今更いふまでもありませんが、また、この航続力の大きいことでも知られてゐます。我が海軍航空隊が、いはゆる戦爆連合でオーストラリアを空襲した時、オーストラリアの新聞は、日本の戦闘機が来たとは信じられない、もしほんたうに來たとすれば、日本海軍は、恐しく航続力の大きい戦闘機を持つてゐるにちがひないと悲鳴をあげました。次に掲げたのは、さういふやうに、航続力の大きいことで、世界中を驚歎させてゐる、我が海軍



航続力の大きい海軍戦闘機

戦闘機の勇姿です。

海軍の戦闘機は、航空母艦、又は陸上飛行場を基地として行動します。陸上を基地とする場合は、陸軍のものと少しも變りがありませんが、航空母艦を基地とする場合は、後でお話しするやうに、その發着特別の困難と危険がともなふので、そのために、特別のはげしい訓練を必要とします。

航空母艦を基地として働く戦闘機は、艦上戦闘機と呼ばれて車輪をつけてをり、ふつうの陸上機と、形の上では變りがありません。

このほかに、我が海軍は、浮舟をつけ、海上を基地として活動する水上戦闘機をもつてゐます。艦上戦闘機は、母艦か、陸上以外では動きがとれませんが、この水上戦闘機は、海上であるかぎり、所をえらばず行動することができます。

今までも、かういふ水上機の便利であることは、よくわかつてゐたのですが、浮舟といふやつかいな物をつけてゐるために、敏捷な動きができない。それで、前にいつたやうに、偵察機としては、どこの海



編隊で出動する水上戦闘機。

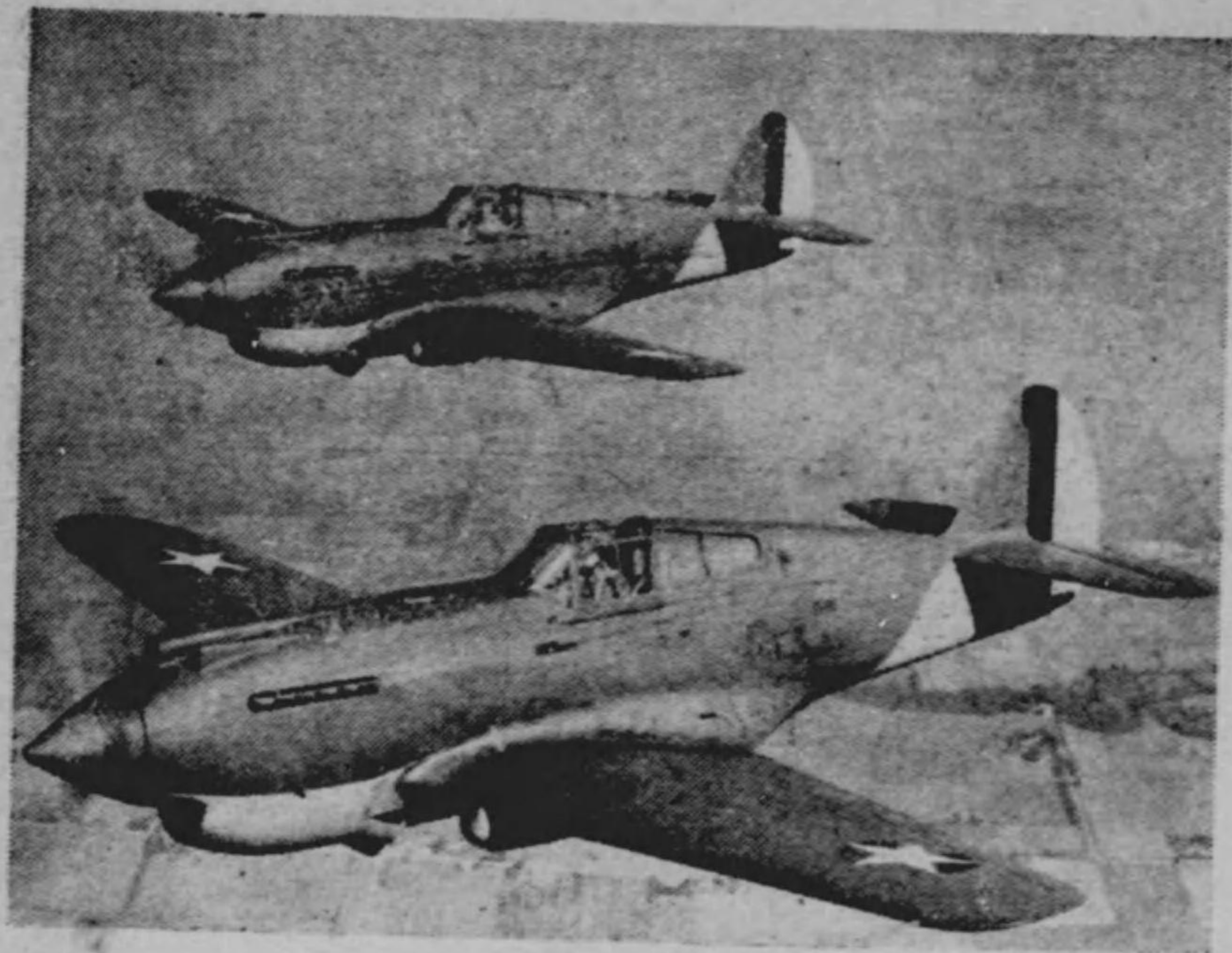
軍でも使つてゐましたが、特に敏捷な行動を必要とする戦闘機には、絶対に不向きだとされてゐた

ものです。

しかし、今や我が海軍は、そのむづかしい條件をこなし、水上戦闘機を活動させてゐるのです。上圖はその颯爽たる編隊ぶりです。

單座戦闘機の機關銃砲は、プロペラ軸の中、胴體頭部の兩側、主翼の内部などに固定されてゐます。かういふのを固定銃といひます。この固定銃で敵を攻撃する時は、機體そのものを、正しく敵機に向けることによつて、ねらひを定めます。

このやうに、戦闘機の攻撃力は、前方にだけ向いてゐるので、後方がお留守になります。(後方に限らず、攻撃火器の使へない方向を死角といひます。)従つて、敵戦闘機を攻める時は、後



カーチスP40型単座戦闘機 (アメリカ)

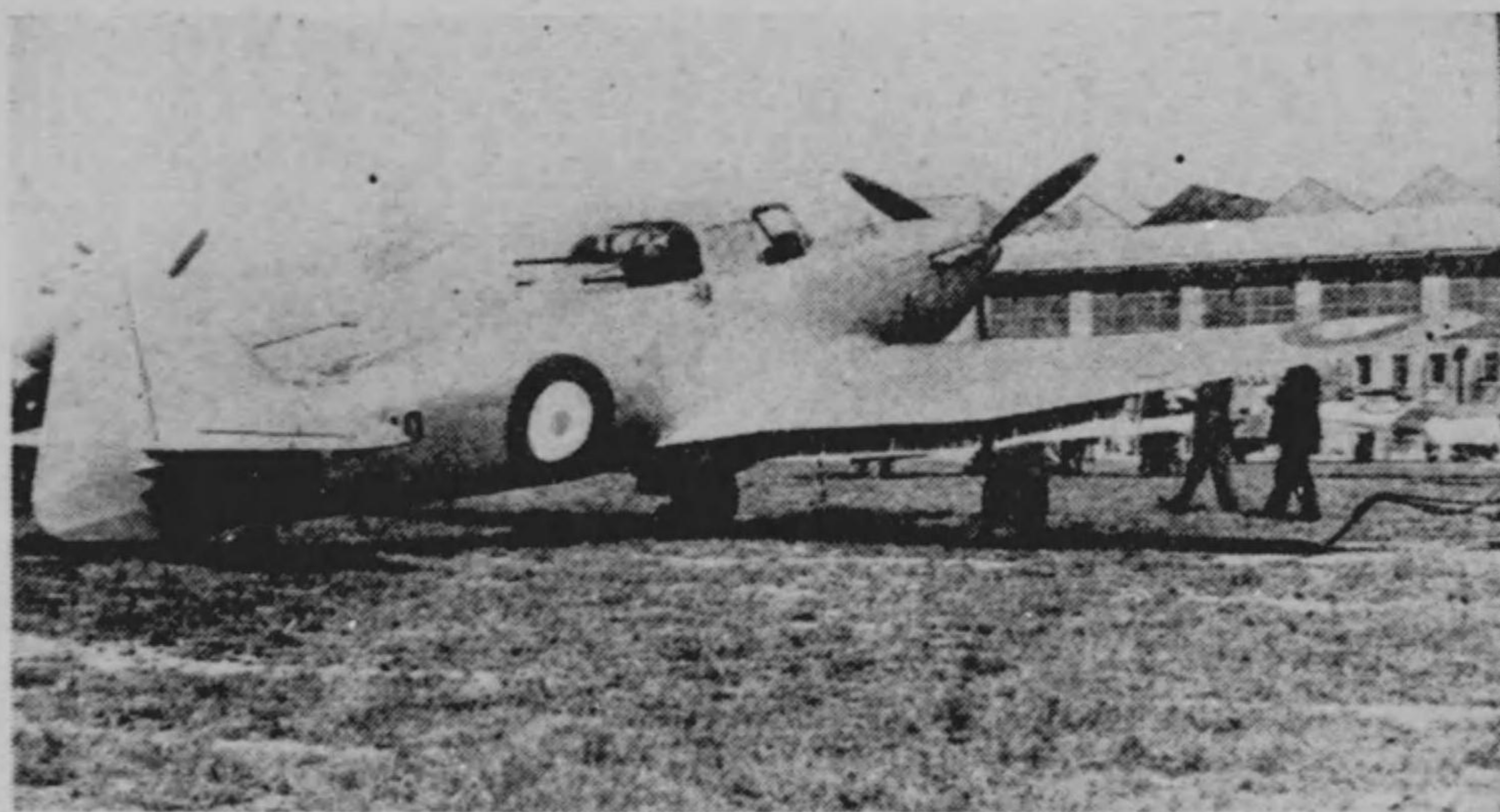
おしまひに、二、三の外國の戦闘機の性能と要目を記して見ませう。

メッサーシュミット一〇九型単座戦闘機 (ドイツ)

——これは、前記したやうに、記録飛行で七五五浬の時速を出し、世界最高速といはれてゐるもの。翼幅九・二〇米、全長八・一四米、全高二・二七米、發動機一一五〇馬力一基、機銃四、最大速度五七〇浬時、上昇限度一一〇〇〇米、航続距離一〇〇〇浬。

カーチスP四〇型単座戦闘機 (アメリカ) は、翼幅一一・五八米、全長九・六〇米、全高三・四五米、發動機一〇〇〇馬力一基、最大速度六四〇浬時、航続距離一〇〇〇浬。もつともアメリカの軍用機の性能は、發表より二割引ぐらゐのところか實際のもの

また、戦闘機は、小さな爆弾をつんで行き、手頃な目標をえらんで、爆撃を加へることもあります。



ボルトン・ポール複座戦闘機の後部銃座 (イギリス)

方、特に後上方からおそふのがいちばんいいといふことになります。しかし、敵の方もまた、こちらの後上方にくいつかうとします。そこで、くるりくるりと體をひるがへして、少しでもいい攻撃位置を占めようとするようになります。この時、てきめんにものをいふのが、さつきお話しした、機體の操縦性の優秀なことです。更に、その優秀な操縦性を、完全に利用し得る搭乗者の腕前と、果敢な攻撃精神です。

二人乗の場合は、後方にも機銃をつけ、同乗者がそれにかかります。この方は上下左右に銃身を動かしてねらふのですが、これを旋回銃といひます。

戦闘機は、空中戦の他に、その搭載銃砲によつて、敵の陣地や、艦船や、飛行場などを掃射することもあります。機銃掃射によつて、敵機何臺を炎上させたなどといふのがそれです。ハワイ空襲では、この方法で飛行場に並べてあつた數百臺の敵機を、きれいに片づけてしまひました。

だといはれてゐます。

スーパーマリン・スピットファイア型戦闘機（イギリス）は、翼幅一一・二五米、全長九・一五米、全高三・四八米、發動機一〇三〇馬力一基、最大速度五八七杼時、航続時間は三・六時間といはれ、戦闘機としてはかなり長い方です。

四、爆撃機

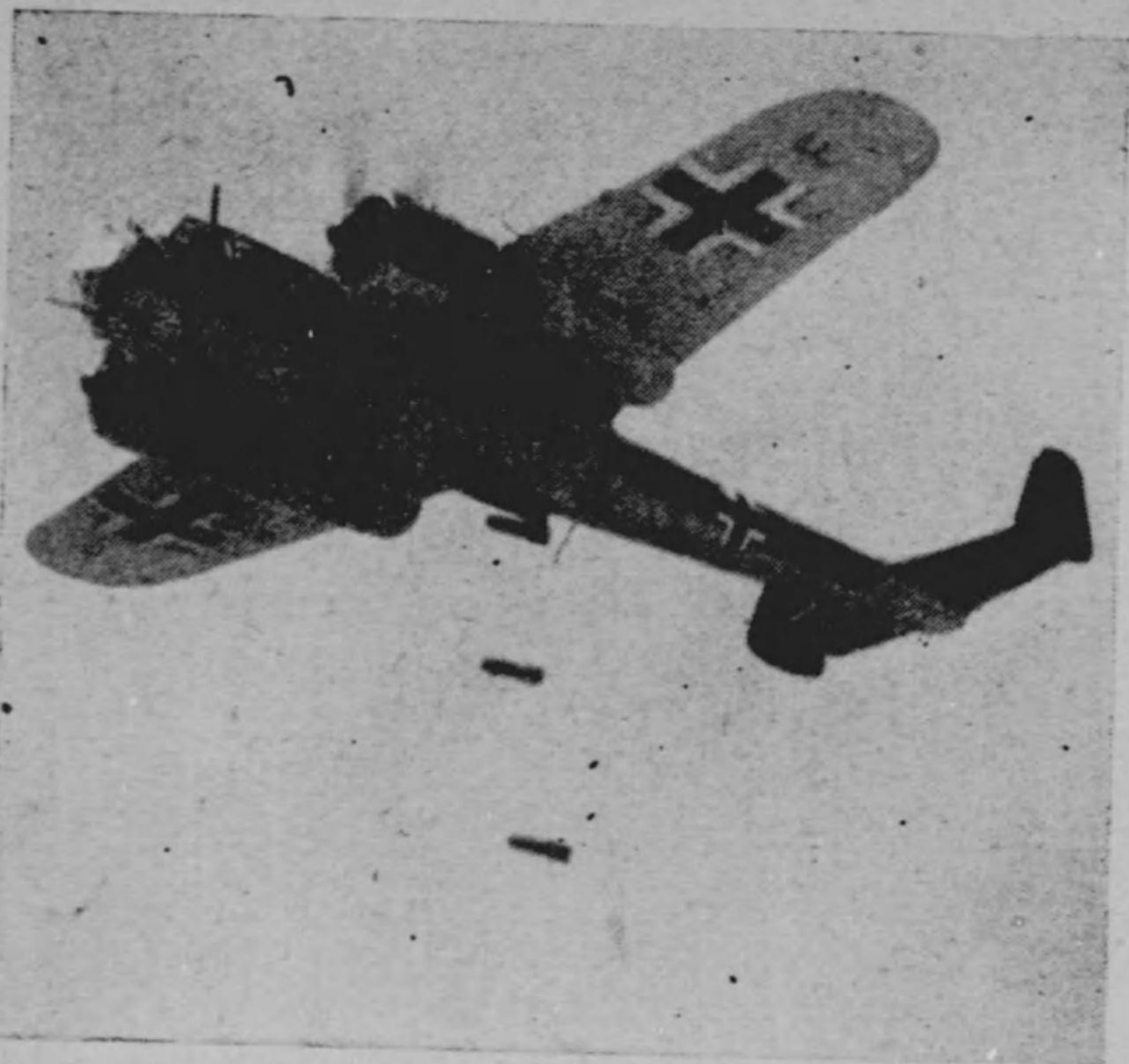
爆撃機の主任務は、敵を爆弾で攻撃する、つまり爆撃することであることは、今更いふまでもありません。

この爆撃には、水平爆撃と急降下爆撃との二つの方法があります。

水平爆撃といふのは、ある高度を水平に飛びながら、ばらばらと爆弾をおとす方法です。

この時、爆弾には、それまで飛行機といつしよに非常な速さで水平にとんで来た、そのいきほひがついてゐます。それでその爆弾は、機體からはなれた時の直下でなく、飛行機のすすむ方へそれて落ちる、つまり、ななめ前方へ落ちます。

その「ななめ前方」の割合は、爆弾を投下する時の飛行機の速さ、高さ、風の方向、強さ等で、一々ちがひます。もちろん、さういふいろいろな条件を勘定に入れて、ねらひをさめる照準器はあ



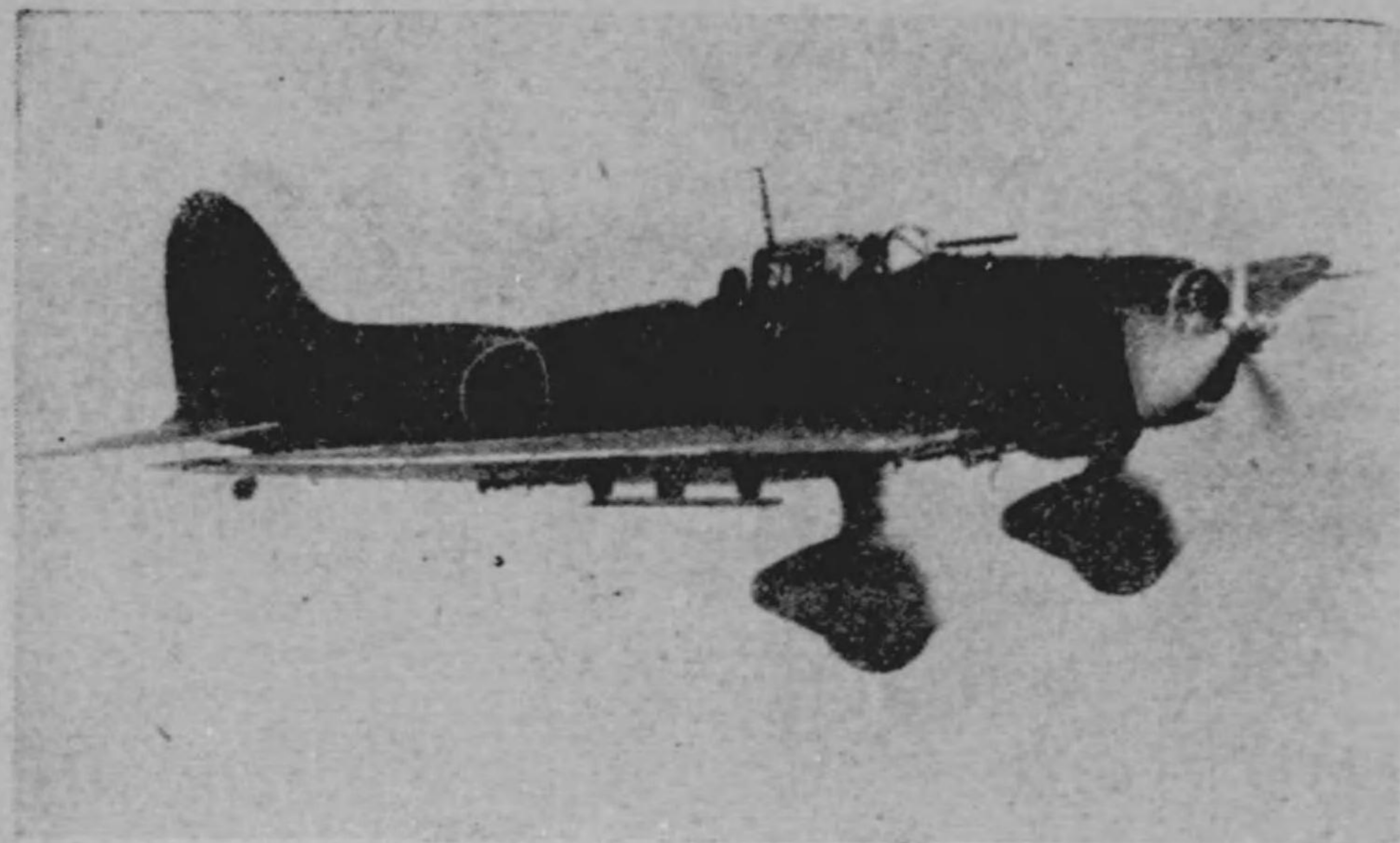
水平爆撃の一例（ドイツのドルニエ215型爆撃機）。

りますが、それにしてもこの水平爆撃で、ある一地點に命中させることは、なかなか容易ではありません。特に、相手が自由自在に逃げ廻れる、海上の艦船である場合などは、いつそうむづかしくなるのです。

はじめは、どこでもこの水平爆撃だけやつてゐましたが、そのうち急降下爆撃法が考へ出されました。

これは、上空からある程度の低空まで、一気に急降下して来て爆弾をはなし、そのとたんに急上昇して回避するやり方です。

これは、目標まで思ひ切つて近づくこと、それまで飛行機は、ほとんど垂直に近いほどの急角度で突込んでくるから、弾道が直線的になること等のために、命中率はうんとよくなります。それで、陸上のトーチカとか、海上の艦船とかいふやうなものを攻撃するには、

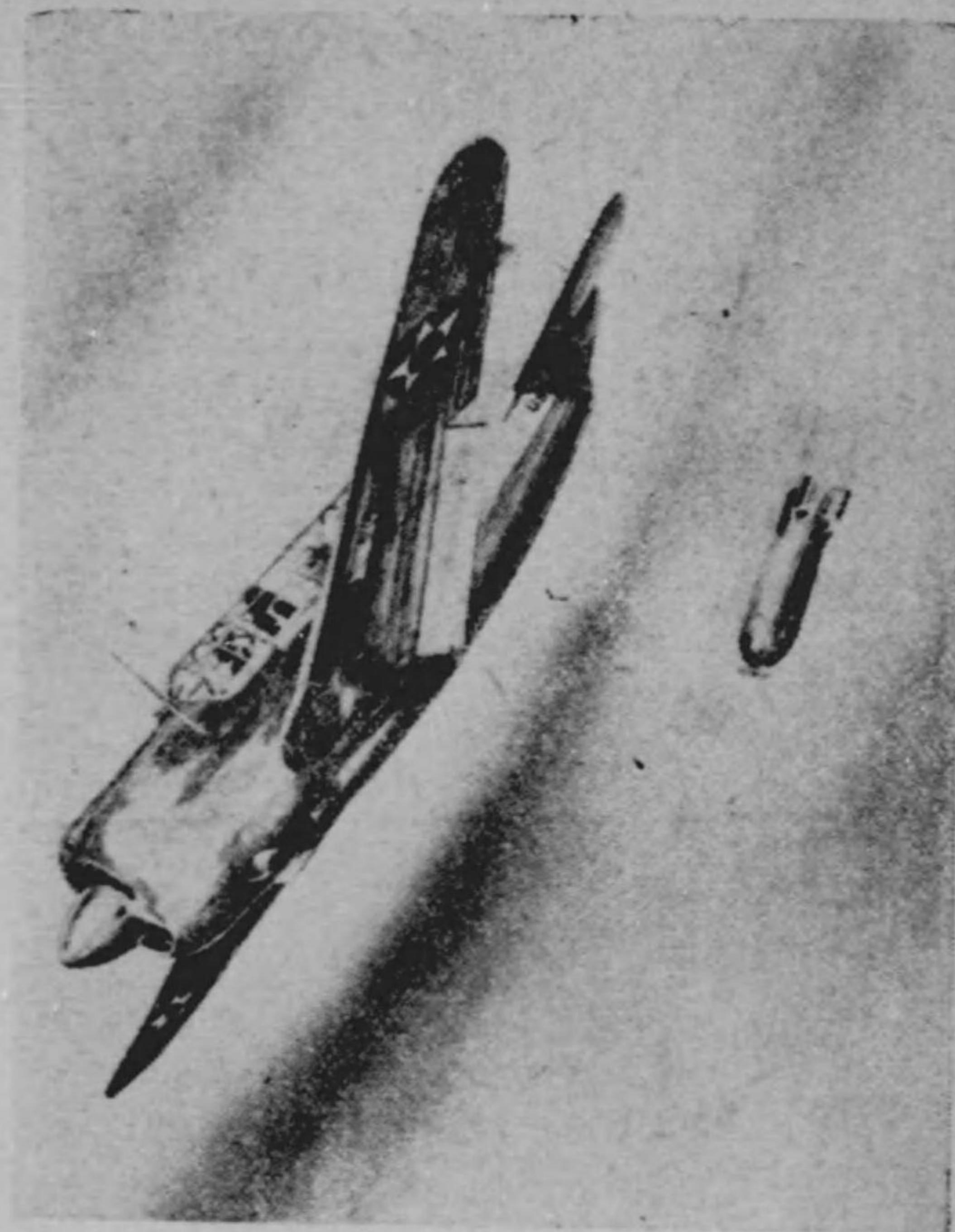


艦上爆撃機、主翼の下についてある
のやうなものは阻害板（空氣抵抗板）。

低空へ一気に降下し、ふたたびもとの高空へ急上昇する結果としての氣壓の激變のため、又、急角度で突込んだ機を、いきなり引起す結果としての遠心力の作用等のため、搭乗者自身が氣を失つて、墜落するといふやうなこともあります。

いづれにしても、かういふ過激な操作を必要とする急降下法には、或る程度以上の大型機はつかへません。従つて、或る程度以上の大型爆撃機をつむ力もないといふこととなります。燃料も同様ですから、航続力を非常に大きくするといふこともできません。

そこへ來ると、水平爆撃の方は、水平に飛びながら爆弾を落すだけで、無理な運動をしませんから、技術のゆるすだけの、さうして必要と思ふだけの大きな飛行機をつくつて使へます。従つて、多くの燃料、多くの爆弾（數をへらせばそれだけ大きな爆弾）、



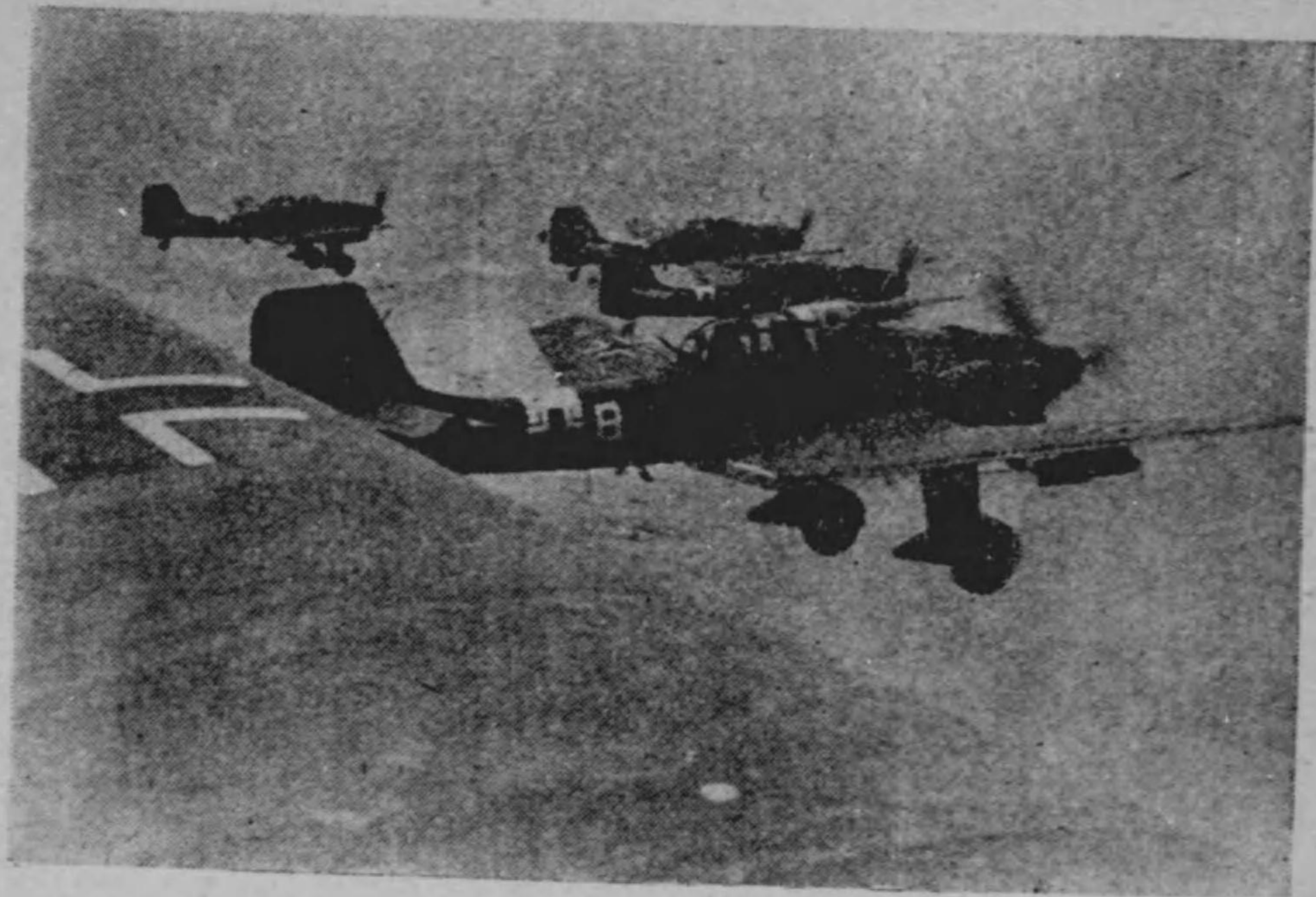
急降下爆撃の一例（アメリカのカーチスXSB2-C型急降下爆撃機）。

この急降下爆撃法にかぎるといはれてゐます。

それなら、爆撃はみな急降下法でやればいいぢやないかといひたくなりませうが、さう簡單にも行きません。

急降下爆撃は、非常にはげしい運動をやるのですから、あまり圖體の大きい飛行機ではできません。この方法を最初にこころみしたのは、アメリカ海軍だといはれますが、はじめのうちは、急降下中、風壓のために飛行機がばらばらに分解したり、舵がきかなくなつてそのまま墜落したり、といふやうな事件が始終起つたものです。アメリカで、これを「ヘル・ダイヴ」（地獄急降下）といつてゐるのを見ても、この爆撃法の犠牲のいかに多かつたかが想像されます。

もつとも、これは、必ずしも機體がまるるからばかりでなく、氣壓の低い高空から、氣壓の高い



ユンカース87B型急降下爆撃機（ドイツ）。

多くの人員をのせて、思ひきり遠方の敵をたたくことがのできるのです。

前のやうな、急降下をやれるものを、ふつうは軽爆撃機、又は急降下爆撃機といひ、後のやうな大型のものを重爆撃機といひますが、我が海軍でいへば、艦上爆撃機が軽爆撃機にあたり、重爆撃機には、後でのべる陸上攻撃機が相当します。

急降下爆撃機で、早くから知られてゐるのは、ドイツのユンカース八七型で、その要目と性能は、翼幅一三・八米、全長一〇・八米、全高三・九米、發動機一一〇〇馬力一基、最大速度四〇〇杼時、航続距離八五〇杼、二人乗となつてゐます。主翼の下には、急降下中、或る限度以上の加速度が出ないやうに、空気抵抗板ていこうばんがけられてゐます。

このユンカースが有名になつたのは、第二次ヨ



上海事變の市街戦（我が陸戦隊の突撃）。

ロッパ大戦で、ドイツがこの機種を大量に出動させてからのことです。しかし、この急降下爆撃法を實戦で最初に行ひ、その正確な命中ぶりで世界を驚かしたのは、我が海軍の爆撃機です。

前にも記したやうに、支那事變のはじめ頃の上海戦は、世界戦史にかつてなかつたほどの、はげしい市街戦でした。その上海市街には第三國の會社や公館がたくさんあります。蔣軍は、わざとさういふ第三國の權益物けんえんぶつの近くに陣地をまうけ、我が方の攻撃をやりにくくさせるのが常でした。さういふ時、我が海軍の爆撃機がよし來たとばかりにとび出して行つて第三國の權益物には被害を及ぼさず、めざす敵陣だけを、必中の爆弾でたたきつぶしたものです。

はじめにいひましたやうに、この急降下爆撃は、もともと海上を高速力で



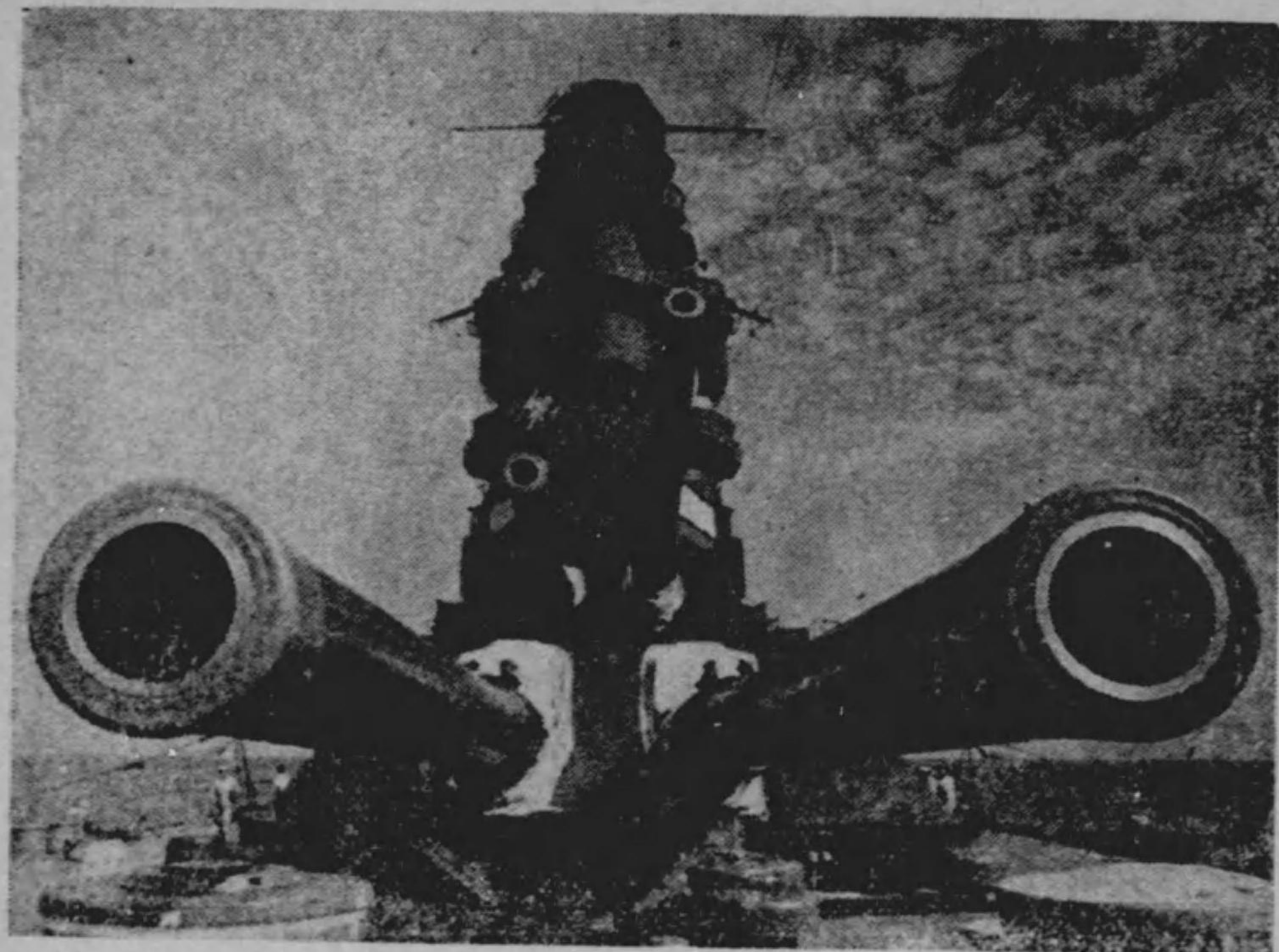
移動する艦船攻撃を、主な目的として工夫されたものであり、我が海軍機も、當然それを第一の目的として、日頃から訓練を重ねてゐたのですから、地上の陣地は、たとひ小さくても、動かないといふ點で、かへつてやりよいといふことになるのです。

その後、我が海軍の爆撃機は、性能でも、數でも、又搭乗者の腕前の上でも、格段の進歩をとげました。具體的なことは、一切發表されてゐませんが、その威力は、大東亞戦争の戦績によつて、十分に想像されます。少くとも、我が海軍機の行動すべき空は、ドイツの空軍のそれなどは、てんで比較にならないほど廣大ですから、たとへば航続力などにしても、ユンカース程度では、もの役に立たないだらうといふことぐらゐは、理窟でおしてもうなづかれるでせう。

一體、海戦で敵を攻撃するものには、爆弾の他に、艦砲や、魚形水雷や、爆雷などがあります。そのいづれにしても、ただ目標にぶつかつて爆發するよりも、それをうちぬいて爆發する方が、効果が大きいのですが、その物をうちぬく力は、ぶつかる時の速さに比例します。

ところが爆弾は今のところ、自分の重みで落ちるだけの速さであり、魚形水雷の速度は七、八〇浬時がふつうであり、爆雷は、潜水艦の攻撃にだけ使はれる水中爆弾で、水中に沈むと自動的に爆發するものです。

この點では、何といつても大砲がいちばんで、その貫徹力（うちぬく力）といひ、連続發射のき



我が戦艦の主砲。

くことといひ、大小にもよりますが、最も威力のあるものとなつてゐます。戦艦の四〇浬主砲弾などは、外國の例で見ると、三〇〇〇米の距離で厚さ三五浬の、一五〇〇〇米の距離では五〇浬の厚さの鋼板をうちぬくといはれます。爆弾には、このやうな力はありません。もつとも、ものすごい高空から落せば別ですが、それでは命中しなくなります。

しかし、その一方では、それをかかへた爆撃機そのものの行動が、大砲を武器とする軍艦とは、段違ひに機敏です。たとへば、四〇〇浬のあなたに、敵艦を發見したとします。軍艦がそれをやつつけるために、一時間五〇浬の速さで走つて行くとしても、八時間もかかりません。その間には、敵の方も走つて逃げるから、とても

つかまらないといふことになります。

これを爆撃機が、時速四〇〇軒で飛んで行くとするれば、わづか一時間で発見された地點に達し、そこから敵艦が逃げ出してゐたとしても、たちまち追いつめることができます。

我が海軍機は、このやうにして、偵察機や、海上の哨戒艦艇からの報告を受けるやいなや、航空母艦や陸上の基地から出動して、敵の艦船を撃沈したり、又は大舉して敵の飛行場や港などに、爆撃を加へたりしてゐるのです。

又、この爆撃機も、戦闘機と同様に、艦上爆撃機と呼ばれて、航空母艦上で活動しますが、同時に、陸上基地においても、陸上機と變りなく働くことができます。

五、攻 撃 機

攻撃機といふと、アメリカあたりでは、陸上の作戦に協力して、小型の爆弾をばらまいたり、機銃掃射をやつたりするものを指しますが、我が海軍では、主として魚形水雷（魚雷）で敵の艦船を攻撃する飛行機のことをいふのです。

魚雷は、始め水雷艇だけ使ふ武器でした。その後、この水雷艇を攻撃するものとして驅逐艦が生まれ、同時に魚雷攻撃もやるやうになつたので、一時は各國とも、水雷艇の建造を中止してゐまし

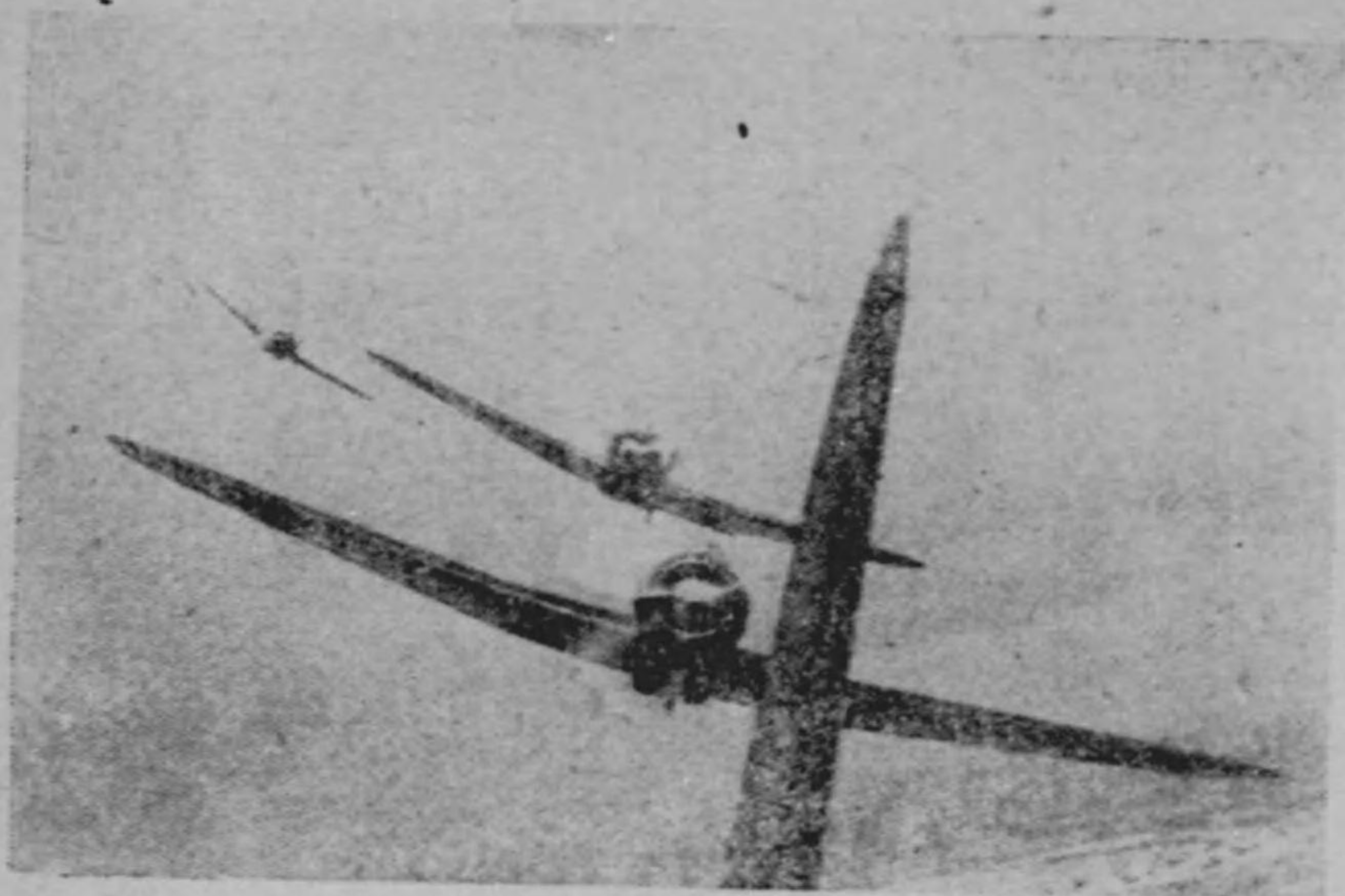
た。その一方では、巡洋艦も魚雷を使ひ、稀には戦艦さへ使ふやうになりました。特に、前大戦時代から實用されるやうになつた潜水艦に至つては、この魚雷を第一の兵器としてゐます。

攻撃機は、このやうに、昔から海上艦艇だけに使はれてゐた魚雷を抱いて出動するものです。それで、別に雷撃機と呼ばれることもあります。

では、どうして攻撃機が、艦艇専用の魚雷を使ふやうになつたか。前にもいつたやうに、魚雷の進行速度は七、八〇軒ぐらゐで、だいたい巡洋艦や驅逐艦程度のもので、これをもちと速くしようとすれば、到達距離が短くなります。

それで、たとひ魚雷を發射されても、少し早目に見つければ、適當に舵をとることによつて、その命中をさけることができます。この速力のおそいことが、魚雷の缺點の一つです。

次に魚雷は、主として壓搾氣體を原動力として、推進機



艦上攻撃機編隊で出動す。



潜水艦の魚雷發射室（イタリヤ）。

を回轉させて進むものですが、その氣體は進行するにつれて後に放出され、白い泡を立てます。これが、いはゆる魚雷の航跡となつて、敵の目に入りやすいことになります。これも魚雷の缺點の一つです。

次に、魚雷は、艦艇の發射管から、水中へ發射されるのですが、魚雷よりも先に、その艦艇そのものが、まづ發見されてしまひます。潜水艦の價値が大きく見られる理由の第一は、潜航したまま魚雷を發射されるため、魚雷の缺點はそのままであつても、少くとも發射する艦艇だけでも、敵の目に

つかないことです。

攻撃機は、以上にあげたやうな、艦艇による魚雷攻撃の缺點を、いちじるしく補ふものです。今もいつたやうに、魚雷が、そのねらつた艦から回避されるのは、その航跡によつて發見され、

同時にその進行速度がおそいからです。しかし、たとひさうであるにしても、回避するゆとりのない距離まで肉薄して發射すれば、たしかに命中させられる道理です。ところが、潜水艦は別として、他の艦艇がかういふ攻撃をやらうとすれば、その艦艇の命があぶなくなり、さうでないまでも、魚雷發射の前に、すでに警戒行動を起させる結果を生じます。

攻撃機は、その行動の機敏性によつて、あつといふまに敵に肉薄して、魚雷を投下します。體全體をむき出しにして敵に迫ることは、水上艦艇とかはりがありませんが、ただその動作が格段にすばしいため、いきなりうちぶところにとびこみ、回避するゆとりのないほどの近い距離から、發射することができるのです。

同時に、魚雷の射程を短くされる結果、魚雷の進行速度を高めることができ、兩方相俟て、いよいよ敵に回避のゆとりをあたへないことになるわけです。

つぎに攻撃機は、自分の航續力のゆるすかぎりの遠距離の敵に、魚雷をたたきつけることができます。

魚雷の射程は、日清戦争のころは約四〇〇米、日露戦争のころは四〇〇〇米、この前の世界大戦のころは一五〇〇〇米にとび、今日では二〇〇〇〇米を越すといはれてゐます。しかし、遠くまでとどくからといって、あまり遠くから發射すれば、その距離が大であることの他に、魚雷の速度が

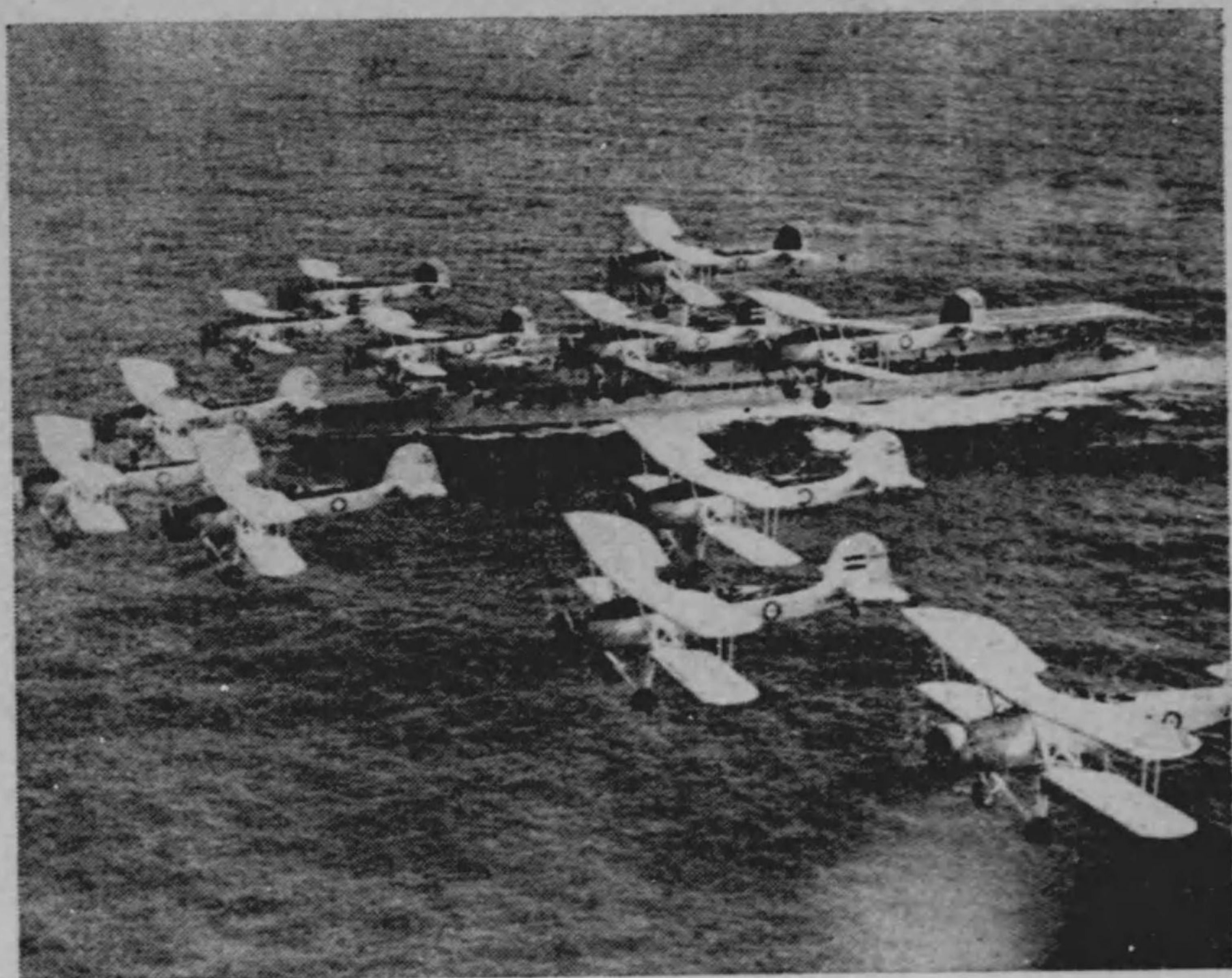
おそくなること、敵に発見、回避の動作のゆとりを、それだけ多くあたへること等のため、命中率がひくくなることは、さつきもちよつと申した通りです。

攻撃機は、いはばこの魚雷の射程を、數百軒、數千軒にもばしたのと同様の効果を發揮するものであり同時に、實際の發射は、前述のやうにごく近い距離から行ふので、逆に命中率を高めるといふ結果を生むのです。

前に記しましたやうに、昭和十六年の五月末、北大西洋で、イギリスの巡洋戦艦フッドを、一撃の下に倒して母國へ歸航中だったドイツの戦艦ビスマルクは、數十時間後に、まづイギリスの哨戒飛行艇によつて発見され、次いで、その報告によつてかけつけてきた、航空母艦搭載機と水上艦艇によつて雷撃をくりかへされ、つひに撃沈されてしまいました。

もつとも、とどめをさしたのは、巡洋艦の大型魚雷でしたが、その前に、いちはやくビスマルクにとりつき、雷撃を加へて航行不能にさせ、味方の艦艇に包圍させる状態にみちびいたのは、たしかに航空母艦の雷撃機だったのです。

ビスマルクの速力は、一時間三〇節以上——五、六〇軒だったといはれます。勿論、この最高速力で走りつづけるわけにも行きますまいが、いづれにしても、これを水上艦艇だけで追撃したのでは、とてもつかまへることができなかつたでせう。



航空母艦とその搭載雷撃機（イギリス）。

昭和十六年の十二月十日には、諸君も御承知の通り、マレー沖海戦がありました。これはシンガポール軍港から出撃してきたイギリス東洋艦隊を、我が攻撃機隊が、爆撃機隊と共に、陸上基地から長距離行動を起し、つひにひとつらへて撃滅したたかひです。

この東洋艦隊の出動を、いちばんはじめに発見したのは、我が潜水艦でした。しかし、或は距離が遠すぎ、あるひは水上艦艇より速力が劣ることなどのためだったでせうか、自分では攻撃をくはへられませんでした。

ところが、敵艦隊が、我が航空部隊に発見された時は、我が方の手荒い反撃を受け

ることを察して、すでに引返ししかかっているのです。かうなると、もし適当な距離に進出してゐれば別として、水上艦艇で敵艦隊をとらへることは、非常にむづかしかつたにちがひありません。爆撃機の強烈な爆弾と共に、このやうな遠方まで急遽出動し、必殺の魚雷を連続命中させることは、攻撃機隊であればこそ出来ることなのです。

後で記しますやうに、十八年十一月はじめ、ソロモン群島中のブーゲンビル島沖で、何回も大きな戦が行はれましたが、そのうちの六回は、我が海軍航空隊が單獨で敵艦隊を撃滅した航空戦であつて、そのたびごとに我が攻撃機が出動し、最も有効な雷撃を行つたのです。

又、攻撃機は、ハワイ海戦で見られるやうに、完全に敵の根拠地の中にとびこんで、魚雷攻撃を加へるといふやうな、思ひ切つた戦法をとることもできます。

このたびのヨーロッパ大戦がはじまつて後間もなく、ドイツの潜水艦が、イギリスのスカパ・フロー軍港に潜入して、戦艦ローヤル・オークを魚雷で撃沈したことがあります。ハワイ海戦では、我が特殊潜航艇も、真珠湾内に潜入して、戦艦アリゾナを見事にうちとつてゐます。又、日清戦争の時は、我が水雷艇が、敵の威海衛軍港を夜襲したことがあります。

攻撃機は、これと同じやうなことを、水中や、水上からではなく、空中から強行するわけです。しかし、かういふ攻撃機の雷撃戦術にも、缺點がないわけではありません。それは魚雷発射のや

り直しができないことや、一ぺんに何本もの魚雷を發射して、命中率を高め、又効果を大きくすることができないことなどです。

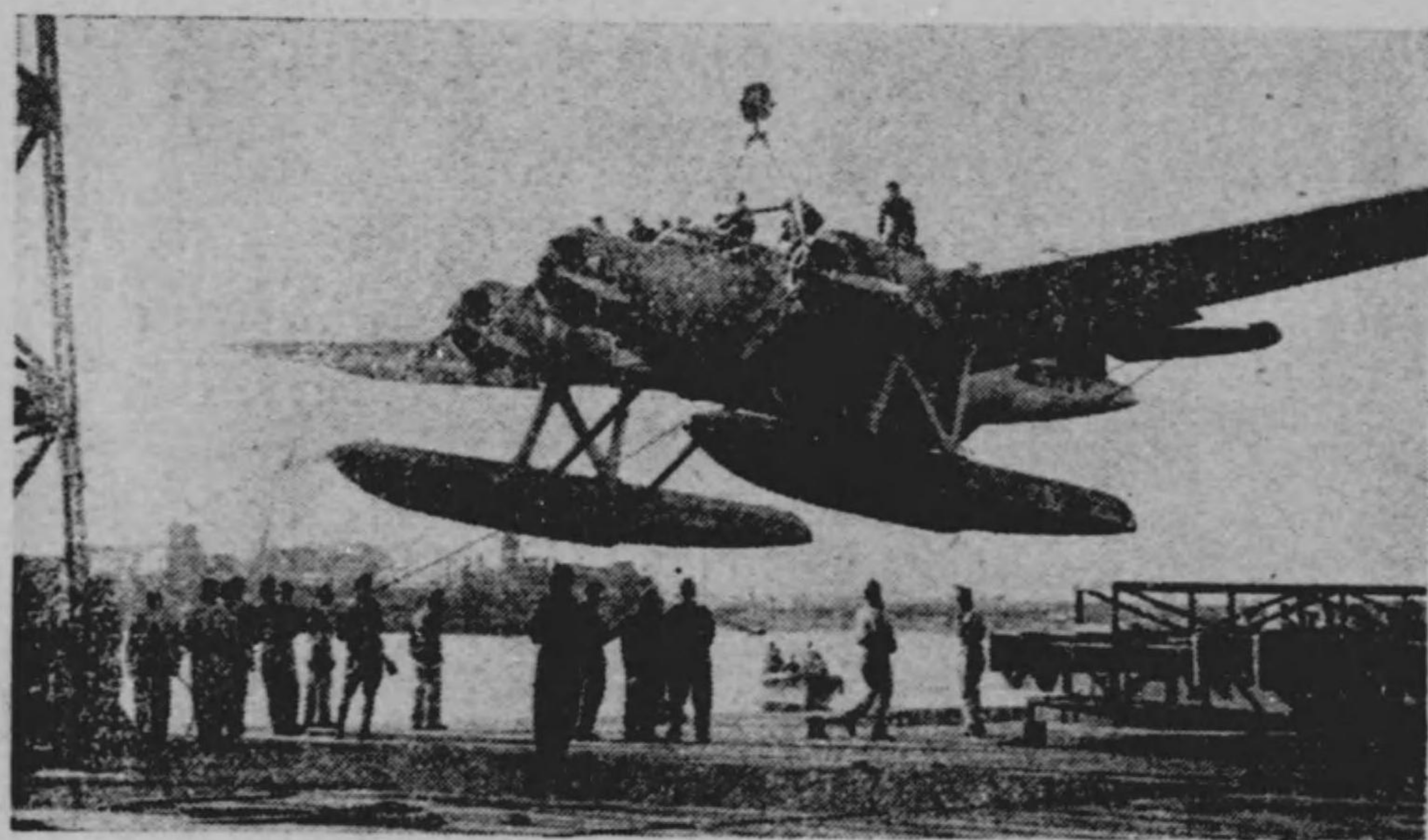
今のところでは、攻撃機は、一本の魚雷しかでないのがふつうです。それで、その一本を投射したら、もうそれでおしまひで、たとひ命中しなくても、また、命中した効果が十分でなくても、やり直すといふことができません。

これを、他の艦艇が、何本もの發射管をもち、その發射管の数の數倍の魚雷をつんでゐるのにくらべると、いちじるしく不利となります。

従つて、攻撃機としては、どうしても一發必中を心がけることが必要なのです。雷撃機が敵に肉薄するのは、その行動の機敏性のためにやれる得意な戦法なのですが、一方では、今いつたやうな事情から、否でも應でも、さういふ肉薄戦術をとらないわけに行かないといふこともあるのです。

又、魚雷攻撃の効果を大きくするためには、魚雷の数をふやさなければならぬ。ところがその魚雷は、一機一本がふつうですから、雷撃機そのものの数を増し、一機又一機と立向つて、息をもつかせず攻撃をくりかへすことが必要となつて來るのです。

魚雷の射程は、前に記したやうに、二〇〇〇米もありますが、攻撃機用のものは、どつちみち肉薄して發射するのですから、そんなに長いことを必要としません。一方では又、攻撃機の性能の



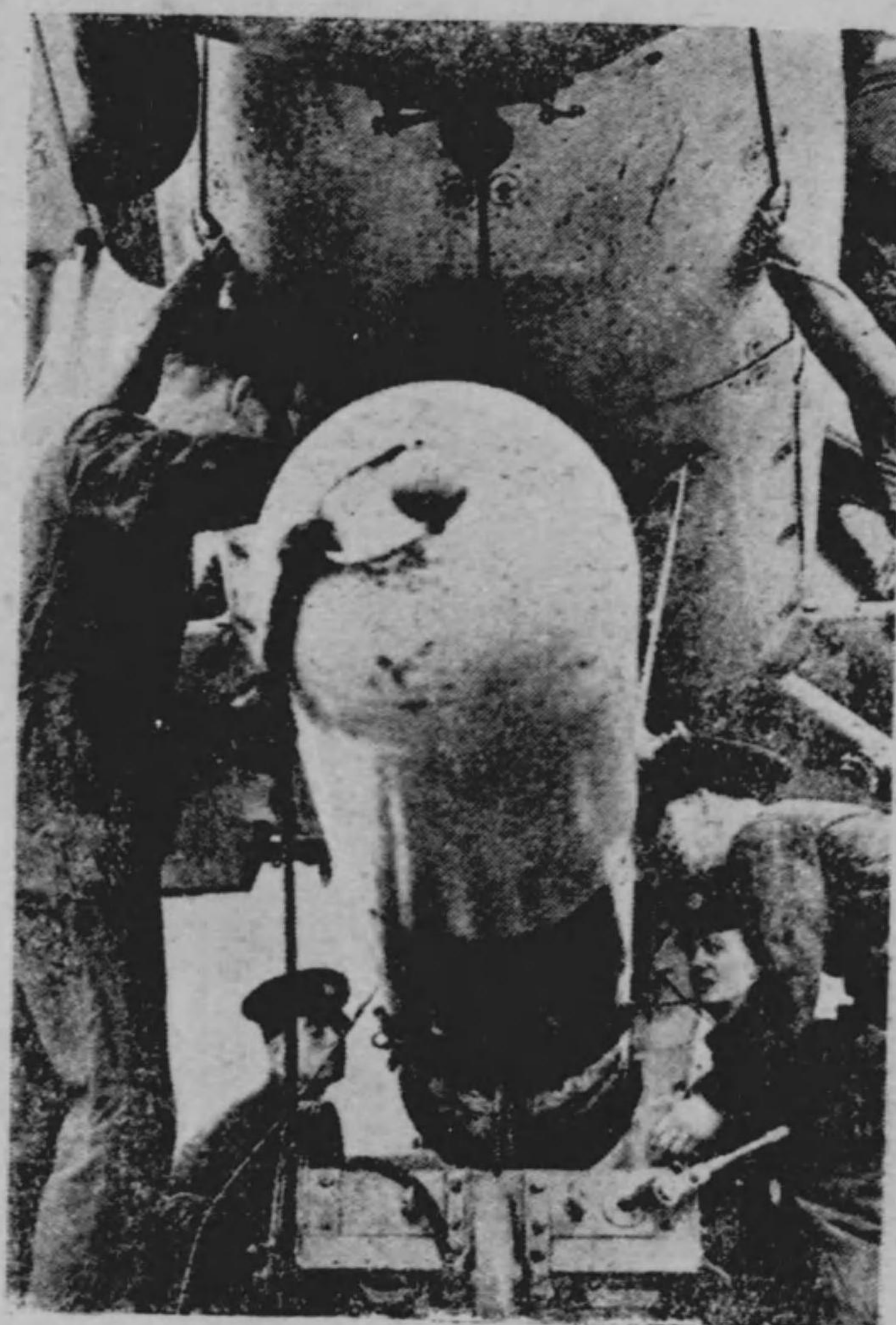
カントZ506型雷(爆)撃機(イタリヤ).

を生じます。同時に、命中率もわるくなります。それで、外国の例でいふと、少くとも海面上二、三〇米まで下つてから投下する必要があるさうです。

雷撃機の一例として、イタリヤのカントZ五〇六B型を引いて見ますと、翼幅二六・五〇米、全長一八・六〇米、全高六・七〇米、發動機七五〇馬力三基、五人乗、最大速力三九〇浬時、航続距離二〇〇〇浬となつてゐます。この雷撃機の全高がばかに大きいのは、浮舟をつけた水上機だからです。

我が海軍のは、車輪をつけた陸上機で、航空母艦を基地として活動するので、艦上攻撃機と呼ばれますが、勿論陸上でも使へます。

雷撃機の性能、その戦術、搭乗員の技術の最もすぐれてゐるのは、うたがひもなく、我が海軍のそれです。その上、搭乗員のすべては、熱火のやうな攻撃精神を抱い



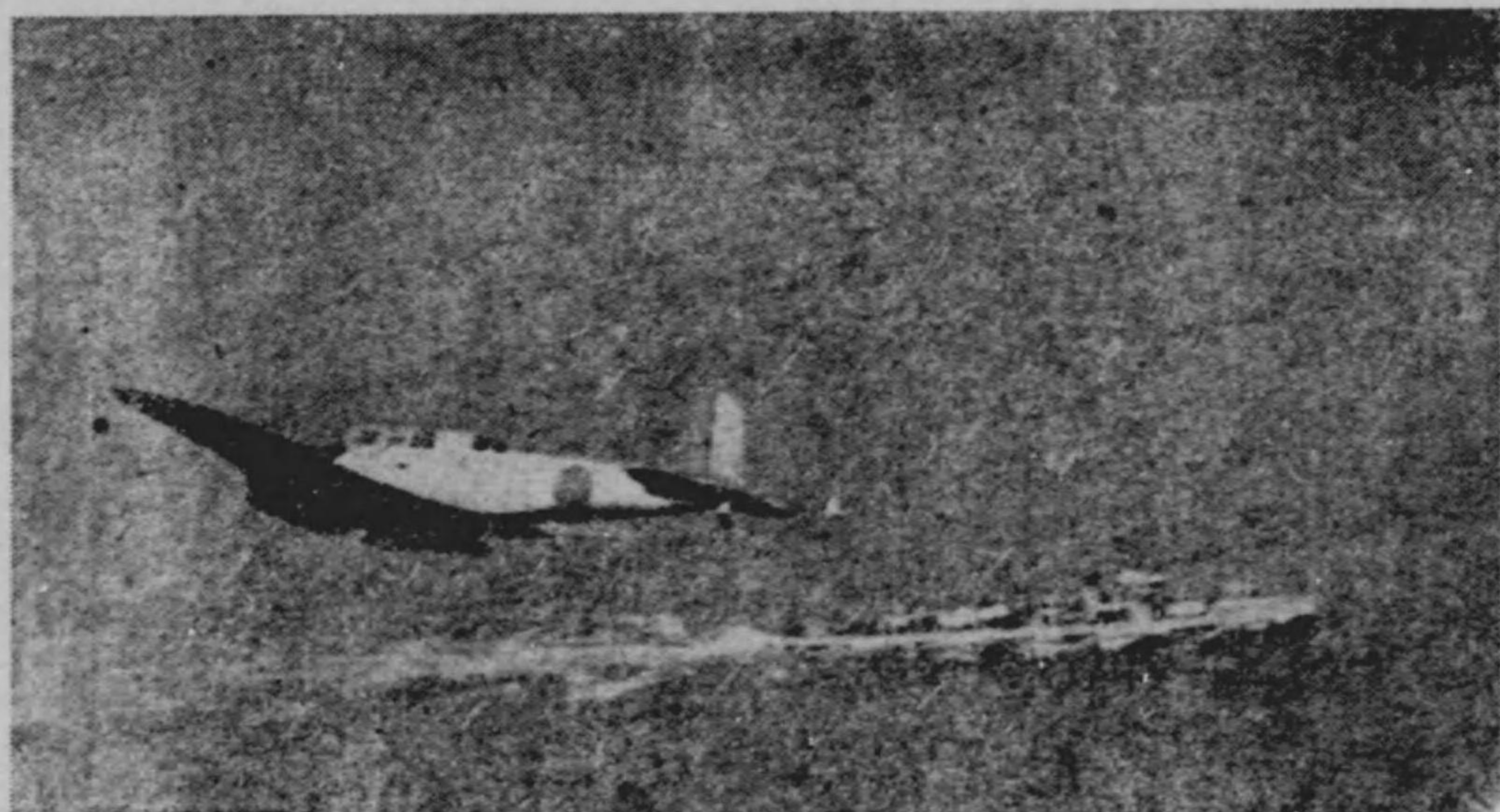
雷撃機の魚雷積込(イギリス).

關係から、艦艇用のものより小型であるのがふつうとされてゐます。戦前イギリス海軍が使用してゐたものは、直徑四五浬(艦艇用のものは五三浬ぐらゐがふつう)射程二〇〇〇米、重さ七五〇斤といふことでした。

發射方法は、艦艇のやうに動力を用ひて發射管からうち出すのではなく、胴體の下にひき出しにしてつりさげ、發射點で海上へ投下するだけです。

もつとも、その時の魚雷には、それまで飛行機と同速力で進んで來たいきほひがついてゐますから、まつすぐ下に落ちるわけではなく、發射管から射出した場合と同じやうな運動で、海中へつっこんで行くやうになります。

この時、あまり高いところからおとすと、海面にはげしくぶつかり、内部の精巧な装置にくるひ



海上艦艇に協力する我が攻撃機、厨の下には、魚雷の代りに小型の爆弾をつけてゐる。

飛行機で雷撃する場合は、投射と同時に機をひるがへし、後上方に退避するのがふつうになつてゐます。しかし、マレー沖に参加した勇士の話によりますと、我が攻撃機は、一機残らず、敵艦上をすれすれにとびこして、前方へつきぬけてゐます。一發必中を期するあまり、後方へ急轉するゆとりがなくなるほど、敵に肉薄した結果に他なりません。

ハワイ海戦の寫眞を見ても、我が攻撃機の魚雷の投射點と、敵艦との距離は、驚くほど短いことがわかります。

魚雷の性能のよい上に、この捨身の攻撃精神あり、我が攻撃隊の戦績のすばらしいのも、決して偶然ではありません。

なほ、この攻撃機は、魚雷攻撃しかできないものではありません。その必要のある時は、いつでもふつう

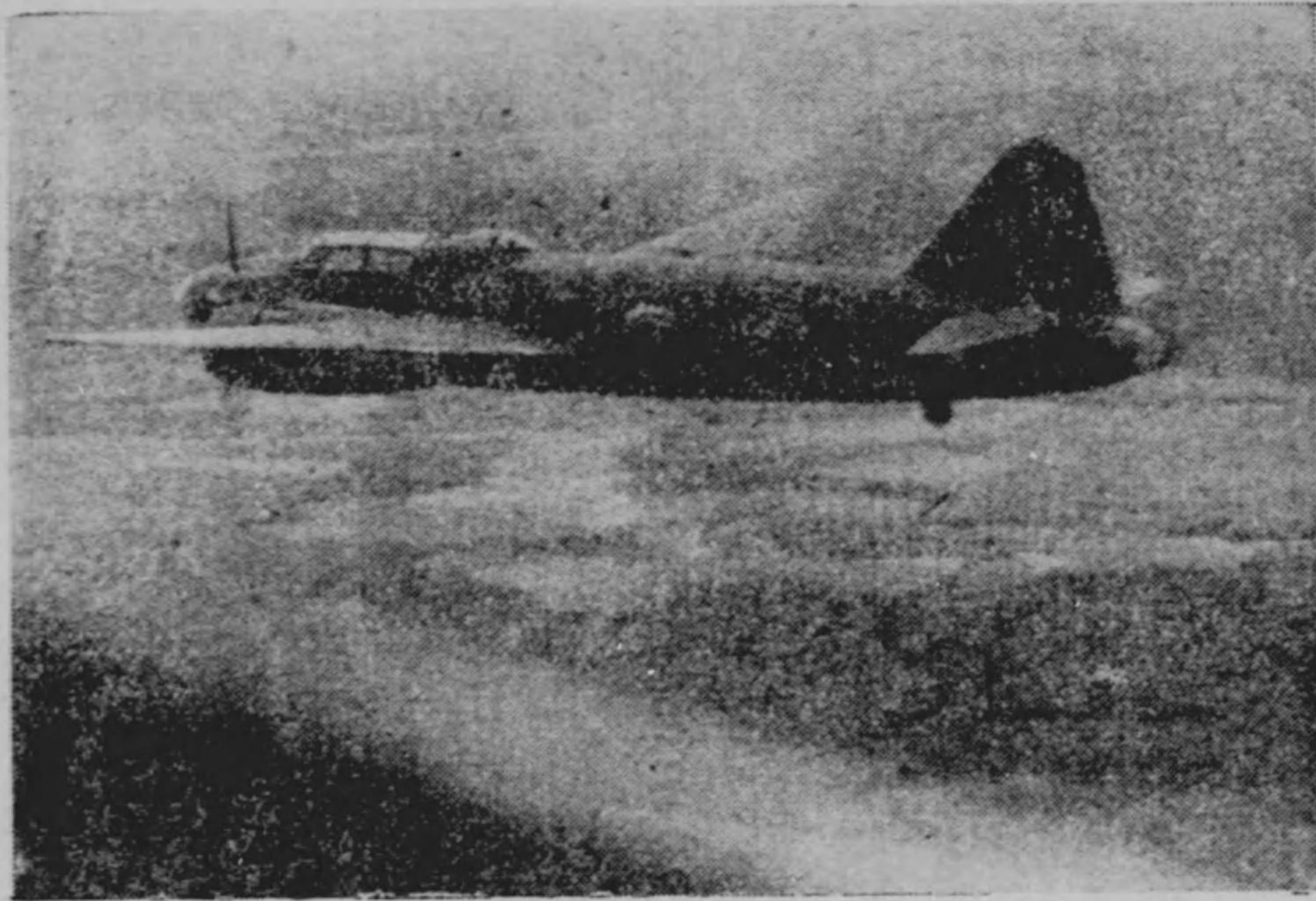


雷撃戦の一例——珊瑚海海戦（昭和17年5月7、8日）中央と左下方に見える白線は、我が攻撃機の投下した魚雷の跡、右上にもえてゐるのは、アメリカの航空母艦サラトガ。

我が海軍の飛行機用の魚雷の性能は、非常にすぐれてゐるものにちがひありません。

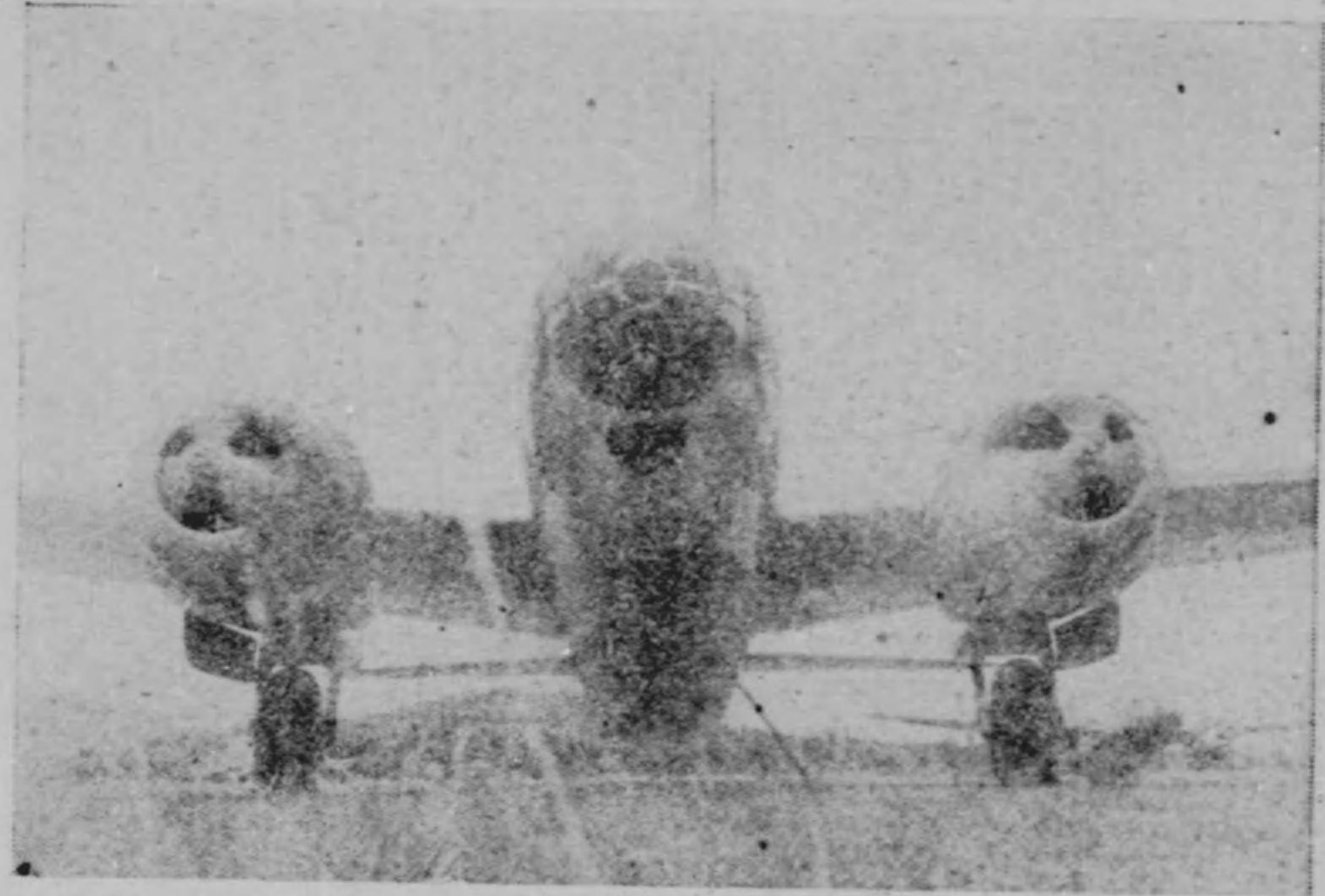
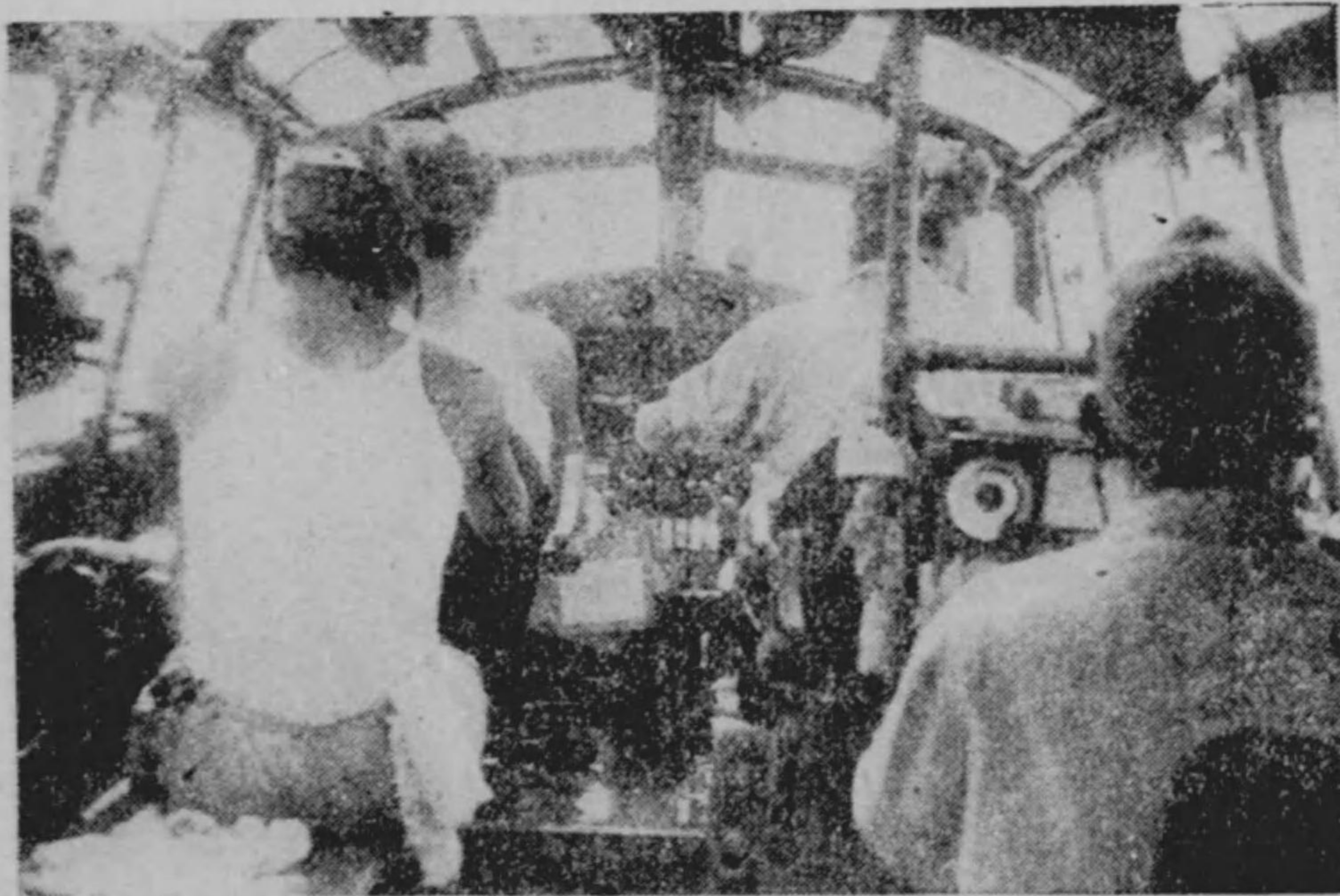
飛行機用の魚雷は、艦艇用のものより小型であるため、戦艦のやうながちりした大軍艦は、沈められないといはれてゐました。現にドイツの戦艦ビスマルクは、八本の飛行機用魚雷をくらつても沈みませんでした。

しかし、大東亞戦争での我が海軍の攻撃機は、爆撃機と協力してではあります。が、ハワイ海戦で、マレー沖海戦で、珊瑚海海戦で、又、南太平洋海戦で、ブーゲンビル島沖ギルバート諸島沖、マーシャル諸島沖の諸航空戦で、續々と敵の戦艦を撃沈してゐます。これから見ますと、



〔上〕 新鋭陸上攻撃機の威容，尾端にも銃座がある。

〔下〕 その搭乗席の一部，この他，各銃座には，それぞれの銃手がひかへてゐる。



真正面から見た我が新鋭陸上攻撃機。

の爆弾を抱いて出動し、爆撃機と同じやうに活動します

六、陸上攻撃機

我が海軍は、今お話しした艦上攻撃機の他に、陸上攻撃機と稱するものをもつてゐます。これは、艦上攻撃機にくらべると、ずっと大きく、航空母艦へ發着するには適當でなく、もつばら陸上の飛行場を基地として活動するところから名づけられたのであつて、任務の上には大きなちがひがありません。

ただし、艦上攻撃機が、發動機を一基しかつんでゐないのに、この方は二基であり、乗員も倍以上、燃料その他も、格段に多くつんでゐます。従つて、たとへば爆撃をやる時は、艦上爆撃機や、



ボーイングB17X型重爆撃機 (アメリカ)

艦上攻撃機の及ばないやうな長距離に行動し、たくさん爆弾をたたきつけることができます。つまり、陸軍の重爆撃機に相當するものと考へることができます。

これは、前にも記しましたが、昭和十二年八月十五日、支那事變がはじまつて後間もなく、支那海をとびこえ、いきなり敵の首都南京や、飛行場などに大爆撃を加へたのも、この陸上攻撃機でした。マレー沖海戦でも、この陸上攻撃機は、遠くはなれた陸上基地から出動して活躍したのです。現在、オーストラリアのポート・ダーウィンとか、ニューギニアのポート・モレスビーなどへ連続爆撃を加へてゐるのも、主としてこの陸上攻撃機です。この機種が、必要に応じて魚雷をもつて出動すれば、ふつうの艦上攻撃機よりは、はるかに強力な攻撃を行ふこととせう。

魚雷の時は別として、爆弾をつんではたらく時は、いはゆる重爆撃機とみなせるわけですが、その重爆撃機の有名なるものを二、三、外國の例を引いて調べて見ませう。

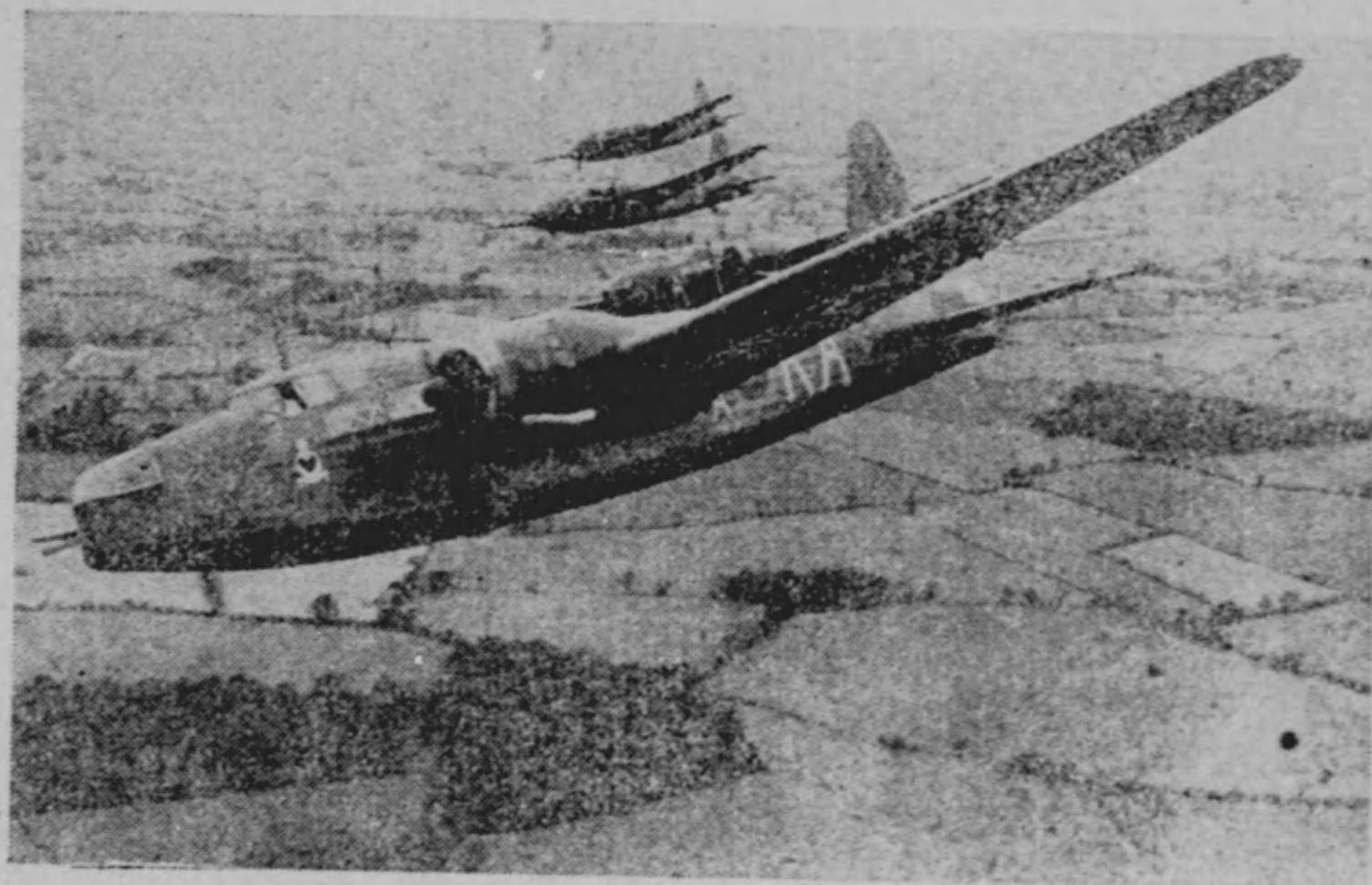
まづ、大東亞戦争で、さかんに我が軍にいどみかかり、さうしてさかんに撃墜されてゐるアメリカのボーイングB一七B型は、翼幅三一・六〇米、全長二〇・七〇米、全高四・七〇米、發動機一〇〇馬力四基、七一人乗、最大速度四二三浬時、航続距離五六三〇浬、機銃七をつけ、一〇〇〇砲乃至三〇〇〇砲の爆弾をつみます。

同じくアメリカのダグラスB一九は、何でも世界一のものをつくりたがるアメリカが、大いに得意になつてゐるもので、始めにもいひましたやうに、世界最大の爆撃機です。翼幅六四・四二米、全長三四・一四米、發動機二〇〇馬力四基、一〇人乗、最大速度三三六浬時、航続距離一二〇〇〇浬、爆弾一八〇〇〇砲をつむことができますといふことです。

しかし、これが果して實用になるものか、又、この通りの性能が、實際に發揮されるかどうかについては、大分疑問をいだかれてゐます。アメリカでも、今のところ試験飛行に成功したといふだけで、制式に採用されたといふことは、まだ聞いてゐません。

次にイギリスのヴィッカーズ・ウェリントン爆撃機は、翼幅二六・二七米、全長一九・六八米、全高五・三〇米、發動機最大一〇〇〇馬力二基、最大速度四二五浬時、航続距離四五四浬、爆弾二〇〇〇砲以上をつむことができます。

このやうに、重爆撃機の強味は、多くの爆弾をつんで、思ひ切つて長距離に行動することができ



ヴィッカーズ・ウェリントン重爆撃機 (イギリス)

るところにあります。距離をつめれば、そのために減らされる燃料や何かの分だけ、より多くの爆弾をつむこともできるわけです。

その一方では、一體に動作がぶくなり、戦闘機のやうに、自由自在に體をひるがへして、空中戦などできないのはもちろん、ふつうの爆撃機のやうに、急降下をやるといふわけにも行きません。

そこで、その爆撃は、もつばら、前にのべた水平爆撃だけとなり、空中で敵機に出あつても、こちらから突込むことはなく、敵戦闘機の攻撃をふせぐだけにとどめます。さうしてその際は、戦闘機のやうな運動はできませんから、上下・左右・前後に向かつて銃座をまうけて死角をなくし、更にびつたりと編隊を組んで、送弾量を増すやうにします。

今までお話ししてきた戦闘機・爆撃機・攻撃機などは、

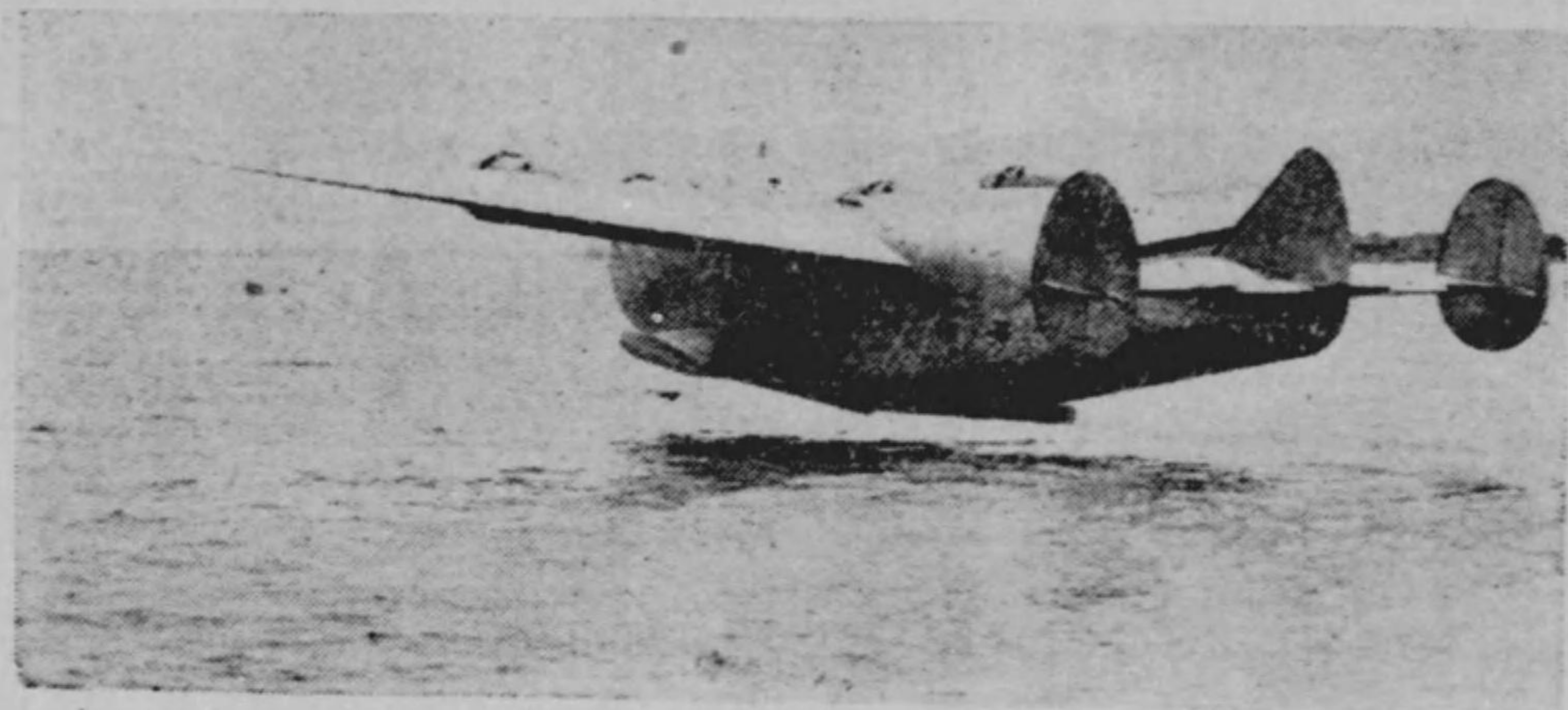
車輪のついた陸上機ではありますが、どれも航空母艦ではたらくるものでした。しかし、この陸上攻撃機だけは、その名の通り、陸上の基地でだけ活動するものです。それなら、ふつうの陸軍機と變りがなささうです。どうして海軍は、かういふ飛行機を、かふ必要があるのでせう。

海軍航空隊の任務は、こまかくいへば、今までのべて来たやうにいろいろありますが、そのどれもが、けつきよくのところは海洋上の制空権をにぎり、それによつて制海権を獲得することを目的としてゐます。

従つて、その活動面は、原則としては海洋上空であります。ところが、その海洋はかぎりなく廣い。後でのべる航空母艦は、その廣大な海洋上を自由に走り廻り、いたるところでその搭載機を活動させられる、たいへん便利なものです。

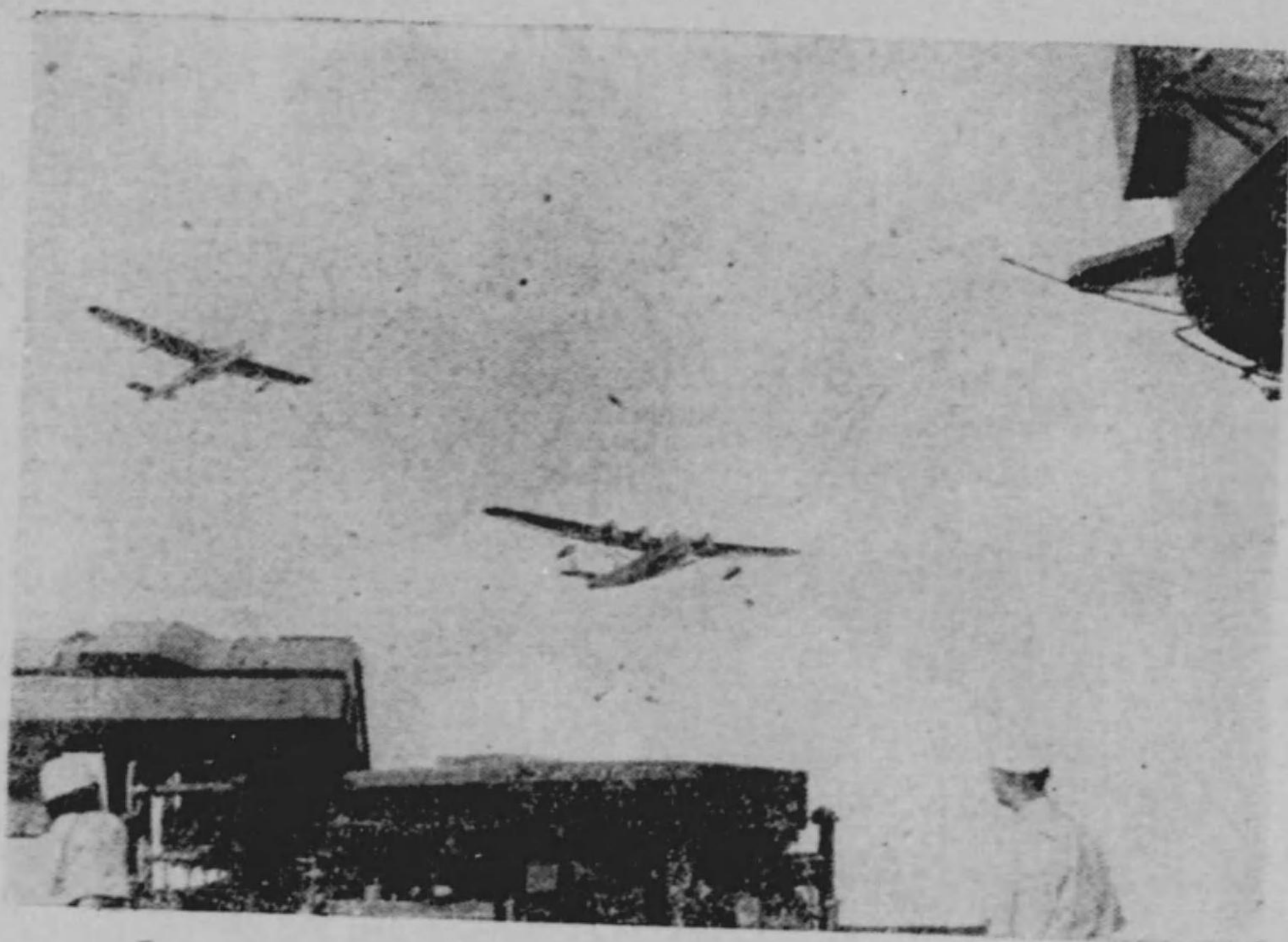
しかし、その搭載機は、後でのべるやうに、いろいろな事情から、あまり強力なものはいません。搭載機数にもかぎりがあります。又、航空母艦そのものも、無数につくつて走らせておくといふわけにも行きません。

そこで、作戦すべき海洋上の島々や、海岸などに陸上基地をおき、そこからこの強力な陸上攻撃機をくり出して、艦上機の手を負へないやうな、がんばりやうな敵艦をやつつけたり、その航続力の大きいことを利用して、航空母艦をつかはずに、うんと遠距離の敵地を攻撃したりすると、都合の



ボーイング314型飛行艇 (アメリカ)。

程度以上には大きくされないといふことになってゐます。
ところが、この飛行艇だけは、できさへしたら、いくら大きい
のをつくつても、さし／＼かへありません。飛行艇の飛行場は、廣
さにかぎりのない海上だからです。
かういふわけで、今日まで實用化されてゐる航空機の大型のも
のは、ほとんどみなこの飛行艇でした。たとへば、戦争がはじま
るまで、アメリカが、本國と、ハワイ・ウエーキ・グアム・マニ
ラ・香港をむすぶ、太平洋横断定期飛行にかゝつてゐたボーイン
グ三一四型(いはゆるクリッパー機)は、翼幅四三米、長さ三三米、
高さ八・七米、發動機一五〇〇馬力四基、四〇人の乗客をのせて、
最大三二〇軒の時速を出すものでした。
飛行艇は、このやうに搭載量が大きいばかりでなく、海上のど
こへでも降りられるといふ強味があります。單に降りるといふだ
けのことでしたら、浮舟のついた水上機も同様ですが、この方は
波の荒い時は、ひつくりかへる心配があるので、よほど大事をと



條艦の上を行く我が飛行艇。

よいことになるのです。
さうすれば、隻數と搭載機數にかぎりのある航
空母艦の方は、陸上基地の航空隊の活動範圍外の
海洋へ、自由に進出させることができ、それだけ
制空と制海の面がひろくなるわけです。
なほ、陸上基地の航空隊と、航空母艦の航空隊
の關係については、別にくはしくお話しします。

七、飛行艇

今いつたやうな重爆撃機が出発するには、非常
にひろい飛行場が必要です。飛行機は重くなるに
したがつて、つまり、大きくなるにしたがつて、
滑走距離が長くなるからです。

それで、陸上機の大きさといふものは、たとひ
それをつくれるだけの技術があるにしても、ある

らなければなりません。

そこへくると、飛行艇の方は、かなり大きな艇に、翼のついたものと同じやうなつくり方になつてゐるのですから、波に對して非常に強いのです。

それで、發動機に故障がおきたといふやうな時は、いつでも海上へ降りることができ、そのまま浮いてもゐられるのです。又、大型飛行艇は、みな二基以上の發動機をもつてゐますが、それが一ぺんに全部故障をおこすといふこともありませんから、残りの發動機を廻轉して、機動艇のやうに航走することもできるわけです。これが、何十人乗といふやうな大きな陸上機だつたら、不時著でさるやうな飛行場や空地は、めつたにあるものではありません。まして、それで海洋をわたる場合、故障を起したら、それつきりです。

こんなわけで、海外と連絡する長距離輸送飛行には、各國とも大型飛行艇をつかつてゐました。さつき記したアメリカの太平洋横断飛行の終點であつた香港には、イギリスの大型飛行艇による航空路がのびてゐたし、大西洋の方は、アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス等が、それぞれ御自慢の飛行艇をくり出して、定期輸送飛行を營んでゐたのです。

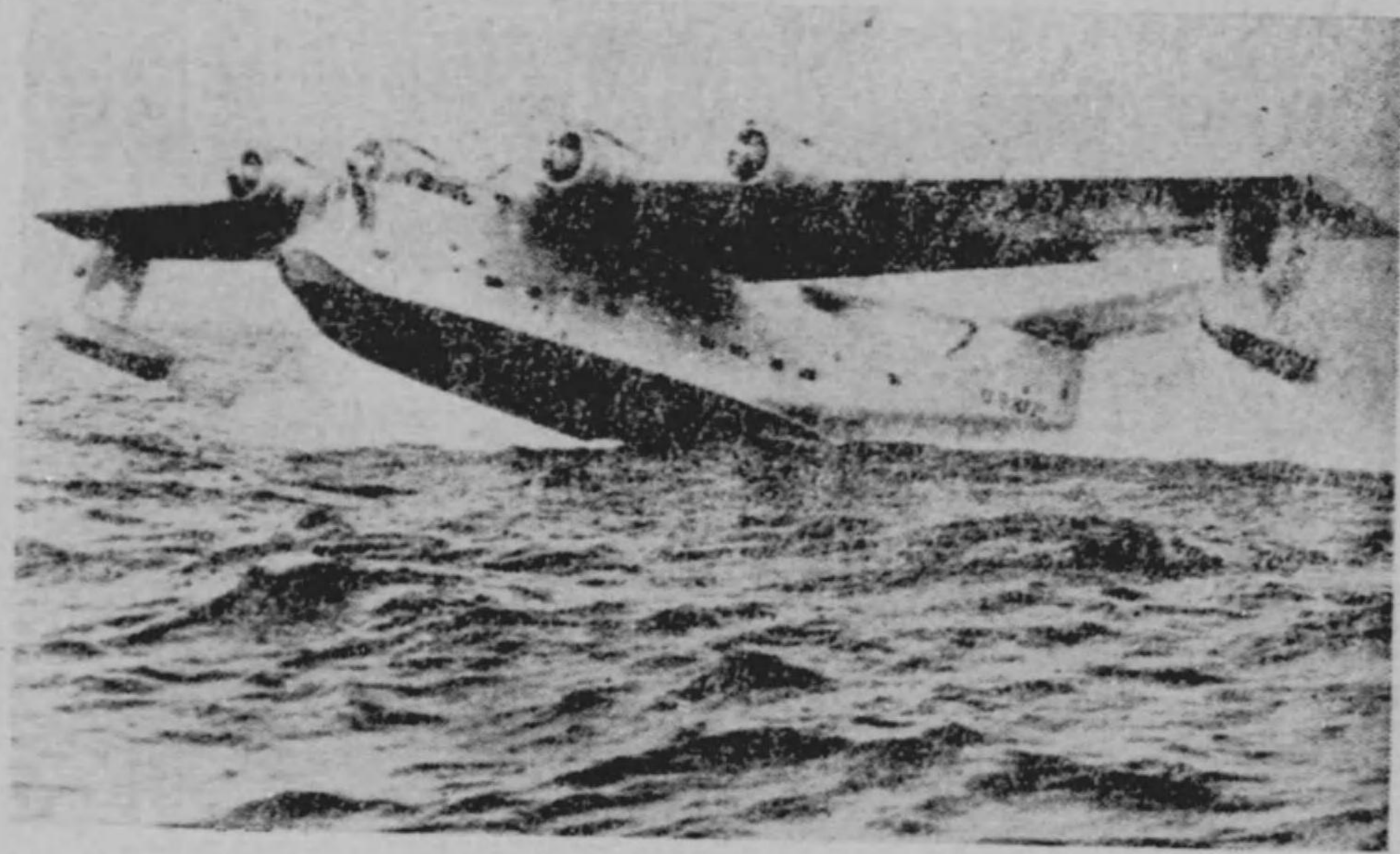
機體を大きくつくれば、重爆撃機のところでも申したやうに、燃料や、爆弾や、人員を多くつんで、長距離行動につくことができることとなります。



飛行艇と共に哨戒する我が艦。

それで、この飛行艇は、哨戒や、索敵などの方面にいちばん多く使はれます。すなはち、廣い海洋上を、長時間にわたつてとび續けて、敵の來襲を警戒したり、敵の艦隊などを發見すれば、いつまでもそれにくひついて、その様子やうごきを見張り、それを無電で味方に知らせます。又、敵の潜水艦や商船などに、つんで行つた爆弾をたたきつけたり、銃撃を加へたりすることもあります。外國で、哨戒爆撃飛行艇などと呼んでゐるのも、かういふわけからです。

軍用としても、民間用としても、この飛行艇の建造に、いちばん熱心だつたのは、アメリカだといはれてゐますが、中でもコンソリデーテッド、ダグラス、マーチン、ボーイングなどは、その有名な製造會社です。そのうちの一つの、



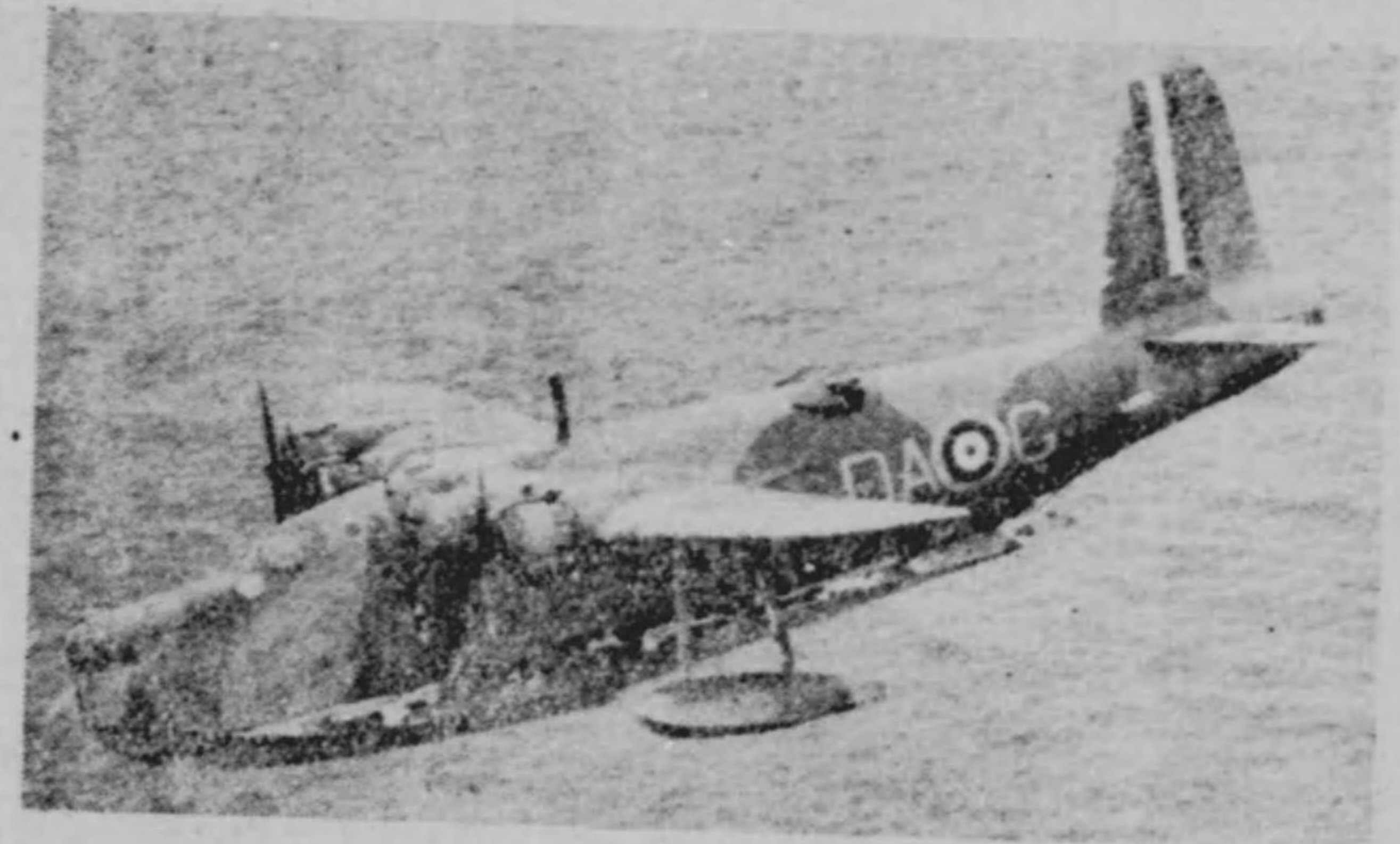
コンソリデーテッドPB2Y-1型飛行艇(アメリカ) 幅35米、長さ24.20米、高さ7.70米、發動機1200馬力4基、乗員9、最大353軒時、航続距離3300軒。

飛行艇の性能は、だいたい以上のやうなものです。もちろん、かういふ大型のものばかりでなく、たとへば、ヴォート・シオルスキーOS2U-1型(アメリカ)のやうに、二人乗で四五〇馬力の發動機一基といふやうな、小型飛行艇も大いに實用に供されてゐます。又、たとへば、同じくアメリカのコンソリデーテッドPB2Y-1A型のやうに、その必要のある時は、ひつこめてある車輪を出して、陸上にも發着できる、水陸兩用飛行艇もあります。

御承知のやうに、我が國が制壓すべき海洋は、まことにひろい。特に、この大東亞戦争を勝ちぬくためには、東西南北數千軒にわたる海上を、がつちりと我が手ににぎりつづけておなければなりません。そのためには、この飛行艇が最も



コンソリデーテッドPB1Y-1型飛行艇(アメリカ)。

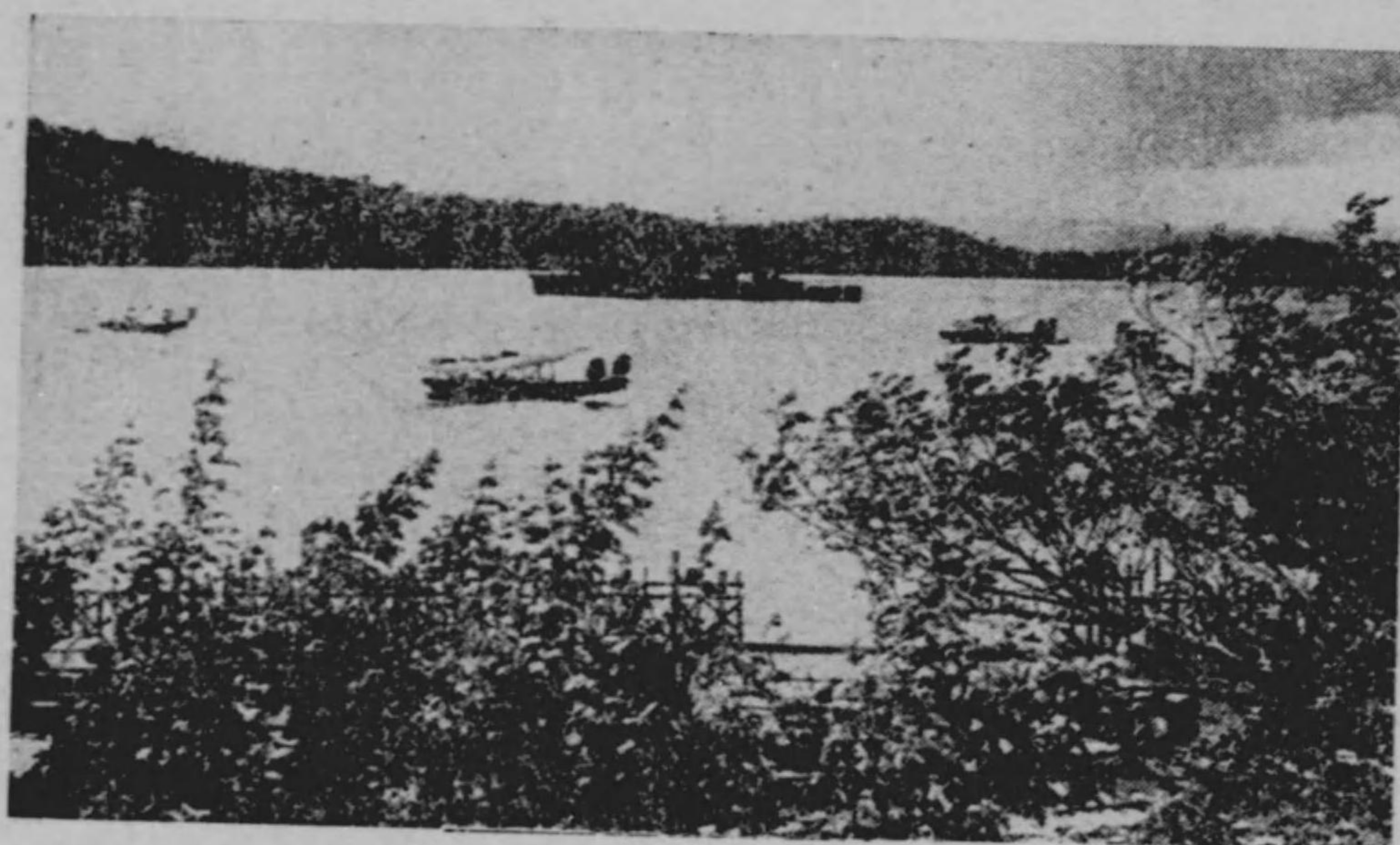


ショート・サンダーランド飛行艇(イギリス)。

大東亞戦争で、皆さんにもおなじみの、コンソリデーテッドPB1Y-1型は、翼幅三一・七〇米、全長二〇・三〇米、全高五・四〇米、發動機最大一〇五〇馬力二基、乗員五―九、最大速度三二三軒時、航続距離六四〇〇軒、機銃五―六、一八〇〇珄の爆弾を みます。

ト・サンダーランドは、翼幅三四・三九米、全長二六・〇〇米、全高一〇・〇〇米、發動機最大九一五馬力四基、六―八人乗、最大速度三三六軒時、航続距離二八五〇軒、機銃七を んでゐます。

イギリスの、ショー



飛行艇我が養ふ英氣を基地に

必要で、前にいつたやうな性能を利用して、間断なく見張と警戒をつづけるのです。

それで、爆撃や銃撃をやるとはいつても、それは必ずしも主任務ではなく、戦闘機や、爆撃機や、攻撃機のやうなはなばなしい戦闘をすることは少く、さういふ機種や艦隊に、手がらを立てさせるための、地味な仕事につく方が多いのです。まことに、この飛行艇の搭乗員たちは、偵察機の搭乗員と同じく、最も忍耐力のいるかかりです。私たちは、我が艦隊や航空隊の、輝かしい戦果をさくごとに、そのかけには、必ずかういふ人々の辛苦のにじんであることを、思ひ出さなければなりません。

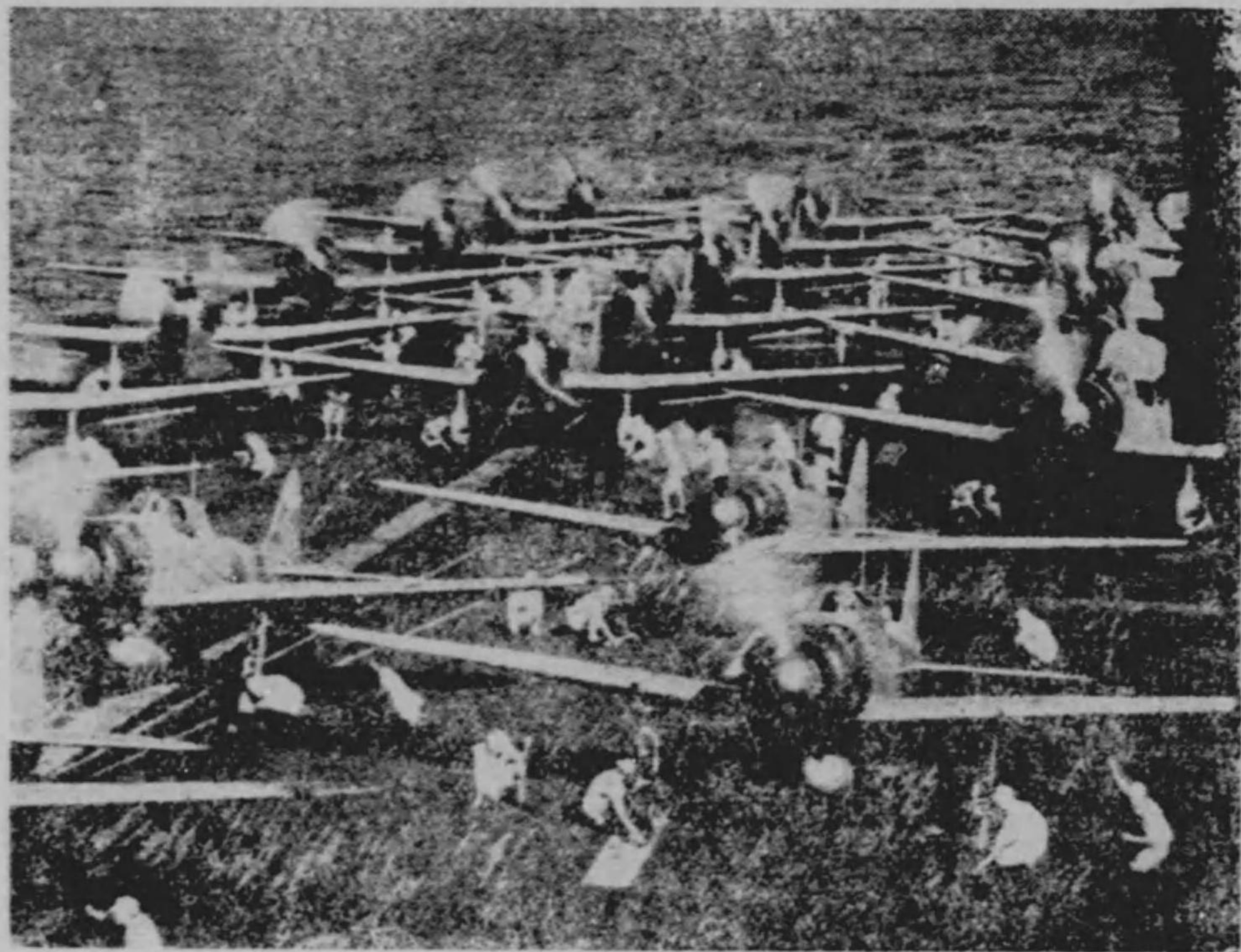
第五章 航空母艦

一、航空母艦の役目

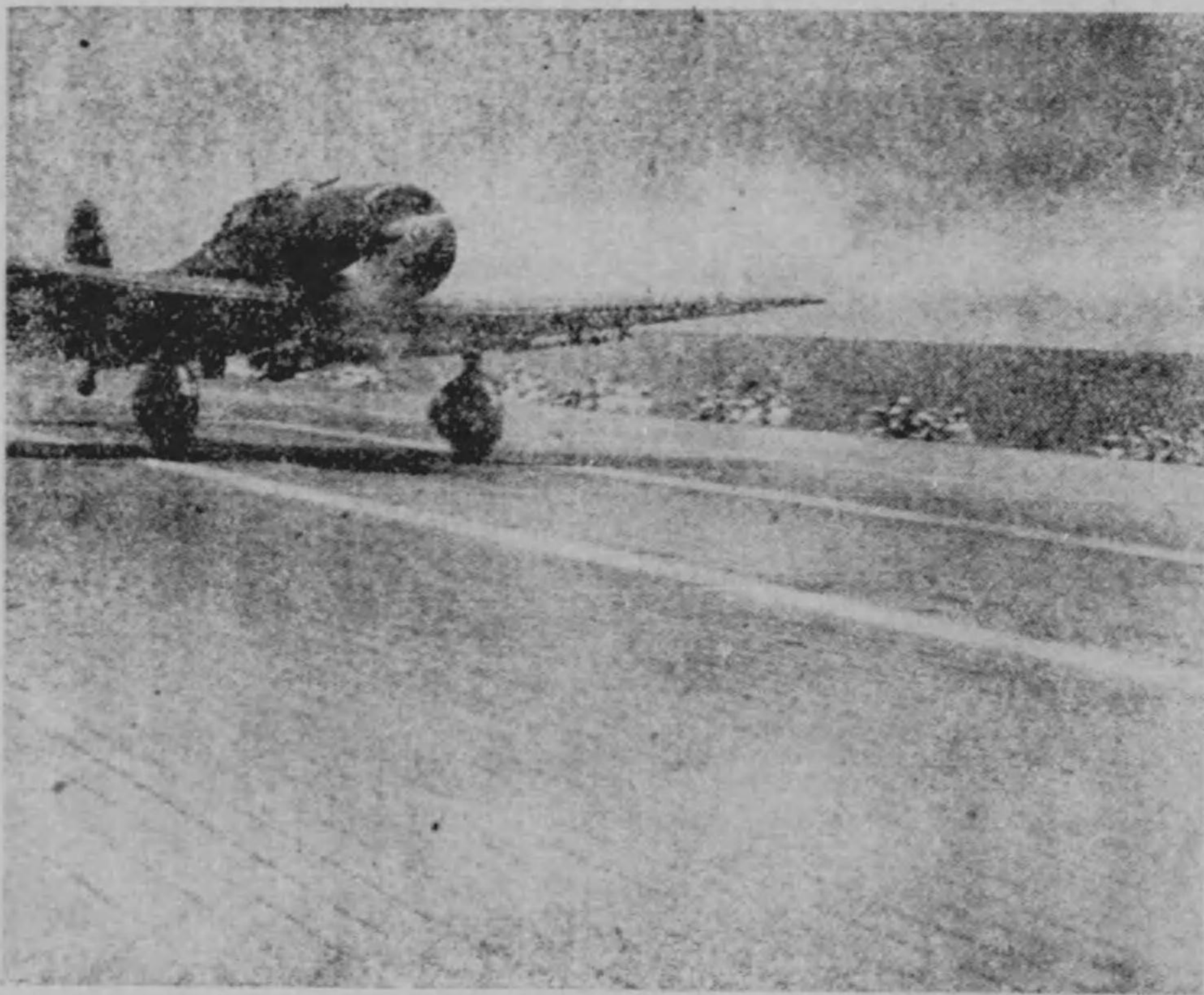
今までお話してきたやうに、海軍機は陸上を基地としてりつばにはたけません。しかし、現在のところ、たいていの飛行機の航続力といふものは、船などにくらべると、たかが知れてゐます。もつとも、速力の方は、段ちがひまさつてゐますが、それにしても、どんなところへも、自由に行けるといふほどにはなつてゐません。

航空母艦は、その缺點を補つて、海洋上のどんな遠いところへも、その航空隊を進出活動させる役目に働くのです。

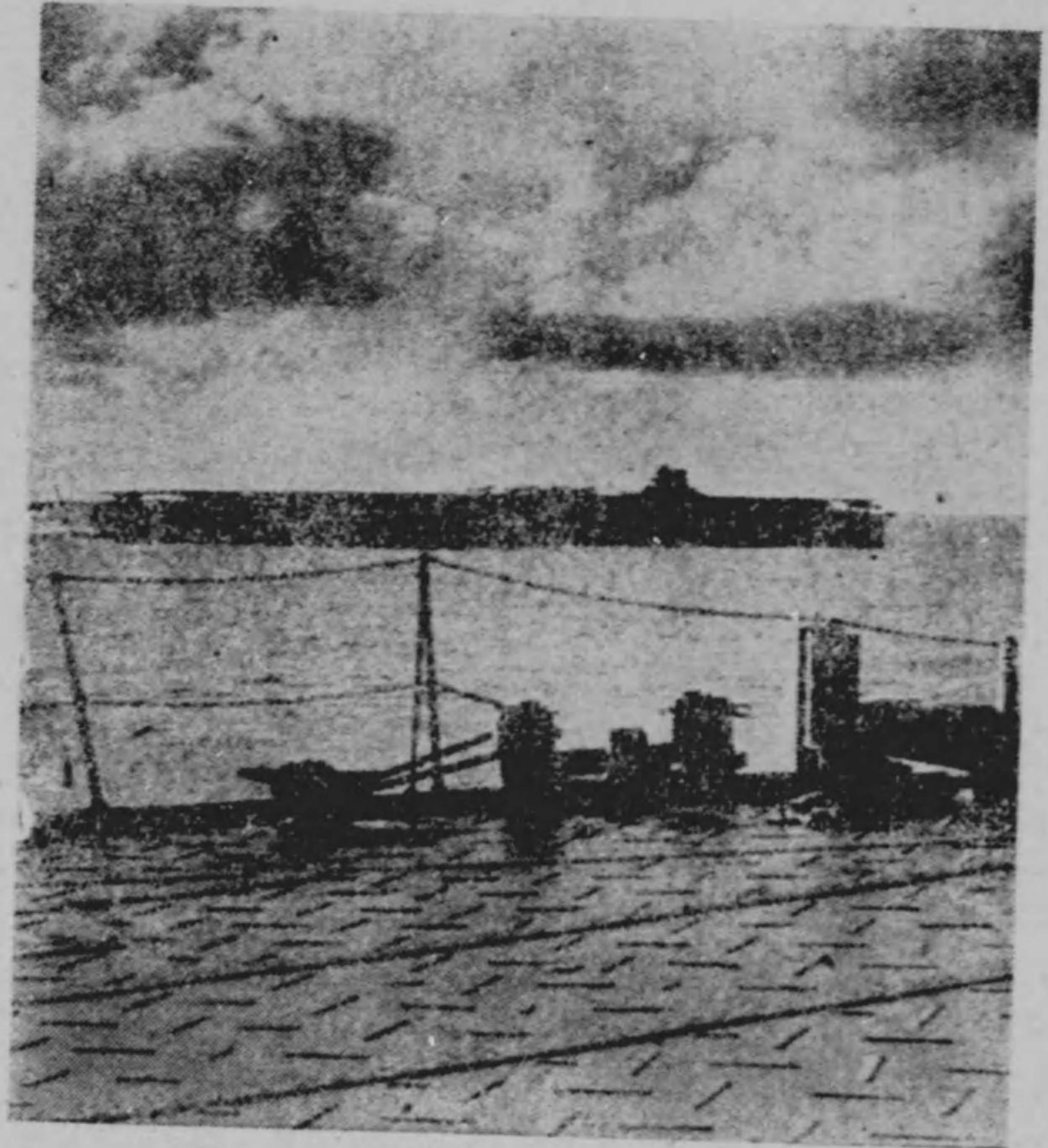
すなはち、陸上を基地とする飛行機は、その航続力の半分の距離以上には出て行けません。ところが、航空母艦の場合は、基地にあたる母艦そのものが、まづ、どこまでも出かけて行き、そこから搭載機をとばせてやるのです。それで、この搭載機は、母艦を出発点として見れば、やはり自分の航続力の半分の距離しかうごけません。基地を出発点として見れば、それに母艦の行動距



甲板上で出動準備中の艦上戦闘機。



甲板を滑走、まさに離艦しようとする艦上爆撃機。



行動中の我が航空母艦。

離を加へただけ、遠距離へ出動したことになるわけです。

又、航空母艦は、単に飛行機の航続力の不足を補ふといふばかりでなく、その機動性^{きどうせい}を利用して、必要と思ふ海洋上へ、急速に航空兵力を移動させられるといふ點でも、まことに大切なものです。

陸上の基地は、まづ地ならしをしたり、滑走路をこしらへたり、また格納庫や兵舎をつくつたりしなければなりませんから、早急の場合には間にあひません。そこへくると航空母艦は、海のつづくかぎり、どんなところへもかけつけることができます。さうして、そこでただちにその搭載機を活動させることができるのです。

海上の艦隊は、いつでも自分の陸上基地の航空隊の、勢力範囲内だけで作戦するとはかぎりませ

ん。いや、その力のゆるすかぎり、どんな遠方へも出動されてこそ、はじめてその本来の値打が發揮されるのです。

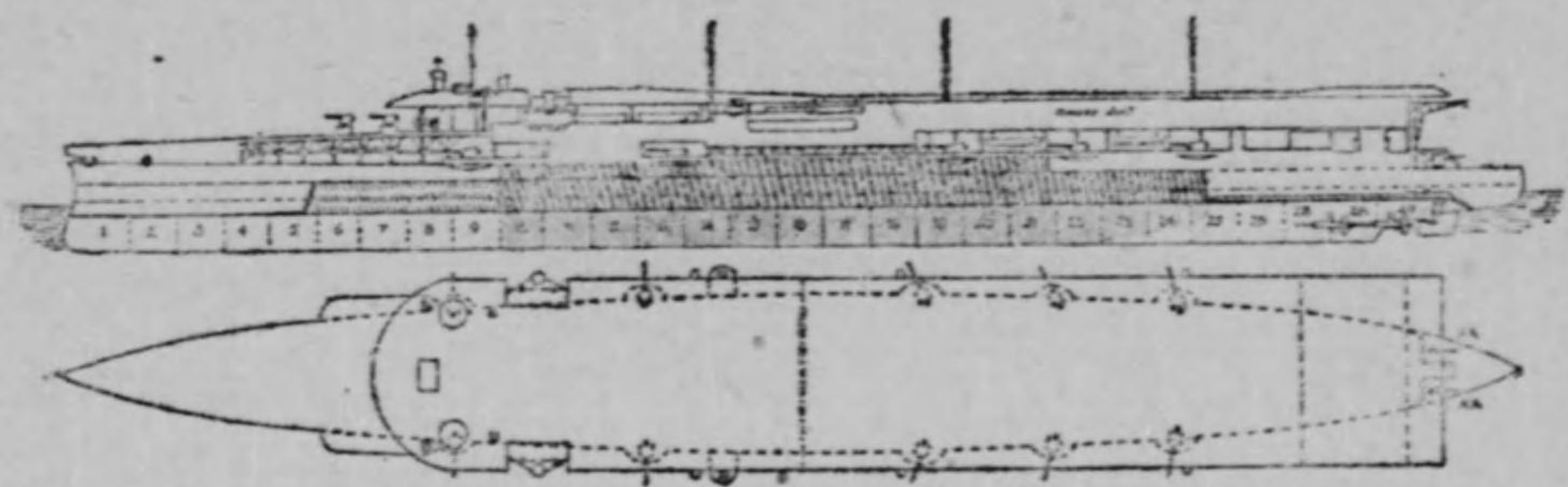
ところが、今日の海戦の勝負は、味方に航空兵力があるかないかによつて、まるで結果がちがつてきます。かういふ場合、その艦隊に航空兵力をあたへるものは、この航空母艦においては他にありません。

二、その構造

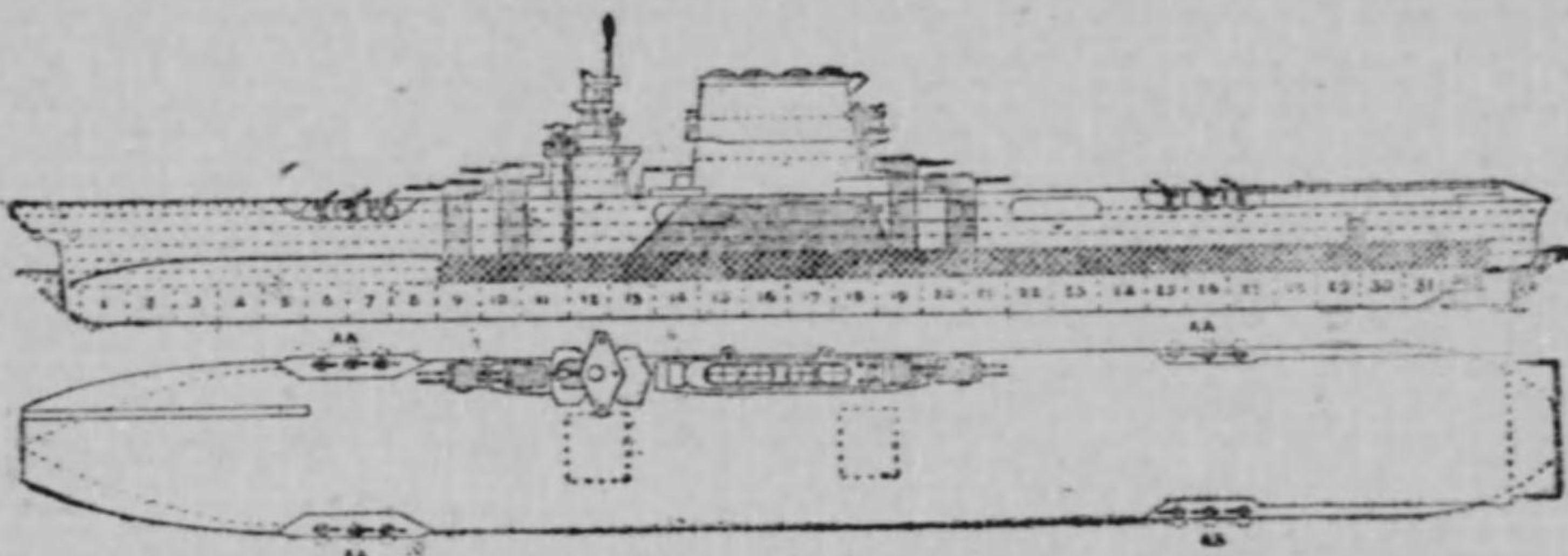
かういふ役目につくために、航空母艦はまづ飛行場をもたなければなりません。航空母艦の上の方は、だいたいの艦の大きさ一ばいだけ、全くたひらになつてゐます。これが飛行場で、飛行甲板といはれます。

この甲板の上に、煙突だの、大砲だの、艦橋だのが、あたり前に出つばつてゐたのでは、飛行機が出発したり、かへつてきたりすることができないことは、いふまでもありません。

それで航空母艦は、かういふものをできるだけ、甲板の下におしこむやうにしてゐます。それで、ひどくのつぺらばうに見えます。こんなふうには、ひどくのつぺらばうに見えるつくり方のものを、平甲板型といひます。



フラッシュ・デッキ型航空母艦の一例（イギリスのフューリアス艦型圖）。



アイランド型航空母艦の一例（アメリカのサラトガ艦型圖）。

ところが、航空母艦は、堂々たる大軍艦であり、しかも、最も速力の大きいものの一つです。かういふ艦を操作するためには、艦橋が甲板の下あたりにひつこんであるのでは、ひどく不便です。大砲をうつのにも同じことです。

平甲板型では、煙突も横へ向けたり、後の方へひくくのばしたりしてゐますが、それもまづすぐ上の方へ立てた方が、煙の出工合がよく、従つて火力も強くなります。

そこで、この煙突や、艦橋や、それに艦によつては主砲塔までもいつしよにまとめ、しかも少しでも甲板の面積をせばめないため、前後に細長くつぶして、右舷側に突出させてゐる母艦もあります。

かういふのを島型といひます。まづたひら

な、廣々とした甲板を海とすれば、このひとかたまりの構造物が、ちやうど島のやうに見えるところから名づけられたのです。

しかしこの方は、艦をうごかす上ではたいへん便利ですが、發着する飛行機の方からいへば、たとひひとかたまりにせよ、細長いにせよ、何も出てゐないにこしたことはありません。又、煙突から出る熱氣が、母艦上空の氣流を亂して、著艦する場合の飛行機に、不都合を及ぼすといふやうなこともあります。

それで、この兩型式の母艦のどちらがよいかといふことは、かんたんにはきめられませんが、實際の母艦について見れば、外國のはほとんどみな島型、我が國のは、その島型に近い型になつてゐるのが多いやうです。

次には、飛行機をしまつておくところが必要です。それで、飛行甲板の下は、廣い格納庫になつてゐます。ここに、アメリカのサラトガやレキシントンは一〇〇臺も飛行機をつんでおきました。イギリスのアーク・ローヤルは七二臺つみました。もつともこれは、その全部をあたり前の形にしておくと、格納庫がせまくなりますから、何臺かは分解しておくやうになります。

次には、りつばな飛行機工場があります。ただしこれは、飛行機を新しくつくるためのものでなく、機體や發動機に手入をしたり、修繕したりするためのものです。従つて、それに必要な、いろ

いろな機械設備や材料を用意してゐることも、いふまでもありません。

又、燃料の貯藏庫たくわんもあります。これは、陸上とちがひ、火を引きやすいからといつて、遠くにはなしておくわけには行きません。それで、嚴重な隔離設備かくりをなし、又、ガスがたまらないやうに、換氣装置くわんきで絶えず空氣を掃除してゐます。

以上が、航空母艦と他の軍艦とちがふ主な點で、その他の彈藥庫とか、兵員の居住區くまとか、炊爨すなはち所などの設備の方にはかはりありません。

三、飛行機の發着法

さて、かういふ航空母艦が、その搭載機をとばすには、まづ、高速力で、正しく風上へ向つて走ります。

飛行機がとび上るには、皆さんも御承知の通り、ある速度で滑走しなければなりません。しかしこれは、滑走することが目的なのではなく、翼に強い風をあてるためなのです。

凧にも風をあてなければあがらない。風の弱い時は、糸をもつて風上へ走る。糸をもつて走る代りに、飛行機は發動機でプロペラを廻して、滑走するといふことになるのです。

ところが、航空母艦では、その滑走が問題で、陸上での飛行場のやうに、飛行機に浮力うきりきがつくま



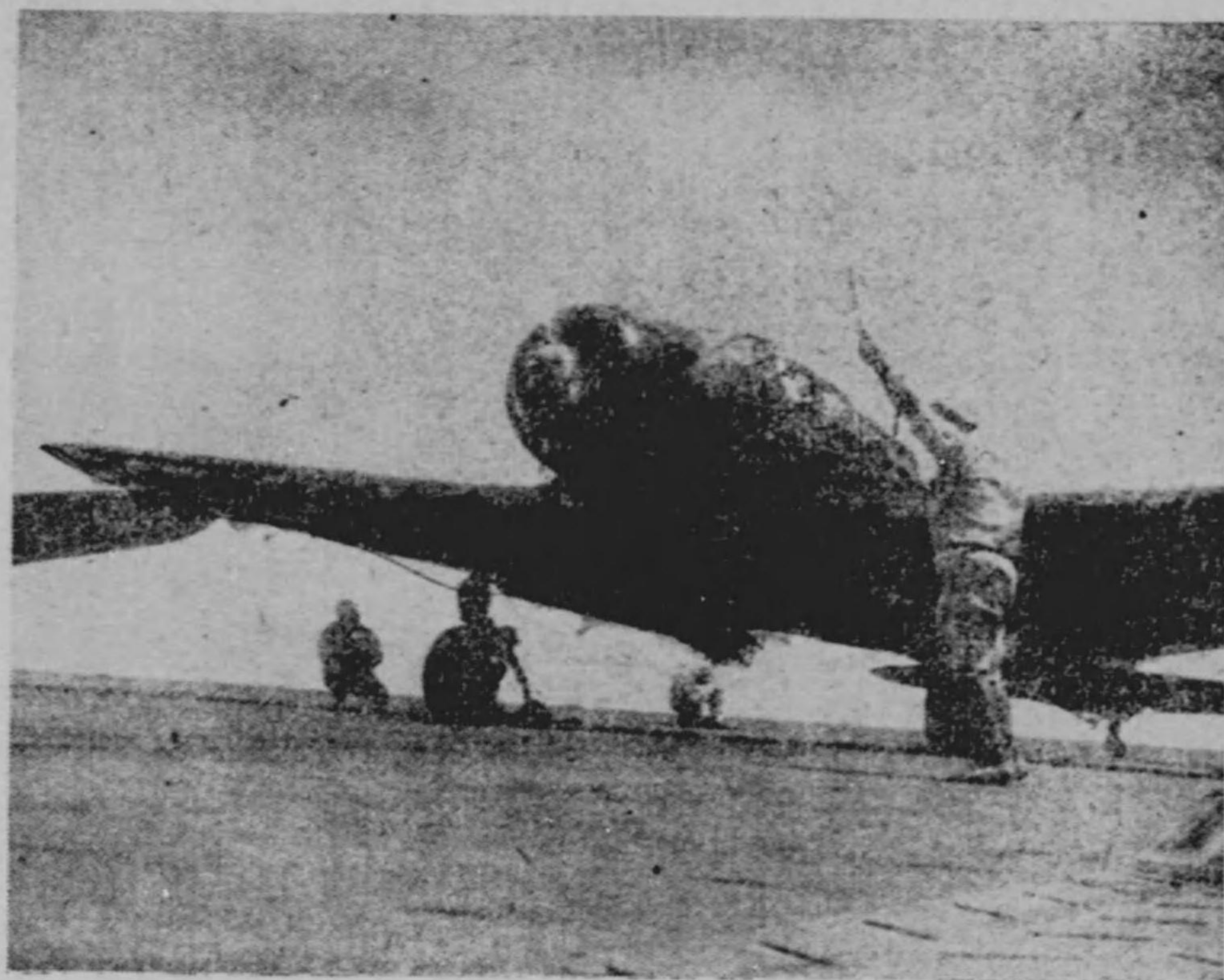
浮揚寸前の艦上爆撃機。

るのです。

しかし、さうかといつて、風の速さを人力でかげんするわけには行きません。それで、風の弱い

時は、それだけ艦を速くし、風の強い時は、それだけ艦をおそくし、その両方の合計風速が、常に必要な程度を保つやうに調節します。又、滑走距離は、機種によつてちがひますから（重ければ重いほど、滑走距離がのびる）艦の速度は、とばさうとする機種によつてもかげんしなければなりません。

搭載機が著艦する時も、艦は風上へ向かつて高速で走ります。これは、このやうにして強い向かひ風をあてることによつて、著艦した機の滑走の惰力を、なるべく早く弱くしようとするのです。それと同時に甲板を横切つて鋼索を張り、著艦した飛行機の尾端から出る鉤がひつかかつて、滑走



發動機全開，“準備よろし”“發進”といふ艦長の號令と共に、白旗がさつと振られる——その瞬間、その合圖と同時に、甲板上にしやがんでゐる整備員は、車止の綱をぐつと引くのである。

で、長々と滑走するといふわけには行きません。飛行甲板の長さといふものは、ふつう二〇〇米前後しかないのです。

そこで、否應なしに、飛行甲板の長さ以内の滑走で、飛行機に浮力をつけなければなりません。搭載機をとばす時、母艦が風上へ向つて走るのはそのためなのです。

かうすると、風の吹く速さと、母艦の走る速さと、飛行機の走る速さとの合計の速さの風、すなはち、それだけの強さの風が翼にあたり、全然動かない陸の飛行場から飛ぶ時よりは、ずっと短い距離の滑走で飛揚するやうにな

をくひとめる装置にもなつてゐます。飛行機は、かういふ母艦の後方から、できるだけ速力をおと
して近づき、しづかに甲板へすべりこむのです。

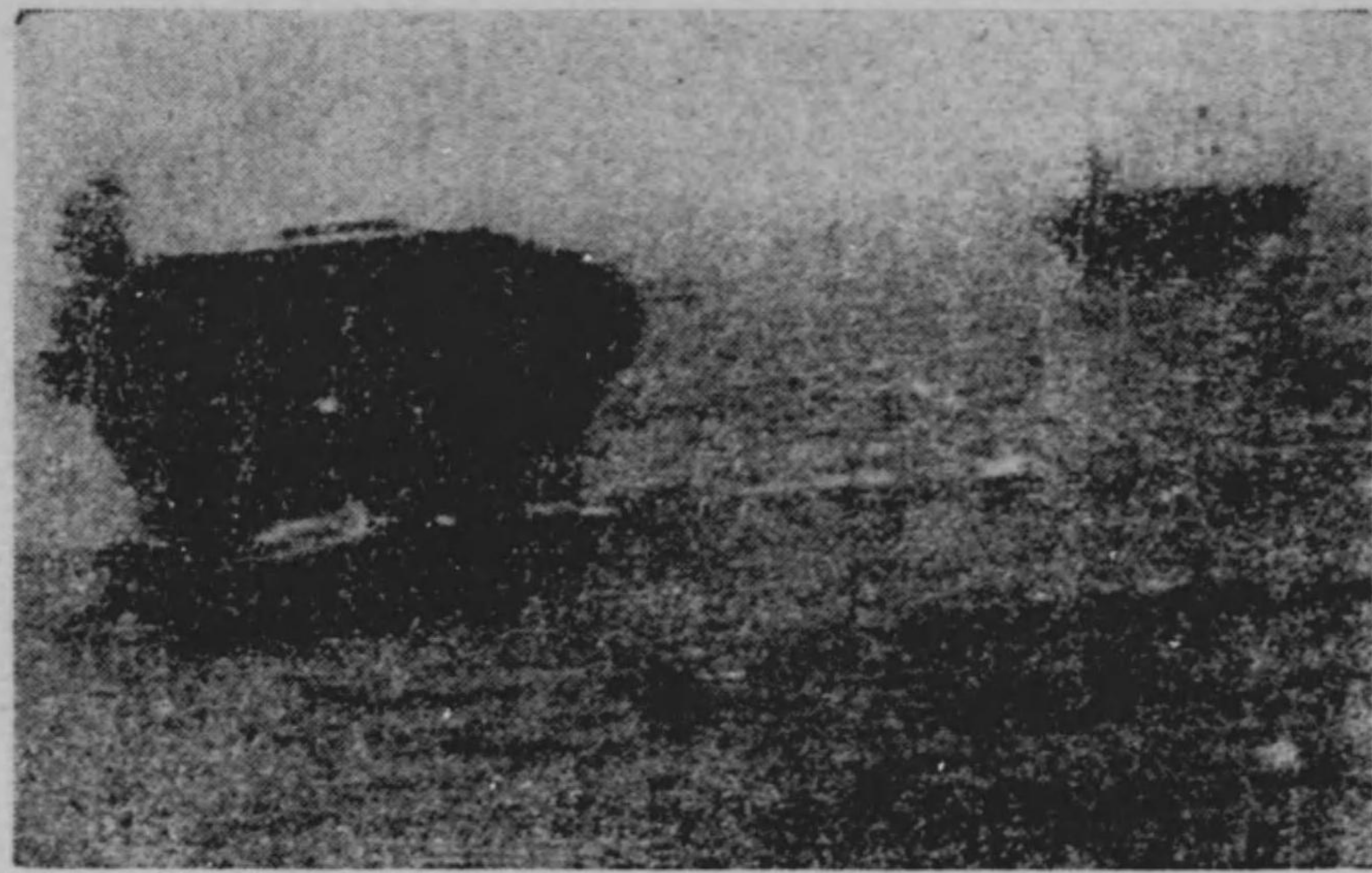
格納庫と飛行甲板の間には、翼をひろげたままの飛行機が、すつぽりとゐるやうな、大きなエレ
ベーターがあり、飛行機を甲板へあげたり、降したりします。これを、母艦はふつう二、三臺備へ
てゐますが、この出し入れがすばやくないと、それだけ全搭載機の活動能力に影響しますから、非
常に大切な仕事です。

四、困難で危険な操作

以上は、とび方と、降り方の原理だけをお話したのであつて、実際の場合となると、なかなか容
易なものではありません。

まづ、とばせるまでの準備が、さつきいつたやうに厄介至極なものなのですが、その上母艦は、
風波の強い時は、前後左右にゆれるのです。つまり、ぐらぐらする飛行場から、滑走してとびあが
らなければなりません。

ハワイ海戦の映畫をごらんになつた方は、我が海軍の二隻の母艦が、ものすごくゆれながら、ハ
ワイへ、ハワイへと進んで行く場面のあつたことを覚えてゐるでせう。いつでもあんなにひどくゆ



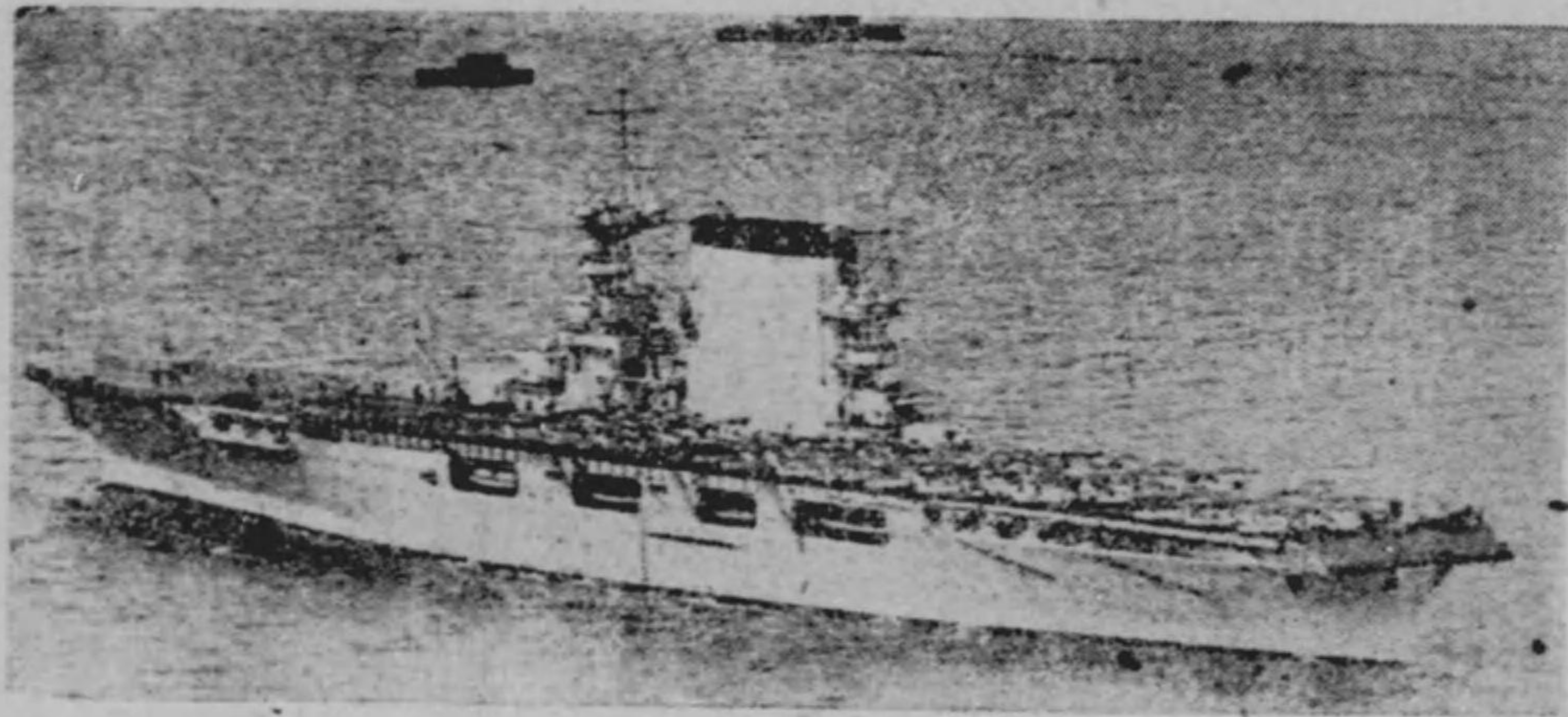
ハワイへ！　ハワイへ！

れてゐるわけではありませんが、ともかくあれを見れば、母艦に發着することが、いかにむづかし
く、あぶないことであるかが想像されませう。

特にこれは、著艦する時に、いつそうひどいのです。飛
行機の方は、發動機をとめ、下げ翼をおろし、まづすぐ艦
尾に近づき、車輪を甲板にふれるとたんに、母艦が大波に
もちあげられたりすると、その飛行機は、いきなりそこへ
たたきつけられることになります。

同じやうな時、母艦がかたむけば、左右いづれか一方の
車輪が、文字通り一足さきに甲板にふれ、機はいきなりそ
の方へ急旋回する。かういふことのため、今までどれほど
多くの、尊い犠牲者を出したか知れませんが。

その上、更に搭乗者の方からいふと、際限のない廣大な
海洋に活動した後で、元の母艦へかへつてくるのが、並大
抵なことではないのです。搭載機を出発させた後で、母艦
は元のところにぼんやり待つてゐるわけではありません。

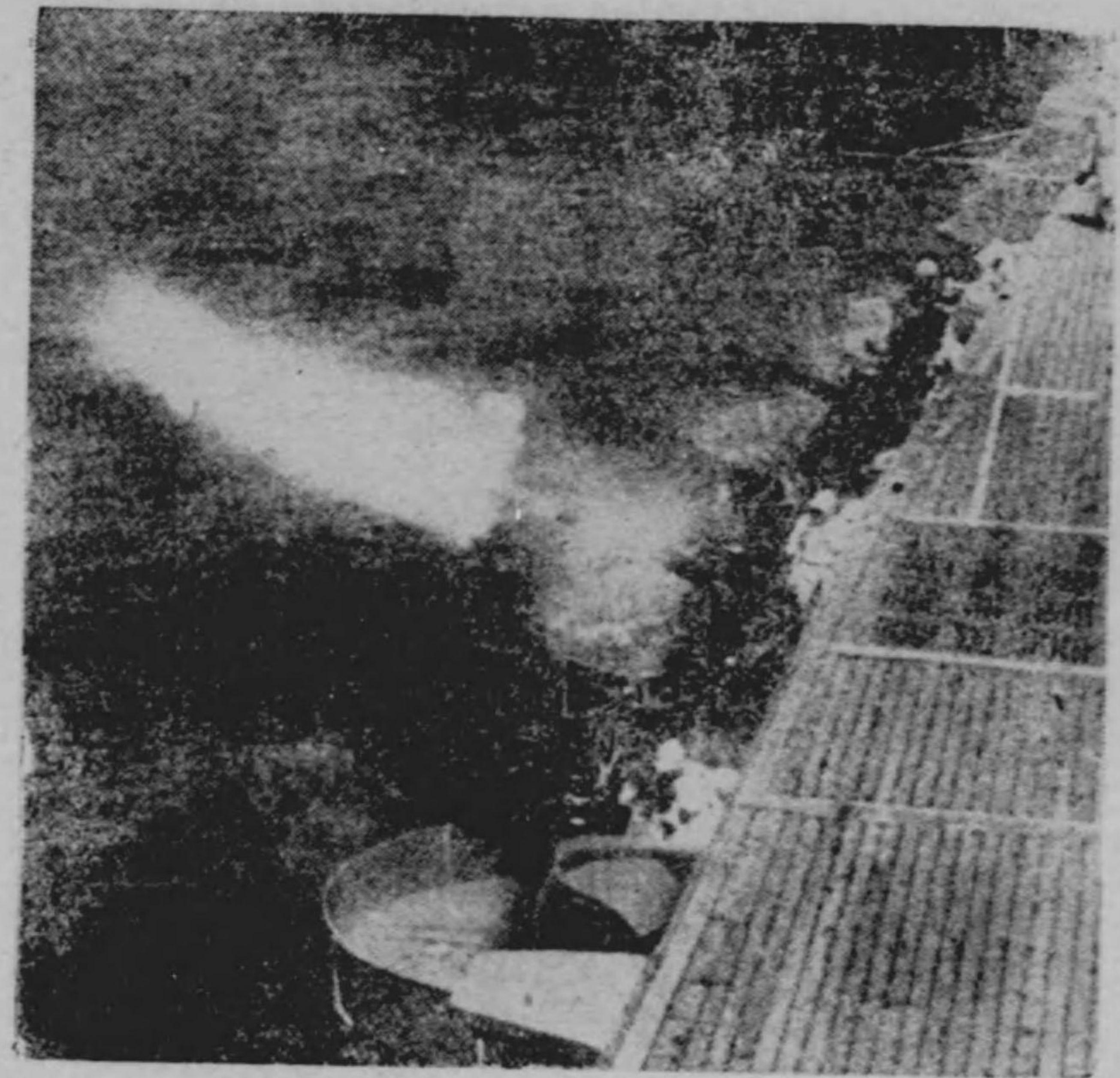


今は太平洋の底にあるアメリカ航空母艦サラトガ。

たとへば、すでに撃沈されたアメリカのサラトガやレキシントン
 ンは、排水量は戦艦なみの三三〇〇〇噸もありながら、主砲とし
 ては、一〇〇〇〇噸の重巡洋艦なみの二〇・三吋砲を八門つんで
 あただけでした。

飛行機を活躍させるのが本職の航空母艦にとって、苦手なもの
 の一つは、やはり敵の飛行機です。それは、艦型が目立つこと、
 艦體が大きいこと等のため、敵機にねらはれやすく、さうしても
 し一發の爆弾をくらつて、甲板に穴をあけられたりすると、飛行
 機を出発させることも、收容しゅうようすることもできなくなるからです。

ふつうの軍艦でしたら、沈みさへしなければ平気でたたかひつ
 づけられますが、航空母艦は、一つ穴をあけられただけで、まゐ
 つてしまいます。それで、敵機をやつつけるための高角砲かうかくはうは、う
 んとつんでゐます。これは、もう兩方とも沈められました。ア
 メリカのワスプは計四八、イギリスのアーク・ローヤルは計八〇
 の高角機銃（及び砲）をそなへてゐました。



我が航空母艦の副砲發射。仰角の小さいところを
 見ると、敵の奇襲艦をでも射つのであらうか。

搭載機は、豫定してある母艦の移動先
 へ向かつてかへり、更に無電その他の
 方法で連絡をとつて近づくのですが、
 ひどい濃霧の時などは、母艦のすぐそ
 ばへ来てゐながら、どうしても母艦の
 姿を見つけれないといふやうなこと
 もあるのです。

五、その性能

航空母艦の主任務は、あくまでもそ
 の搭載機を活動させることにあるので
 すから、堂々たる軍艦ではあつても、
 自分からふつうの海戦にとびこむこと
 はありません。しかし、賣られた喧嘩けんかは買はなければなりませんから、
 相當な砲力はもつてゐます
 が、それもその排水量の割合から見れば、きはめて貧弱ひんじやくなものです。

高角機銃砲の他に、航空母艦は相當多くの中小口径砲を備へてゐます。これは、海上から奇襲してくる敵の驅逐艦や潜水艦に攻撃を加へるものです。

對空防禦と共に、航空母艦のまさつてゐるところは、その速力です。これは、前にお話したやうに、搭載機をはたらかせるのに、ぜひとも必要なものであつて、いづれも三〇節以上の高速力を出します。最近の新戦艦は、たいてい三〇節ぐらゐ出るやうですが、今までは何萬噸もある大艦で、三〇節以上も出るのは、航空母艦だけでした。

なほ、航空母艦については、「基地航空隊と艦隊航空隊」の項でものべることにし、最後に開戦當時の、アメリカとイギリスの代表的母艦の、要目と性能の一覽表を出しておきます。

國名	艦名	排水量(噸)	長さ(米)	幅(米)	速力(節)	搭載機數	主砲	高角兵器	竣工年
アメリカ	サラトガ	三三〇〇〇	二六四	二九・九	三二	一一〇	二〇一八	二〇	昭和二年
同	ワスプ	一四七〇〇	二一〇	二四・六	三〇	五〇		四八	昭和十五年
イギリス	アーク・ローヤル	二二〇〇〇	二二〇	二八・七	三〇	七二		八〇	昭和十三年
同	イラストリアス	二二〇〇〇			三〇				昭和十五年

我が海軍の航空母艦の新しいことは、公表されてゐません。しかし、その威力は、大東亞戦における多くの海戦で、すでにあきらかであります。

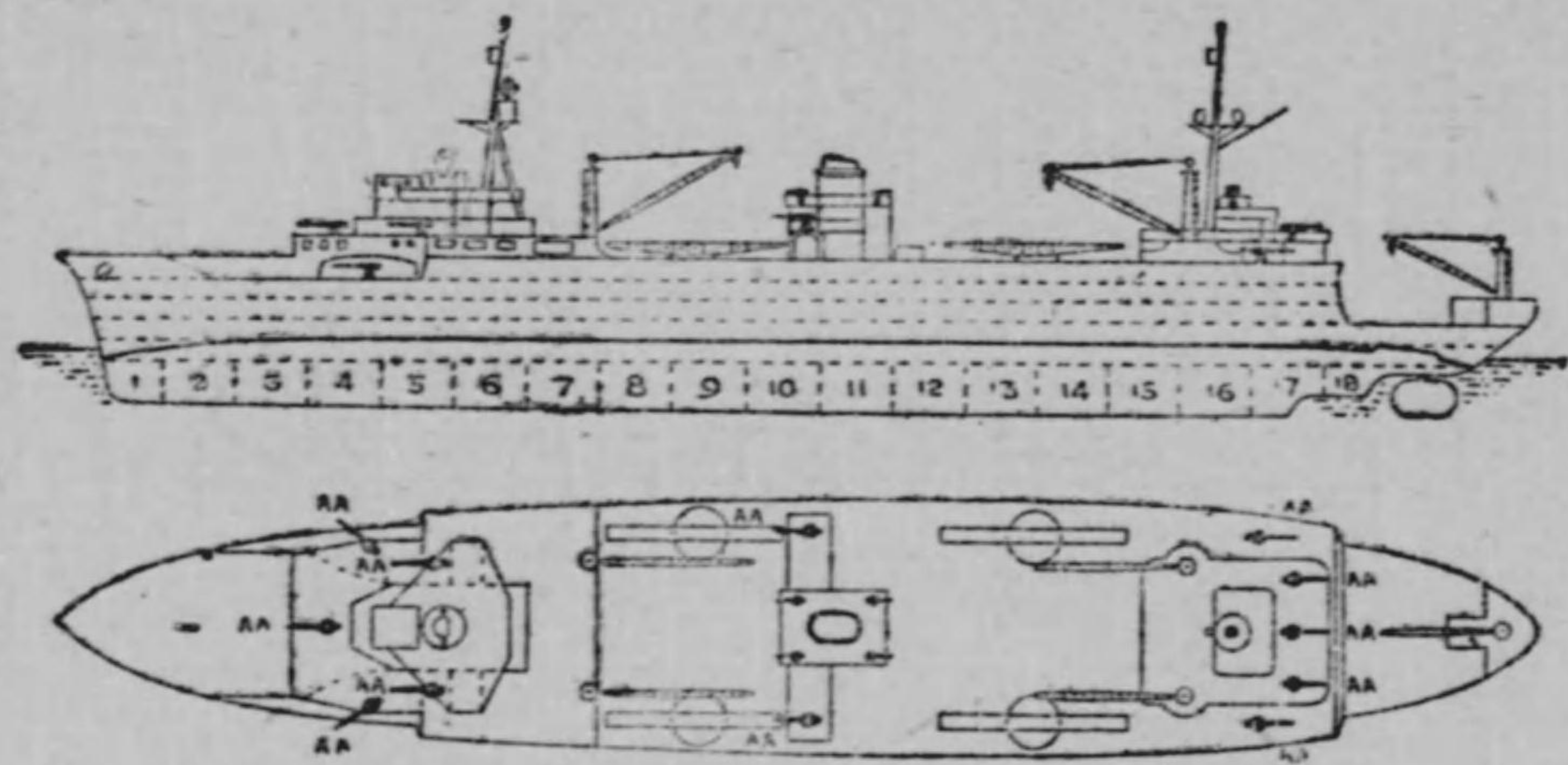
第六章 水上機母艦

海軍の航空隊のことを一通り知るには、この水上機母艦も見落せません。

この水上機母艦は、偵察機の項でお話した水上機を搭載してそれを活動させ、その他、艦上機に對する航空母艦と、同様な任務にあたる軍艦です。ただし、搭載機の發着法は、その構造がちがふだけに、航空母艦の場合とは、まるでちがひます。

さつきお話したやうに、航空母艦がその搭載機を發着させるには、母艦が高速力で走らなければなりません。ところが、この水上機母艦の場合は、その反對に、艦は停止しなければならないのです。これは、水上機を發着させるには、一々起重機であげおろしする必要があり、それには又、艦を止めて操作しなければならぬからです。

すなはち、搭載の水上機を出發させるには、まづ艦を停止し、起重機で機を海上へおろす。それから機は、適當な方向へ滑走をはじめるといふこととなります。歸艦の場合は、その逆の順に、適當なところへ著水した機が、停止してゐる母艦へ水上滑走で近づく。母艦はそれを、起重機でつりあげて艦上へ收容してから、航行しはじめるといふこととなります。



フランスの水上機母艦コンマンド・テストの艦型圖。

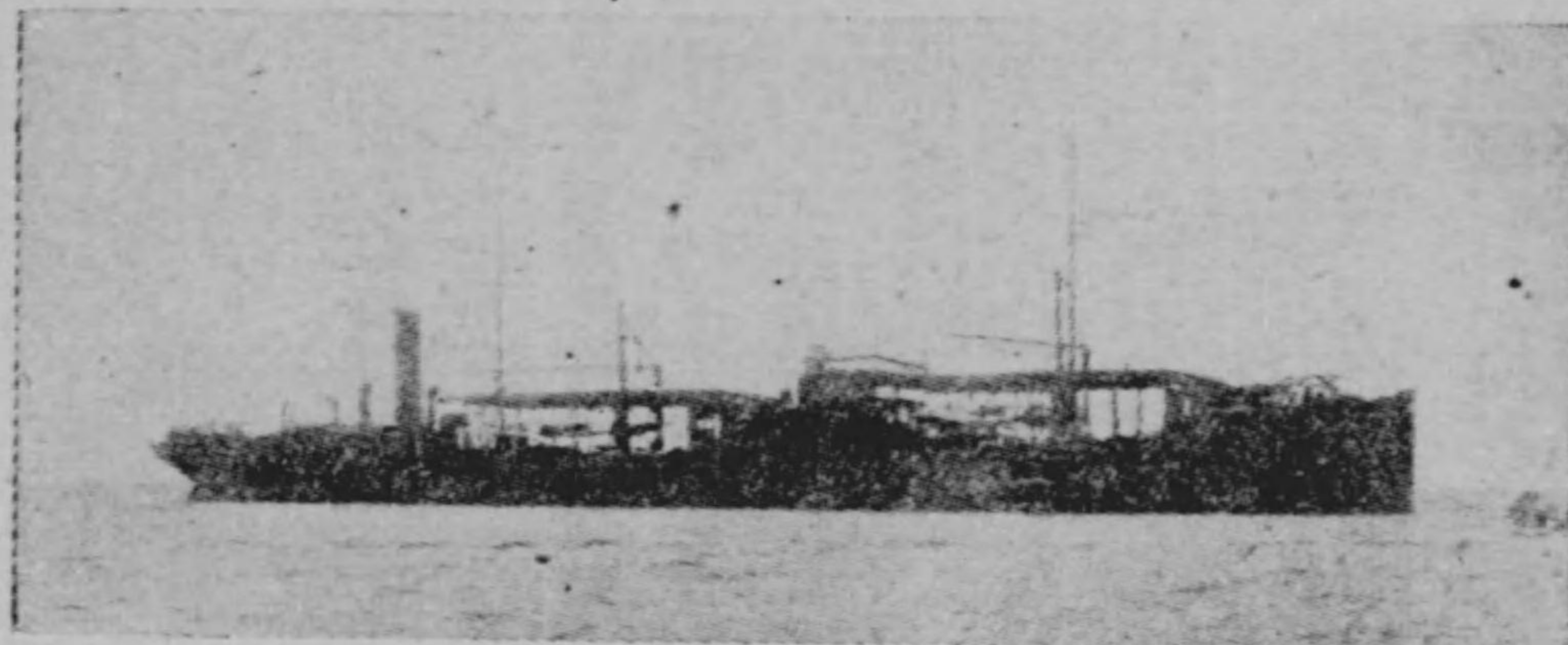
といふことになります。

かういふわけで、水上機母艦は、航空母艦のやうに、高速力である必要はありません。しかし、乗員を居住させたり、燃料や必要兵器をたくはへたり、搭載機の組立、修繕等のための工場設備があつたりすることは、航空母艦と同様です。

水上機は、飛行艇などと共に、海岸に基地をおくのがふつうですが、多数の水上機をつんだこの母艦は、洋上のいたるところでその基地となり、その搭載機を、哨戒、索敵、連絡等の任につかせることを主任務とするわけです。海戦などもあるべくさけるのが當然で、従つて、砲力もあまり大きくはありません。左に、一、二の例を引いて見ませう。

コンマンド・テスト（フランス）排水量一〇〇〇〇噸、長さ一五六米、幅二一・八米、高角砲二〇、機銃一二、水上機二六臺搭載、速力二〇・五節。

ライト（アメリカ）排水量八六七五噸、長さ一三六米、幅



我が水上機母艦能登呂。

しかし、何艦によらず、戦闘に出て、じつと停止してゐることは、敵が雷撃や爆撃をやるのに、最もいい状態となるので、できることなら、停止しないに越したことはありません。それで、新しい水上機母艦の中には、射出機をそなへ、出発の時だけでも、艦を停止させずにすませるやうになつてゐるのがあります。

この上、收容する時も、艦をとめずにやれたらしめたものです。その一案として、戦前にイギリス海軍で、次のやうな方法が工夫されました。

それは、水上機がゆつくりと乗れるぐらゐの幅の歸著帯（Landing Canvas）といふものを、母艦の艦尾から水中に垂らして走ります。そこへ、水上機が後方から滑走してきて、わざと乗りあげるのです。すると機は、歸著帯に乗つたまま、艦尾にびつたりとくつついて走るやうになります。従つて、機と母艦との関係は、兩方が停止してゐると、同様な條件になりますから、それを艦尾の起重機で、りあげるといふやり方です。用がすめば、歸著帯は艦上へまきあげる

一七・七米、一二・七種砲二、高角砲二、同機銃四、水上機一二臺搭載、速力一五節。
アルバトロス（イギリス）排水量四八〇〇噸、長さ一三七・一六米、幅一七・六七米、高角砲二、機銃三二、水上機九臺搭載、速力二一節。

この水上機母艦の建造には、アメリカが特に熱心でした。それは、水上機母艦である一方に、飛行艇の移動基地としての役目をあたへ、洋上で燃料を補給したり、乗員を休養させたりすることを目的としたものでした。

第七章 基地航空隊と艦隊航空隊

一、基地航空隊と艦隊航空隊

今までのお話でわかるやうに、我が海軍は、陸上やその海岸に基地をおく基地航空隊と、航空母艦を基地として、海洋上の任意な場所に出動してはたらく、艦隊航空隊とをもつてゐます。

かういふと、前章でのべた、水上機母艦を基地とするのも、一種の艦隊航空隊となりますが、この方の任務は、大分趣がちがひますのでしばらく別とし、次に、何故この基地航空隊と艦隊航空隊とに分れてゐる必要があるか、又その優劣等について、少しお話したいと思ひます。これをよく知ることには、同時に海軍航空隊の性格を、よくのみこむことになるからです。

二、艦隊航空隊の長所と短所

一體、海軍の飛行機は、水上機として生まれたものです。海軍の飛行機であるからには、海上に發着しなければならないといふ理由からです。



陸上基地に待機する我が海軍戦闘機。

それで、はじめのうちは、海軍機とは浮舟をつけたもの、陸軍機とは車輪をつけたものと、かんたんに考へ分けることができました。その當然の結果として、母艦といふものも、水上機母艦の方が先につくられたのです。

ところが、あの浮舟といふものは、重い點でも、空氣の抵抗をふやすといふ點でも、いかにも邪魔なしらもので、このために飛行機の性能は、同じ馬力、同じ大きさの陸上機にくらべると、ぐんと落ちるのです。

そこで、何とかして輕快な陸上機を、海上のまつただ中で活動させたいものだ、といふところから案出されたのが、皆さんもすでに御承知の航空母艦です。それが、時代と共に、母艦も飛行機も、それ等をつくつたり、とばしたりする技術もどしどし進歩して、まづ、海上のどんなところででも、思ふ通りの飛行機を、思ふ通りに活動させられるやうになりました。これが艦隊航空隊の長所です。

ところが、それと同時に、航空母艦の短所、いはば艦隊航空隊の弱味といふものも、次第にはつきりしてきたのです。

その一つは、航空母艦の防禦力が、あまり大きくないといふことです。まづ、あの飛行甲板ですが、あれは爆撃に對して、同程度の排水量の他の艦にくらべると、ずつと弱い装甲板がうすいからです。航空母艦の章でいつたやうに、飛行甲板を傷つけられることは、航空母艦の生命をうばはれることにも等しい（少くとも修繕ができるまでは）のですが、困つたことには、その大事な甲板を十分に厚くすることができないのです。

これも航空母艦のところで話したことです。ふつうの軍艦では、遠慮なく甲板の上にもりあがつてゐる構造物の、ほとんどすべてが、あの甲板の下に收められてゐます。それで、飛行甲板のある位置といふものは、他の艦にくらべるとうんと高いのです。この高い甲板の装甲を厚くすると、いはゆる頭でつかちになり、艦が非常にゆれやすくなる。そのゆれることがまた、前にもいつたやうに、航空母艦にとつて何よりも禁物なのです。（このゆれるのを防ぐために、獨樂の原理を應用した自動装置をしてある艦もあるくらいです。）

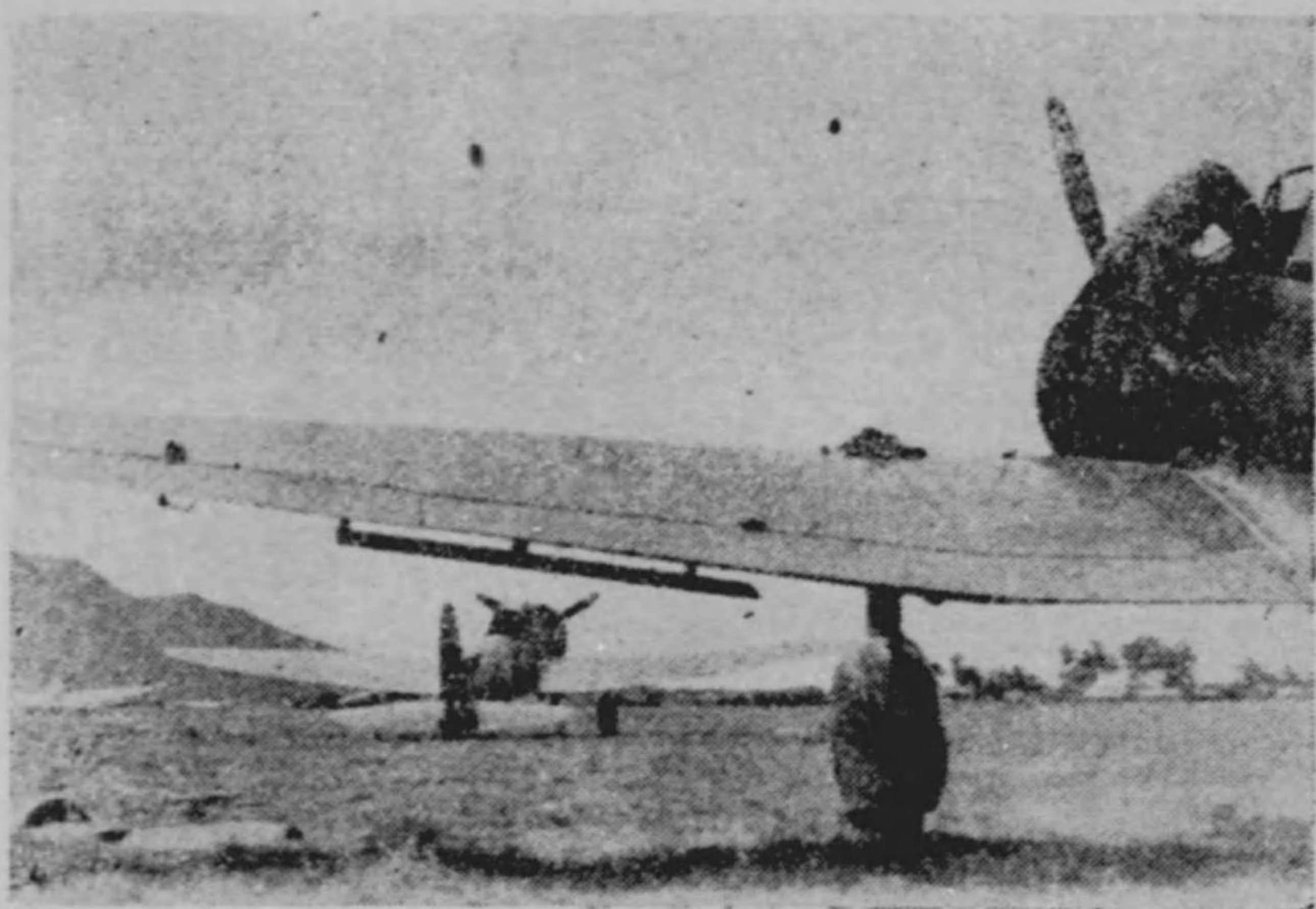
かういふ事情から、甲板がわりあひに弱いといふことが、航空母艦の一つの弱味です。次に、飛行機を出發させ、又は歸着させる時、一直線に走らなければならぬことが、又一つの

弱味です。一方向に、一定の速度で航走する艦ぐらゐ、敵にとつて攻撃し易いものはありません。空からの攻撃は自分の搭載機でふせけるとしても、潜水艦からの魚雷攻撃といふ苦手もあります。その魚雷を受ける舷側の装甲がまた、あまり十分なものではありません。それは、主として、すばらしい高速力を出すための大機関に、大きな重量をくはれる結果で、この點は巡洋戦艦の舷側装甲が、同噸數、又は同噸數以下の戦艦のそれより、すつとうすいものと同じです。

今後、航空母艦の建造法や、或は飛行機の發着法が、格段に進歩すれば別ですが、少くとも今までの航空母艦は、みな以上のやうな弱點をもつてゐました。つまり、相當な大艦でありながら、割にもろい軍艦だといふことになります。

現に、アメリカは、大東亞戦争がはじまつてから、我が海軍に計二六隻沈められ、イギリスも、樞軸國海軍によつて、六隻以上沈められてゐます。

もう一つ、航空母艦の弱味は、或る程度以上強力な飛行機をつめないといふことです。それは、飛行甲板によつて、滑走距離が制限され、そのため或る程度以上の大型、或は重い飛行機は活動させられないといふ結果になるからです。つまり、魚雷や爆弾でいへば、或る程度以上大きなもの、又は或る程度以上の數はつめないといふことになるわけです。一艦のつむ機數にも限りのあることはいふまでもありません。



陸上基地で整備中の我が海軍攻撃機。

三、基地航空隊の長所と短所

そこへくると、基地航空隊の方は、以上のやうな弱味がまるでありません。一發や二發の爆弾をくらつたつてびくともしない。あいた穴をうめるのもかんたん。何十發くらつても絶対にしづみません。航空母艦が沈めば、搭載機が全部なくなるのはむろんのこと、長い年月をかけて、高度の訓練をほどこした搭乗員も、まづ失ふものと思はなければなりません。陸上基地では、何から何まで、きれいになるといふことはありません。

ハワイ海戦では、我が海軍航空隊は、陸上基地にあつた機敵を、五〇〇臺近くやつつけましたが、飛行場も搭乗員もたすかつてゐます。

又、陸上基地の飛行場は、水上機や飛行艇の飛行場にあたる海上のやうなわけには行きませんが、それにしても、航空母艦の飛行甲板にくらべれば、何十倍もの広いものをつくれます。従つて、た



陸上基地で、戦ひの合間に、慰問品の玩具を楽しむ我が海鷲たち。

とひ航空母艦のやうに、自分の方から風上へ向かつて走らないにしても、艦上機よりはすつと大きくて重い飛行機を行動させることができず。なほ、この點に關しては、陸上攻撃機の項でものべておきました。

又、陸上基地は、面積を十分に廣くとられますから、空間の制限を絶對的に受けてゐる母艦のやうに、窮屈な設備をする必要がありません。燃料その他のものも、いくらでもたくはへられるし、人員も機數も、欲しいだけ收容することができ。つまり、それだけ大きな戦力を收容することができ

るわけです。

航空母艦を片つばしから沈められたアメリカが、その後になつて太平洋上の島々に、

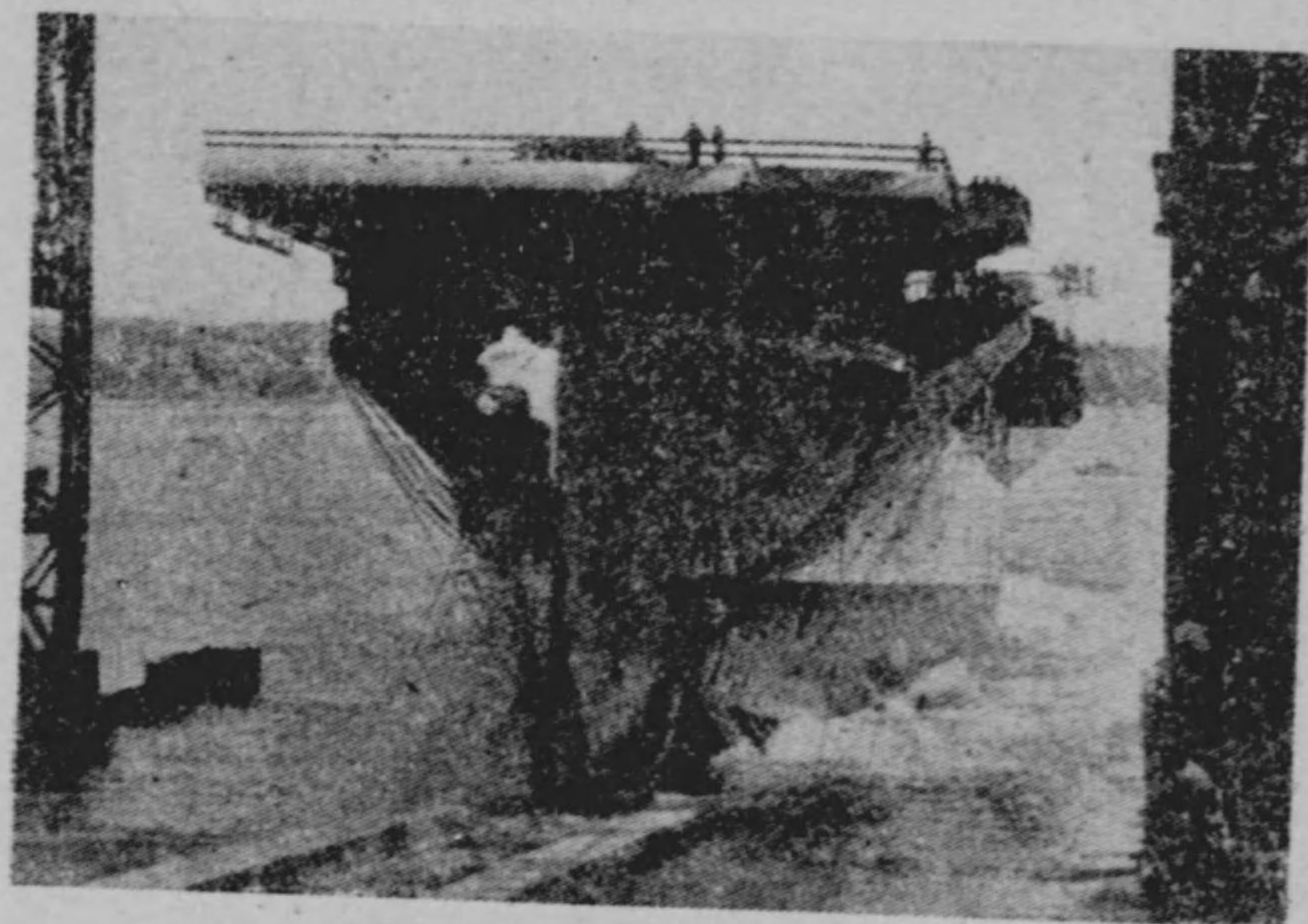
狂氣のやうになつて、基地航空隊を設けはじめたのも、基地航空隊といふものが、このやうな強味一つのをもつてゐることが、大きな理由になつてゐるのです。

こんなわけで、陸上基地は、「不沈母艦」などといはれますが、しかし、この「不沈」である母艦が、航空母艦に對して、絶對にかなはないところもあります。それは、「不沈」であるがために、身動きがとれないといふことです。従つて、そこを基地とする飛行機は、航続距離の半分以上へは出られないといふことになります。

それでさういふ海上へ、どんな獲物があらはれても、又は、その邊で、見す見す味方の艦隊がやられてゐることがわかつても、ただじつとひかへてゐるより他はないといふことになるのです。そこへくると航空母艦の方は、味方の艦隊と共に、どんな遠方へも出動されるし、自ら護衛艦をつれて、たとへばハワイ海戦や、南太平洋海戦のやうに、敵陣へ殺到するといふこともできるのです。

基地航空隊は又、敵に奇襲を加へることがむづかしい。何故かといふと、その基地は不動のものですから、その所在位置が必ず敵にわかつてしまふ。すると敵は——自分の方からその基地へ進撃してくる場合以外は、なるべく基地の飛行機の行動半徑内に、ふみこまないやうに注意するからで

す。この點、航空母艦の方は自由自在で、神出鬼没的に行動し、自分の欲するところへ、欲する時に



アメリカの新造航母レキシントン(2代).

攻撃を加へたり、退避したりすることができません。敵の立場からいふと、いつどこから突込んでくるかわからないといふ、まことに氣味のわるいのが、この艦隊航空隊なのです。

四、兩兵力を充實することが大切

そこで、廣大な海洋上空を制壓するには、一方では海上の要所要所の島嶼などに基地航空隊をおいて、全海洋をその飛行機の行動半徑内におさへこむことが、まづ第一に必要であり、その一方では、できるだけ多数、かつ優秀な母艦をそなへ、基地航空隊の行動できる範圍外の海洋上の、必要なところへ必要な時、直ちにその航空兵力を出動させられるやうにしなければならぬのです。

大東亞戦争がはじまつてから、敵の航空母艦が、あまりあつけなくやられるので、アメリカは自分の方から、基地航空隊にかぎるといひ出しました。又、その通りに増強してゐることも、前記の

やうに事實です。

しかし、アメリカは、その一方では、或は新造、或は商船改装、或は建造中の他艦種の變更等によつて、急速に航空母艦陣を充實させつつあることも事實です。敵もまた、海洋航空兵力のそなへ方を知つてゐるのです。もし、その一面の宣傳を信じて、こちらでも航空母艦は不用だなどと考へるとすれば、それこそ敵の思ふ壺にはまつたものといはなければなりません。果せるかな、敵アメリカは、基地航空兵力によるソロモン諸島の、飛石式地上作戦が停頓しがちになると、今年秋あたりから、南鳥島やギルバート島に、艦上機による空襲を加へ、更に十一月以後になると、すでにお話したやうに、航空母艦をもつて、猛烈な反撃に出てくるやうになつたのでした。

第八章 海軍航空隊の特殊性

一、海國の敵を討つ道

「海からくる敵は海で防げ」——これは、東郷元帥の残された数々の教訓のうちで、最も尊いものの一つです。

今更いふまでもなく、我が日本は、模範的な海國です。かういふ海國の敵は、海上の艦隊にしても、空中の空軍にしても、必ず海をわたつて來ます。その敵を海洋上でやつつけなければ、海國である我が日本の生命は危くなる。そこで「海からくる敵は海で防げ」といふことになるのです。

よく防ぐためには、またよく攻めなければなりません。敵の都合のよい時、都合のよい態勢で攻めてくるのを、ぼかんとして待つて防戦するのは、決してほんたうの防ぎ方ではありません。時と所をえらび、こちらにとつて最も有利な態勢で攻めてこそ、はじめて海のももりが完全に果せるのです。いはゆる「攻撃は最良の防禦」です。

攻撃にせよ、防禦にせよ、我が海軍の戰場は、廣大無邊の海洋上にあることには、變りがありま

せん。従つて、我が海軍航空隊の雄飛力戦すべきところも、當然海洋上空であります。

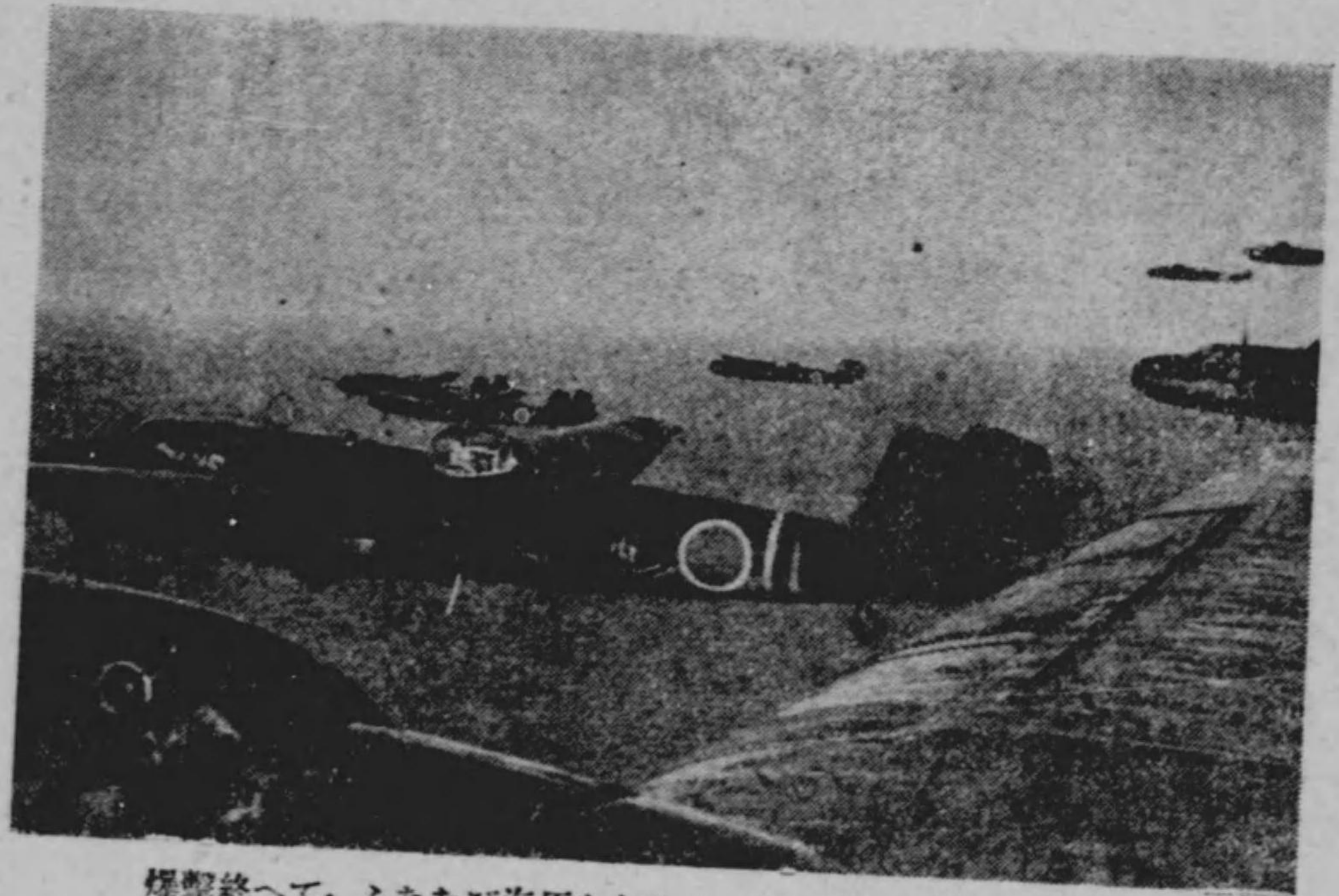
もちろん、支那事變で見られるやうに、我が海軍航空隊は、大陸の空でも、陸軍航空隊と全く同じやうに活躍しましたが、あれは決して本來の任務ではなく、大東亞戦争に入つてからの、海洋を舞臺としての善戰敢闘こそ、海軍航空隊の眞面目を發揮してゐるものといふべきです。

海洋は、陸とは全くちがつた性格をもつてゐます。従つて、その海洋を舞臺として活躍しなければならぬ海軍航空隊は、陸上のそれには全くない、いろいろな條件を克服する必要にせまられます。

二、海洋航空の困難と危険

海洋の上には、陸上とちがつて、目標といふものが全然ありません。陸上の飛行ならば、山とか、谷とか、町とか、道路とかいふものが、次々にあらはれて目じるしになります。その上空を飛ぶものは、さういふ目じるしを、機上の地圖にてらし合はせて、自分の進むべき路を、正しくたどることができます。同じ空を何度かとぶうちには、さういふ地形をすつかり覚えこみ、地圖も羅針儀もなしに飛べるやうにもなませう。

しかし、海洋の上には、今もいつたやうに、全然目じるしになるものがありません。それで、何



爆撃終へて、ふたたび海原をわたる。(我が陸上攻撃機の歸隊。)

度同じ海洋の上を飛んでも、その條件は最初に飛ぶ時と同様で、そのたびごとに同じやうな苦心をくりかへすことになりす。

海軍機も、もちろん地圖を使ひます。しかし、それは、他の方法によつて判定した自機の位置なり、進路なりを記入して、その後の行動に役立てるものであつて、地圖と下界とを見くらべて、現在位置をたしかめたりする、陸上飛行の場合とは反對になります。

すなはち、海軍機の搭乗員は、せまい機体内にあつて、間斷なしに風の速さや向きを計りつづけて、自機の實際の速度や横に流される度合(遍流)を算出し、羅針儀や天體觀測によつて、自機の現在位置を判定しつづければならぬのです。

陸上の飛行でなら、正しい、或は豫定の航路から

それであることは、少し注意してゐれば、地形の相違によつてすぐ氣がつく。しかし、海洋の上では、どんなに見當ちがひの航路をすすんだところで、海の様子には何の變化もないのです。ある地點で、わづか一度それだけでも、先に行つては何百軒もはなれたところへ出てしまふ。さうなつてから氣がついたのでは、戦争の役に立ちません。

海洋上を戦場とする海軍航空隊は、まづ、目じるしなしでいかに路をまちがへずにとぶか、といふ困難なわざを、完全にこなさなければならぬのです。盲目飛行、或は計器飛行といつて、地形を全然見ないで、計器ばかりで飛ぶのが、いちばんむづかしいことになつてゐますが、海洋の飛行は、見たところで何にも變らない波の上ばかりをとぶのですから、いつもこの計器飛行ばかりやつてゐるやうなものです。さうして、故障でも起きた時は、飛行艇などは別として、陸上のやうに不時着もきかず、落下傘も用をなさず、まづ助かる見込みはないといふことになります。

三、母艦發著の困難と危険

海洋航空は、單に飛行するといふ一つの事だけでも、こんなに特殊なものをもつてゐますが、航空母艦へ發着するといふことが、またなみなみならぬ技術を必要とします。

これはすでに、航空母艦のところで、くはしくお話しましたが、もう一度まとめていつて見ます

と、ふつうの母艦の飛行甲板は、長さ二〇〇米ぐらゐ、幅は二、三〇米しかない。しかも母艦は、その限られた距離内の滑走で、艦上機を完全に浮揚させ、或は安全に著艦させるのに必要な風速を得るために高速力で走るので。

そこで、艦上機の搭乗者は、少くとも二つの困難を征服しなければなりません。一つは、飛行場のせまさにうちかつこと、他の一つは、その飛行場の動搖にうちかつことです。もちろん、前にもいつたやうに、せまい甲板にも發着出来るやうに、また動搖もなるべく少いやうに工夫されてはゐますが、いづれにしてもそれは、陸上の飛行場を使用する場合の安全と容易さには、くらべものになりません。おまけに、戦争の場合は、どうしても手荒い活動をやらなければなりませんから、このちがひは一層大きなものになります。前にもいひましたが、この母艦の發着だけで、海軍航空隊は、どれだけ犠牲者を出したかわかりません。

これも前にのべたことですが、海軍には陸上を基地とする航空隊もあつて、全部が全部航空母艦にのりこんでゐるわけではありません。しかし、その搭乗者は、原則として、いつでも航空母艦の勤務にたへられるだけの技術を獲得しておく必要があるのです。

陸上の場合では、飛行場から出發するのに、特別の配慮は不必要です。歸著する時は、飛行場が見えればもう安心です。ところが、航空母艦では、出發する時もさうですが、歸著する時は、更に

大きな苦勞をしなければなりません。さうして、その出發と歸著の間では、さつさいつたやうな、むづかしい飛行をつづけなければなりません。

四、敵艦攻撃の困難と危険

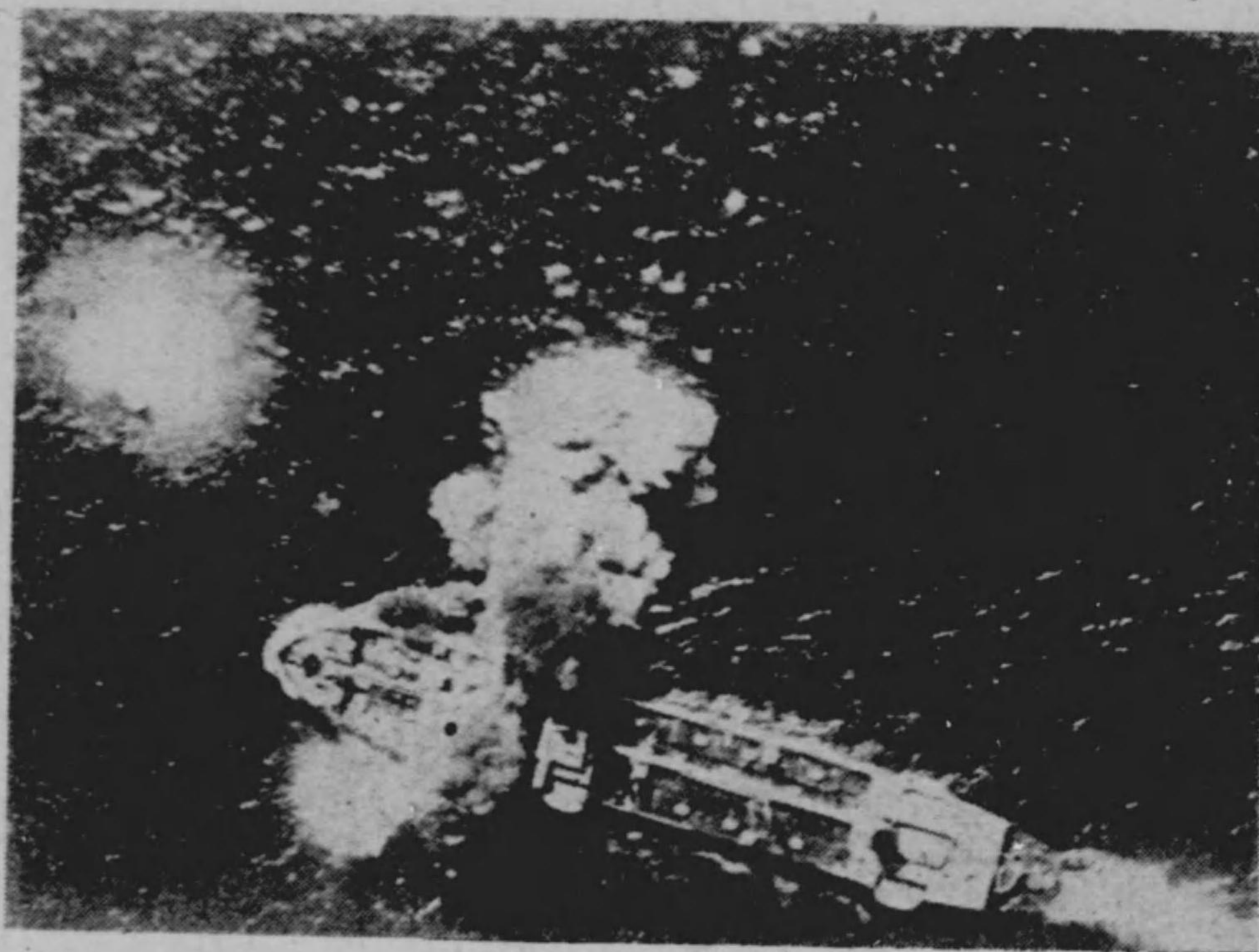
以上の二つの困難な條件を突破した上で、海軍航空隊は、更に特別にむづかしい攻撃を行つて、戦果を収めなければならぬのです。

諸君も御承知の通り、海軍機は、その必要があれば、陸上の敵兵や施設をも攻撃します。しかし、その本来の任務は、敵の空中勢力と、敵の海上艦船勢力を撃滅することにあります。

この時、敵の空軍に對する攻撃は、陸上におけるそれと變りがありませんが、海上艦艇に對するそれは、大いに様子がちがひます。

海上の艦艇は、陸上の目標のやうに、じつとしてゐません。常に數十節の時速で航走してゐる。狙はれたとなれば、いつそ高速力で逃げ廻る。これに必中彈をあたへることが、陸上の場合にくらべて、いかにむづかしいかは、讀者にも容易に想像されると思ひます。

しかも、艦艇の對空兵器といふものは、非常に強力です。大艦はいづれも、數十門の高角銃砲をそなへてゐるのがふつうですし、例のプリンス・オヴ・ウェールズなどは、實に一二〇門の高角



我が海鷲、敵輸送船を撃つ。

機銃をもち、一分間の送弾量は六萬發に上つたといはれます。

地上の對空防備が、いかに完備してゐるとはいつても、それは、數百平方呎もの都會などに、數百門、數千門といふのであつて、決して一隻の軍艦と同じくらの面積のうちに、その軍艦だけの割合で、高角砲がおかれてあるわけではないのです。

海軍機は、かういふ對空火器のふきあげる彈幕の中へ突込んで行つて攻撃するのです。高速で移動する艦の急所へ命中させるには、否でも應でもさうせざるを得ないのです。すなはち、この場合は、攻撃が技術的にむづかしいのに比例して、生命の危険率も増大するといふことなるわけです。

なほ、もう一つ、海洋の天候の激變といふことも、大きな問題です。激變しやすいところへもつてきて、海洋の上には、それを觀測し、報知するものがないから、それによる危険率は、一層増してくるようになります。海軍機の搭乗者たちは、たとへばスコールとか、濃霧とかいふものに出あつても、それをきりぬけて使命を果せるだけの技術をねつておくことが、ぜひとも必要なのです。

五、要求される高性能

以上は、主として搭乗者の技術の上に作用する、海軍航空の特殊性ですが、飛行機そのものの性能にも、特別に要求されるものがあります。航続時間と速度の問題などもその好例です。

海上の艦艇は、陸上の兵力とちがひ、すべて高速で行動します。同時に、その行動する場所が、どちらへ向かつても障碍のない、しかも無邊際むへんがいの海洋です。それで、理窟からいへば、敵艦艇といふものは、いつ、どの方角から現れるか、又いつどの方角へ去つたか見當がつかないといふことになります。陸上ではこれが、すべて道路といふものに制限されるから、推測することも容易です。

かういふ海洋上の敵艦船を捕捉するには、できるだけ航続力を大きくしておかなければならない。すなはち、航続時間と、速力とをかね合はせて、航続力を大きくする必要に迫られるのです。

たとへば、夜間の海上戦で、我が艦艇が敵艦をうちもらしたとする。それを航空部隊が、夜明か

ら追撃するとする。その時は、すでに何時間かの時がたつてゐるから、敵艦はすつと遠くまで逃げ
てしまふ。しかも、その方角はよくわからない。——かういふ敵艦をつかまへるには、つまり、あ
つちこつち探しながら捕捉するには、なるべくすばやくとんで行かなければならない。又、かた
んに見つからない場合、或は長追ひしなければならぬ場合に備へて、長時間とべるやうになつて
ゐなければならぬ。

ところが、飛行機では、航続時間と速力とは、たがひに相容れない性質のもので、戦闘機は速力
が大きい代りに航続時間が少く、爆撃機や攻撃機は、航続時間が多い代りに、速力が劣るといふ
うになるのです。この兩方を、各機種を通じて、それぞれ大きくすることが、海軍機にはぜひとも
必要なのです。

六、特殊訓練の必要

このやうに、海洋上空を主戦場とする航空部隊の活動は、陸上空を主戦場とする航空部隊とは、
大分性格を異にするものです。さうしてこれは、海洋といふものの特殊性からもたらされる、當然
の結果なのであります。

かういふわけから、我が國の航空部隊は、海軍と陸軍とに分けて組織され、それぞれの活動のに



水上戦闘機隊の基地。

も適した方法をもつて、その搭乗員に教育・訓
練をほどこしてゐます。我が敵國であるアメリ
カやイギリスでも、その航空部隊は、海軍と陸
軍とに分れてゐます。

しかし、盟邦のドイツでは、その航空部隊を
海軍、陸軍に對する空軍として獨立させてゐま
す。さうして、陸上作戦と共に、海上作戦にも
従ふのですから、その空軍には、ふつうの陸軍
機は勿論のこと、水上機も、飛行艇も、同列に
使用されてゐるわけです。

航空部隊が、海陸に分れてゐるにせよ、空軍
として獨立してゐるにせよ、その使用機を多量
に製作するには、命令系統が一本立であるのに
越したことはありません。今年の秋、我が國に
は、軍需省が新たに設けられ、海陸軍航空關係

の權威者が、それぞれの位置について活動をはじめました。この軍需省の役割のうちの、最も大きいものの一つは、海陸軍の飛行機を増産することであり、そのために、資材の入手や配給などの方法を統一しようといふのであります。

しかし、前にいひましたやうに、作戦や技術の方では、海軍と陸軍では大變違つてゐますから、搭乗員をはじめ、人員の養成はやはり別別に行はれてゐるのであります。

要するに、海洋航空といふものは、非常に特殊な性格を持つてゐるものですから、それを本務とする海軍航空部隊を、ふだんから出来るだけ充實させ、特別の訓練を重ねておかなければ、海國としての航空兵力を完全なものとする事は出来ない、といふことにあるのであります。

第九章 戦ふ海軍航空隊

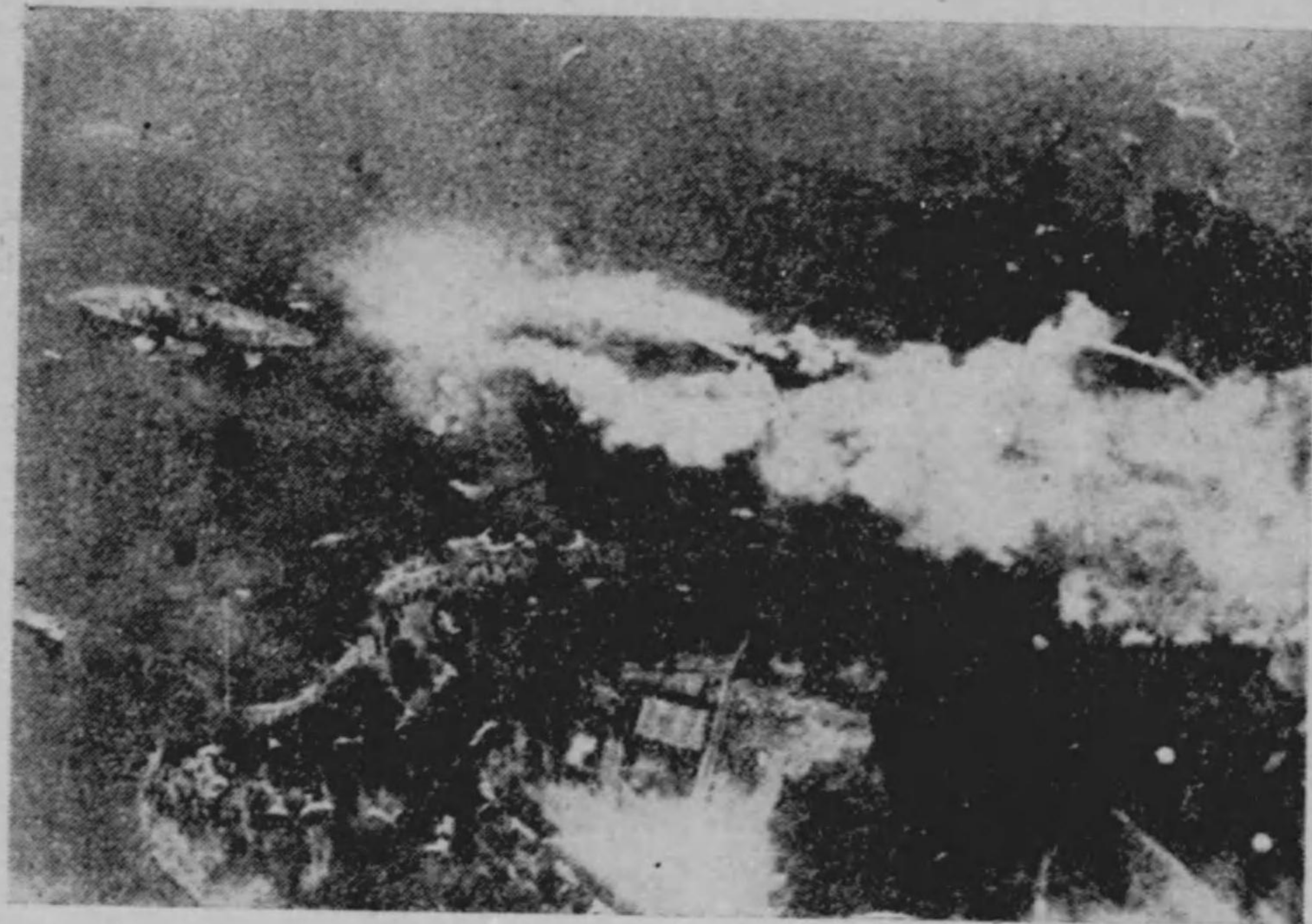
さて、以上にのべたやうな歴史を持ち、以上にのべたやうな意義と使命を有し、以上にのべたやうな訓練を重ねた我が海軍航空隊が、大東亞戦争で、實際にどのやうに戦つたか、又は今日もたかひつつあるかといふことを、一通りお話しして見ませう。

一、ハワイ海戦

この海戦については、今までするぶんたくさんの話が語られてゐますが、なほ二つ三つ、話題を取上げて見たいと思ひます。

大型爆弾で、敵艦をやつつけたある大尉の話ですが、彼は、第一回目の爆撃をやらうとした時、強風のため流されて、うまく爆撃針路に入れなかつたので、敵艦が逆さに降る雨のやうに吹きあげてくる中で、悠々とやり直しをしてゐます。それについて彼は、次のやうに語つてゐます。

「爆弾投下を中止して、眞珠灣の南に出してしまひました。そこから右に廻ると、敵艦は来るが、眞珠灣の上へすぐ出られ、かつ、爆撃針路に入りやすい。左に廻ると、雲が一ぱいあつて、敵艦は来ないが爆撃はしにくい。ちよつと迷つたが、断然右に廻つて爆撃した。……命中した時は、何ともい



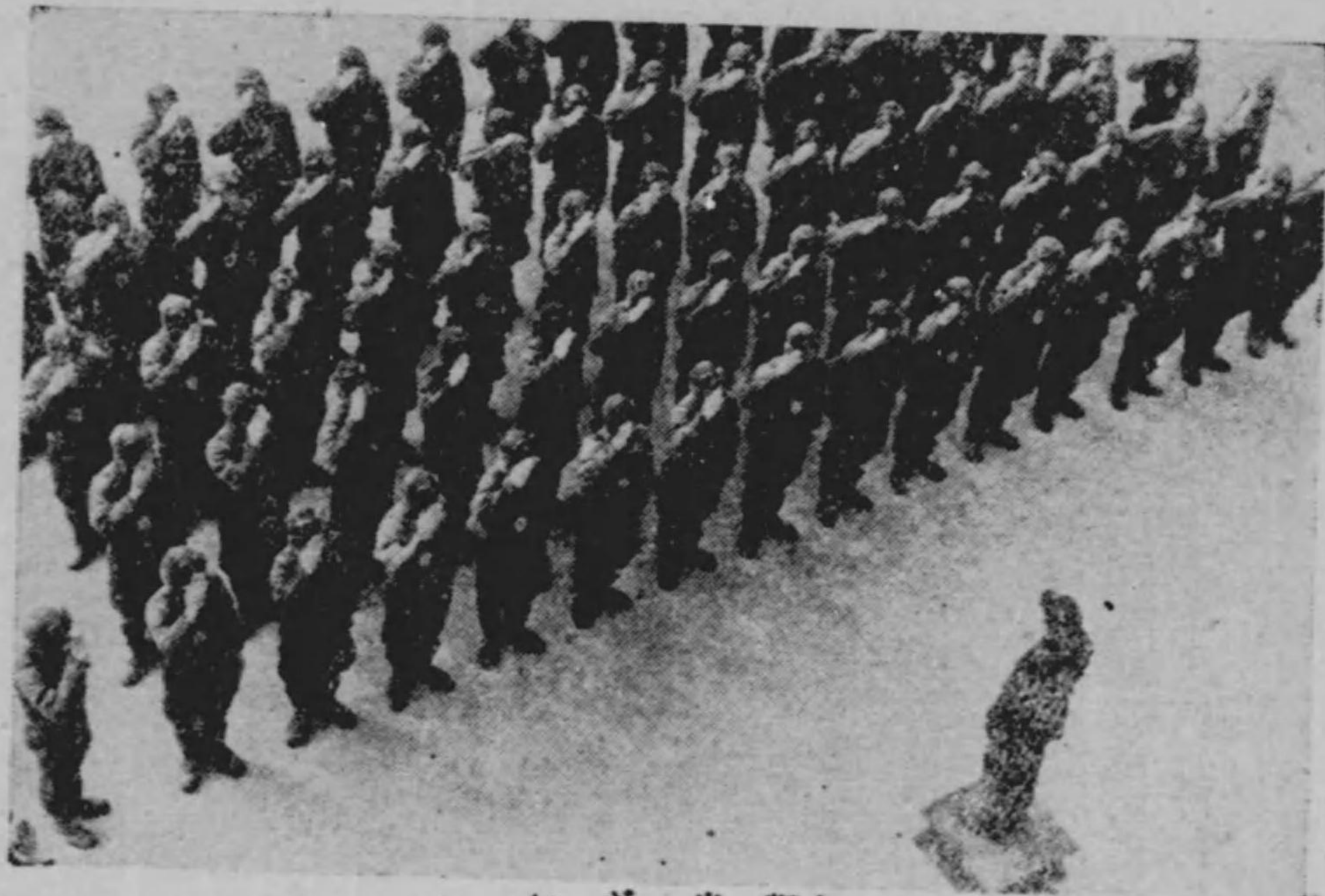
ハワイの真珠湾軍港で炎上する敵艦艦群。

を教へてから、再び敵上空へ単機で引返して行つて自爆したのでした。

同中佐は、ふだんから、生きるか死ぬかわからない時は、いさぎよく死をえらべと、部下に教へてゐたといふことです。

我が方の「自爆」といふことを、敵側はまぐれあたりであるかのやうに解してゐますが、事實は決してさうではなく、どうせ死ぬのなら、少しでも敵に斬りつけてといふ信念の下に、計画的に敢行するものであることは、この中佐の例でもよくわかります。又、部下の道案内に立つたことや、日頃の死生訓などは、我が日本武士にのみ見ることの出来る、部下に對する情は親子の如く、死を見ることが歸するが如き武士道精神のあらはれです。

また、はじめの或る大尉の話は、己の生死など



いざ、出撃!

へませんでした。私の後にゐた照準員（爆撃手）は、照準器を抱いて泣いてゐました。操縦手までが、両手をあげて萬歳萬歳とやるので、機がぐらぐらしました。……ヒツカム飛行場の、あのきれいに並んだ敵機は、先發の連中がやつつけてしまつてゐたのですが、私たちは、爆撃を終つてから、あの煙をくぐり、格納庫を一つ一つのぞいて、燃えのこつてゐる奴を、片はしから銃撃で片づけました、云々。」この海戦では、我が方も二九の自爆機を出しましたが、その中には、雷撃機部隊長の某中佐の搭乗機もあります。同部隊は、雷撃を終へてから、カネオエ飛行場の敵機約四〇を銃撃でやつつけ、歸路につかうとしたのですが、その時、部隊長機は、すでに燃料タンクを射たれてゐました。しかし、部隊長機は、部下をあつめて先頭に立ち、海上へ出て母艦への針路

は問題にせず、ただ、討つて討つて討ちまくらすにはおかぬ、我が海鷲の攻撃精神を、最も明らかに示す一例であります。

二、マレー沖海戦

シンガポールの敵艦隊の出動したことが、哨戒中の味方潜水艦から報告されたのは、十二月九日（昭和十六年）の夕方、日没一時間ぐらゐ前でした。それから、すぐさま攻撃部隊が、陸上基地から飛出して行つたのですが、つひに敵発見に到らず、引上げることになつたのですが、全部の飛行機が基地にかへりついたのは、夜中の十二時ごろでした。

ところが、再び味方潜水艦から、敵発見の無電の入つたのが、十日の午前三時頃です。それで、この時の攻撃部隊員は、ほとんど眠つてゐないのです。

十日の未明から、索敵機が出発しました。しかし、その索敵機からの報告を待つてから基地を出発すると、又もや敵をとり逃がすおそれがある。そこで、索敵機が出た少し後から、攻撃部隊も出動しました。索敵機からの報告は、進撃の途中で受けようといふのです。

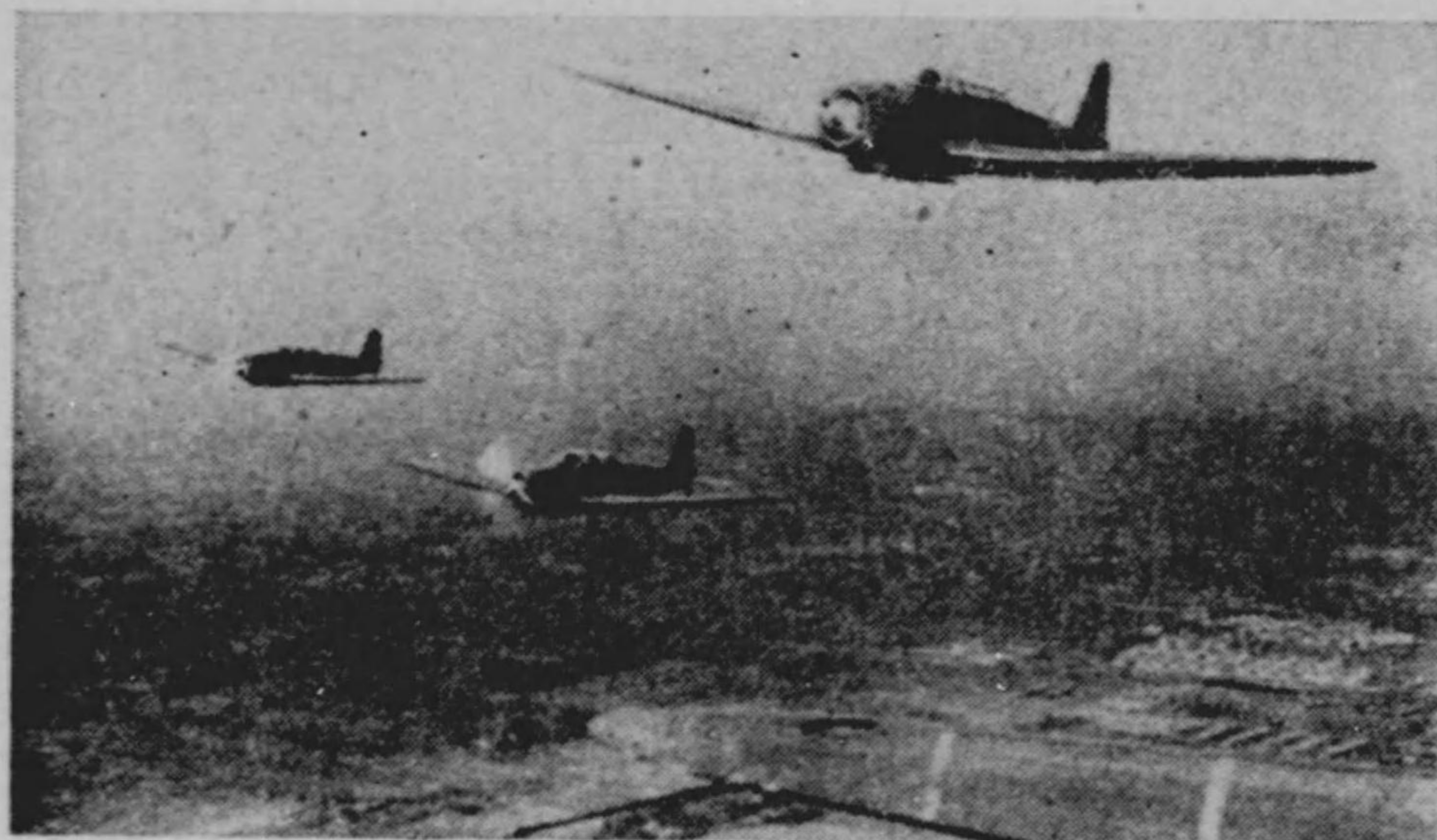
その第一報が入つたのは、十一時四十五分で、第二報で艦列や艦種などを知らせて来たのが十二時五分、これによつて、第一次の雷撃隊が、はじめて敵にくひついたので午後一時八分でした。

それから、皆さんもすでに御承知のやうな戦果があげられたわけですが、私はここで、この海戦で我が海鷲たちが、前日来、どんながんばりをつづけたか、そのがんばりの猛烈さをよく知つていただきたいと思ひます。当日も、早朝出發して、攻撃開始は午後一時過ぎなのです。よくもあきらめずに、がんばり通したものです。しかも、来ただけの距離は、又引返さなければならぬのです。（燃料が切れて、途中で不時著したのも、何機もありました。）ここに、我が海鷲の不死身（ふしびみ）のがんばり、不退轉（ふたいてん）の戦意を、まざまざと見ることが出来ませう。

この海戦で討取つた敵艦の一つは、プリンス・オヴ・ウェールズで、例の「不沈戦艦」といふ奴でした。敵が「不沈」と誇つた理由の一つは、對空火器の完備（くわんびひ）であり、前記のやうに、實に計一二〇門の高角機銃をそなへ、一分間に六萬發の送弾量があるといはれてゐました。

この海戦に参加した一大尉は、「ふと海面を見ると、ちやうど砂利（さざり）をつかんで池の中へ投げたやうに、弾片が小さな水煙をあげてゐた。その中へ、ぐつと機首を下げてつつこんで行つた。」と語つてゐます。

同大尉機は、敵弾で損傷し、速力がひどく落ちました。それを部下機がぐるりととりかこみ、びつたりと編隊を組んで、どこまでもついて來ます。いくら歸れといつてもききません。そのうちの一機に、分隊長機は少しおくれるが、大丈夫歸るからと基地へ報告しろと命令したら、それだけは



編隊で出動する我が艦上攻撃機、

先に行きましたが、残りは全部最後までくつついてゐたさうです。ハワイ海戦の某中佐の例のやうに、これもまた、何といふ崇高壯美な上下の愛情の發露でせう。

三、フィリピン方面

フィリピンへの攻撃は、主として敵の飛行基地へ向けられました。十二月八日の第一撃では、撃墜二五、撃破七一の戦果をあげましたが、この中には、敵が日本空襲用に用意してゐた大型機も三三機含まれてゐます。

九日には、ニコルス飛行場を襲つて、格納庫を全部破壊し、次の十日には、マニラ方面を襲つて、撃墜四五機、撃破三六機の他、驅逐艦、潜水艦、特務艦各一隻撃沈といふ戦果をあげました。

これで、所在の敵航空兵力は一掃され、その結果、陸軍部隊の上陸作戦は、實に見事に成功したのでした。そ

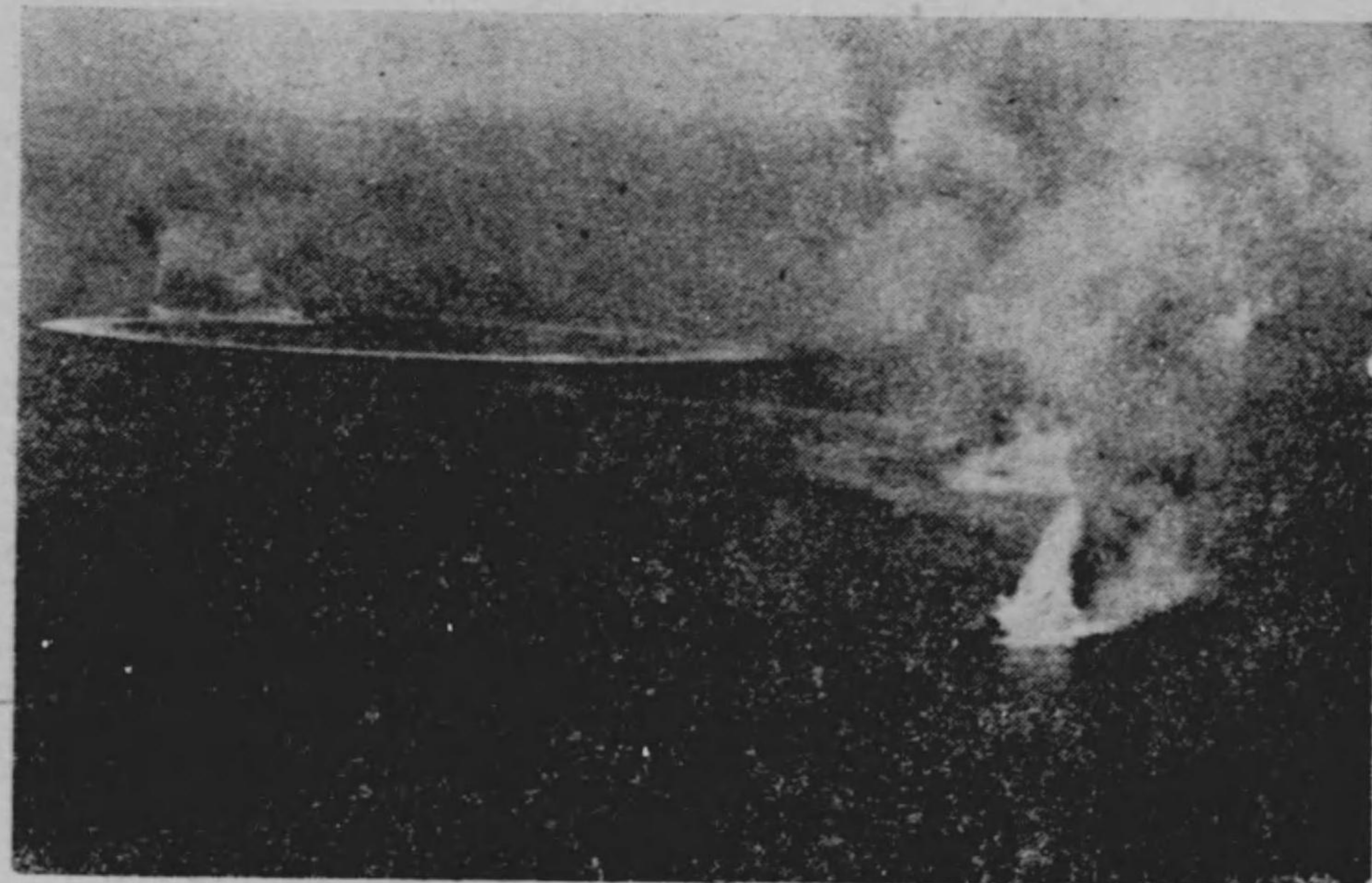
れに呼應して、我が海鷲の基地も、その陸上に進出させられたことはいふまでもありません。

一方、香港、シンガポールに對しても、陥落の瞬間まで猛攻をくりかへしましたが、この間において、二月四日（昭和十七年）には、アメリカ、オランダの聯合艦隊をジャワ沖にとらへ、敵巡洋艦二隻撃沈、三隻大破の戦果をあげ、同十九日には、長驅してオーストラリアのポート・ダーウィンに、第一回の大空襲を加へ、所在の全敵機二六を撃墜破し、驅逐艦二、驅潜艇一、輸送船九、特設巡洋艦一を撃沈、他に格納庫、兵舎の全部を爆破してゐます。このポート・ダーウィン攻撃は、その後間もなく開始された、ニューギニアのポート・モレスビー攻撃と共に、今日まで絶えずくりかへされ、次々に増強される敵兵力をたたきつづけてゐます。

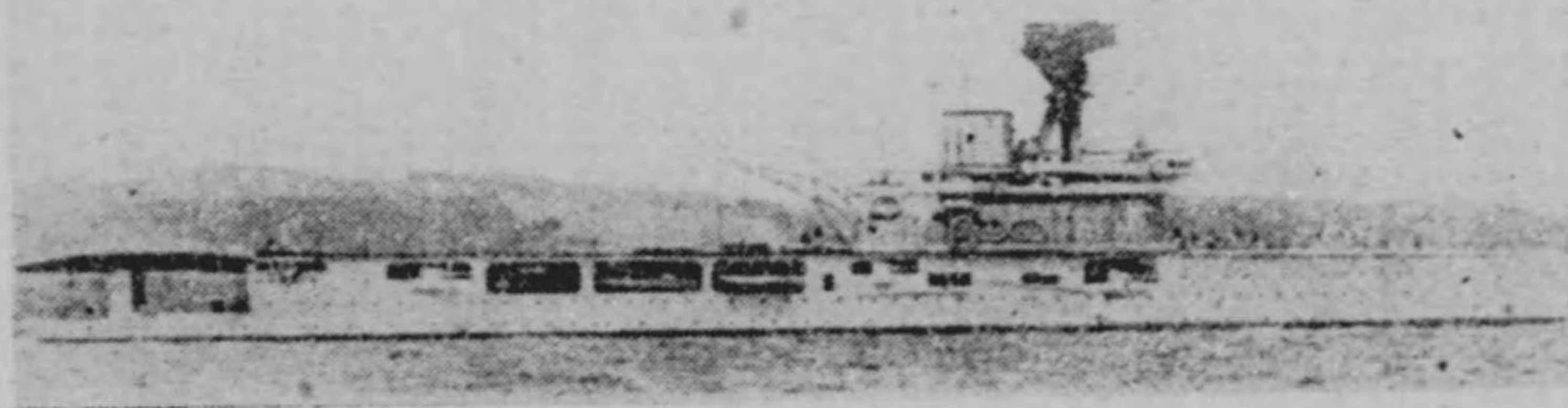
四、印度洋方面

次に四月五日（昭和十七年）より十三日まで、我が海軍航空部隊は、艦艇部隊に協力して印度洋方面に出撃し、イギリス航空母艦ハーミス、甲巡ロンドン型、コンウォール型、驅逐艦各一隻撃沈、飛行機撃墜破一二〇機、船舶撃沈三五隻、大破二五隻といふ大量の戦果をあげてゐます。

これは洋上ばかりあげられたものではなく、コロンボや、ツリンコマリにまで突込んで行つた結果ですが、ハーミスを撃沈した部隊の隊長の話によりますと、風をくらつて逃げ出したハーミス



インド洋海戦、右下はイギリス航空母艦ハーミスに爆弾が命中した瞬間、左方は燃えながら逃げ廻る直衛の駆逐艦。



インド洋で撃沈されたハーミス。

をやつと見つけ、それつと襲ひかかつたら、彈著がいかにも正確で、僅か〇機の攻撃で片づいてしまった。そこで、他の機は爆弾をもてあまし、せつかくもつて来たのだから、このままかへるのはもつたいない、ツリンコマリをやつつけろとばかり、その部隊としては豫定外の攻撃までやつて引上げたのださうです。

この印度洋作戦では、次のやうな實話があります。敵の大型哨戒艇が、コロン

ポ攻撃から引上げて来た部隊に、かまり、たちまち火を吐きました。すると、その艇はてんで應戦せず、そのまま著水してしまひました。その乗員は全部捕虜になりましたが、はじめに脱出したのは少佐一人、大尉一人で、下士官以下数名は、火が廻らないやうに（座席内から發火）、その火と共に閉ぢこめて、外から鍵をかけてしまつたのだ、といふのです。

これを、前にあげた我が崇高な主従愛とくらべて見る時、今更ながら、我が武士道の尊さに打たれ、我が軍の精強さの、世界無比なる所以もよく知られるではありませんか。

五、珊瑚海海戦

この珊瑚海海戦は、我が方が基地航空隊を主力として敵艦隊を撃滅した海戦で、その戦果はマレ沖海戦にも劣らないものでありました。

すなはち、その戦果は、アメリカ空母サラトガ型、同ヨークタウン型、アメリカ戦艦カリフォルニア型、同甲巡ポートルランド型、驅逐艦各一隻撃沈、アメリカ戦艦ノース・カロライナ型、同甲巡ルイスビル型、イギリス戦艦ウォースパイト型各一隻撃破、撃墜九八機といふすばらしいものでした。

この海戦に際して、早くから敵艦隊を發見し、それに觸接してゐた一偵察機が、いかに崇高な犠



珊瑚海海戦——敵艦隊は、全速で逃避せんとする。
上から三番目が航母サラトガ、他は護衛艦の航跡。

性的行動をとつたかは、前に偵察機の項でお話しました。攻撃部隊の隊長も、「この勇敢な觸接機の適切な行動があつて、はじめてあの輝かしい戦果があつたのだ。」と、聲を大きくしてその勳功をたたへてゐます。

次に、これは、直接空中に出動したのではありませんが、ぜひともある兵曹のことをお話ししなければなりません。

同兵曹は、この海戦で沈没した、小型航母に乗組んでゐたのです。海中に漂流してゐた乗組員のうちの數人が、流れて來た木片を禰でしぼり合はせ、一隻の筏をつくり、まづ負傷者を真中にのせ、自分たちは、代る代るその筏に上つて休んだり、又それにとりついて浮いてゐたり、といふやり方をくりかへしてゐました。或る兵曹といふのは、そのうちの一

人だつたのです。

そこへ、一枚の紙が流れて來ました。泳いでゐるうちの一人が、何氣なく手にとつて見ると、それは尺八の譜だつたのです。

「おや、尺八の譜だ。」と、その兵はいひました。それを聞いて、

「何、尺八の譜だ？　〇〇兵曹のおやないか。」と、他の一人がいひました。その兵曹は、ふだんから尺八が得意で、艦内にある時も、ひまな時はよく吹いてゐたのを知つてゐたのです。その譜を渡された兵曹は、ばつと顔を輝かせて、

「さうだ、これは俺のだよ。」と叫んだのです。

何といふ偶然でせう。皆は、何となくうれしくなり、子供のやうにわつと叫びました。さうして誰からともなく、「〇〇兵曹、一曲やれ、やれ。」といふ聲があつたのです。兵曹は、てれくささうに笑ひながら、「それでは一つやりますかな。」といつて、筏の上にきちんと坐り直しました。さうして、しづかに目をつぶり、指を構へ、ツローレットと吹きはじめたのです。

といつて、もちろん尺八はあらう筈ありません。口で節を出し、その通り指を動かし、ただ、型だけをやるのです。漣がきて筏がゆれると、兵曹は、その架空の尺八から手をはなして筏につつばつて體をささへ、又元へもどしてはしづかに吹きつけます。筏の上のものも、海中のものも、

じつと息をのんで、その尺八にさき入るのでした。

これが、南海の真只中のことなのです。激烈凄愴な大海戦の直後のことなのです。そして、生命の安否は絶體にわからない、小さな筏の上のことなのです。

これはもはや、度胸がいいとか、ゆとりがあるとかいふやうなところを通り越した、それこそ眞に一身の生命を、大君へ、祖國へ捧げ切つた、眼前には死も生もない境地へ入つた人間にのみ見られる、美しくもおごそかな世界でなくて何でせう。「朝日に匂ふ山櫻花」と故人のよんだ大和魂、我が日本のもののみにのみ咲出る、尊く、美しく、そして強い大和魂のあらはれでなくて何でせう。我が海鷲は何故強いのか。この質問に對する答の一つとして、それは、このやうな大和魂を持つた兵員によつて満されてゐるからだ、といふことをあげたいと思ひます。

なほ、この漂流者たちは、後で全部すくはれました。

六、ミッドウエー強襲

ミッドウエーは、ハワイ・ウニキ・グアム等と共に、アメリカ本國と、東洋・南洋方面とを連絡する軍事基地で、我が海軍は、開戦當日、すでに第一次の攻撃を加へてゐますが、六月五日には、ここを基地として行動をつづけてゐる敵兵力に、思ひ切り痛打をあびせるために、敵の基地航空隊

の威力圏内にふみこんで、第二次の空襲を強行したのです。

その戦果は、敵航空母艦エンタープライズ型、同ホーネット型、甲巡サンフランシスコ型、潜水艦各一隻撃沈、約一五〇機撃墜といふ輝かしいものになつてゐますが、敵は母艦搭載機の他に、基地の航空兵力をも出動させることが出来た結果、我が方でも航空母艦一隻沈没、同一隻及び巡洋艦一隻大破、三五機未歸還といふ大きな犠牲を出してゐます。

この時沈没した航空母艦〇〇の艦長は加來止男少將で、又同艦には山口多聞中將が、航空戦隊司令官として乗組んでゐました。

この海戦で同艦は、延機數一一五の敵機の襲撃を受け、魚雷二六、爆彈七〇を、艦の巧妙な操作で回避しましたが、遂に數發の命中弾を受け、大火災を起すに至りました。

消火不可能とわかると、艦長はまづ御眞影を護衛の驅逐艦にお移し申し、全員を甲板に集めて、今日までの敢闘を謝した後、退去命令を出しました。それから山口司令官の發聲で、天皇陛下の



山口中將



加來少尉

萬歳を奉唱、次いで軍艦旗（この際は戦闘中だから、橋上にあつて戦闘機）の降下式をおごそかに行ひました。

さて、一同退艦となりましたが、山口、加來兩提督は、陛下の艦と生命を共にする覚悟を決め、部下の言葉にもかかはらず、退艦を肯んじません。さうして、さらば我も、我もと上官に従はうとする將兵に對しては、嚴として退艦命令をくりかへすのでした。

今はやむなく、一同擧手の禮をしながら、驅逐艦へ移乗しました。それに答へながら、兩提督は元の艦橋へもどります。次第に離れて行く驅逐艦からは、もえさかる眞紅の火炎を背にして、ゆるやかに手をふる兩提督の姿が、黒く、くつきりと見えておりましたが、やがて一大爆音が起り、と共に、兩提督はその母艦と共に、東太平洋の海底に消え去つたのです。

山口中將の名の「多聞」は、楠木正成の幼名の多聞丸によつたもので、年少より誠忠一途の教育を受け、自らも出征に際しては、皇國のために死することこそ最上の光榮であると、その愛兒に書さ

残され、加來少將もまた常日頃、汝等の父のなすことを範とせよとさとし、自ら海軍軍人として、また日本國民としての典型たらんことを心掛けてゐられたのです。

死所をえらぶことは、古來の我が武士道が、最もきびしく教へたものです。前に記したハワイ海戦の某中佐も、珊瑚海海戦の偵察員も、みなその死所を見事に擱んでゐます。この山口、加來兩提督もまた、武士道の國日本の軍人ならずしては、絶対にあり得ない最期をとけました。

かういふ立派な軍人を失ふことは、我が海軍にとつてまことに大きな損失です。しかし、身をもつて範を垂れたその壯烈な最期は、後において、いよいよ全海軍を奮起せしめるものであり、我が海軍の強さは、上にかかる指揮者をいただくところにも、その根元の一つをおいてゐることがはつきりと知られるのです。

七、ソロモン海戦

このあたりから、敵はやうやく陣營を立直して、反攻作戦に出て來はじめましたが、その手はじめに、本國からハワイを經、南方最大の反攻據點となるべき、オーストラリヤに通ずる連絡線の確保に、最も大切な役割を持つソロモン群島を制壓することに著手しました。

その結果、八月十四日まで數日間にあつたたかはれた第一次、同月二十四日の第二次ソロモ

ン海戦をはじめ、間に十月二十六日の南太平洋海戦をはさみ、十一月十二日から十四日にわたつた第三次ソロモン海戦まで、幾回となく猛烈な海戦が行はれることになりました。

更に、大きくいへば、今いつた南太平洋海戦も、十一月三十日のルンガ沖、十八年一月二十九日のレンネル島沖、二月一日から七日にわたつたイサベル島沖、四月七日のフロリダ島沖の諸海戦もみなソロモン海戦の連続、あるひは擴大したものと云ふことができます。

つまり、それほどこの方面が、戦略的に重要視されて來たわけで、その作戦の中心基地となつたのが、即ちガダルカナル島です。當時敵は同島を、強力な空軍の前進根據地化し、ハワイオーーストラリヤ間の連絡を固めると同時に、そこから一島一嶼と空軍の陸上基地を推進させて、次第に被占領地を奪還して行かうとしてゐたのですが、さういふ戦力を養ふためには、いろいろな資材・彈薬・人員等の補給を、間断なくつづけなければならぬ。そのためには、輸送船團や、海上兵力や、航空兵力を動かさなければならぬ。その結果、今列記したやうな戦闘がくりかへされることになつたわけですが、とりあへず、第三次ソロモン海戦までの戦果を記すと、左の通りです。

第一次ソロモン海戦（八月十四日）

撃沈	アメリカ巡洋艦	七	艦型未詳巡洋艦	二
	イギリス巡洋艦	二	驅逐艦	九
			潜水艦	三

撃破	輸送船	一〇
撃破	甲巡	一
	驅逐艦	三
	輸送船	一
撃墜機		五八
我が方損害	自爆機	二一

撃破	潜水艦	六
	輸送船	六
	掃海艇	一
撃破	戦艦、空母、巡洋艦、潜水艦、掃海艇	各一、計五
撃墜破機		五一九
我が方損害		

撃破	アメリカ戦艦	一
同	航空母艦	二
我が方損害	大破 小型航母	一
	沈没 驅逐艦	一

沈没	巡洋艦	二
	驅逐艦	二
	潜水艦	一
	輸送船	五
破大	巡洋艦	一
	驅逐艦	三
	潜水艦	一
	輸送船	五

第二次以後十月二十五日まで

撃沈	アメリカ航母ワスプ	一
	巡洋艦	三
	驅逐艦	五

自爆及び未歸還機	一〇四	巡洋艦	一
大破機	三一	驅逐艦	三
十一月十二日ガダルカナル強襲		巡洋艦	一
擊沈巡洋艦	三	驅逐艦	三
大破巡洋艦	二	輸送船	三
擊墜機	一九	擊破機	一〇以上
我が方損害		我が方損害	
大破戰艦	一	沈沒戰艦	一
沈沒驅逐艦	二	巡洋艦	一
未歸還機	一〇	驅逐艦	三
第三次ソロモン海戦(十一月十二日—十四日)		大破戰艦	一
擊沈戰艦	二	輸送船	七

以上の諸海戦で、我が海軍陣營が、艦艇と協力して、いかに激戦をつづけたかは、その損害の非常に大きいことを見ても、十分に想像されます。又、これ等のソロモン海域の海戦では、我が戦艦をはじめ、海上艦艇の損害も激増してゐますが、これは、陸上基地による敵空軍の勢力圏内に、絶えずふみこまなければならなかつた關係上、必然的に生じたもので、この點は、ミッドウェー強襲作戦でも、同様の傾向をあらはしてゐます。

八、南太平洋海戦

これ等の諸海戦の中間、十月二十六日にたたかはれたものに、南太平洋海戦があります。この海戦で、我が方は、もつばら航空母艦搭載機の善戦敢闘によつて、敵航空母艦エンタープライズ、ホーネット型の計二隻の航空母艦、戦艦一、巡洋艦三、驅逐艦一を撃沈、艦型未詳三、驅逐艦三を大中破せしめ、敵機二〇〇以上を撃墜破するといふ大戦果をあげました。

一方、我が方では、航空母艦二、巡洋艦一小破の他、未歸還機四〇以上といふ尊い犠牲を出してゐます。

自爆機 三二 一 未歸還機 九

この海戦では、少年飛行兵出身の、まだうら若い一人の兵曹のことを話さずにはおられません。彼は、この海戦に臨むまでに、敵四機を撃墜してゐました。しかもそれは、六機の敵戦闘機の中に、ただ一機でとびこんで、たちまちのうちにその四機をしとめたものでした。

南太平洋海戦の時、彼は母艦上空にあつて、敵機の來襲に備へてゐました。そのうち、はたして、敵爆撃機隊がやつて來たのです。彼はその中へ、面もふらずに斬込んで行きました。右に、左に翼をひるがへす彼が、六機まで仕止めるのを、戦友たちが認めてゐます。もし、生きながへたら、すばらしい撃墜記録を立てる猛者だつたのにちがひないのですが……。

そのうち彼は、いつの間にか、味方の防衛陣を突破した敵の一機が、まつしぐらに、己が母艦へ急降下して行くのを発見したのです。彼の腕前は、数瞬ならずして、必ずその敵機をうちおとすことができたにちがひありません。しかし、その時すでに敵機は、投弾寸前の態勢にありました。銃撃では間にあひません。彼は、横なぐりに自機を敵にうちつけ、そのまま南太平洋の「水づく屍」となつて母艦の命を救つたのでした。

この壯烈崇高な犠牲的精神と、機體が損傷するより早く落下傘でとびおり、生命だけは助からうとする敵機の搭乗員の精神とを考へ合はせて見ると、我が海鷲の精強さの根元は、いよいよあきらかになつてくるのです。

九、その他の主な海戦

その後十一月三十日には、ルンガ沖夜戦がたたかれました。これは、我が水雷戦隊が、敵の強力な艦隊に得意の夜襲を決行し、戦艦・巡洋艦各一隻を轟沈、駆逐艦二隻撃沈、同二隻に火を發せしめ、我が方はわづかに驅逐艦一隻沈没といふ驚異的な戦果をあげたものです。

越えて十八年の一月二十九日には、我が海鷲によつてレンネル島沖海戦がたたかれました。これまた、戦艦二、巡洋艦三撃沈、戦艦・巡洋艦各一撃破、敵機三撃墜といふ大戦果をあげ、これに對して我が方は、自爆、未歸還機合計一〇の損害を生じてゐます。

二月一日から七日までつづけられたたかひは、一括してイサベル沖海戦と名づけられてゐますが、この海戦では、巡洋艦二、驅逐艦一、魚雷艇一〇を撃沈、敵機八六を撃墜、我が方では、驅逐艦三隻大中破し、自爆、未歸還機二を出しました。

四月七日のフロリダ島沖海戦では、巡洋艦、驅逐艦各一、輸送船一〇を撃沈、輸送船三を大小破せしめ、我が方は自爆機六を生じてゐます。

一〇、航空戦の出現

前節でお話した海戦は、みなソロモン群島をめぐつてたたかはれたものばかりです。敵は、同群島中のガダルカナル、その他へ兵力を揚げてゐる。同時に、その他の島へもその兵力を推進させようとはだててゐるため、後から後からと、物資や兵力を補給しなければならなくなつてくる。そこを我が海軍にたたかれるといふ關係から、ほとんど同じ海域で海戦がくりかへされるやうになつたものです。

六月十六日のルンガ沖のたたかひも、同じ系統のたたかひの一つであつて、我が海軍は敵輸送船大小計七隻、驅逐艦一隻撃沈、飛行機三二以上撃墜といふ戦果をあげましたが、ここに注意しなければならぬのは、このたたかひで、はじめて「航空戦」といふ呼稱が用ゐられたことでもあります。すなはち、このたたかひは、彼我の飛行機二〇〇機が、まづ猛烈な空中戦を交へ、それと同時に我が航空隊が、敵の輸送船團とその護衛艦隊に猛攻を加へたものであります。又、この航空戦で我が方は二〇機の犠牲を出しましたが、これは本年に入つてから、いちばん大きいものでした。先にもいひましたやうに、大東亞戦争の、ほとんどすべての海戦は、主として海軍航空部隊の力によつて勝ち取られたものですが、それでもまだ「航空戦」といふ呼稱は用ゐられませんでした。

それは、何等かの意味で——多かれ少かれ、直接、間接に、海上の艦艇部隊が關係してゐたためだつたのですが、このルンガ沖航空戦に至つては、全然航空部隊だけによつてたたかはれた結果、はじめてかういふ呼び方をされるやうになつたのです。

さうして、かういふ呼稱が用ゐられるやうになつたことは、大東亞戦争の戦局が變つてきたこと、つまり、艦艇を主役とするたたかひが、次第に航空兵力を主役とするものに變つてきたことを物語つてゐるのです。

即ち敵は、十七年八月はじめ、ソロモン群島中のガダルカナル島へ取りついて以來、ガッツイ、ニュー・ジョージヤ、レンドバ、コロンバンガラ、ペララペラ等の諸島をじりじりと北上して來てゐましたが、十八年十月末には、ブーゲンビル島から、南方へ六〇浬ほどはなれてゐるモノ島に上陸しました。これ等の作戦には、もちろん輸送船が必要であり、その護衛艦艇も必要なわけでしたが、敵がもつとも頼みとしたものは、その航空兵力だつたのです。

敵は、我が海軍航空隊の精強さを、骨身にこたへて知つてゐました。それと共に、我が海軍航空部隊が、數量の上で自分より劣つてゐることを、よく知つてゐたのです。

それで彼は、たたかれても、たたかれても、少しも戦意をなくさず、突込んでくるのです。もちろん出てくればそれ相當の犠牲は生じます。しかし、日本だつて無傷といふわけには行かない。従

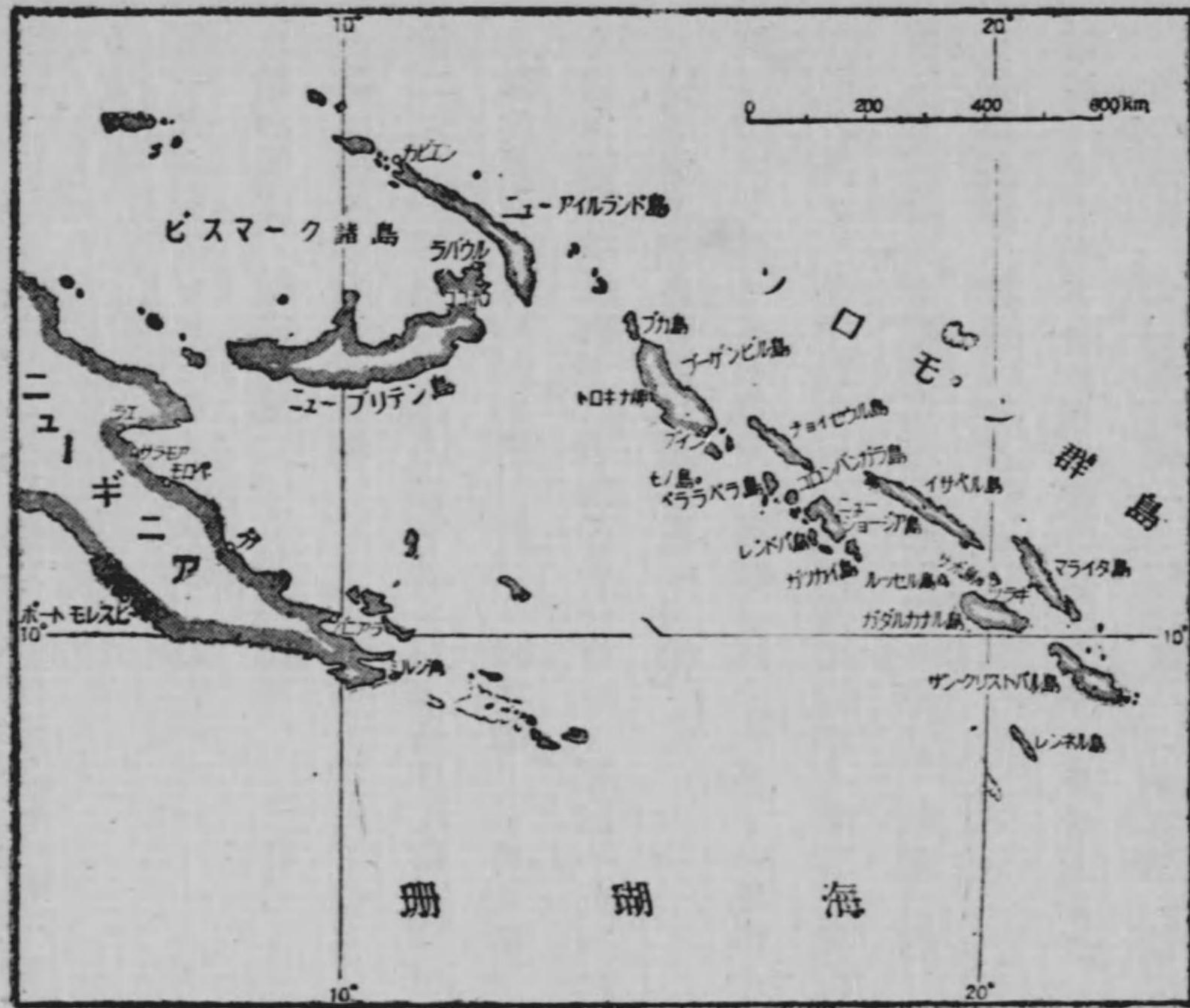
つて、なんべんでもくりかへして、かつ大量の機を動かして攻めてくれば、日本の方は、遂には數の上での補給が不十分になる——これが敵の目算でありました。

この敵の目算は、ある程度まであつてゐたかのやうであります。一舉に數百機をもつてする空爆で、我が方の航空基地を一時的に押へ、そのすきに上陸するといふ方法をくりかへして、ともかくもモノ島まで北上することに成功したのですから……。

しかし、いつまでも敵の考へるやうに、うまくばかりは行かない時期が來ました。すなはち、我が海軍航空部隊は、十月二十七日、敵がモノ島に上陸した當日、上陸點附近の敵艦隊に猛攻を加へて、巡洋艦二、輸送船二を撃沈、他に三隻の艦船を撃破、三十一日夜から十一月一日にかけては、巡洋艦一、驅逐艦一、輸送船二、舟艇四〇以上を撃沈、その他四の艦船を撃破しました。さうして同一日の夜は、ブーゲンビル島ガゼレ灣外で、我が巡洋艦隊と水雷戦隊が敵艦隊に猛攻を加へ、巡洋艦三もしくは四、驅逐艦二を撃沈、その他巡洋艦一乃至二、驅逐艦二を撃破しました。すなはち、ブーゲンビル島沖海戦であります。

ところが、この方面に對する敵の出撃ぶりは、ものすごく強氣であつて、是が非でもブーゲンビルをほふり、ニューブリテンをうばふつもりであることが、すぐわかつて來ました。

すなはち、ブーゲンビル島沖で大敗した敵は、あくる二日の朝、しつぺいがへしに、ニューブリ



テンのラバウルに、大空襲を加へて來たのです。その數二百數十機。ラバウルには、前夜殊勳をたてた我が艦隊も歸つてゐましたが、その艦隊と、地上部隊と、航空部隊は共に協力して應戦し、實に敵の二〇一機(うち不確實二七機)を、又同じ日に、ブーゲンビル島の北方のブカ島に來襲した一三五機のうち三九機をうち落したのです。

なほ、ブーゲンビル島沖海戦で、我が方は驅逐艦一隻を失ひましたが、このラバウルでは一五機を失つてゐます。

以上のやうな大損害を受けても、敵の戦意は少しも衰へず、次々に大兵力をくり出した結果、左のやうに激戦がくりか

へされ、しかもそれがことごとく、いはゆる航空戦であるところに、大きな特徴が見られることになりました。

第一次ブーゲンビル島沖航空戦（昭和十八年十一月五日）

敵の損害 航空母艦二、大型巡洋艦二、巡洋艦もしくは大型驅逐艦二撃沈

我が損害 未歸還三機

第二次ブーゲンビル島沖航空戦（同十一月八日）

敵の損害 戦艦四、巡洋艦二、驅逐艦三、輸送船四撃沈、その他の大型巡洋艦六、巡洋艦もしくは大型驅逐艦四、大型輸送船一撃破、撃墜一五機以上

我が損害 自爆及び未歸還一五機

第三次ブーゲンビル島沖航空戦（同十一月十一日）

敵の損害 巡洋艦もしくは大型驅逐艦一撃沈、戦艦一、大型航空母艦二、大型巡洋艦一、巡洋艦もしくは大型驅逐艦三、驅逐艦一撃破、撃墜二機

我が損害 自爆未歸還計三〇機

第四次ブーゲンビル島沖航空戦（同十一月十三日）

敵の損害 大型巡洋艦一、巡洋艦一、驅逐艦一撃沈、戦艦一、中型航空母艦一撃破

我が損害 未歸還二機

第五次ブーゲンビル島沖航空戦（同十一月十七日）

敵の損害 航空母艦三、巡洋艦三、大型軍艦（艦種未詳）一撃沈

我が損害 未歸還五機

第六次ブーゲンビル島沖航空戦（同十二月三日）

敵の損害 航空母艦三、戦艦もしくは大型巡洋艦一、巡洋艦一撃沈、戦艦一、巡洋艦一、驅逐艦一撃破

我が損害 未歸還一〇機

以上を総合すると、敵の損害は、轟撃沈されたもの戦艦四、航空母艦八、大型巡洋艦一六、巡洋艦又は大型驅逐艦四、艦種未詳の大型軍艦一、驅逐艦八、輸送船一三、計五五、撃破されたもの戦艦三、航空母艦三、巡洋艦一二乃至一三、巡洋艦又は大型巡洋艦八、驅逐艦五、大小輸送船六、計三七乃至三八、撃墜機五七六以上となり、我が方は、驅逐艦二、自爆未歸還機一三八の尊い犠牲を生じてゐます。

一一、敵の戦意と航空決戦

以上は、開戦以来の主な海戦からひろつた我が海鷲の奮戦挿話であり、戦局のあらましなのですが、わづかにこれだけの話題を通じて、我が海鷲がどんなにもすごくがんばり、どんなに崇高な盡忠報國の一念にもえて、たたかひつづけてゐるかがわかるでせう。

その戦果も、まことにすばらしいものですが、しかし、これとても、著名な海戦を中心としてあげたものを、大づかみに数へたに過ぎないのであつて、特に何々海戦或は何々航空戦とは名づけられてゐない、さうして、一日も缺かさず、夜も晝もつづけられてゐる對艦艇戦、對航空機戦であげられるものを数へたら、それこそ實に大きなものになるのです。

次の章でのべますやうに、日本は絶対にたちあがるまいと考へてゐた敵にとつて、この大東亞戦争は、かなりの不意打であつたやうです。そのためもあつて、元來武力的に強いとはいへない敵は闘戦以來敗退に敗退を重ね、それにつれて我が方の制壓圏は、驚くばかりに廣大なものとなりました。

一方敵の方は、半年の間押されつづけながらも、銳意戦備をととのへつつありました。さうしてその主力を大量生産のさく空車の擴充にそそいだのですが、その空軍は、基地航空兵力を主體とす

るものでした。

これには、二つの理由が考へられます。一つは、日本に對する反攻戦の最大基地であるオーストラリアから、我が占領地域へは、多くの島が飛石のやうにつらなつてゐる。従つて、その島々を基地として利用すれば、基地航空兵力だけでも、反攻戦がやれるのであります。

もう一つは、航空母艦を建造するのに時日が必要なことです。御承知の通り、アメリカは、開戦當時もつてゐた航空母艦を、開戦後半年の間に、ほとんど全部つぶされてしまひましたが、この方は飛行機のやうに、いきなり多數につくり出すといふわけには行きません。従つて、アメリカとしては日本を航空兵力で壓迫しようとするれば、基地航空兵力をもつてするより他はなかつたわけなのであります。

ところが、さうはいつても、その基地となるべき島がなければ、いかに飛行機の製造能力があつても、敵としてはどうすることも出来ないわけだったので、悪運が強いとでもいふのでせうか。まるで註文でもしたやうに、適当な島々が南方海域に散在してゐることが、敵の作戦を非常に有利ならしめることになつたわけでありませう。

このやうにして敵は、昨年八月ソロモン群島中のガダルカナルにとりついたのを手はじめとし、非常な消耗をつづけながらも、前にいつたやうな島々をつたはつて北上して來ることになり、十一

月一日には、ブーゲンビル島のトロキナ岬にとりつきました。この作戦の前後にたたかはされたのが、ブーゲンビル島沖の海空戦であります。ここで注目しなければならないのは、敵がこの時分から、多数の航空母艦を出動させるやうになつたことです。つまり、開戦以来の「時」が、艦隊航空隊を出動させることを、敵にゆるしたことになるわけであります。

このことは、又、敵として新たな作戦をこころみさせることにもなりました。それはギルバート諸島への反攻であります。

すなはち敵は、十一月十九日より、ギルバート諸島中のマキン、タラワ兩島へ猛烈な砲爆撃を加へた後、二十一日早朝より強引に上陸を開始しましたが、この時の航空兵力も航空母艦のものであり、同時にその航母が、我が方のために、大損害をかうむるに至つたわけであります。

第一次ギルバート諸島沖航空戦（昭和十八年十一月二十二日）

敵の損害 航母一、驅逐艦一撃沈、航母三、戦艦もしくは大型巡洋艦、輸送船一撃破、撃墜三六機

我が損害 一五機

第二次ギルバート諸島沖航空戦（同十一月二十六日）

敵の損害 航母二撃沈

我が損害 一機

第三次ギルバート諸島沖航空戦（同十一月二十七日）

敵の損害 航母二、巡洋艦二撃沈、巡洋艦もしくは驅逐艦一撃破

我が損害 五機

第四次ギルバート諸島沖航空戦（同十一月二十九日）

敵の損害 航母二、艦型未詳一撃沈、巡洋艦一撃破

我が損害 六機

ソロモン群島の北上作戦は、我が南方要線中の最大據点であるニューブリテンのラバウルをうばつて、我が占領地域を衝かうとするものであり、ギルバートの奪還作戦は、はるか東北方からラバウルをねらふと同時に、我が南洋群島をおそひ、やがては我が本土をたたかうといふのであります。果して敵は、十二月五日、早くも我がマーシャル諸島の我が基地に來襲し、手荒くたたきかへされましたが、この時の航空兵力もまた、航空母艦のものであります。

マーシャル諸島沖航空戦（昭和十八年十二月五日）

敵の損害 航母一、巡洋艦一撃沈、航母一、巡洋艦一撃破
我が損害 六機

ブーゲルビル島沖海戦以來、わづか四十日ほどの間に、敵のかうむつた損害は、別表のやうに歴大なものであり、更に開戦以來滿二年間の損害は、第一章に掲げた通りであります。しかし、我が海軍が、このやうに驚異的な大戦果をあげたといつても、敵の手になほどれだけの艦船や飛行機がのこり、今後どれだけの補給能力があるかといふことは、おのづから別問題であります。そしてこの問題を、我が方が武力と物力をもつて、いかに片づけるかが、最後の勝敗を決するものなのであります。

十月二十七日より十二月七日までの綜合戦果

撃破	撃沈	戦艦	戦艦又は巡洋艦	航空母艦	巡洋艦	巡洋艦又は大型驅逐艦	驅逐艦	未詳型艦	輸送船	計
三	四		一	一七	二〇	四	九	二	一三	七〇
八	二	八	一五	一六	八	五			八	四九一五〇
飛行機 七二一機以上撃墜										
その他 上陸用舟艇多數撃沈、同士討で驅逐艦一沈没										
我が方損害 驅逐艦二沈没、巡洋艦二小破、自爆未歸機一七一										

しかも、ブーゲンビル島沖海戦以來の敵の態度を見ると、その戦意には、かつて見られなかつた

ほどのたくましさがあります。もちろん、見やうによつては、無謀とも猪突ともいへるでせう。しかし、いづれにしても、あくまでもくらひついて來ようといふ、氣魄のたくましさには變りがありません。

かういふ點から見ますと、たとひ敵はどのやうな大損害をかうむつても、決して手をあげることはなく、いつそう頑強に反撃してくるものと思はれます。従つて、大東亞戦争は、依然として航空撃滅戦、特に、攻めるにも守るにも、その舞臺は常に海洋上空であるところから、海洋航空決戦の連続といふ姿をとつて行くであります。

第一〇章 航空兵力を育てるもの

一、物 と 人

大東亞戦争に臨んで、我が海軍はどのやうに戦つたかといふことについては前にのべました。さうして今日は、いかにさまざまの航空決戦の連続時代に突入してゐるかといふことも、いちばんはじめの章でお話しました。そこで、こんどは、その大切な航空兵力を大きくするには、どうしなければならぬか、といふことを考へて見なければなりません。

それには、まづ、性能のすぐれた飛行機を、うんとつくり出せる力を持たなければならぬ。性能のすぐれた飛行機をつくるには、研究機關を完備し、製造技術を向上させなければなりません。

第三章でのべたやうに、我が國の航空界は歐米諸國よりもおくれて出發したものです。海軍航空隊にしても、イギリスやフランスなどから教官を招いて、操縦、その他の技術を教へてもらつたこともありません。

しかし、我が海軍は、その傳統の獨創力と熱意とを發揮して、やがて独自の研究・製作・訓練の

組織を完成し、機體の性能と戦闘技術の向上に邁進するやうになつたのです。かういふ經過は、海上艦艇の發達と全く同じで、海上艦艇の方も、はじめはみな外國に學び、その主なものには外國にくつてもらつてゐたのですが、後になるに従つて獨得の技能を獲得し、つひには先進國の海軍を、全く壓倒するやうになつたのです。

こんなわけで、今日の我が海軍の飛行機の性能は、諸外國のものにくらべて、決して劣るものはありません。もちろん、箇々の點では、——例へば、或る機種の防禦力とか、他の或る機種の速度とかいふやうな點では、必ずしも第一位でないところもあるでせうが、それ等を打つて一丸として發揮される戦闘能力の點では、確かに世界一といつてもさしつかへありません。

次に、飛行機をうんとつくるといふ點ではどうか。これには、資材の多いこと、工業能力の大きいことが必要なのですが、これは、残念ながら、世界一といふことはできません。少くとも、アメリカ以上とはいへません。

アメリカは、ふだんから、世界一の資源國であり、工業國でした。それが、第二次世界大戦後、特に大東亞戦争開始後は、今までの工場は元より、例へば、全世界の自動車の大部分の生産能力を持つてゐた自動車工場などを轉換させ、飛行機の多量生産に、一路邁進するやうになりました。その結果、前にもいつたやうに、年に十二萬機以上も生産することが出来るまで、放言するやうに